

東方魔箱録 ～メモリ の使役者～

マイスイートザナディウム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷

そこは世間から忘れ去られたもの達の最後の楽園

そんな楽園に幻想入りしたのはとある風の街にてありとあらゆる超常現象や怪事件を引き起こすガイアメモリを持つ少女だった。

これは…風都の仮面ライダー達の物語ではない。

これは…幻想郷を守護する博麗の巫女の物語ではない。

これは……魔性の小箱を手にし、自分自身を探す少女の物語である。

目次

オリキャラ設定	1
穢土転生 キアラ	36
歴代博麗の巫女 設定	52
幻想入り編	
Mの記憶／少女の幻想入り	70
Mの記憶／忘れ去られたものの楽園	78
Pの能力／魔性の小箱の使い方	89
Fの脅威／来雪のやるべき事	100
紅霧異変編	
Tの咆哮／赤い霧が覆う空	113
Iの競争／常闇と氷精の猛威	123
Tの門番／恐竜同士の勝負	136
T達の激突／紅魔館への潜入	145
Fの狂気／来雪の無くし物	154
暗躍のO／繰り返される歴史	164
Kの合流／レミリアを止める	175
変貌のR／家族の想い	192
Kの宴会／来雪の住居	214
空白期編	
Eの妖怪／霊夢の苦悩	228
Cの事件／新たな仲間は大妖怪？	253

	Kの雄叫び／番犬の超人	267		Fの襲来／崩れる異変	439
	Dの襲来／こあの真名	281		Lの目的地／決戦の地白玉楼	465
	Pの家族／炎の記憶と消火器	291		Hでの決戦／集う者達	496
	春雪異変編			Hでの決戦／対峙する巫女達	527
	Yの企み／春に広がる雪景色	304		Iの終息／新たな闘いの幕開け	
	Aの継承／振り切る霊夢	311	554		
	高熱のA／飢えた猫妖怪	325		フォーウルム様コラボ回・空白期／異界	
	Tの介入／コンピの復活	334		騎士転移異変編	
	Pの遊戯／魔界からの人形師	349		遭遇のK／突然の出会い	579
	Gの切り札／蘇りし楽園の巫女				
366	Gの実験／暗躍する者達	388			
	始動のF／不死身の手駒達	411			

オリキャラ設定

そのだこゆき
園田来雪

種族：人間？

年齢：推定15〜16

性別：女性

身長：156cm

体重：53kg

職業：紅魔館のメイド見習い

能力：地球の記憶を具現化する程度の能力

イメージCV：大本 眞基子

概要：本作の主人公。

一人称は私，二人称はあなた、君，三人称はあなた達、君達

魔法の森で倒れていた以前の記憶が無く、どうやって幻想入りしたかも不明な謎の少女。
魔法の森にて野良妖怪に喰われそうになった時、所持していた溶岩マグマメモリの記憶を起動させ

超人へと変身し野良妖怪を撃退。^{ドールバント}

その後東方Projectのメインキャラ・霧雨魔理沙と出会う。

博麗神社で暫く居候していたが紅霧異変後はレミリア・スカレットの提案で紅魔館の正式な住人になった。

紅魔館では十六夜咲夜の指導の元、メイド見習いとして働いている……のだが料理スキルは問題無いが紅茶スキルが壊滅的で、彼女が淹れる紅茶は何故か激マズになる。

メモリに頼り過ぎる傾向にある事を自覚しており、美鈴に戦闘の修行をつけて貰っている。

尚、親しい者にはフレンドリーでレミリアをレミちゃん、フランドールをフランちゃん、咲夜を咲夜ちゃん、と呼んでいる。

美鈴やパチュリー、小悪魔はさん付け。

紅魔館に移住する際、霊夢とはタメ口で喋る様になったが魔理沙の事はまだ魔理沙さん呼ぶ。

幻想郷に蔓延る魔性の小箱ガイアメモリを全て回収するという目標を持っており、複数のメモリを所持している。

敵組織である『裏』幻想郷と何らかの因縁がある模様――

『地球の記憶を具現化する程度の能力』

彼女が持つ本来の程度の能力。

来雪自身は自分の能力を『メモリの力を引き出す程度の能力』という限定的な能力だ
と思っっているが、実際は地球の記憶を読み取りメモリとして具現化させるという能力。

これにより無造作にガイアメモリを創り出す事が出来るのだが、本人が自覚していな
い為完全には使用出来ない。

彼女がこの能力で創り出したのは現段階では、^{マグマメモリ}溶岩の記憶と^{プラントメモリ}植物の記憶のみである。

所持しているメモリ一覧

PLANT --- 植物の記憶

FLEET --- 艦隊の記憶

TREX --- ティラノサウルスの記憶

ICE AGE --- 氷河期の記憶

WISDOM --- 知識の記憶

DRACULA --- ドラキュラ、ヴァンパイアの記憶

ZOO——動物園の記憶

ENIGMA——謎の記憶

FIRE EXTINGUISHER——消火器の記憶

HEAT——熱き記憶

犬飼紗綾^{いぬかいさあや}

種族：犬妖怪

年齢：112

性別：女性

身長：163cm

体重：57kg

職業：何でも屋

能力：切り裂く程度の能力

イメージCV：斎藤 千和

概要：空白編にて出会った犬妖怪。

一人称は私，二人称は君，三人称は君達

今後来雪達と共にメモリ回収や「裏」幻想郷との戦いに参加することになる。とある事件を調査していた来雪達の前に現れ、事件解決に貢献した。

普段は人里近くの森に住んでおり、何でも屋として働いている。

来雪が幻想入りする1年前に地獄ゲルベロスの番犬メモリの記憶を拾った事でメモリと適合し彼女本来の力が上がっており、元々弱小妖怪だったにも関わらず現在はそこらの野良妖怪には遅れを取らない程の力を手にした。

更にメモリの影響で嗅覚が異常発達し、匂いでメモリの位置が分かるまでになっている。

来雪と知り合ってから良く紅魔館に遊びに来ており、美鈴と一緒に来雪を鍛えたりしている。

妖怪としての感性なのか『ぶつ殺す』や『殺す』と言う言葉を使わない。

理由としては、妖怪の世界は常に弱肉強食でそんな言葉は無意味だから。

「使っている妖怪が居るのだとしたら…それは私以下の弱小妖怪なんでしょうね」

『切り裂く程度の能力』

文字通り何でも切り裂く能力。

メモリを使用してから能力が格段と強化され、大抵の物は切り裂く事が出来る。

この能力でメモリブレイクも可能。

所持しているメモリ一覧

K E R B E R O S ー ー 地獄の番犬の記憶

冴^{さつきりん}月麟／ヒストリー・ドーパント

種族：人間

年齢：不明

性別：女性

身長：148cm

体重：48kg

職業：〃裏〃幻想郷・ボス

能力：不明

イメーヂC V：竹達彩奈

概要：後頭部に大きなリボンと髪飾りを付けたミディアムヘアで、フリル調の巫女服を纏った少女。

幻想郷にガイアメモリをばら撒いている組織・「裏」幻想郷のボス。
歴史の記憶を使用し変身する。

ヒストリーの能力で幾度も世界の改変を行っており、改変の理由はその世界線の来雪が死亡しているから。

この能力でDr.ガイストの頼みで存命の三代目と十一代目博麗の巫女の魂を持ち帰った。

来雪の成長を心待ちにしている。

所持しているメモリ一覧

HISTORYー歴史の記憶

小野塚克巳おのづかかつみ／フレンド・ドーパント

種族：死神

年齢：不明

性別：男性

身長：177cm

体重：72kg

職業：『裏』幻想郷・ゴールド幹部

能力：不明

イメージCV：杉田智和

概要：『裏』幻想郷にてゴールド幹部に所属する男。
フレンドメモリ
友達の記憶を使用し変身する。

紅霧異変時にフランドールに壊された来雪の身体に能力で入り込み、フランドールを撃退。

介入しようとした八雲紫や八雲藍に対して、『纏めて殺せる』と豪語しており実力は計り知れない。

役職的には麟の右腕。

実は地獄で船頭をしている妹がいる。

所持しているメモリ一覧

FRIEND――友達の記憶

ZONE——地帯の記憶

蘆屋董香あしやとうか／ジエラシー・ドーパント

種族：人間

年齢：不明

性別：女性

身長：167cm

体重：55kg

職業：〃裏〃 幻想郷・ゴールド幹部

能力：不明

イメーজCV：本渡楓

概要：〃裏〃 幻想郷にてゴールド幹部に所属する女性。
嫉妬ジエラシーメモリの記憶を使用し変身する。

フレンドとは違い戦闘に参戦していない為、能力や戦闘能力は謎。

実は平安時代の呪術師・蘆屋道満の末裔でもある。

所持しているメモリ一覧

J E A L O U S Y ――嫉妬の記憶

おおくらさやか
大倉冴香／セル・ドーパント

種族：人間

年齢：不明

性別：女性

身長：153cm

体重：43kg

職業：〃裏〃幻想郷・シルバー幹部

能力：不明

イメーჯICV：沢城みゆき

概要：〃裏〃幻想郷にてシルバー幹部に所属する女性
細胞セルメモリの記憶を使用し変身する。

タイラント・ドーパントに変身する門藤龍司と実の姉弟。

冷酷で残虐な性格で、実験の為に他人の命が無くなるうと気にしない外道なのだが弟

と準幹部の旦那は別。

大倉は旦那の名字で、旧姓は門藤。

所持しているメモリ一覧

CELL——細胞の記憶

門藤龍司もんどうりゅうじ／タイラント・ドーパント

種族：人間

年齢：不明

性別：男性

身長：190cm

体重：92kg

職業：〃裏〃幻想郷・シルバー幹部

能力：不明

イメージCV：木村昴

概要：〃裏〃幻想郷にてシルバー幹部に所属する男性。

暴君の記憶タイラントメモリを使用し変身する。

セル・ドーパントに変身する大倉冴香と実の姉弟。

組織の命令より姉を優先する傾向にある為、いつも姉に怒られている。姉を貶したり傷付けたりする者を絶対に逃さない追跡者チェイサーの一面がある。尚、準幹部である姉の旦那を兄ちゃん呼びしている。

所持しているメモリ一覧

TYRANT---暴君の記憶

鷺沼夢継さぎぬまむつき／スパイラル・ドーパント

種族：人間

年齢：不明

性別：男性

身長：163cm

体重：54kg

職業：『裏』幻想郷・シルバー幹部

能力：不明

イメージCV：岡本信彦

概要：『裏』幻想郷にてシルバー幹部に所属する男性。
螺旋スパイラルメモリの記憶を使用し変身する。

主に実験の事後処理を担っている。

来雪達の前に現れた最初の幹部。

所持しているメモリ一覧

SPIRAL——螺旋の記憶

藍原あいはらまなか愛花／ギア・ドーパント

種族：人間

年齢：10

性別：女性

身長：136cm

体重：32kg

職業：〃裏〃 幻想郷・シルバー幹部

能力：無し

イメージCV：長縄まりあ

概要：〃裏〃 幻想郷にてシルバー幹部に所属する少女。
歯車ギアメモリの記憶を使用し変身する。

年齢も10歳と幼いながらも〃裏〃 幻想郷に7人いるシルバー幹部の中で一番強い。

その実力はゴールド幹部であるフレンド・ドーパントに一目置かれている程で、彼の直属の部下に抜擢されている。

尚、売人達の殆どが彼女の部下にあたる。

所持しているメモリ一覧

GEAR——歯車の記憶

饕餮とつみんぎ明忌／アースクエイク・ドーパント

種族：饕餮

年齢：不明

性別：男性

身長：175cm

体重：78kg

職業：〃裏〃幻想郷・シルバー幹部

能力：不明

イメーჯCV：関智一

概要：〃裏〃幻想郷にてシルバー幹部に所属する男性。

アースクエイクメモリ
地震の記憶を使用し変身する。

シルバー幹部の中でも麟に対する忠誠心は一番高く、〃裏〃定例会議では一番最初に麟に挨拶をする程。

実は双子の妹がとある世界でとある組織の同盟長をしている。

所持しているメモリ一覧

EARTHQUAKE――地震の記憶

にのみやふゆき
二乃宮冬雪／シーズン・ドーパント

種族：雪女

年齢：不明

性別：女性

身長：159 cm

体重：48 kg

職業：『裏』幻想郷・シルバー幹部

能力：不明

イメーჯCV：金元寿子

概要：『裏』幻想郷にてシルバー幹部に所属する女性。

シーズンメモリー
季節の記憶を使用し変身する。

大倉冨香をライバル視しており、顔を合わせれば直ぐに皮肉を言い門藤龍司を苛つかせている。

実はレティ・ホワイトロックと知り合いらしく、正体を隠しつつお茶をする仲らしい。
所持しているメモリ一覧

SEASON——季節の記憶

庭瀬巧にわせたたくむ／ジャツジメント・ドーパント

種族：人間

年齢：10

性別：男性

身長：140cm

体重：36kg

職業：「裏」幻想郷・シルバー幹部

能力：不明

イメージCV：内田真礼

概要：「裏」幻想郷にてシルバー幹部に所属する少年。
審判ジャツジメントメモリの記憶を使用し変身する。

本来は無口な少年なのだが、麟と愛花には良く話しかける。

実は愛花に想いを寄せているらしい。

所持しているメモリ一覧

JUDGE MENTOR 審判の記憶

八城一騎やしろういつき／フォートレス・ドーパント

種族：土蜘蛛

年齢：125

性別：男性

身長：185cm

体重：76kg

職業：「裏」幻想郷・番人及び執行人

能力：不明

イメージCV：松山鷹志

概要：「裏」幻想郷に三人居る番人の一人。
フォートレスメモリ
 要塞の記憶を使用し変身する。

フォートレス・ドーパントの腹部にある門に「裏」幻想郷への入口がある為、番人として働いている。

元々は地底に住んでいたのだが、彼の能力に麟りんが目を付けスカウトした経緯けいがある。今の所能力は使用していない。

所持しているメモリ一覧

FORTRESS——要塞の記憶

河城^{かわしろ}みとり／マテリアル・ドーパント

種族：半人半妖（河童）

年齢：不明

性別：女性

身長：160cm

体重：48kg

職業：〃裏〃 幻想郷・番人及び執行人

能力：あらゆるものを禁止する程度の能力

イメージCV：嶋村侑

概要：〃裏〃 幻想郷に三人居る番人の一人。

材料^マ, 素材^テ, 原料^リの記憶^アを使用し変身する。

一騎と同じく〃裏〃 幻想郷の番人として働く一方、〃裏〃 幻想郷にとっての邪魔者を

排除する執行人としての役割を担っている。

河童である河城にとりとは腹違いの姉で人間の母胎から産まれた半人半妖。

『両者のかけ橋となつてほしい』という母親の願いは理想論でしかなく結局は『人間でも河童でもない存在』として、人間の社会からも河童の社会からも受け入れられることは無かつた…謂わば被害者である。

孤独を感じ両種族を忌み嫌い、『自分などいなくなってしまえばいい』と自ら旧地獄へと移り住んだのだが――

どうやらボスである冴月麟と何らかの関係がある様で…

『あらゆるものを禁止する程度の能力』

みとりが決めた『禁止』した事を行う事ができなくなるという、非常に強力かつ危険な能力。

この能力を個人に向けた時はさらに凄まじく、逃げる事や自分がどこに居るのかを把握する事、一定の方向に移動する事、ゆっくりと移動する事等様々な事が禁止されてしまう。

ただし、複数のことを同時に禁止することはできない――

筈だったのだが、*“裏”* 幻想郷にスカウトされメモリを渡され番人兼執行人として働いている内に、ハイドープへと覚醒し能力が向上し複数のことを禁止だけではなく記憶

といった不確かなモノでさえ禁止することが出来るようになった。

所持しているメモリ

MATERIAL——材料，素材，原料の記憶

神斬^{かみきり}かそり／フアクトリー・ドーパント

種族：虫妖怪（カミキリムシ）

年齢：不明

性別：女性

身長：147cm

体重：43kg

職業：〃裏〃 幻想郷・番人及び執行人

能力：洗脳する程度の能力

イメーτζCV：雨宮天

概要：〃裏〃 幻想郷に三人居る番人の一人。
工場^{ファクトリー}，工廠^{工場}，製造所^{メモリー}の記憶を使用し変身する。

一騎やみとりと同じく、*「裏」* 幻想郷の番人として働く一方、*「裏」* 幻想郷にとつての邪魔者を排除する執行人としての役割を担っている。

男口調で一人称はういとかかなり特殊なキャラ。

番人の中で一番喧嘩っ早く気に入らない相手には背中に背負った鋏で斬り刻もうとするが、みとりか一輝に止められる。

元々はそこまで強い妖怪ではなく、メモリに適応しハイドープになった事により番人及び執行人としての力を得るまでになった成り上がり。

『洗脳する程度の能力』

その名の通りかそりが触れた相手を洗脳する能力。

但し自分より格上の存在には効力が低く、博麗の巫女レベルを洗脳することは出来ない。
い。

ハイドープになった今でも博麗の巫女レベルの相手を洗脳することは出来ないが、あの程度の相手なら洗脳する事が可能となった。

所持しているメモリ

FACTORY 工場， 工廠， 製造所の記憶

村瀬着火
むらせつきひ

種族：人間

年齢：不明

性別：女性

身長：160cm

体重：49kg

職業：『裏』幻想郷・売人リーダー格

能力：不明

イメージCV：折笠富美子

概要：幻想郷に数多くいる売人達のリーダー格の一人。

市販メモリの管理を任されており、普段は満面の笑みを浮かべている女性だがメモリの紛失や回収失敗には厳しく当たる。

あるくにくいな
有国玖伊那

種族：獣人

年齢：108

性別：女性

身長：159cm

体重：49cm

職業：『裏』幻想郷・売人

能力：不明

イメージCV：高橋李依

概要：幻想郷にメモリを販売している売人の一人。

ガイアメモリを幻想郷に住まう人々の発展に必要と純粹に思っている。

メモリを悪だとは思っておらず、それを使用する者が悪事を働いているのだと少し不快に思っている。

フエン

種族：人間

年齢：不明

性別：男性

身長：165cm

体重：56kg

職業：執行チームA^{アルファ}

能力：不明

イメージCV：石田彰

概要：執行チームA^{アルファ}のリーダー。

冷静沈着で狙ったターゲットは確実に仕留める暗殺者^{ヒットマン}。
常にチョコレートを持参している。

ヨル

種族：人間

年齢：不明

性別：女性

身長：153cm

体重：42kg

職業：執行チームA^{アルファ}

能力：不明

イメージCV：鈴木愛奈

概要：執行チーム アルファ Aの女性工作員。

組織の中でもぞんざいな扱いを受けている自分達の立場に腹を立てており、組織の目的である来雪を標的にグレンを召喚し送り込んだ。

何やら自分のメモリの副作用で、食人衝動があるらしい。

ヘル

種族：人間

年齢：不明

性別：女性

身長：160cm

体重：49kg

職業：執行チーム アルファ A

能力：不明

イメージCV：大森日雅

概要：執行チーム アルファ Aの女性工作員。

見事な赤髪でメモリの影響なのか体温が異常に高く、彼女の周りには常に陽炎が発生している。

ヨル同様、自分達の扱いに納得がいかない様子。

塔守昂／トリガー・ドーパント
とうもりすばる

種族：鬼

年齢：不明

性別：男性

身長：175cm

体重：65kg

職業：執行チームA
アルファ

能力：不明

イメージCV：鳥海浩輔

概要：執行チームAアルファの作業員。

元々は売人で、成り上がった末に執行チームに所属した。

組織に入る前は地底の地獄に居たのだが、自分には合わないと感じ地上に上がり組織に身を置くことになった。

所持しているメモリ一覧

TRIGGER——銃撃手の記憶

グレン

種族：悪魔

年齢：1000以上

性別：男性

身長：177cm

体重：63kg

能力：不明

イメージCV：鈴木達央

概要：執行チームAのヨルアルファが来雪の力を測るために呼び出した悪魔。

全盛期の小悪魔を良く知っている為か、パチュリーの使い魔となり力の大半を失った小悪魔に失望していた。

ヒートメモリ熱き記憶の強大な力を過信していた為か、最期はレミアアのスピア・ザ・グングニルに穿かれ消滅した。

所持していたメモリ

HEATER 熱き記憶

横田万^{よしたよろず} / シガレット・ドーパント

種族：人間

年齢：32

性別：男性

身長：171cm

体重：62kg

職業：『裏』幻想郷・売人

能力：無し

イメージCV：木村良平

概要：幻想郷にメモリを販売している売人の一人。
紙卷^{シガレット}煙草^{メモリ}の記憶を使用し変身する。

自己共に認めるヘビースモーカーで、客が居ないときは常に煙草を吸っている。

麟の命令で来雪達の相手をする事になるのだが、クロードと共にアリスの操り人形になってしまった。

所持しているメモリ一覧

CIGARETTE——紙卷煙草の記憶

クロード

種族：人間

年齢：不明

性別：男性

身長：175cm

体重：64kg

職業：〃裏〃 幻想郷・売人兼殺し屋

能力：無し

イメージCV：平田宏明

概要：幻想郷にメモリを販売している売人の一人。
蝙蝠^{バット}の記憶^{メモリー}を使用し変身する。

売人の傍ら殺し屋としても活動しているが〃裏〃 幻想郷では殆ど目立っていない。
万同様、アリスの操り人形になってしまった。

所持しているメモリ一覧

B A T T E R Y 蝙蝠の記憶

D r . ガイスト

種族：人間↓半人半霊

年齢：自称1078

性別：男性

身長：158cm

体重：55kg

職業：『裏』幻想郷・研究員

能力：不明

イメージC V：大塚芳忠

概要：亡霊や地縛霊を研究するあまり自分自身も半人半霊になったマッドサイエンティスト。

スパイラル・ドーパントの部下にあたる存在で、組織を裏切った魅魔を処刑する為送り込まれた。

歴代博麗の巫女を穢土転生させた張本人。

所持しているメモリ一覧

GHOST——幽霊の記憶

来栖凜くるすりん

種族：人間↓死体

年齢：14

性別：女性

身長：153cm

体重：42kg

能力：無し

イメージCV：和氣あず未

概要：人里に住む普通の少女。

来雪が幻想入りする前に妖怪に襲われた所を霊夢に助けられ、その時から霊夢に憧れを抱いていた。

助けられて以来霊夢と仲良くなり、度々神社に遊びに行っていた。

だがその帰りに妖怪に襲われ、命を落としてしまう。

その時に拾った謎の記憶エニグマメモリが挿入され、死んでいるにも関わらず人里に帰ろうとするエ

ニグマ・ドーパントになってしまった。

セル・ドーパントの策略で命を奪われ、最期は霊夢の腕の中で変身が解け死体に戻った。

所持していたメモリ

ENIGMART―謎の記憶

金石愛^{かないしあい}

種族：人間

年齢：29

性別：女性

身長：165cm

体重：52kg

職業：不明

能力：無し

イメーজICV：花守ゆみり

概要：人里に住む女性。

売人の横田万から『F』『C』『R』『Z』計4本のメモリを購入した。
彼女自身も実は『G』のメモリを持っている。

博麗^{はくれいれいか}靈繫

種族：人間？

年齢：不明

性別：女性

身長：176cm

体重：56kg

職業：先代博麗の巫女

能力：不明

イメージCV：林原めぐみ

概要：霊夢が巫女になる前に幻想郷を守護していた先代博麗の巫女にして霊夢の母親。

巫女引退後に『裏』幻想郷に勧誘されるも『娘と敵対したくない』という理由で組織加入を即答で断り、組織から追われる身となり姿を消した。

娘が大好きな親バカ。

現役の頃、まだ魔法使いだった魅魔とコンビで異変解決をしていた。
………一体幾つなんだ？

穢土転生 キヤラ

名前：青導^{せいどう} 蘭武^{らんぶ}

種族：穢土転生

能力：『全ての武術を操る程度の能力』

文字通りどんな武術も使うことができる。

また見た相手の動きや技はすぐに覚えて使うこともできる。

関係性：紅美鈴の1日限定兄弟子であり、初恋の人

イメージCV：中村悠一

死因：飴玉を誤って喉に詰まらせて窒息死。

メモリの有無：無し

概要：金髪のツンツンヘアで細い体型、緑色の瞳をした革ジャンを着た男。

見た目とは違い柔道や剣道，空手，弓道，相撲，槍術，合気道，中国拳法，少林寺拳法，居合道，テコンドー，カポエラなどありとあらゆる武術をマスターした最強の格闘家で、あらゆる道場の門下生になるがすぐに1日で覚えて全てマスターしてしまう天才肌。

その中の一つに美鈴の住む道場があり、1日で覚えて帰ろうとしたが師範が教えて欲しい子がいると言われて美鈴を紹介された。

とりあえず美鈴ちゃんと呼んで動きを観察、コツを教えるはや1時間後には殆ど使えるようにした。

その後は道場を出てまた次を目指す。

彼は知らないだろうが彼女はその後大泣きしたのだとか。

彼が様々な道場に入門するのは飽きっぽい性格である彼が退屈しないため、様々な物体験していく。

世界中には様々な物が存在する。

似ているがどこことなく違う、面白くて飽きない。

その中の一つが武術であり、彼にとって娯楽の一つなのである。

妖怪にも出会ったことがあるが全て返り討ちにした。

名前：ロベール・スカーレット

種族：穢土転生

能力：『機械に変形する程度の能力』

自分が見た事のある機械に変形できる能力。

外見は完璧にコピーできるが、内部組織が完全に変化する訳では無い。

また、変形の際に苦痛を伴うらしいが……

関係性：スカーレット一族の一人の吸血鬼。

レミリア、フランドールの叔父に当たる。

イメージC V：逢坂良太

死因：投下爆弾に変形して爆散した後、日光を浴びて灰化。

メモリの有無：無し

概要：外見はアシンメトリーボブの黒髪赤目で20代くらいの青年。

ドラキュラにイメージされる服装をしているが、変形の邪魔になるという理由でよく

上半身の服を脱ぐ。

下半身を脱がないだけまだマシかもしれない。

貴族を謳うスカーレット家らしからぬ気安い性格で男女問わず相手をちゃん付けで

呼んだり、語尾にじゃんを付けたりする。

自分の能力から、機械好きの上マゾヒズムの気がある。

若い頃からワザと人間に捕まって拷問を受けたり、処刑されたりを楽しんでいた。

産業革命後――更なる機械の進化を予感してスカーレット家を出奔し、2度の世界大

戦に乱入したりしていた。

最期は太平洋戦争中にとある島にて米軍部隊を巻き込んで自爆。時間帯が日中だった為、破片が日光で灰化し完全に死亡した。

その後遺灰は従者によってスカレット本家に届けられている。

スカレット姉妹との仲は良好だったが、レミアアからは「好ましい人物であったが、それはそれとして変態」と称されている。

名前：十六夜いざよい 獄糸ごくし

種族：穢土転生

能力：『不死を殺す程度の能力』

不死の力を持つ者なら吸血鬼や蓬萊人でも殺すことができる。

関係性：十六夜咲夜の育て親兼師匠

イメージCV：大塚明夫

死因：強大な吸血鬼との戦いの末、深傷により死亡。

メモリの有無：有り

概要：見た目はボロボロの茶色のコートとカウボーイハットを被り、ボサボサのグレーの髪をした男。

コートやハットには様々な妖怪退治の武器やアイテムが仕込まれている。

普段は黒い瞳だが殺気を放つと赤色に変化する。

何故なら吸血鬼と人間のハーフ『ダンピール』だからである。

そのため不死を殺す力と妖怪を探知する能力を持っており、吸血鬼ハンターとして活動している。

いくつもの吸血鬼を倒して、その名を知らない吸血鬼はいないほど。

国を渡り移動している途中で行き倒れていた咲夜に遭遇。

助けて何処かの施設にでも入れようかと思ったが、まだ未熟だが強力な力を感じ弟子にした。

様々な戦闘技術や妖怪に有利な方法や弱点を叩き込み、立派な吸血鬼ハンターに育て上げた。

また咲夜にもし家族という存在ができたら死んでも守り抜き、生涯を全うしろとも教わった。

ダンピールというどちらでもない存在のため家族という物に憧れていた。

だからこそ咲夜に自分のように闇だけでなく光の生活も送って欲しいと思っていた。

咲夜が独り立ちした後、真祖級の吸血鬼と対峙し倒すことができたが思ったよりも深傷で生涯を終えた。

ただ心残りには咲夜が家族と言える者と暮らせているのかちよつと心配であった。

名前：ツツチー

種族：穢土転生

能力：『土を操る能力』

地面の土を触れずに操ることができる。

関係性：チルノと大ちゃん達の友達

イメージCV：かないみか

死因：モースにより侵蝕され復活が不可能になった。

メモリの有無：無し

概要：赤茶色の髪に緑色の瞳、背中には昆虫を思わせる茶色の翅がある褐色肌の少年の姿。

チルノや大ちゃん達と妖精友達で一緒にイタズラや能力で遊んだりしていた。

だがそんなある日、巨大なモースが現れチルノ達が攻撃するが全然効かず逃がして巫女を呼ぶよう伝える。

自分はモースを食い止めてると言い立ち向かう。

チルノは自分も残ろうとしたが大ちゃん達に止められ、連れて行かれた。

能力を使い立ち向かうが案の定効かず、そして最後はモースの毒に侵蝕され――

モースは博麗靈夢によって倒されたが、モースの毒に侵蝕され妖精の特権である復活が不可能になりそのまま消滅。

チルノ達は深く悲しみ、湖の辺りに小さいお墓が建てられた。

名前：田中^{たなか} 描絵^{かくえ}

種族：穢土転生

能力：『描いた絵を実体化させる程度の能力』

文字通り絵を実体化させられる。

実体化した絵は本物に近く、生物でも無機物でもなんでも実体化できるが水に弱い。

関係性：アリスの友達でありライバル

イメージC V：潘めぐみ

死因：病死

メモリの有無：無し

概要：見た目は白衣にベレー帽を被り腰のベルトには多種多様な筆記道具に画材があり、ロングヘアで見る角度で色合いが自在に変幻するグレーの瞳の姿。

画家で幻想郷の全てを絵にするために歩き回っている。

その時にアリスの家を見つけた。

そこで襲われそうになるが人形を操るアリスを見て素晴らしきと感じた。

そして同時に嫉妬心が芽生え、彼女の人形よりも素晴らしい物を描いてみせると決めた。

すると突然絵描きし始め、アリスの絵を完成させた。

今回は君の勝ちだと言って去っていた。

そのことにアリスは啞然としていた。

それから色んな物を描き始め、幻想郷を代表する天才画家として知れ渡る。

外の世界と比べ文明が遅れている幻想郷に絵画という物を流行らせた功績が認められ、幻想郷の歴史の教科書に載る程までになった。

それほど人気の画家となったのだが実は病氣持ちで、最後に大作と言える絵を描こうとしたが結局描けずにこの世を去った。

そのことを知ったアリスは特に何も無いが、今までで魔理沙の次によく来る友人がいなくなつた虚しさを感じた。

名前：書院蝕しよいんしよく 美絃みと

種族：穢土転生

能力：『文字を化けさせる程度の能力』

周囲30m程の範囲の文字を意味不明な文字へ変える。

一方向へ能力を向ければ、更に射程は伸びる。

範囲内から抜けければ変化した文字は元に戻る。

意味を失ってしまうのは文字だけではなく物品に刻印されていた文字がその物品を意味していた場合、文字と一緒にその物品も意味・機能を喪失してしまう。

この作品には登場しないがスペルカードやガイアメモリがこの能力に晒されると、起動しなくなってしまう。

関係性：稗田阿求、本居小鈴の幼馴染。

イメージCV：遠藤璃菜

死因：病死

メモリの有無：有り

所有メモリ：MOLDOORカビの記憶

概要：人里の娘。

サイドテールの黒髪で利休鼠色目の少女。

性格は純真でよく人の事を信じる。

生前は能力を制御できておらず、能力のお陰で周囲の大人からは気味悪がられていた。

そんなとき幼き頃の鈴と阿求に出会い、彼女達と友達になる。

能力の影響もあって文字の読み書きができなかった美絃だが阿求や鈴程ではないが聡明で、彼女達とは話があった。

七歳の頃に流行り病に罹り、そのまま病死した。

名前：黒涙こくろい あげは 鳳

種族：穢土転生

能力：『黒色火薬を生み出し操る程度の能力』

文字通り黒色火薬を生み出すことができる。

火薬は変幻自在で導火線のようにしたり、生物の形を作り触れた相手を爆破できる。

関係性：ミステリアの常連客

イメージCV：置鮎龍太郎

死因：自身の黒色火薬による大爆発。

メモリの有無：有り

所有メモリ：ARMSー武器の記憶

概要：黒い長髪でハイライトがない黒目でサングラスをかけ、黒いスーツを着た男の姿。

背中には蝶の羽が生えている。

蝶の妖怪で殺し屋。

ターゲットはいつの間にか爆破される、影も形も無い爆弾魔『エアボマー』と呼ばれている。

実際は黒色火薬を虫サイズに作り、服などに忍び込ませていただけ。

あとは起爆するだけという簡単なやり口。

自分の殺し屋としての道は誇りを持って行っており、殺すことは自分にとっての生き甲斐である。

そして自分がヤバい存在であることも承知済み。

わかっていながら殺す。

彼曰く殺しを認識できないのに殺すのは単なるチンピラかただのアホ、殺すという意味を知り理解して行うのが本当の殺し屋だ。

もう一つの生き甲斐はミステリアの経営する八目鰻の屋台で食事すること。

ここの料理が美味しく仕事帰りには毎日のように通い、顔と名前を覚えて貰えるほど常連となり気軽に話し合える仲となった。

ある日仕事でミスをしてしまい、ターゲットとその配下達に取り囲まれた。仕方ないと思い、ターゲットを巻き込み自爆した。最後にミステリアの料理が食べられないことに残念に思っている。

名前：セクト・バグスター

種族：穢土転生

能力：『蟲の力を使う程度の能力』

全ての蟲の力を使用でき、姿も顔はカミキリムシ、腕はカマキリと蠍、背中には甲虫類のような羽、六本の脚が生えている合成された昆虫になることができる。

関係性：リグルの師匠で、幽香の友でありライバル。

イメージCV：高山みなみ

死因：寿命100歳（人間年齢300歳）

メモリの有無：無し

概要：見た目は黄緑色のロングヘアで触覚のような物が2本生えており、オレンジ色の瞳はよく見ないとわからんが昆虫のように複眼になっている。

背格好はリグルのようだがマント部分が紺色。

『蟲の女王』と呼ばれ、全ての蟲の力及び蟲を操れる。

その中でリグルの師匠として力の使い方を教えた。

リグルも『セクト先生』と呼んで尊敬していた。

力も強く、幽香とよく喧嘩をしていたほど。

理由としてよく幽香の花の蜜を吸ったり、食したりしていて逆鱗に触れたことが最初だった。

どちらも互角に強かったため中々決着が付かなかった。

そしていつの間にかそれが恒例行事になっていた。

本人達は内心認めて楽しんでいた。

だがある日の事だった。

自分の死を感じ取り最後にリグルに蟲達のリーダーの座を与え、幽香に喧嘩を挑み負けた。

幽香は納得していなく、理由を問うが答えもせず風と共に消えた。

名前：ベニート・ムツソリーニ

種族：穢土転生

イメーヂC V：梅津秀行

メモリの有無：有り

所持メモリ：ROMリーローマ帝国の記憶

概要：フルネームはベニート・アミルカレ・アンドレーア・ムツソリーニ。
イタリヤ王国の元大元帥。

イタリヤ社会党で活躍した後に新たな政治思想ファシズムを独自に構築し、
国家ファシスト党による一党独裁制を確立した。

典章同様Dr.ガイストが手駒として蘇らせられた穢土転生の一人。
典章が人格を縛られる様を見た為、大人しく従っている。

自身の野望を叶える為の足掛かりとして考えており、穢土転生された事に関しては特
に何も感じていない。

名前：典章

種族：穢土転生

イメージ：CV：中井和哉

メモリの有無：有り

所持メモリ：METALLIC闘士の記憶

概要：中国後漢末期の武将。

禿頭が何よりの特徴で厳つい顔つき。

190を超える長身で筋肉質な大男。

その怪力と魁偉な風貌から、曹操より古代の豪傑「悪来」とあだ名される。

粗暴な言動や荒々しい外見とは裏腹に、人一倍忠節を重んじる人物である。

曹操の護衛として活躍した。

穢土転生として蘇らせられ、Dr. ガイストによつて人格を縛られ殺戮人形と化した。

名前：八雲やくも 輪廻りんね

種族：穢土転生

能力：『組み立る程度の能力』

自身の膨大な妖力を消費して古今東西ありとあらゆる武器や道具等つを組み立くる事が出来る

関係性：紫とは長い付き合いのある師匠的な立場。

紫はどう思っているか分からないが……………

イメージC V：山口勝平

死因：謎の病魔による病死

メモリの有無：あり

概要：見た目&種族はこのキャラクターのモデルとなった犬夜叉と同じで性格は他者の事を想える人物。

幼い頃の紫が「式になってくれ」とお願いされる位優秀な半妖だったらしい。

紫には「ずっと一緒にいてやる」とは言ったが謎の病魔が原因で紫に迷惑をかけまいと紫がわからない所で亡くなった。

尚、これが原因で紫は輪廻は自分を嫌って離れたと思ひ込んでいた。

歴代博麗の巫女 設定

博麗^{ういむ}初夢

種族：穢土転生

身長：143cm

体重：45kg

能力：見透す程度の能力

イメーヂC V：花澤香菜

概要：初代博麗の巫女。

紅白の巫女服を身に着け、リボンが両眼を覆う様に巻かれている。

幻想郷が出来たての頃、博麗の巫女というシステムが出来る前に紫が外の世界から連れてきた少女。

博麗初夢という名前はその時つけられた物で、本名は不明。

幼い頃から視力が悪く、博麗の巫女になった頃彼女の目は完全に光を失った。

彼女の能力により、情報を得ることが出来た為目が見えなくとも役目が果たせたとの事。

能力を常に使用していた事から段々衰弱していき、二代目博麗の巫女が役目を受け継ぐと同時にこの世を去った。

『見透す程度の能力』

その名の通り、何でも見透す事が出来る能力。

失明し目が見えなくなっただがこの能力のおかげで見えずとも情報を読み取る事が出来る。

更に相手の位置だけでなく、心の内や感情、能力すらも見透す事が出来る。

だがデメリットが大きく目が見えない分常に能力を発動していなければならない為、初夢自身の寿命を削る事になる。

博麗次夢^{つくむ}

種族：穢土転生

身長：146cm

体重：46kg

能力：未来を視る程度の能力

イメージCV：野川さくら

概要：二代目博麗の巫女。

初代服と同じ巫女服を着ている。

初夢が人里を散歩しているときに捨てられていた赤ん坊を拾い育てられ二代目となった。

庶民の出であるため、霊力は高くなく、結界一枚はるのが精々である。

しかし彼女は、それを補うため体術を鍛えた。

本名は花田継葉はなだつぐはで、次夢という名前は初夢によつて付けられた名前。

最期は三代目に看取られ、安らかに逝つたと言われている。

『未来を視る程度の能力』

彼女が視える未来は、良いものではない。

人に起こる悪いことを視てしまい、自由に視えるものではない。

彼女はその能力をもつて師である初夢の死、そして自身に起こることが分かつてしまった。

博麗幻夢げんむ

種族：穢土転生

身長：143cm

体重：45kg

能力：頭が良い程度の能力

イメージCV：森永理科

概要：三代目博麗の巫女。

初代と同じ巫女服に紫の襷に短髪の眼鏡

靈力や腕っぷしなら歴代最弱の巫女。

元は人里の裕福な家の出であるが為に様々な縁により博麗の巫女となるが靈力に關しても平均以下の為結界も護符を大量に使ってようやくと一枚が限界であるが頭脳戦と手先の器用さに関して歴代随一。

靈力は並の博麗の巫女以下だが、威力は劣るが波紋のような使い方をしてある程度接近戦にも対応は出来る。

本人の性格は努力は大嫌いだ自分が死なないために死ぬほど準備するタイプで博麗の巫女の死により代替わりをしていたが彼女のみはそのジンクスを破り存命のうち四代目に巫女の仕事を任せ隠居した。

靈力を波紋のような感覚で使っていた為、靈夢の代までただ一人存命しており全盛期の20代後半の姿ではないが30代後半の見た目を維持している。

穢土転生として蘇らせられたのは麟のヒストリーメモリの力で死んだ歴史を辿った幻夢の魂を持ってきた為である。

『頭が良い程度の能力』

読んで字の如く、頭の回転が早い。

ジョセフ・ジョースターのようなセリフの先読みや小手先の手品などで相手に精神的な揺さぶりをかけ、相手を罠にかけて倒すことが出来る。

博麗夢陽^{むよう}

種族：穢土転生

身長：146cm

体重：45kg

能力：光・電気を操る程度の能力

イメーজC V：酒井香奈子

概要：四代目博麗の巫女。

生まれつきそれなりに能力を扱えたため時々消えていた。

それを気味悪がれ捨てられた。

わずか7歳のことである。

もちろん7歳の子供が親の庇護もなしに生きていける訳ではなく、お腹を空かせてたどりついたのが博麗神社であった。

そして行くあてのない彼女は博麗神社に住むことになった。

二代目である次夢、次期巫女である幻夢は可愛かった。

そして数年が経ち次夢は死亡し、夢陽は次期巫女候補となった。

尚、次夢の実の妹の子供で叔母と姪の關係。

本名は花田陽花^{はなだようか}で、博麗の巫女候補になる際に夢陽と名付けられた。

最期は先代と5代目、6代目に囲まれて逝った。

『光・電気を操る程度の能力』

生体電氣——脳が体へと発する命令——を操り一時的に失明、金縛り、音遮断等が可能。

更に光の屈折率をかえて透明化及び目潰しができる。

博麗回夢^{かいむ}

種族：穢土転生

身長：160cm

体重：49kg

能力：力を操る程度の能力

イメージC V：沼倉愛美

概要：五代目博麗の巫女。

初代巫女と同じ巫女服だが、肌けてサラシを巻いて筋肉質が高い姿をしている。

他の巫女達よりも特に強く妖怪を純粋な力だけで倒したと言われ通称『力の巫女』と呼ばれていた。

博麗の巫女になったきつかけは幼少期（当時6歳）、妖怪に親を殺されその妖怪を倒して住む場所を探しながら修行していた際に博麗神社から強い力を感じ取りやってきた。

三代目、四代目巫女に話を聞き、ここで修行させて欲しいと頼む。

二人は彼女の内なる力を感じ取り巫女を継いでくれると確信した。

戦闘スタイルは素手やそこらにある物を武器にして戦う。幼少期から高い戦闘能力と鬼レベルの筋肉によって妖怪を素手で倒せることができた。

更に巫女達により技を磨き強さを増した。

最期は強大な妖怪と対峙し、最後は自分の全ての力を込めた一撃で妖怪を退治した後六代目に『次は任せた』と伝え力尽きた。

『力を操る程度の能力』

単純に力をコントロールする能力。

自身の力を強化することは勿論、相手の力を弱体化させることも可能。

博麗^{れいゆ}霊結

種族：穢土転生

身長：144cm

体重：45kg

能力：どんな呪いも祓う程度の能力

イメージCV：上田麗奈

概要：六代目博麗の巫女。

初代と同じ巫女服で、高身長で茶髪のロング。

他の巫女と比べて霊力が強く邪神並みの妖怪や悪霊を祓う事が出来る。

幼少期に妖怪を消し去った力に親が気味悪がられ捨てられた。

飢餓で死にかけていたところを回夢に救われた。

博麗神社に運ばれ介抱され、住むことになった。

回夢には恩を感じており、彼女の助手として共に妖怪から人里を守っていた。

戦闘スタイルは無限に近い霊力を操り弾幕や札として放ったり、お祓い棒に霊力を注いで光の剣にすることもできる。

因みに三代目から教わった。

人里の薬売りの青年と結婚している。

最期は呪いにかかった人を最後まで祓い続けたことで身体に無理がきてしまい、身体が弱くなり吐血して寝たきりの状態に。

薬売りの夫に看病してもらい、最後は愛する夫の手を握りながら息を引き取った。

『どんな呪いも祓う程度の能力』

読んで字の如く、どの様な呪いだろうと祓う事が出来る。

六代目に払えない呪いは恐らく無いだろう。

博麗夢蟲^{むこ}

種族：穢土転生

身長：143cm

体重：44kg

能力：眩きを焼き付ける程度の能力

イメージCV：並木のり子

概要：七代目博麗の巫女。

黒髪ショートの背の低い女性。

穏やかな平和主義者で霊力が弱めなのもあって、「もつとも非力な巫女」とも呼ばれる。

しかし引退中の幻夢に師事し、口の上手さを身に着ける。

そして穏やかな雰囲気に反した蠱惑的なオーラを纏っており「7人目のスタンド使い」の集団幻覚、「蠱惑蟻原」の様なことになっている。

人間に対しては耳元で囁かなくては大きな効果を発揮しないが、人の心を歪ませるこの技は本人もやりたくない。

上記の特性を合わせた交渉術で生前はほとんどの妖怪との諍いを交渉で切り抜けた。戦闘は苦手。

甦らせられた後、敵の戦力を寝返らせる目的で呼び出される。

その蠱惑オーラから多くの人妖から気に入られるが痴情トラブルも多かつたらしい。本人はその辺はどうにかしようとしていた時期もあったがやがて諦めたとのこと。

最期は仲が良かった魔法使いにマジックアイテムで刺されたこと。犯人の魔法使いはその後リンチを受け原型が無くなっていった。

今際に次代は一番腕の立つ才能の巫女にして欲しいという遺言を残した。

『眩きを焼き付ける程度の能力』

自分の言葉を深層意識にまで焼き付きさせる能力で洗脳にも使えてしまう。

虫や小動物を操り戦ったり中には能力によって心酔した人物が代わりに戦わせる事が出来る。

博麗靈斬^{れいき}

種族：穢土転生

身長：150cm

体重：50kg

能力：斬ったという結果を残す程度の能力

イメージCV：喜多村英梨

概要：八代目博麗の巫女。

紅白の巫女服に白い刀身で紅い持ち手の刀『宝桜（ほうおう）』を腰に差した白髪のセミロングで深緑のリボンをし、緑色の瞳でグラマスな体型の女性。

巫女の中で剣術を得意とする巫女。

実は魂魄妖夢の祖父である妖忌の母親。

つまり妖夢にとって曾祖母にあたる。

剣を極めすぎてつまらなくなり、色々あつて博麗神社で巫女をしている。

性格はポジティブでどんなことも前向きに考える。

鬼と同等の酒豪で大ジョッキに入ったウオッカを10杯一気飲みしても平気。

世話焼き好きでもあり、寺小屋で子どもと戯れたりするのが大好き。

戦闘スタイルは刀による剣術を最も得意とする。

本気の抜刀は抜いた瞬間が見えないほどの速さで相手は斬られたことすら気づかない。

神や霊、火や水、風、或いは空間さえ、どんな物でも斬ることができる。

最期はコケたことにより頭部に石が当たり、即死。

『斬ったという結果を残す程度の能力』

簡単に言えばFateのゲイボルグと同じ。

因果逆転の斬撃を放ち『斬った』という結果が先に発生し、後はその結果にそって刀を振るうというチート能力。

博麗美霊^{びれい}

種族：穢土転生

身長：145cm

体重：45kg

能力：人格を操る程度の能力

イメージCV：川村万梨阿

概要：九代目博麗の巫女。

紅白の巫女服風のドレスを着た金髪のツインテールの女性。

巫女の中でも特に変幻自在と言われ『惑わしの巫女』と呼ばれていた。

多重人格者で7人の人格がいる。

主人格である細かい変化も見逃さないほどの観察眼をもつお嬢様口調の『美霊』

百発百中で射撃を得意とする物静かで無口な『銃霊』

知識欲が強くどんなことでも調べないと気が済まない魔法を得意とした本オタクの

『夢利』

様々な武術を会得した荒っぽい性格の『霊突』

農作物を栽培出来。パワーが他の人格より強く、炊事洗濯が得意な優しい口調の臆病な

性格の『精夢』

風を吹かせて雨を操るネガティブな性格の『霊水』

マジシャンで明るく何事にも動じず相手を騙す事が出来る『無品』の七人。

親が物心つき始めた頃に亡くなったことで多重人格者となり周りから君悪がられたが、八代目の霊斬に拾われ博麗神社に住むことになった。

親同然で育ててくれたことに感謝しながら生活を続け、修行の一環として心の強さを教わった。

霊斬が死んだことは悲しいがそれでも砕けなかったのは霊斬のおかげ。

十代目の狂夢はそんな自分に姿を重ねて博麗神社に迎えた。

因みに彼氏がいたらしいがどんな相手かは不明。

本人曰くみんなが知っている男だそう。

最期は寿命を全うし逝ったそうだ。

『人格を操る程度の能力』

上記にもあるように七人の人格を変幻自在に変えていく能力。

其々の戦い方がある為、最低でも対策を七つ揃えなくてはならない。

博麗狂夢^{きりょうむ}

種族：穢土転生

身長：200cm

体重：84kg

能力：呪を操る程度の能力

イメージCV：ファイルーズあい

概要：十代目博麗の巫女。

赤と黒の巫女服を着ておりグラマスな女性だが、顔は髑髏で狐の面を被った紫色の口ングヘアで身長は2mある。

博麗史上最狂の巫女で通称『博麗の死神』。

幼少期から自らどんな呪物も体内に取り込み自分の力とする事が出来る。

その代償として顔が骸骨となっている。

ある村で神として祀られていたが、村人が子を殺して贄として捧げたことで愛想尽かし村を焼き払った。

行く宛を探しながら森を歩いていたら幻想郷に辿り着いた。

紫と九代目に遭遇し自身の生い立ちを話す。

不憫に思ったのか或いは危険だと思ったのか、博麗神社に住まわせてもらうことになつた。

九代目の手伝いをしながら人と交流を交わし、面を外しても気にならないほど親交が深まった。

九代目が寿命で死んだことで自動的に巫女となった。

性格は大雑把で強気な口調で『じゃじゃじゃ』といった笑い方が特徴的。誰とでも気軽に話す。

自分を優先せず人を守る事を第一に考える正義感の持ち主。

18歳の夫がおり意外にもラブラブ。

戦闘スタイルは今まで取り込んだ呪を使うことが出来る。

彼女が作り出した結界や封印は巫女の中でダントツ最上位。

更に人や物の寿命が見えるようにもなった。

最期は老衰で、見た目ではわからないが彼女は呪物を取り込みすぎて既に300歳はとうに越えていたらしい。

『呪を操る程度の能力』

読んで字の如く、あらゆる呪術を駆使する変幻自在な能力。

対象物を燃やすまで消えない黒炎や呪毒を与える黒い鉤爪、黒い無数の触手を生やした異形の姿に変わる事が出来る。

そのためこちらに干渉する能力は時間がちよつとかかるが解くことが出来、同じ力は効かなくなる。

博麗米^め亜^あ理^り

種族：穢土転生

身長：158cm

体重：56kg

能力：あらゆる武器を作り使い知る程度の能力

イメージC V：荒浪和沙

概要：十一代目博麗の巫女。

歴代博麗の巫女の中で初代以外の唯一の外来人。

十代目が急死：もとい老衰で亡くなった為、急遽紫に任命された。

服装は基本的に巫女装束だが、妖怪退治や異変の時は迷彩色の巫女装束（特注品）に着替える。

元海兵隊、特殊部隊出身。

日本人とアメリカ人のハーフである。

本名は宗田^{むねだ}メアリー。

休暇で旅行に来た時に無縁塚へと迷い込み、十代目に遭遇、保護される。霊力は歴代の中でもトップ5にはいる。ただ、それを上手く使いこなせなかった模様。

十一代目とは言うものの、次代の博麗の巫女への繋ぎとしての任命だったため、厳密には十一代目と言えない。その為か、歴代の中でも一番任期が短い。

その日数、何と3カ月。

しかも二月と五月の間。

引退後は霊繁にその霊力を50%譲渡したのち、行方不明となっている。

穢土転生させる際は三代目同様、ヒストリーメモリの力を使い死亡した歴史から魂を連れてきた。

『あらゆる武器を作り使い知る程度の能力』

読んで字の如くあらゆる武器を作り、使い、そして名前、作られた経緯を知ることが出来る。

幻想入り編

Mの記憶／少女の幻想入り

風の街——風都

街のシンボルである巨大な風車のついた塔「風都タワー」がそびえ立ち、風都の名の通り心地のいい風が吹いている。

海と山に囲まれ自然豊かなこの街には負の象徴としてあるUSBメモリ状のアイテムを用いつた犯罪が耐えなかつた。

そのアイテムを人は魔性ガイアメモリの小箱と呼んでいる。

一度使えばその力の強大さやメモリの毒素ゆえに地球の記憶に飲み込まれ、精神と肉体を蝕まれることで、暴走・依存症になってしまう。

一種の麻薬でもある。

そしてそんな代物を使用し誕生した怪物超人を人はドーパントと呼んだ。

風都の街に蔓延るガイアメモリを巡る物語は二人で一人の仮面ライダーや風都署の刑事の仮面ライダーによって紡がれる。

だが……

これから始まる物語は風都の仮面ライダーの物語ではない。

これは……

ある忘れ去られたもの達の樂園に迷い込み、何故か風都の魔性の小箱ガイアメモリを持った少女の物語である。

「……んっ」

幻想郷の魔法の森にて少女は目を覚ました。

「……………何処？」

辺りには草木と少女の持ち物であろう小さな手提げバッグだけだった。

何故こんな森の中に自分は寝ていたのか、少女は記憶を呼び起こそうとする。

「……私は……」

だが何も思い出せなかった。

「……………」

少女は辺りを見渡し、歩き始める。

歩いている最中に少女は考える。

(何処なんだろう……此処……なんか変な気分……早く此処を抜け出さないと)

どれ位歩いただろうか……

数分？

数十分間？

数時間？

良く分からない感覚に襲われながら少女はひたすら歩いた。

「はあ……はあ……この森……深すぎ……」

少女は歩き疲れたのか、木陰に座り込む。

「……変な気分……もう何なのさ……」

魔法の森の妖気に当てられつつも少女は再び立ち上がった。

「……何か無いかな」

少女はバッグの中を漁り始めた。

「……………ん？」

バッグの中には一本のU.S.B.メモリだけだった。

「何これ……マグマ？」

メモリにはMの形をした山から熔岩が流れ出ているマークとMAGMAと書かれた文字が描かれていた。

「USBメモリ……何でこれだけ？」

USBメモリ一つ入れるにしては少し大きいバッグ。

何故USBメモリしか入っていないのか少女は不思議に思った。

「……はあ……終わった……森の中で迷子なのに……持つてる物はマグマって書かれたUS
Bメモリだけ……はあ」

少女は肩を落とす。

ガサガサ

「っ!？」

すると少女近くの茂みが揺れる。

「えっ……何?」

これまで人は愚か小動物にすら出会さなかった少女は不気味がる。

ザザツ

「……ええ」

茂みから出てきたのは文字通りの化け物だった。

「キキキ……ウマソウナニオイ……ミツケタ」

本来の魔法の森なら並の妖怪なら寄り付きもしないのだが、空腹な上に人のニオイが

した森に入ってきた妖怪に運悪く遭遇してしまったのだ。

「ヒッ」

少女は尻もちを付いた。

「ウンガイイナ…コンナトコロニニンゲンノコムスメガイルトハ…サツソクイタダクトスルカ」

頂く…怪物は間違いなく頂くと言った。

では何を頂くのか？

その答えを軽くパニックに陥っている少女は導き出す。

（私…食べられる!?!）

少女は咄嗟に後ろを振り向き逃げ出そうとする。

「オット」

妖怪はすかさず少女の足を掴んだ。

「きやつ」

「ニガストオモツテンノカ？」

軽々と少女を持ち上げる妖怪。

「いや！離して！」

「イセイガイイナ、ダガヒサビサノゴチソウダ…ハヤク…クイタイ」

妖怪は少女を口元に運び出す。

「いや…イヤだ…誰か…」

「アアアアア」

妖怪がその大きな口を開ける。

「助けて…イヤだ…イヤアアアアア！」

少女が叫ぶ。

するとあることが起きた。

【MAGMA！】キュピーン

手に持っていたUSBメモリが突如MAGMAと鳴り出すと少女の左腕に吸い込まれたのだ。

ジュウウウウ

「ギヤアアアア」

すると妖怪が突然少女を離した。

「…うつ…えっ？」

地面に落下した少女は呆気にと取られていた。

だがそれだけでは無かった。

少女の体が見るみると燃え始めたのだ。

「えっ!?!何!?!何!?!」

燃えた少女の体は次第に崩れていき、その姿を現した。

「グッグウウウウウ」

妖怪は焼け焦げた右腕を見つめながらその姿を見る。

そこに居たのは先程の弱そうな人間ではなかった。

そこには流れる溶岩と燃え上がる炎のような身体が特徴的な怪物^{超人}が居た。

Mの記憶／忘れ去られたものの楽園

熔岩の記憶を秘めたメモリ・マグマメモリで熔岩マグマ・ドールパントの怪人になった少女は、自分の姿に驚愕していた。

「何これ!? 私どうなってるの!?!」

「キサマアア! コノオレサマニヨクモオオ!」

少女が戸惑っているのと右腕を燃やされた妖怪が目赤くして睨んでいた。

「ヒッ」

いくらドーパントになったと言えど、すぐには対応仕切れない少女は妖怪の威圧に怖気づいていた。

「ブッコロシテヤルゾオオ!!」

妖怪が少女に迫る。

「ヒッ! 来ないでえええ!!」

少女が右手を前に出した。

ボオオオオ!

「グツギヤアアアア!?!」

「…へ？」

少女が前を見ると自身の出した右手から炎が噴射されており、妖怪を焼いていた。

「アツイアツイアツイ！」

妖怪は炎の熱さで苦しんでいた。

「…もしかして…これ…私がやった？」

少女は自身の右手を見つめながら呟く。

すると少女の脳裏にあるヴィジョンが見える。

【MAGMA！】

それはとある男が今自分自身が使っているマグマメモリを使用している姿だった。

（これは…もしかして…このメモリの？）

少女は見た。

その男、戸川陽介がマグマメモリで犯してきた罪を見た。

WINDSCALEの支店ビルを2軒襲撃。

3軒目では支店をビルごと倒壊させ、さらには崩壊させたビルが道路側に倒れたことで、交通渋滞等の二次災害を引き起こした。

(酷い…リストラされて恨んでたからって…他の人まで巻き込んで…)

戸川はその後にWINDSCALE支店を襲うために現れるも、一人の男性に話しかけられる。

『戸川陽介…だな?』

(この人…誰だろ…)

『お前も、ここの社員か?…ならば…燃えろ!』

戸川は自身が変身するマグマ・ドーパントに変わる。

(!?…やめて!…これ以上この子で悪さしないで!!)

少女は叫ぶが彼女の声は聴こえていない。

『…止めてやるよ…俺が、いや…俺たちが』

男性は懐からベルトを取り出し、腰に当てる。

【JOKER!】

(あれは…メモリ?…でもこの子と形が違う…あれ…何で私…メモリの事この子って呼んでるんだろう?)

そこでヴィジョンは途切れた。

「っ！…何だったの？今の…？」

「ニンゲンガアアア!!」

「っ!?!」

呆けていた所に妖怪が燃えながら突っ込んできた。

「ッ！」

少女は咄嗟にヴィジョンで見た通りに自身の体を燃やしその熱気を放った。すると熱気はそのまま妖怪まで辿り着き、妖怪までの経路を溶かした。

「ナツギヤアアアアアアアア!!」

そのまま妖怪は熔岩と化した地面を踏み、みるみると溶け始めた。

「ギツギザマアアアア」

妖怪は少女を睨みつけながら、骨も残らず全て溶けていった。

「ハア…ハア…ハア…ハア…」

ギユウウン

少女が体の力を抜くと左腕からマグマメモリが出てきて、少女の体は元に戻った。

「ハア…ハア…ハア…」

少女は落ちたマグマメモリを手取る。

「…マグマ…メモリ…何だったんだろう…今の」

少女が呆気を取られていると…

「うわ?!何だコレ?!」

「っ?!」

突然声をした方向を見るとそこには白と黒をベースとした服装とまるで魔女の様な大きい黒い帽子を被った金髪の少女がいた。

「おいおい…何で地面が溶けてんだ?!しかもクサ!?何だこの何か焼け焦げた様なニオイ…っ…お前見ない顔だな?…大丈夫か?」

金髪の少女が近づいてくる。

「……」

少女は一步引いた。

「そう警戒すんなよ!まあこんな所に突然現れた私も悪いけどさ…あつ私は霧雨魔理沙!見ての通り普通の魔法使いだ」

「……魔法…使い?」

「んあ?何だその反応…幻想郷に住んでんなら魔法使い位珍しくもないだろ?」

魔理沙は少女の反応にあたかも当たり前だと言いたげに呟く。

「幻想……郷？」

「ん？……ああ！お前外来人か？だったら魔法使い知らなくても無理ないか……あく……と
りあえず霊夢ん所行くか……アイツに説明して貰うのが早いし……んじやまあ付いてきな
よ……あくお前さん名前は？」

「えっ？」

一通り自身の中で解決した魔理沙は少女に聞いた。

「えっ？じゃなくて名前だよ、私が名乗ったんだから次はあんただろ？ずーつとあんた
とかお前とか呼ぶのもなあ」

「……名前……」

少女はこの森以前の記憶が無い。

しかし少女は自身の名前と思われるものを口にする。

「……来雪」

「ん？」

「来雪……そのだこゆき園田来雪」

「園田来雪……ふうん、いい名前だな！んじや来雪！私の事は魔理沙で構わないからな」

「……うん」

来雪は魔理沙の言葉に頷いた。

「それじゃあ行くこうぜ！」

「……何処に？」

「博麗神社…来雪みたいないな外来人がまず行かなきゃいけない所だな」

そう言うのと魔理沙は箒に跨り飛んだ。

「えっ!!」

「ん？何してんだ？…もしかして飛べねえのか？」

「飛べるわけ無いでしょ!!ていうか飛べるの!？」

魔理沙の素っ頓狂な言葉に来雪は驚愕する。

「えくしょうがねえなあ…」

魔理沙は再び地面に降り立った。

「ほらよ」

「え？」

「え？じゃなくて乗れよ！連れてってやるから」

「え…ああ…うん」

来雪はツツコむのを止めた。

「んじゃまあ…飛ばすぜえ！」

「っ！~~~~~!!」

それ以来、来雪は魔理沙の箒に乗りたいとは一切思わなくなった。

「おし到着！な？早かっただろ？」

「ゼエ…ゼエ…もう二度と乗らない」

「何だよ折角早く連れてきてやったつてのに…んなことより…おっい霊夢！魔理沙さんが来てやったぜ！」

魔理沙は神社の敷地内に家主の許可を聞かずに入っていった。

「全く…あんたは何時何時も…」

そこに白と赤をベースとした巫女服に大きな赤いリボンをした少女が現れた。

「あんたねえ…毎回毎回家主を差し置いてズケズケと」

「何だよ霊夢くお前と私の仲だろく」

魔理沙は巫女の少女・博麗霊夢に言った。

「親しい仲にも礼儀ありでしょ…全く…んで？何の用よ」

「いやな外の世界の奴が魔法の森に居たんで連れてきたぜ」

「は？外の世界？…魔法の森に居たのに良く生きてたわね」

「それが妙なんだよなあ…辺りの地面は溶けてたし、焦げ臭かったし…まあ生きてたんだから良いだろ！来雪！こっち来いよ！」

魔理沙に呼ばれ来雪が歩いてきた。

「紹介するぜ！こいつは博麗霊夢！ここ妖怪神社こと博麗神社の巫女だ」

「ちよつと！妖怪神社は余計よ！全く…あなたが魔理沙の言つてた外の世界の人ね…私は博麗霊夢…とりあえずアイツが居ないから私が言うけど…ようこそ幻想郷へ、ここ幻想郷は全てを受け入れる場所よ」

「全てを受け入れる？」

霊夢は来雪に一通り説明する。

幻想郷

忘れ去られたもの達の最後の楽園。

そこには人、妖怪、妖精、神等などの種族が暮らし、魔法やら妖力やらが闊歩する世界。

時折外の世界から迷い込んでくる外来人が居る事や常識が通用しないこと等など。

「とまあこんな感じ…分かったかしら？」

「……もう何がなんだか…」

「まあいきなりこんな所に迷い込んだら混乱もするわね……そんなあなたには悪

いけど…あなたが取れる選択肢は2つよ」

「2つ?」

「1つはいつかは分からないけど外の世界に帰る事、もう1つは外の世界を捨ててここで暮らす事…私としては後者の方が楽でいいんだけどね」

「……………」

来雪は考えたが殆ど選択肢等無かった。

「…ここで暮らすにはどうしたら良いですか?」

「……へえ…私が言うのもなんだけど、普通なら帰る事を選ばないかしら?」

「…その…帰る帰らないの前に…私…あの森の前の記憶が無いんだ」

「っ」

「はっ!? 記憶が無い?」

黙っていた魔理沙も驚きで声を上げる。

「うん…気が付いたら森に居て…でもどうやって森に来たのか…それ以前に今まで何してたのかすら覚えてない…この名前もふと思いついた名前なんだ…だから…帰りたいけども帰る場所がわからないから…選択肢は1つしか無いんだ」

「来雪…」

「…そう…ハア…ならとりあえずは宿が見つかるまでは家に居なさい…何も無いけど」

ね」

「霊夢さん…良いの？」

「ただし、タダでとは言わないわ！それなりに働いて貰いますからね！」

「…うん、宜しく霊夢さん」

来雪は右手を出す。

「…記憶が無いのに握手は覚えてるのね」

「…そう言えば…何でだろ？」

来雪は無意識だった様だ。

「…まあ良いわ、こちらこそ宜しく来雪」

霊夢は左手を出し握手を交わした。

「改めてようこそ幻想郷へ」

「……うん！」

この時より記憶の無い少女、園田来雪の幻想郷での生活が始まる。

Pの能力／魔性の小箱の使い方

博麗神社に暫く住むことが決まった来雪。

するとその経緯を見ていた魔理沙がふと呟いた。

「そーいやさ来雪、お前の能力って何なんだ？」

「ん？能力？」

「またまた隠したって無駄だぜ、お前を見つけた時辺りが凄かったじゃんか！あれお前の能力だろ？」

来雪は考え込む。

（能力って…多分あれだよな？…でもどうやって説明しようかな…）

「まさかの能力持ちだったなんてね」

霊夢は苦笑いしていた。

「う〜ん…参考までに聞くけど二人も能力を持つてるの？魔理沙さんのは…魔法使いで言ってたしやっぱりそっち関係？」

「おうよ！私の能力は「魔法を使う程度の能力」だけ！」

「私は「空を飛ぶ程度の能力」よ」

来雪は二人の能力を聞いて疑問に思った。

「程度の能力?…何で程度?」

「…そう言えば何でかしら…考えたこと無かったわね」

「確かにな…何でだ?」

「…えつと…霊夢さんの空を飛ぶ程度の能力?…魔理沙さんも空飛べますよね?」

「ああ私の能力は確かに空を飛ぶ程度の能力だけど、ただ空を飛ぶだけの能力ではないわよ…ただ説明が面倒だから追々話すわね…それよりあなたよ!あなたの能力は何なの?」

「私は…」

来雪は持っているバッグからマグマメモリを取り出す。

「多分…これかな?」

「何だこれ?」

「…箱?」

魔理沙と霊夢はガイアメモリを見てキョトンとしていた。

「えつと…マグマメモリって言うんだけど…えつと…見せた方が早いかな…二人共離れて」

霊夢と魔理沙は何故かと思ったが言われた通りに離れる。

「……」

来雪はガイアメモリのボタンを押す。

【MAGMA!】

ガイアメモリからガイアウイスパークが鳴るとメモリは宙に浮き、来雪の左腕に入っていた。

キュピーン

ボオ

来雪の体が燃え始め、崩れた。

『!?!』

二人はその光景に驚愕する。

来雪は熔岩の記憶の怪物、超人マグマ・ドープアントに変身した。

「はああああ……はあ!」

来雪が唸るとマグマ・ドープアントの周りは陽炎が立つほどの熱気になった。

ボオ

「ん?うお!」

余りの熱気に魔理沙の帽子に火が点きそうになった。

「…^{アツ}熱ッ」

「えつと…これが私の能力…かな？」

「おいおい来雪…めちやくちや格好いいじゃねえか！」

「格好…いい？」

魔理沙のセンスに苦笑いする霊夢。

ギユウウン

来雪はマグマメモリを体内から取り出し、人間の姿に戻った。

「マグマ・ドールパントって言うんだって…私も良く分からないけど…妖怪？…に襲われた時にこのメモリが私の左腕に入ってたら変身したんだ」

「道具を用いる能力かあ…アリスみたいだな」

「メモリ？を扱う程度の能力って所かしら？」

「うくん…何だろう…ちよつと違うような…」

「なあなあ他には無いのか？他のメモリ！」

「えつ？…えつと」

来雪は困り果てる。

(どうしよう…マグマメモリしかない…でも目を輝かせてるし…うくん)

来雪がバッグの中をダメ元で見ると一本のメモリが入っていた。

(えっ?!…マグマメモリしか入ってなかったのに…何で?…これが私の能力なのかな?…うくん)

来雪はバッグの中からメモリを出した。

「おっ! やっぱりまだあるよな! 早く見せてくれよ!」

「う…うくん」

来雪はメモリのボタンを押す。

【PLANT!】

ガイアメモリからガイアウイスパーが鳴るとメモリは宙に浮き、来雪の首筋に入ってしまった。

キュピーン

その姿は全身蔦で巻かれており、所々に謎の花や果実がついた植物人間の様な姿だった。

来雪は植物の記憶の怪物^{超人}、プラント・ドーパントに変身した。

「そのメモリはそんな姿なのね」

「うくん…私はさっきのマグマの方が好きだぜ」

「あはは…えっとプラント・ドーパント…能力は……ねえ霊夢さん…さっき何も無いけ

どって言ってたけど……その……食に困ってる?」

来雪が聞くと霊夢は苦笑いしながら答える。

「……まあ……お賽銭も少ないし……一人なら何とかいけるって感じかしら……正直来雪の食事どうしようって……あはは」

「おいおい……貧乏なのは知ってっけどよ……そこまでかよ」

霊夢の言葉に魔理沙も同情していた。

「その問題……解決出来るかも」

「えっ?」

来雪が裏庭に移動する。

「ちよつと!」

「何だ何だ?」

「ふうう……ふん!」

来雪が右腕を地面に付けると体に巻き付いた蔦が裏庭にどんどん広がっていった。

「なっ!?!」

「蔦が伸びてる!?!」

裏庭全体に蔦が広がると来雪は力を入れる。

「フッ!」

すると広がった蔦から花が咲き、やがて実を付けていった。

その実はみるみると霊夢や魔理沙達を知る野菜に変わっていった。

「おいおい…幽香みたいな能力だな」

「ふう…体には害は無いように作ったからちやんと食べられる…と思うけど…：どうかかな？」

ギユウウン

来雪はプラントメモリを体内から取り出し、人間の姿に戻った。

プラント・ドーパントの変身を解いても野菜は健在だった。

「………来雪」

「ん？」

霊夢は来雪の手を掴んだ。

「っ！」

「私と商売しない？」

「えっ…商売？」

「おいおい霊夢…まさか…」

良く見ると霊夢の目にはお金しか映っていないかった。

「だってそのメモリ使えば無限に野菜や果物を作れるのよ！この野菜や果物を売れば生

活も困らないわ！こうしちやいられないわ！すぐに人里での販売許可を取りに行かないきゃー！！」

「おい霊夢待てよ！結局それかよ！来雪の善意をお前何だと思つてんだ！」

今すぐにでも人里に向かって飛びそうになる霊夢を抑える魔理沙。

「離しなさい魔理沙！私はこの野菜達を使つて儲けるのよ！」

「お前金の事になると急に意地汚くなるよな！少しは考えろよ！第一来雪の宿が見つかるまでだろ！その後はどうすんだよ！！」

「安心しなさい！来雪は此処で暮らさせるわ！」

「来雪どうこうじゃなくて絶対にプラントメモリの為だろお前!?」

「あの……えつと……」

結局この後魔理沙は霊夢が正気に戻るまで止めに入っていた。

正気に戻つた霊夢は来雪に謝罪をし、魔理沙は疲れたと言い自宅に帰ろうとした所、来雪は魔理沙にプラントメモリで作つた野菜を分け、魔理沙も感謝し帰つていった。

その日の夜

早速霊夢はプラントメモリで作つた野菜を使つて夕食を作つた。

「簡単な野菜炒めだけ……この野菜凄く美味しいわね！」

「気に入って貰えて良かった……うん、美味しい」

来雪もプラントメモリで作った野菜を食べて美味しく感じている。

「うん……やっぱり来雪これで商売した方が良いと思うわよ？人里の八百屋さんには悪いけど凄く美味しいもの」

「うん……正直私は八百屋になりたいんじゃない……この子達を悪いことには使いたくないな」

「この子達？」

「うん……あつ……ただ……何で私はこのメモリをこの子達と呼ぶんだろう？」

無意識にメモリをこの子と呼んだ来雪は首を傾げた。

「……あなたの記憶に関係してるんじゃないかしら？」

「私の……記憶………良く分からないけど……この子達は決して良いことに使われてた訳じゃないみたいなんだ」

「……どういふこと？」

霊夢が尋ねると来雪は悲しそうな顔で語った。

「魔理沙さん……マグマ・ドーパントが格好いいって言うてくれたけど……マグマメモリはある一人の男性が仕事を辞めさせられて……その恨みを晴らすために使われてたんだ」

「……………」

来雪の話や霊夢は静かに聞いていた。

「妖怪に襲われた時に頭の中に記憶が流れてきて……これはマグマメモリの記憶なんだと思う……メモリに入ってる熔岩の記憶じゃなくて……マグマメモリ自体の記憶……そう思うと……この子達を私利私欲の為に使いたくないなって……」

「……そう……ならあなたが正しい使い方をしなさいな」

「えっ?」

「あなたが見た記憶の男と同じ様に使うんじゃないかって、それを人の為に使えば良いんじゃないかしら? 私にやってくれたプラントメモリの様に、使い方次第で人の為になるんじゃない?」

「人の……為に……」

来雪はマグマメモリとプラントメモリを見つめる。

「……そう……出来たら良いな」

「出来るわよ来雪なら、私が保証するわ」

「……何でそんなに自信たっぷりなの?」

「感よ感……私の感って意外と当たるのよ」

霊夢はあたかも当然の様に胸を張る。

「……ふふ……なにそれ」

来雪はそんな霊夢の様子に笑みを溢した。

Fの脅威／来雪のやるべき事

「人里に行きたい？」

「うん」

来雪が霊夢と暮らし始めて早2日になり、来雪は霊夢にお願いした。

「霊夢さんと暮らして2日…幻想郷の住人になるんだから色んな所行ってみたいなつて」

「それで人里って訳ね…：そうね…じゃあ行きましようか」

「え？…場所だけ教えてくれれば…」

「これでもあなたを預かつてる身よ、一人で行かせる訳ないでしょう！分かったら支度する！」

来雪は霊夢の言われた通りに支度をする。

「まあ…持っていく物って言ったらこれしか無いけど…」

来雪の持ち物はマグメメモリとプラントメモリだけだった。

「メモリねえ…必要かしら？」

「まあ一応ね…何かあるか分からないし」

「ふうん……まあ良いわ、それじゃあ行きましょうか」

霊夢は来雪の脇に手を回す。

「えっ？」

「しっかりと捕まってなさいよ、今日は私が運ぶから今度飛ぶ練習もしましょうか」

「……安全飛行でお願いします……」

来雪は冷や汗を掻きながら言う。

「安心しなさい、急いでる訳じゃないからそこまで飛ばさないわ」

霊夢の言う通り、人里まで来雪は地獄を見ることなく空の旅を楽しんだ。

「ほえ〜」

来雪は人里の様子を見て呆けていた。

「何呆けてるのよ?」

「何か新鮮だなあって」

「外の世界より発展はしてないでしょうけどね」

霊夢と来雪は色々な店を周った。

雑貨屋で来雪の小物を探したり、霊夢御用達の団子屋で団子を食べたりと人里を満喫

した。

「来雪が野菜を作ってくれたおかげで食費が浮いたし、久々に食べた団子美味しかったあ」

霊夢は満面の笑みを浮かべていた。

「うん、霊夢さんごめんなさい：私の小物まで買ってもらっちゃって」

「良いの良いの、こつちも色々やってもらってるし：まあ前も言ったようにそれなりに働いて貰いますからね」

「は〜い」

来雪は歩きながら人里の風景を見る。

「ん？どうしたのよ来雪」

「何か：：こういう賑やかなの良いなって」

「：：ふふ：：そう」

来雪の言葉に笑みを浮かべる霊夢。

そんな二人に一人の男が話し掛ける。

「なあ少し良いか？」

「ん？」

「えっ：：何でしょうか？」

その男は来雪を見つめながら笑みを浮かべる。

「園田来雪つてのはあんたかい？」

「えっ？…そうですけど…えっと…何処かでお会いしましたか？」

「っ！来雪離れて！」

霊夢は来雪の肩を掴み後ろに下がらせる。

「霊夢さん？」

「博麗の巫女か…ついでにお前も消しとくか」

男がそう言うのと懐からある物を取り出した。

「っ!?それは…」

「ガイア…メモリ!？」

「さあ…殲滅だ」

男はガイアメモリのボタンを押す。

【FLEET!】

ガイアメモリからガイアウイスパーが鳴る。

男はフリートメモリを右腕の生体コネクタに挿した。

キュピーン

男の体は金属で覆われ聴てその姿を現した。

男は上半身が洋風の戦艦の甲板を思わせる外殻で覆い、下半身は某ロボットアニメガ
ン〇ムの下半身に変わった。

両手には大剣と盾を装備している。

男は艦隊の記憶の怪物、フリート・ドーパントに変身した。

「うううう…ウオオオオオオオオ!!」

雄叫びを上げたフリート・ドーパント。

フリート・ドーパントの出現に里の人々はパニックに陥っていた。

人々は一目散に逃げ出した。

「来雪以外にも変身者が幻想郷に居るなんて…!」

「フリート!?!…そんなメモリ知らない…初めて見るメモリだよ!」

「園田来雪…博麗の巫女…此处で消えろ!」

フリート・ドーパントは大剣を振り回しながら走り出す。

「そう簡単に殺れると思わないことね!」

霊夢はお祓い棒を構えた。

「これでも喰らいなさい!」

霊夢は御札の弾幕をフリート・ドーパントに向けて発射する。

「オラア!」

フリート・ドーパントは弾幕を大剣で斬り捨てる。

「なっ!?!」

「死ねえ!!」

フリート・ドーパントの大剣が霊夢の頭に迫る。

「霊夢さん!」

【PLANT!】

キュピーン

来雪は咄嗟にプラント・ドーパントに変身し、葛を大剣に絡ませた。

「ああ!?!」

「フンッ!」

すかさず霊夢がフリート・ドーパントの腹部を蹴り飛ばした。

「グハッ」

霊夢は距離を取った。

「ありがとう来雪!」

「園田来雪! 邪魔すんじゃないやねえ!」

フリート・ドーパントの甲板から5機のファンネルが飛び出した。

「なっ!」

ピュンピュンピュン

5機のファンネルから光線が放たれる。

「キヤアツ」

光線よつてプラント・ドーパントの体から火花が舞った。

「来雪だけじゃないのよー」

霊夢はお祓い棒でフリート・ドーパントに攻撃しようとする。

「ウザつてえー」

フリート・ドーパントは大剣で受け止める。

【MAGMA!】

キュピーン

来雪はすかさずプラント・ドーパントからマグマ・ドーパントに変身し直した。

「ハアツ！」

マグマ・ドーパントがフリート・ドーパントに向けて火炎岩を発射した。

ドドドン

「グオオオオ!?!」

フリート・ドーパントの背中に直撃する。

「そこよー!」

フリート・ドーパントが怯んだ隙に霊夢は顔面にパンチする。

「ガハッ！」

フリート・ドーパントが後方に殴り飛ばされた。

「クソがアア!!」

「……」

マグマ・ドーパントとなった来雪はフリート・ドーパントを見つめながら考えた。

(あのメモリの事は分からない…でも…この子達と同じガイアメモリであることは変わりない…だったたら!!)

マグマ・ドーパントはそのまま走り出した。

「来雪!？」

突然走り出したマグマ・ドーパントの行動に霊夢は驚きを隠せなかった。

「此処でくたばれ園田来雪イイイ!!」

フリート・ドーパントも大剣を振り回しながら走り出した。

「ダアアア!!」

マグマ・ドーパントは熔岩をフリート・ドーパントに向けて放った。

「効くかああ!!」

フリート・ドーパントは盾で熔岩を防ごうとした。

しかし盾は意図も簡単に溶けた。

「何イイ!?!」

本来のマグマ・ドーパントの力ではフリート・ドーパントの盾を溶かすことは出来ないが、この土壇場で来雪の程度の能力が一時的に覚醒した。

【地球の記憶を具現化する程度の能力】

それこそが来雪の能力であり、地球の記憶を封じ込められたガイアメモリの能力を最大限に引き出す事が出来る。

「この子達を…二度と悪事に使わせない!!」

来雪の心の叫びに応えるかの様に、マグマ・ドーパントの熔岩が威力を増した。

「グアアアアアナニイイイ!?!」

フリート・ドーパントはマグマ・ドーパントの熔岩に飲み込まれた。

「ソナナ…バカナアアアア!?!」

ドオオオオオン!!

フリート・ドーパントは大爆発を起こした。

カチャカチャ

フリートメモリはメモリブレイクされずに霊夢の元に飛ばされた。

「ツッ！」

霊夢はすかさずフリートメモリを拾い上げた。

「……メモリは無事ね」

「ガハッ……クソが……」

身体中火傷だらけの男が倒れていた。

「……」

ギユウウン

来雪はマグマメモリを体内から取り出し、人間の姿に戻った。

霊夢は男の所に歩いていく。

「あなたには聞きたいことがあるわ……一緒に来てもらおうわ……拒否権は無いわよ」

霊夢は男を睨みつけながら言い放つ。

「クソ……」

男を連行しようとしたその時だった。

ブオオオン

突然男の周りに螺旋階段の様な檻が出現した。

「なっ!?!」

「……これは!?!待ってくれ!もう一度俺にチャンスを!」

男の言葉を聞かずに螺旋階段は消え去った。

「消えた!?!」

「ッ!?!」

来雪が見た先には全身に螺旋階段の様な装甲を身に纏った怪物^{超人}が立っていた。

「ドーパント!?!」

「ッ!あんたがさっきの奴をどっかにやったって訳!」

霊夢は謎のドーパントを睨みつけながら言った。

「……園田来雪」

「ッ!?!」

「今回はそのメモリはくれてやる……だがいずれはお前の力を貰い受ける」

謎のドーパントは先程の螺旋階段の様な檻を出現させ、その場から消えた。

「ちよつと待ちなさいよ!」

「……」

霊夢が追いかけてようとするが既にそこにはドーパントの姿は無かった。

「一体何なのよ」

「……………」

「…はあ…さつきまではいいい気分だったのに…今は最悪よ」

「…ねえ霊夢さん」

「ん？」

来雪は何かを決意した目をしていた。

「私決めた」

「何を？」

「彼奴等はまだメモリを持つてると思う…だから…私が全て回収する…もう二度とこの子達を悪事に使わせない為に…私は戦う」

来雪はマグマメモリを見つめながら言った。

「……………」

霊夢は先程拾い上げたフリートメモリを来雪に渡した。

「異変解決は博麗の巫女の務めだもの…私も手伝うわ…力になれるか分からないけどね」

「…ありがとう…霊夢さん」

「この時から始まった。」

来雪達と謎のドーパント達との長い戦いが…

その夜、とある赤い館の時計塔に幼い見た目をした少女が月を眺めていた。

「……さあ…いよいよこの時が来たわ」

少女の後ろには複数の少女達が立っている。

長い紫髪のをリボンでまとめ、紫と薄紫の縦じまが入った、ゆったりとした服を着た少女。

銀髪のボブカットに、もみあげ辺りから三つ編みを結っているおり髪の先には緑色のリボンをつけて、青と白の二つの色からなるメイド服を着た少女。

華人服とチャイナドレスを足して2で割ったような淡い緑色を主体とした服装で髪は赤く腰まで伸ばしたストレートヘアーで、側頭部を編み上げてリボンをつけて垂らしている少女。

「私達の異変を始めましょう」

少女の手には魔性の小箱が2本握られていた。

【DRACULA!】

【UNION!】

紅霧異変編

Tの咆哮／赤い霧が覆う空

フリート・ドーパントとの戦いがあつた次の日。

来雪は境内の掃除をしていた。

「♪」

鼻歌を歌いながら箒で落ち葉を集めていく。

「おいしい霊夢～来雪～！魔理沙さんが遊びに来たぜえ」

そこに箒に乗った魔理沙がやって来た。

「あつ魔理沙さんいらつしやい」

「おつ何だ来雪その格好！霊夢の巫女服か？」

「えへへ：持つてる服は着てたあの服しか無くて、霊夢さんの予備借りてるの」

来雪は少し嬉しそうに巫女服を見せていた。

「似合うかな？」

「おう似合う似合う！霊夢より似合ってるじゃね？」

「失礼な事言うわねあんた！」

霊夢がプリプリ怒りながら自宅から出てきた。

「ていうか来雪も何でそんなに嬉しそうなのよ……私の予備で良い訳？」

「うん！ 霊夢さんの巫女服可愛いし！ 初めて会った時から着てみたかったんだ！」

来雪は嬉しそうに掃除していた。

「……あ……そう」

「何だ霊夢くお前照れてんのか？」

「てっ照れてないわよ！」

「あはは……何か良いなあ二人共」

来雪の言葉に二人は首を傾げた。

「良いなあって何が？」

「初めて会った時も思ってたんだけど、二人凄く仲良いなあって」

「まあ霊夢とは昔からの付き合いだからなあ」

「そうね……昔のあんたは女の子口調でうふふとか言ってたしね」

「やめろ!! 私の黒歴史を扶るな！」

霊夢の言葉に魔理沙が顔を真っ赤にしながら反応する。

「ぶっ……あはははは」

そんな二人の様子を見て思わず笑い出す来雪。

そんな会話が続いていく最中、突如空が真つ赤に染まった。

『ツ!?!』

「えっ!?!…さつきまでいい天気だったのに…何でこんなに真つ赤に?」

「霊夢!」

「ええ…どうやら異変が起きたみたいね」

「異変…」

昨日も聞いた異変という言葉に来雪は考え込んだ。

(これが異変…もしこの子達も関わってたら…)

来雪は巫女服のポケットの中にあるメモリを握る。

「最近は何変すら無かったからなあ…退屈してたしちよつくら行ってくるか!」

「はあ…仕方ないわね」

霊夢と魔理沙は異変解決に乗り出そうとする。

「待ってください!」

そんな二人に来雪が声を掛けた。

「ん?」

「どうした来雪?」

「私も連れてって下さい!」

「はあ？ おいおい来雪は此処に来てまだそんな経ってないだろ？ ここは異変解決の専門家である私達が……」

来雪の申し出を否定しようとする魔理沙。

「邪魔にはなりません！ それに……この子に関係あるかもしれないし……」

来雪は昨日回収したフリートメモリを取り出す。

「おっそのメモリ見たことないな！ 新しいメモリか？」

「違うのよ魔理沙……実は昨日ね……」

少女説明中

「はあ!? 何で私に早く言わないんだよ！」

「しょうがないでしょ……私だって突然で驚いたんだから」

「昨日現れたあのドーパントが関わってるかもしれない……だったら私も動かないと！ 私はこの子達に悪事をさせたくないんだ」

来雪の目は覚悟を決めた目だった。

「……はあ仕方ねえな！ そのままで聞いちゃ断れねえよ！」

魔理沙は来雪に笑いながら言った。

「頼りにしてるぜ！」

「っ！うん！」

「……それはそうと来雪……あなたどうやって飛ぶの？」

　　霊夢の言う通り、来雪はまだ自分の意志で飛ぶことが出来ない。

　　だが来雪には飛ぶ手段があつた。

「大丈夫！この子の力を使えば飛べる！」

【FLEET！】

　　ガイアメモリからガイアウイスパーが鳴るとメモリは宙に浮き、来雪の右腕に入つていった。

　　キュピーン

　　来雪は艦隊の記憶の怪物、^{超人}フリート・ドーパントに変身した。

「おお！マグマも格好いいけどこっちも格好いいじゃねえか！」

「昨日の男が変身したドーパント……でも何か色が違う様な……」

　　男が変身したフリート・ドーパントに対して、来雪が変身したフリート・ドーパントは甲板の色が少しだけ薄い白に変わっていた。

「うん…多分だけど…この子達は適正に合った人が変身すると能力とか姿が微妙に違うんだと思う…私は能力で影響とかなんだけどね」

「ほくん…来雪も自分の能力が分かったのか？」

「うん…確証は無いけどね…私の能力は『メモリの力を引き出す程度の能力』だと思う…この子達の力を最大限に活かせる私向けの能力…」

来雪はそう言いながらプラントメモリとマグマメモリを取り出す。

「メモリを最大限に…ねえ」

「ちよつと限定的だが…来雪らしいじゃんか」

「そうかな…それより早く行こう！他の子達も回収しないと！」

「まだメモリが絡んでると決まった訳じゃないわよ」

「よっしやーんじやこの三人で異変解決に行こうぜ！」

三人は異変解決の為に目的地へと飛んでいく。

そんな三人を陰で見ていた者がいた。

後頭部に大きなリボンと髪飾りを付けたミディアムヘアで、フリル調の巫女服を纏った少女だった。

そして少女の腰にはあるベルトが巻かれていた。

「霊夢に魔理沙…それに園田来雪ちゃんも動いたね…楽しみだよ…君達三人が僕の所

まで来るのがね」

少女は懐から歪んだ時計と歯車がHの文字を描いた金色のメモリを取り出した。

【HISTORY!】

ガイアメモリからガイアウイスパーが鳴る。

そして少女はベルトにガイアメモリを挿し込んだ。

その直後に少女の身体中に時計や歯車が出現し、少女を包み込む。

時計や歯車が砕かれると中から狂気に笑う顔を歪に曲がった時計や歯車で隠し、スマートかつシンブルなボディに時計や歯車で覆われ、ベルト・ガイアドライバーREXを付けた怪物超人が現れた。

それは今後來雪や霊夢達の最大の敵となる歴史の記憶の怪物超人、ヒストリー・ドーパントであった。

「もつと強くなるといい…君達が僕と対等かそれ以上になるまで…僕は気長に待つとしよう…」

パチン

ヒストリー・ドーパントが指を鳴らすと、そこに居たはずのヒストリー・ドーパント

の姿が消え去った。

真の敵の存在等露知らず、三人は霧の発生地点を指摘す。

「来雪のその姿…飛ぶって言うより滑ってる感じね」

霊夢はフリート・ドーパントの飛び方が気になっていた。

「うん、元々艦隊…船の記憶のメモリだからかな…水面を滑ってる感覚だよ」

「面白えなあ…私も一本欲しくなっちゃうな」

魔理沙の言葉に来雪はガイアメモリの事を簡単に説明する。

「……余りオススメしないよ…ガイアメモリは普通の人が使えばその依存性でおかしくなっちゃうのが殆どみたいだし…一種の薬みたいな物らしいし」

「マジかよ…」

「来雪は良く平気よね」

「私の能力が関係してるのは間違いないかな…そんな人を増やさないためにも全てのガイアメモリを回収しなきゃ」

「そうね…そんなのが出回ったら異変より面倒臭い事になりそうだし」

「ちえっ…しゃあねえ…諦めるか」

そういう言っていると突然前から黒い靄の様な物が接近してきた。

「ん…あれは…」

三人はその場で止まる。

黒い霧が段々晴れていくと、中から左側頭部に赤いリボンを付けた10代前半の少女が現れた。

「やっぱりあんたねルーミア」

その少女の名はルーミア、【闇を操る程度の能力】を持つ人食い妖怪である。

「わは〜霊夢に魔理沙〜…あと知らない妖怪がいるのだ〜」

「えっ？妖怪？…あつ…ドーパントの姿だから妖怪に間違えられたのかな」

「おうルーミア、悪いが今から異変解決に向かうから遊んでやれねえんだ…また後で遊んでやるから退いてくれ」

「異変解決か〜…所でその妖怪さん…あなたは食べていい存在？」

「えっ!?違う違う!食べちゃだめ!」

慌てて否定するフリート・ドーパント。

「まあ…どっちみち食っちゃうのだ〜」

そう言うとうルーミアが懐からあるものを取り出した。

「っ!?!」

「おいルーミア!それは!」

「…ガイアメモリ！何処でそれを!？」

「この前寺子屋の帰りに黒い服を着たお姉さんに貰ったのだから、これ使うと力が溢れて来るのだよ」

【T—R—E—X—!】

ガイアメモリからガイアウイスパーが鳴る。

ルーミアは左肩の生体コネクタにメモリを挿し込んだ。

キュピーン

すると左肩辺りから体液の様な物が流れ落ち、徐々に形を作っていくその姿を現した。

ルーミアはティラノサウルスの記憶の怪物^{超人}、ティーレックス・ドーパントに変身した。

「ガオオオオオ!!」

Tレックスが吠えると三人は衝撃波で吹き飛ばされる。

「何だありや!？」

「ティーレックス・ドーパント!…こんなに早く別のドーパントに会えるなんて!…」

「全く…異変解決の前にあの馬鹿を戻さないとね!…」

三人は構えた。

Iの競争／常闇と氷精の猛威

ティールレックス・ドーパントに変身したルーミアと異変解決に乗り出す三人。

両者は睨み合いながら動かなかつた。

「にしてもあのドーパント……頭だけ異様にでかいな」

魔理沙が他愛もない事を口にする。

「見掛けで判断すると痛い目見るのだ」

Tレックス・ドーパントが凄いスピードで突っ込んできた。

「ファンネル！行つて！」

フリート・ドーパントの甲板から5機のファンネルが飛び出した。

ピュンピュンピュン

「わは〜効かないのだ〜！」

ファンネルから放たれる光線をもともせず大きな口を開くTレックス・ドーパント。

「ッ！」

「ッ！」

「頂きますなのだ〜！」

「やらせるかよ！」

フリート・ドーパントに喰らい付こうとするTレックス・ドーパントを魔理沙が魔法で攻撃する。

ドドドン

「イタアア！」

Tレックス・ドーパントが痛みながら後ろに引いた。

「ありがとう魔理沙さん！」

「気をつけろよ！こいつ何時ものルーミアより硬いぜ！」

「だったら遠慮しないわよ！」

霊夢が更に上空に飛び上がり陰陽玉を出現させる。

「んあ〜？」

「そんなに食べたいなら喰らいなさい！夢想封印！」

霊夢は自身の技である夢想封印をTレックス・ドーパントに叩き込んだ。

ドガアアン

夢想封印が炸裂しTレックス・ドーパントの辺りが爆煙で見えなくなる。

「おいおいいきなり夢想封印かよ…容赦ねえな」

「昨日の戦いでドーパントが異常に頑丈なのは体験したからね…ルーミアが無事なら良

「いんだけど」

魔理沙の横に降りてきた霊夢が呟いた。

「Tレックス・ドーパント……本来なら飛べないのに何で飛んでるんだろう……」

「ルーミア自身が飛べるからじゃねえか？」

「来雪も自分の力で飛べるようになればその姿を維持しなくても良いんだけどね」

「……努力します……」

そう話していると……

「お喋りはそこまでのだ〜」

『!?!』

煙が晴れるとTレックス・ドーパントが殆ど無傷の状態で飛んでいた。

「嘘だろ……霊夢の夢想封印でほぼ無傷かよ」

「ドーパントが頑丈なのは分かってたけど……ここまでなんて」

霊夢と魔理沙はドーパントの頑丈さに驚愕していた。

「Tレックス・ドーパントはこんなに頑丈じゃないはず……メモリとの相性が良いから？」

フリート・ドーパントが考えているとそこに乱入者が現れる。

「ああ!!お前らズルいぞ!」

四人がその方向を見るとそこには青い服装に氷の羽根を持ち、髪は薄めの水色で、ウエーブがかかったセミショートヘアに青い瞳の少女がいた。

「何だチルノかく邪魔するなのだ〜」

Tレックス・ドーパントが現れた少女、チルノに文句を言った。

「その声ルーミアか？…何か格好いい姿してるけどあたいにもやらせろ！」

「格好…いい？」

霊夢はチルノのセンスを疑った。

「うるさいのだ〜邪魔するならお前から喰うのだ〜」

「へーんだ！喰えるもんなら喰ってみな！」

そう言うとチルノはポケットからあるものを取り出した。

「ツ！ガイアメモリ!？」

フリート・ドーパントはチルノの持っているガイアメモリを見て焦りだす。

「へっへーん！あたいのサイキョーの力見せてやる！」

チルノはガイアメモリのボタンを押した。

【ICE AGE!】

ガイアメモリからガイアウイスパーが鳴る。

チルノは左掌の生体コネクタにメモリを挿し込んだ。

キュピーン

するとチルノは左掌から凍りだし、全身が氷塊になる。

パリーン

氷塊が砕けるとチルノは氷河期の記憶の怪物、超人アイスエイジ・ドーパントに変身した。

「ダアアアアア！」

アイスエイジ・ドーパントが叫びだすと辺りが凍り始めた。

「チルノ…あんたまで…」

「最悪だぜ…ルーミアで手一杯だったのに…」

「Tレックスとアイスエイジ…ドーパントが一度に二体も…」

三人はこの最悪な状況に焦りを感じていた。

「何だチルノお前もなれるのか？」

「どうだ！あたいのサイキョーの姿！」

アイスエイジ・ドーパントは胸を張って自慢していた。

「へん！お前より私の方が強いのだ！」

「何い！だつたらどつちが霊夢達を先に倒せるか勝負だ！」

「望むところなのだ〜！」

更に最悪な事にこの二人は霊夢達を倒す気でいた。

「おいおいマジかよ…」

「面倒くさ…ドーナント二体相手とか…」

「でも…此処を突破しないと異変解決出来ない」

「分かってるわよ…二人共…覚悟決めなさい」

霊夢の言葉に魔理沙とフリート・ドーナントは頷く。

「行くのだ〜!!」

「おりゃあああ!!」

Tレックス・ドーナントが先制し、その後ろからアイスエイジ・ドーナントが氷柱を飛ばしていく。

「ハァー！」

ガキン

Tレックス・ドーナントの突進をフリート・ドーナントは盾で防いだ。

「ファンネル！」

ピュンピュンピュン

すかさずファンネルを操り、氷柱を消し飛ばす。

「霊夢さん！ 魔理沙さん！」

「おうよ！ 行くぜ霊夢！」

「遅れんじやないわよ！」

霊夢と魔理沙は後ろのアイスエイジ・ドーパントに狙いを定めた。

「逃さないのさ！」

「あなたの相手は私だよ！」

ジャキン

「イタイのさ！」

Tレックス・ドーパントが霊夢達に気を取られた間にフリート・ドーパントが大剣で斬りつけた。

「行くぜ！ マスタースパーク！」

「夢想封印！」

魔理沙は自身のミニ八卦炉からマスタースパークを放ち、霊夢が続いて夢想封印を放った。

「アイスエイジフオール！」

アイスエイジ・ドーパントが氷柱を大量に作り出し、二人の技を相殺する。

爆煙が立ち昇る。

「読めてるわよ!!」

爆煙を霊夢が突っ切ってきた。

「封魔陣!」

アイスエイジ・ドーパントの真正面まで迫り着いた霊夢が、その顔面に技である封魔陣を叩き込んだ。

「ギャア!顔がああ!!」

至近距離から封魔陣をしかも顔面に喰らったアイスエイジ・ドーパントは怯んだ。

「スターダストレヴアリエー!」

その隙に魔理沙が箒に乗った状態でアイスエイジ・ドーパントの腹部目掛けて突進した。

「グエツ!?!」

腹部にもろ喰らったアイスエイジ・ドーパントは後方に吹き飛ばされる。

「霊夢さん達凄いいコンビネーション!」

フリート・ドーパントは霊夢達の息のあった連携に驚いていた。

「余所見するなのだ〜!!」

Tレックス・ドーパントが大きな口を開けながら突進してきた。

「それを待ってたよ」

フリート・ドーパントが正面を向いた。

「フリート・ドーパントの使い方に慣れてきたんだ…甲板に付いてるこの砲台…飾りじゃないんだよ？」

ガチャン

フリート・ドーパントの甲板には無数の砲台が付いており、それは決して飾りではなく本物の戦艦と同じ事が出来るのだ。

「砲撃用意…Fire!!」

ドドドン

無数の砲台から放たれた砲撃がTレックス・ドーパントの大きく開いた口の中に命中する。

「そうだったのかアアア!?!」

ドガアアン

砲撃を受けたTレックス・ドーパントは爆発した。

ヒューン

爆煙から目を回したルーミアが落ちていった。

カチャ

更に落ちてきたTレックスメモリをすかさずフリート・ドーパントは回収した。

「外が駄目なら中から…流石に口の中まで頑丈じゃ無かったみたいだね」

「おっ！来雪の奴終わったみたいだぞ！」

「こつちも負けてられないわね！」

魔理沙と霊夢が笑いながら言った。

「ルーミアの奴！油断したな！」

アイスエイジ・ドーパントは落ちていくルーミアを見て言った。

「それはあんたも同じでしょうが」

「えっ？」

霊夢の言葉に首を傾げたアイスエイジ・ドーパント。

「周りを見てみなさい」

「?…ツ!？」

アイスエイジ・ドーパントの周りには既に霊夢が設置した陰陽玉がスタンバイしていた。

「終わりね…最大火力で行くから覚悟なさい」

「え…ええつと…霊夢…その…許してくれないかな？」

アイスエイジ・ドーパントは冷や汗をかく。

しかしその汗はアイスエイジ・ドーパントの冷気で凍りついており、氷の結晶として落ちていく。

「…駄目よ」

霊夢は開いていた手を握った。

それと同時に待機していた陰陽玉が一斉にアイスエイジ・ドーパントに向かっていく。

「これが私の全力の夢想封印よ」

「ひっ…ギャアアアアア!!」

ドガアアン

全力夢想封印を喰らったアイスエイジ・ドーパントは大爆発を起こした。

ヒューン

爆煙からルーミア同様目を回したチルノが落ちていく。

「おっとー!」

すかさず魔理沙が一緒に落ちていったアイスエイジメモリをキャッチした。

「さっすが霊夢だな!チルノ相手に容赦が無い」

「ドーパント相手に容赦なんていらないでしょ」

魔理沙は笑いながら霊夢に言うと、霊夢も苦笑いしながら返した。

『キュウウウ』

地上に降りた三人は気絶しているチルノとルーミアを見ている。

「こいつらどうする?」

「流石にこのまま寝かしておく訳には…」

「心配ないわ…お迎えが来たみたいだし」

霊夢の言葉で二人が後ろを向くとそこに左側頭部をサイドテールにまとめ、黄色いリボンを付け服は白のシャツに青い服を着た少女が飛んできた。

「チルノちゃん!」

「ああ大妖精か」

魔理沙が駆け付けた少女、大妖精を見て呟いた。

「大妖精…えっ?…名前は?」

「さあ?…みんな大妖精って呼んでるぜ」

「丁度良いところに来たわね大妖精」

霊夢が大妖精を見つめた。

「あつ霊夢さん魔理沙さん…えっと」

大妖精は来雪を見て不思議そうな顔をしていた。

「あつ初めまして園田来雪です」

「あつはい！私は大妖精って言います！みんなからは大ちゃんって呼ばれてます」

「それじゃ大妖精…この二人よろしくね」

「二人？あつルーミアちゃんも気絶してる…分かりました！」

大妖精は気絶しているチルノとルーミアに駆け寄った。

「さてと…それじゃあ本命に向かいましょうか」

「おう！」

「はい！」

三人の目線の先には赤い霧の元凶である真つ赤な館がそびえ立っていた。

Tの門番／恐竜同士の勝負

ルーミアとチルノを倒した三人は、赤い霧の元凶である館の前に来ていた。

「此処が例の場所だな」

「見渡す限り真っ赤…：気味悪い館ね」

三人は館の門まで歩いていく。

「…二人共…：門の前に誰かいる」

来雪は門の前の人物を警戒した。

「おや…：ようこそ博麗の巫女御一行様…：私は此処、紅魔館の門番をしています…：紅美鈴ほんめいりんと申します」

美鈴と名乗った門番は左掌に右拳を付けてお辞儀をした。

「…魔理沙」

「ああ…：あの門番…：手強いかもな」

霊夢と魔理沙は美鈴のただならぬ気配を感じ取っていた。

（霊夢さんに魔理沙さん…：この人の気配に感づいてるよね…：多分だけど…：この人もメモリを持って…：ただでさえ強そうなのにメモリ所有者だったら…）

来雪は美鈴に加えメモリ所有者だと考えていた。

「本来であればお客様として歓迎したい所ですが…我が主レミア・スカーレットお嬢様の命令により此処から先を通すことは出来ません…出来ればそのままお帰り頂けると此方としても助かるのですが…」

美鈴は鋭い眼つきで三人を睨んだ。

「……霊夢さん魔理沙さん」

「何よ?」

「何だぜ?」

「…あの人多分メモリ所有者だと思います…私が相手をします…その間に二人は中に入ってください」

来雪の提案に二人は顔を合わせた。

「本当なら止めたい所だけど…その方が良さそうね」

「ああ…ただけだな来雪…必ず勝ってこいよ」

「分かっています」

来雪は頷いた。

「…どうやら大人しく帰る気はなさそうですね…ならば仕方ありません…此処であなた方を排除させて貰います!!」

ザツ

美鈴が地面を蹴りもの凄いスピードで接近する。

「ツ！」

〔ICE AGE!〕

キュピーン

来雪は先程チルノから回収したアイスエイジメモリのボタンを押す。

ガイアメモリからガイアウイスパーが鳴ると宙を浮き、来雪の左掌に入っていた。

来雪は氷河期の記憶の怪物^{超人}、アイスエイジ・ドーパントに変身した。

「ツ!?!」

アイスエイジ・ドーパントは美鈴の両腕を掴み、その動きを止めた。

「二人共行つて!」

「任せたわよ来雪!」

「絶対追いついて来いよな!」

アイスエイジ・ドーパントの掛け声で二人は紅魔館の門を潜り、中へと入っていった。

「クツ…侵入を許してしまった…：…咲夜さんに後で怒られるなあ」

美鈴は苦笑いしながら呟いた。

「アイスエイジの冷気は炎すらも凍らせる…此処であなたを倒します!」

「…まさかメモリを持っていたとは…：…いやはやなんとも…」

美鈴は右脚でアイスエイジ・ドーパントの左腰を蹴り飛ばす。

「グツ」

その反動でアイスエイジ・ドーパントは美鈴の左腕を離してしまい、すかさず美鈴は左腕でアイスエイジ・ドーパントの顔面に張り手をした。

「ガハツ」

その威力は並の力では無かった。

頑丈なドーパントの肉体を持つてしても、美鈴の攻撃はアイスエイジ・ドーパントをよろけさせた。

「どうしました?…私を止めるんじゃないですか?」

美鈴が構えると凍り付いた両腕はみるみるうちに氷が溶けていった。

「…氷点下のアイスエイジの冷気で凍らせたのに…」

「この程度気を操ればどうということではありません…私は「気を使う程度の能力」を持っていきますので…その気になれば此処から動かずにあなたを沈める事だって出来ま

す

「…じゃあ何でそうしないの？」

「門番と言えど私は武闘家です…一人で私と戦おうとするあなたにそんな無粋な真似は
しませんよ…私の誇りが許しません」

美鈴は生粋の武闘家であった。

「…誇り高い人なんです…武闘家さんってそういう人ばかりなのかな…門番を見れば
その主の格が測れるってどつかで聞いたことあるし…異変を起こしてるけどレミリア
さんってどちらかというところ人格者なんです」

「ええ…お嬢様は素晴らしい御方です…私が仕えるに値する程にね」

美鈴は笑いながらそう言った。

「…じゃあ美鈴さん…そろそろ本気出して貰っても良いですか？」

「ん？」

「…メモリ…持つてるでしょ？」

「…ほう…」

アイスエイジ・ドーパントの言葉に美鈴は感心していた。

「私がメモリ所有者だといつ気付いたのですか？」

「正直確証は無かったけどなんとなく…手加減された状態で負けたってなったら霊夢

さん達に合わせる顔がないから」

「手加減等とんでもない……私は常に本気ですよ……ただこの様な道具に頼った強さを私は余り認めたくないだけです」

「生粋の武闘家さんだね美鈴さんは……それじゃあ勝負しましょうよ」

アイスエイジ・ドーパントはある提案をする。

「勝負？」

「アイスエイジは冷気を使った小細工も出来るメモリ……流星に生粋の武闘家さんである美鈴さんにこれで戦うのは少しずるい気がするので……」

ギユウウン

来雪はアイスエイジメモリを体内から取り出し、今度はTレックスメモリを取り出した。

「私は今からこのTレックスメモリしか使いません……主な能力は咆哮することです放つ衝撃波、後瓦礫とかを取り込んで巨大化する能力を持っています……美鈴さんも持つてるメモリと能力を明かしてそれで戦ってください」

「……本来なら乗る必要のない勝負ですが……良いでしょう」

美鈴は懐からメモリを取り出した。

「私の持つメモリはトライセラトプス……巨大な棍棒ダイナソアクラブを武器とし紫の

エネルギー弾を撃つことが出来ます、後あなたのメモリ同様に巨大化する能力も持つて
ます」

「…トライセラトップスにTレックス…恐竜のメモリ同士ですか」

「正直私も驚いています…ですがあなたのメモリには武器が無い…よつて私もダイナソ
アクラブは使いません…これで対等です」

美鈴の提案に来雪は笑みを浮かべた。

「ホントに武闘家ですね…あなたならそのメモリ…預けても良いかなつて正直思つて
るくらいです」

「いえ…私が勝つても負けてもこのメモリは差し上げましょう…私には必要のないもの
ですから」

「…こつちにしかメリットが無いじゃないですか」

「そんな事はありませんよ…あなたの様な人と一対一の勝負が出来る…それだけで十分
です」

「……あはは…最高ですね美鈴さん…差し出がましいんですが一つお願いしても良いで
すか？」

来雪は美鈴に願ひ事があつた。

「何でしょうか？」

「この異変が解決したら…私の稽古して貰えないでしょうか？…正直私メモリに頼ってる節があるので…美鈴さんに鍛えて貰いたいなって…」

「……お嬢様が負けるとは思えません…良いでしょう…解決出来たらあなたを鍛えて差し上げましょう」

「解決しますよ…霊夢さんと魔理沙さんは強いですから！」

来雪は真つ直ぐな瞳で言い放った。

「…信頼してるんですね…あの二人を……正直あなたの事気に入りました…では始めましょうか」

【TRICERATOPS！】

「はいー！」

【T—REX！】

二人は互いのメモリのボタンを押し、ガイアメモリからガイアウイスパーが鳴る。

キュピーン

美鈴は左の太腿の生体コネクタにメモリを挿し込み、来雪は左肩にメモリを挿し込んだ。

互いの挿した所から体液の様が溢れ、形を作っていきその姿を現した。

美鈴はトリケラトプスの記憶の怪物^{超人}、トライセラトプス・ドーパントに変身した。

来雪もティラノサウルスの記憶の怪物^{超人}、ティラレックス・ドーパントに変身した。

互いに睨み合う。

「ごや…」

トライセラトプス・ドーパントが走り出す。

「尋常に…」

ティラレックス・ドーパントもそれに続く。

『勝負です!!』

そして互いがぶつかりあった。

T達の激突／紅魔館への潜入

紅魔館の門前にて肉食恐竜の記憶と草食恐竜の記憶がぶつかり合っていた。

「ガアアアアアア!!」

Tレックス・ドーパントの雄叫びが衝撃波となり、トライセラトプス・ドーパントに襲いかかる。

「クツ…この程度で…怯むと思いますか!」

トライセラトプス・ドーパントは衝撃波をもともせずTレックス・ドーパントに詰め寄り、掴み掛かった。

「流石美鈴さん…一歩も引きませんね!」

「来雪さんこそ…教え甲斐がありそうですね!負ける気はありませんが!!」

トライセラトプス・ドーパントの蹴りがTレックス・ドーパントの大きな頭を捉えた。

「クツ」

「その大きな頭を削り取って差し上げましょう!!」

トライセラトプス・ドーパントは右脚にエネルギーを溜め始め、蹴りを放つ。

「まだまだあ！」

Tレックス・ドーパントも負けじと頭突きで相殺した。

「ほう……」

「うぬぬぬ……おりやアアアア!!」

Tレックス・ドーパントは持ち味の突進力でトライセラトプス・ドーパントを突き飛ばした。

「クウツ」

突き飛ばされたトライセラトプス・ドーパントは空中で受け身を取り、着地する。

「ああ……やはり戦いとはこうでなくては！」

トライセラトプス・ドーパントは純粹に戦いを楽しんでいた。

「楽しそうですね」

「楽しいですとも……紅魔館の門番を引き受けた時から好敵手と呼べる相手も居ませんでしたからね……来雪さん……あなたに出会うまでね」

心の底から美鈴は来雪を好敵手と思っていた。

「それは何よりです……でもこれはこの子の力……私自身の力じゃない……この子達がいなければ私なんてあなたの相手は務まらないですよ」

「ならば鍛えれば宜しい……その力で私やお嬢様達に勝って見事私に指導させてみせなさい」

「い!!」

「上等です!」

二人がぶつかり合う瞬間に、来雪は嘗てのマグマメモリと同じ現象が起きた。

【T—REX!】

来雪が見たのは嘗てのTレックスメモリの主だった女性、津村真里奈の罪と経緯だった。

WIND SCALEでデザイナーとして勤務していたが、彼氏である戸川同様リストラに遭う。

復讐を果たすため、戸川と真里奈は血の滲んだようなスカーフを纏うセールスマンからメモリを購入。

当初は戸川との共犯でWIND SCALEを襲撃していた。

(これがこの子の記憶……街に似合う帽子や服を作っていただけだったんだ……でも……だからって……この子を使って……ましてや戸川さんまで手に掛けるなんて……)

『裁きを受けて、昔のお前に戻ってくれ!メモリを捨てる……真里奈』

(この人……戸川さんの時にも……誰なんだろう)

だが男性の思いを津村真里奈は踏み躪る事になる。

左肩の生体コネクタにメモリを挿し込んだのだ。

(ツ！)

『っ！止めろ！ぐあっ』

そこでヴィジョンは消えた。

(…真里奈さん……悔しかったんだろうな……この子を使つてまで……でも)

来雪はTレックスメモリの嘗ての主、津村真里奈の過去を見て決意する。

(どんな理由があろうと……私はこの子達を……メモリのみんなを復讐の道具にしたく無い！)

来雪はTレックスメモリの力を最大限に発揮する。

「ガアアアアアアアアアア!!」

Tレックス・ドーパントが雄叫びを上げると、地面や紅魔館の門の外壁が剥がれだした。

「ツ！これは……まさか」

瓦礫はTレックス・ドーパントの身体に纏わり付き、聽てその体を形成していった。

「ビッグ・ティーレックス……これが私とこの子の全力です!!」

「面白い…ならばこっちらも!!」

トライセラトトプス・ドーパントが両腕を上げるとその腕が巨大化し、トライセラトトプス・ドーパントの形を変えていく。

軀てトライセラトトプス・ドーパントは二足歩行の巨大な姿に変わった。

「ビッグ・トライセラトトプス…掛かって来なさい!!」

「ガアアアアア!!」

巨大化した二人の恐竜がぶつかりあった。

巨大化した恐竜達が激突する少し前、紅魔館内に侵入した霊夢と魔理沙は館の主であるレミリア・スカーレットを手分けして探すことにした。

「この館…外観と内装が全然違うじゃない…何でこんなに広いのよ…」

魔理沙と別れた霊夢は迷路の様な館内で迷っていた。

「……………」

霊夢は何かを感じ取ったのか、その場で立ち止まる。

「…外観に合わないくらい広い迷路の様な内装…もしかしくとも…あなたの能力かしら…」

霊夢の後ろにはメイド服を着た少女がいつの間にか立っていた。

「あら…感じがいいのね…正解よ」

「何時から私の後ろに立ってたのかしら？」

「さあ…何時でしょうか？…美鈴ったら侵入されちゃって…後でお仕置きね」

「あの門番に非は無いわよ…私の仲間が一人残って足止めしてくれてるだけだもの」

「それでもよ…門番なのだから侵入されないのが大前提でしょ？」

メイドは笑みを浮かべながら言った。

「あら手厳しい…で？あなたは？」

「これは失礼を…私は十六夜咲夜…この紅魔館のメイド長をしております…侵入者様」

「そう…私は博麗霊夢…この迷惑極まりない赤い霧を出してる元凶を懲らしめに来た博

麗の巫女よ」

「まあ…確かに洗濯物の乾きが遅くなるのはメイドとしては見過ごせないけど…お嬢様

の命令ですもの…喜んで従うまで」

「あら…意外にも不満があるんじゃない…まあ主を持つ者であるあなたにとっては取る

に足らないことでしょうけど」

霊夢がお祓い棒と御札を構える。

「その通りです…お嬢様の命令は絶対ですもの」

咲夜の手にはいつの間にかナイフとメモリが握られていた。

「……やっぱりメモリ持つてるわよね…門番が持つてるんだからメイドが持つてない訳ないもの」

「ええ、全力であなただを倒さなきゃならないのだからこつちも出し惜しみは無しよ…お嬢様から頂いたメモリの力…見せて差し上げます」

咲夜がガイアメモリのボタンを押す。

【CHURCH!】

ドオオオオン

ビッグ・ティーレックスがビッグ・トライセラトップスの首に噛み付き外壁に叩き付ける。

「グッ」

「タアアアア!!」

再び首に噛み付き、外壁を引きずりながら更に投げ飛ばす。

ドオオオオン

「クツ…巨大化戦に持ち込んだのは失敗でしたね」

美鈴は単純な戦闘は得意だが巨大化によって体が大きくなった分、動きが鈍くなって

いた。

「これで…終わりです!!」

ビッグ・ティーレックスがビッグ・トライセラトプスを蹴り飛ばし、バランスを崩させる。

「なっ!?しまっ…」

その好きにビッグ・ティーレックスはビッグ・トライセラトプスの背中を脚で踏み付ける。

「ガアアアアアアアア!!」

そのままビッグ・トライセラトプスに向けて、ビッグ・ティーレックスが衝撃波を浴びせた。

「グッ…見事…です」

ドゴオオオン

衝撃波に耐えきれなくなったビッグ・トライセラトプスは大爆発を起こした。

「ハア…ハア…勝った…」

ギユウウン

ビッグ・ティーレックスからメモリが抽出され、来雪は人間の姿に戻った。

「……」

ボロボロになった美鈴が外壁にもたれ掛かっており、その横にはトライセラトppsメモリが落ちていた。

「見事に負けました……来雪さん……あなたの勝ちです」

「純粋な勝負だったからこそつちが負けてましたよ」

来雪は落ちてるトライセラトppsメモリを取る。

「これは回収させて貰いますね」

「ええ……構いませんとも」

「……私は紅魔館の中に入ります……良いですね？」

「敗北者の私にあなたを止める資格はありません……敵の私が言うのもなんですが……来雪さん……頑張つて下さい……ですがこれだけは守つて下さい……くれぐれも地下室にだけは近付かないで下さい……あなたの為です……」

「……私はこの館のメモリを回収しなきゃなりません……その地下室にメモリがあるなら……それは聞けません」

「………そうですか……武運を」

来雪は美鈴にお辞儀をし、紅魔館に入つていった。

「来雪さん……あなたなら……もしかしたら……お嬢様を救えるかも……しれませんね」

美鈴はそう呟くと疲労の為か眠りについた。

Fの狂気／来雪の無くし物

霊夢と咲夜が今まさに戦おうとしている頃、魔理沙はとある場所に出ていた。

「なっ……何だこれええええ!？」

魔理沙の前に広がるのは数えるのすら馬鹿らしく思えてくる夥しい数の本が並ぶ図書館だった。

パツと見だが普通の本は勿論の事、中には魔導書やら禁書指定されている貴重な本など様々なジャンルの本があった。

「やべえ……此処は天国か？至る所に宝の山……何冊か持ってつてもバレねえかな」

「バレるに決まってるでしょ……誰が管理してると思ってるのよ」

魔理沙が声のする方を見るとそこに二人の人物が現れる。

紫色のダボダボな寝巻きの様な服を来た少女と、その隣に居る悪魔の羽を背中に付けた赤毛の少女だった。

「堂々と私の私物を盗もうとするとは……侵入者に加え泥棒だなんてね」

「ど……泥棒じゃねえ！ちよつと借りようと思っただけだ!」

「許可を取らずに持ち出す事を泥棒って言うのよ」

「ぐぬぬ……そ……そんなことよりこれ全部お前のなのか!? 何処でこんなに集めたんだよ」
「さあ何処でだったかしら……私個人で集めた物やレミィから貰った物……その他色々」

少女は手にしていた本を宙に浮かせ、一元あつた場所に戻した。

「ツ……お前魔法使いか?」

「ええ……この程度の魔法で驚いてるのかしら? 初歩の初歩じゃない」

「生憎と私は攻撃魔法専門でな……生活魔法は専門外なんだよ」

「へえ……もしやと思つたけど……魔法使いなのねあなた……人間の使う魔法……ねえ」

少女は笑みを浮かべる。

「な……何だよ……人間の私が魔法を使うのがそんなに可笑しいのかよ!」

「いいえ……素直に関心してるだけよ……生まれながらにして魔法を使える私達魔法使いとは違い……あなた達人間が魔法を手に入れるには並々ならぬ努力と精神力、後は覚悟かしら?……それらを必要とするのだから……攻撃魔法専門と言つていたけどその努力は誇るべきものね」

「……」

何時もの魔理沙なら努力を隠すのだが素直に自分より格上の魔法使いに褒められて嬉しく思つていた。

「それで努力家の魔法使いさん……私はあなたの名前を知らないのだけど? いつまで黙つ

てるのかしら?」

「……私は霧雨魔理沙……見ての通り普通の魔法使いだ」

「霧雨魔理沙……覚えておくわ……私はパチュリー・ノーレッジ……七曜の魔法を扱う魔女にして此処、ヴワル魔法図書館の管理者……あなたの努力を無慈悲にも踏み躪る敵よ」

そう言ううとパチュリーは魔力を高め始めた。

「ツ!?!」

魔理沙は魔法使いとしてパチュリーの魔力量に驚愕していた。

(こいつ……やべえよ……相当な魔力だ……私一人でこいつに一泡吹かせること出来るか? ……いや異変解決の専門家として此処で負けるわけにはいかねえな!)

魔法使い同士の魔法総力戦が今始まろうとした

かに思われた。

「ツ……ゲホゲホ」

突然パチュリーが咳き込み始めた。

「……はっ?」

「ゲホゲホ…ウツ…ゲホゲホ」

「ああパチュリー様！もう！喘息持ちの癖に面白そうな魔法使いが居るからって無理して大魔女ムーブ決め込んでるから咳き込んでるじゃないですか！全盛期だったあの頃のパチュリー様に少しは近付きましたけどやっぱり変わらないですねこのむきゅー様はww」

咳き込んだパチュリーを心配してる様で煽ってる赤毛の少女。

「ゲホゲホ…こあ…あなたね」

パチュリーはこあと呼んだ赤毛の少女を睨み付けながら咳き込んでいる。

「はいはい咳き込みながら睨んでも可愛いだけですよパチュリーちゃん…ホントに小さい頃から変わらないんだから」

煽っていたこあは突然パチュリーの事を子供のように扱い始めた。

「／／／／／！何時までも子供扱いしないで頂戴!!私の使い魔の癖に!!ゲホゲホ」

「はいはい強がらない強がらない」

こあは咳き込むパチュリーの背中を優しく擦っていた。

「…な…何なんだぜ…魔力が下がってる…あいつの隣の奴…妙に上からだな」

魔理沙は使い魔の筈のこあの反応を見て困惑している。

「全く昔から変わらないんだから…御免なさいねパチュリー様は喘息持ちでして…余り

無理はさせられないので此処は私がお相手しますね」

「こあはポケットのの中からメモリを取り出した。」

「ツ…：ガイアメモリ…：お前も持つてるのかよ」

「ええ…：というより紅魔館のメンバーは全員持つてますよ…：ここにいるパチュリー様もね…：まあパチュリー様のメモリはもうチートもチートなのでパチュリー様の体が持たないため私が預かってるんですがね」

「こあはパチュリーのものであろうメモリを取り出す。」

メモリは金色で大量の小さな文字で表されたWのマークとWISDOMの文字が描かれていた。

「金色のメモリ…：ルーミアやチルノの持つてたメモリとは桁違いって訳か…：」

「適合率が高いんですけどねえ…：パチュリーちゃんは体が弱いから親として心配なんですよ…：悪魔の私が他人の心配をするなんて…：私も丸くなったものです」

「…：…」

パチュリーは顔を真っ赤にしながら心なしか悲しそうな顔をしていた。

「まあ弱体化したとはいえど私はパチュリー様の使い魔…：主が戦えないのなら使い魔である私が戦うしかありませんよね」

【CROWN!】

こあは自身のメモリを押し、ガイアウイスパーが鳴った。

「クラウン…道化師?」

「道化は道化らしく…面白可笑しく振る舞うとしましょう!」

こあは舌を出した。

その舌には生体コネクタが刻まれており、クラウンメモリを生体コネクタに挿し込んだ。

キュピーン

こあの姿が不気味な笑みの仮面を付けている。ピエロの格好で、左半身は血のような紅、右半身には夜より深い黒、全身に星の模様があり、両肩には箱が付いている。

腹部、両太ももには恐怖の表情の人間の仮面が付いた姿に変わった。

こあは道化師の記憶の怪物、^{超人}クラウン・ドールパントに変身した。

クラウン・ドールパントは大鎌ビックリッパーを構えた。

「さあさあ楽しい楽しいパーティタイムですよ!」

その頃、美鈴に見事勝利した来雪は紅魔館内を探索していた。

「メモリ…メモリ…そう簡単に見つからないか…」

来雪は各部屋の隅から隅までメモリを探していた。

「この住人がみんな美鈴さんみたいにメモリに執着が無いとは限らない…早く見つけて霊夢さん達と合流しないと……ん？」

来雪が見つけたのは地下に繋がる階段だった。

「…地下……美鈴さんは地下室には行くなって言つてた…でもメモリがある可能性もある…覚悟決めなきゃ」

来雪は地下室へと向かった。

そこには如何にも何かを封印しているような分厚い扉があった。

「……………絶対何かある…誰が見ても何かあるって分かるよねこれ…」

来雪は地下室の扉を開き、中に入ってしまった。

そこには無数のぬいぐるみの残骸、そして部屋の中央には一人の少女がポツンと座り込んでいた。

「………女の子？…どうしてこんな所に？」

「……うん…あなたは誰？^{だあれ}？」

「えっ？…えっと…園田来雪って言うの…君は？」

「私？…私はフランドール・スカーレット…ねえねえお姉さん…早速で悪いんだけど…」

「これの使い方…分かる？」

「フランドールは手に持っていた物を見せた。」

「ツ…ガイアメモリ…」

「へえ…ガイアメモリっていうんだね…それでこれの使い方分かる？」

「…使い方は知ってる…でもそれは一度使ったらその強大な力に飲まれる…出来ればそのメモリを渡して欲しい」

「ふくん…そう…教えてくれないんだ…じゃあ…しようがないよね？」

「フランドールは手を来雪に向けた。」

「？」

「きゅっとして……」

「ッ！」

【MAGMA!】

「来雪は咄嗟にマグマメモリを押しした。」

「ドカーン」

グチャアア

「…………え？」

マグマメモリが左腕前腕に入る事は無かった。

何故ならその前腕ごと

暗躍の〇／繰り返される歴史

「ア”ア…ア”ア”ア”ア”」

来雪はその場に倒れ、欠損した部分を抑えていた。

「アハハハハ…さてと…お姉さんさつきメモリ使おうとしてたよね？壊れちゃったけど」

フランドールは自身のメモリを見つめる。

「なるほどねえ…そのための生体コネクタってやつなんだあ…面白じゃん」

フランドールはメモリのボタンを押した。

【PLUSH DOLL!】

キュピーン

メモリからガイアウイスパークが鳴り、フランドールはメモリを首筋の生体コネクタに挿し込んだ。

挿し込んだ首筋から綿や糸の様な物が吹き出し、フランドールを包んでいった。綿が弾け飛ぶとフランドールの姿が変わっていた。

継ぎ接ぎだらけの顔はクマで右から斜め半分がウサギの耳と目、下半身がが鳥の脚をした異形の姿。

フランドールはぬいぐるみの記憶の怪物、超人 プラツシユドール・ドーパントに変身した。

「ウツ…アア……」

来雪は出血多量で意識が朦朧としていた。

「う〜ん…せつかくドーパント？になれたのに…もう壊れちゃった？」

プラツシユドール・ドーパントはクマの右手で来雪の頭を鷲掴みした。

「ウツ……」

「ねえねえお姉さん…起きて…よー」

プラツシユドール・ドーパントはウサギの左腕で来雪の腹部を殴った。

「ガツ…ウツ…」

来雪はそのまま糸の切れた人形の様に動かなくなった。

「あくあ……壊れちゃった…」

興味が無くなったのか、掴んでいた来雪をそのまま投げ飛ばした。

ドサッ

「せっかく新しい玩具が手に入ったと思つたのになあ……まあ良いや……早くドーパントの力試してみたいし！」

プラッシュドール・ドーパントは扉に向かう。

部屋を出ようと考えているとみたいだ。

「外で何かあるみたいだし……楽しめそう！」

プラッシュドール・ドーパントが扉に手を掛ける。

「そんなに急ぐこと無いだろう？」

「ん？」

声のする方を見ると、先程投げ捨てた来雪が立っていた。

「その力を試したいんだろ？……だつたら相手してやるよ」

しかし来雪の様子が可笑しかった。

まるで人格が変わつたかの様だった。

「あれ？お姉さん壊れたんじや……」

「プラッシュドール……ぬいぐるみの記憶のメモリか……作つた覚えの無いメモリだが……

まあ良いか」

「……へえ……お姉さんは誰？……さつきのお姉さんじゃないでしょ？」

プラッシュドール・ドーパントは今喋っているのが来雪ではない事に気が付いた。

「ふむ…狂ってる様に見える。頭は良く回るらしい…そうだな…面倒だからコユキと呼んでくれ…実際にこの体は来雪のものだからな」

コユキと名乗ったものは欠損した部位を見つめた。

「全く…余り壊さないでくれよ…コイツはうちの組織に必要な存在だ…死なれては困る」

「組織？」

「お前には関係無い…さて…欠損部分が不便だ…早めに治すでしょう…来いズー」

ドドドン

「うん？」

突然天井に穴が空いた。

ウオンウオン

「ん？犬？」

そこには犬型の機械の様な物が瓦礫の上に立っていた。

「犬じゃない一応狼だ…コイツはズーメモリって言ってるな…あのWのフアングやエクストリームの様に自立行動型ガイアメモリでな…来雪が一番好きなメモリだ」

コユキが右手を出すとズーメモリが手に乗った。

そしてコユキは慣れた手付きでズーメモリを折り畳んでいった。

「さて…腕を治すついでにお前さんにはお灸を据えてやる…安心しろ…殺しはしない…お前さんも来雪の成長の為に必要なものだ…それにここまでの記憶はリーダーに改変させられるしな」

【ZOO!】

「……ん？」

来雪が目を覚ました。

「私……何で寝て……ん？」

来雪が周りを見るとそこには気を失ったフランドールとプラツシユドルメモリが転がっていた。

ウオンウオン

「ん？」

来雪が声のする方向を見るとズーメモリが待機していた。

「これは……ズーメモリ?…何でここに?」

ウオンウオン

「もしかして…あなたが助けてくれた…のかな？」

ウオンウオン

「……えへへ…ありがとう…」

来雪は浮かない顔をしていた。

(どうしてズーメモリがここに…それにあの子…確かフランドール…だっけ？…私…どうやってドーパントになったんだっけ？…どうやって倒したんだっけ？…思い出せない)

「うっ…う〜ん」

考えているとフランドールが目を覚ました。

「…あれ？」

「目…覚めたみたいだね」

「お姉さん？…そっか…負けちゃったんだね…」

「メモリ…渡してくれる？」

フランドールはプラッシュドールメモリを拾った。

「約束だもんね…はい」

フランドールはプラッシュドールメモリを来雪に渡した。

「ありがとう…」

「それにしてもお姉さん凄く強いね…その…ズーメモリだっけ?…動物園のメモリって聞いて少し嘗めてたよ」

「まあ…動物園の動物の力全て使えるメモリだからね」

腑に落ちない所もあるが来雪はフランドールと話をすることにした。

来雪がフランドールと話している頃の事、暗黒空間が広がる謎の場所に人が立っていた。

「あらあら…戻ってきたのですか?ヒストリーさんにフランド君」

ヒストリーとフランドと呼ばれた二人は黒服の女に話し返す。

「全く危うく死ぬ所だった…だから反対だったんだ…紅魔館に、しかもフランドール・スカーレットにメモリを渡すの」

黒服の男はジト目で巫女服の少女に悪態をつく。

「まあ良いじゃない…僕の力があればいくらでもやり直せるからね」

「その言葉何回目だ?…前の時もそう言って全部やり直したじゃねえか」

「前は魂魄妖夢に斬り殺されたんですしたっけ?」

「ああ…全く春雪異変で斬り殺されたとか…今までで最速じゃねえか…今回に限っては

フランドール・スカーレットの能力でお陀仏になりかけるしな！紅霧異変で退場してたら記録更新だぞ！」

黒服の女の言葉に黒服の男は更に悪態をついた。

「まあ…紅霧異変で退場は流石に早すぎる…だから君に横槍を入れて貰ったんじゃないかな？」

「はあ…良かったな俺がハイドープで…本来のフレンドメモリならあんな能力無かったぞ」

「というより…ここにいる三人全員ハイドープじゃない…」

「今回は横槍を入れた…これがどう繋がるか観物だね」

【HISTORY!】

「はあ…」

【FRIEND!】

「ふふ…」

【JEALOUSY!】

三人は腰に巻いていたガイアドライバーREXにそれぞれのメモリを挿し込んだ。

三人はそれぞれのメモリに内蔵された記憶の怪物超人に変身した。

「園田来雪ちゃんは僕達の希望…新たな幻想郷を作る為には彼女の能力の成長が大前提なんだから…今回こそは死なせるわけには行かない」

「それも何回目だ？聞き飽きたぜその言葉」

「だったら今回こそ失敗しなきゃ良いのよ」

「ジェラシーの言う通り…今回こそ成功させる…僕達の野望の為…今は成長の種としてメモリを浸透させなきゃね」

バツ

ヒストリー・ドーパントの言葉で辺りが急に明るくなると、そこには数え切れない程のガイアメモリを製造している工場のような場所とガイアメモリを製造作業をしているマスカレイド・ドーパント達が働いていた。

「種を撒く仕事は君達に任せるよ…僕らの同志達」

ヒストリー・ドーパントの後ろには7人の男女が立っており、彼等の腰にはヒスト

リー・ドーパント達三人と同じガイドライバーREXが巻かれていた。

【G I A！】

【E A R T H Q U A K E！】

【T Y R A N T！】

【S P I R A L！】

【S E A S O N！】

【J U D G M E N T！】

【C E L L！】

ガイドライバーREXに自身のメモリを挿し込んだ。

そして彼らも自身のメモリの記憶の怪物超人に変身した。

「ふふふ…」

その光景を見て、ヒストリー・ドールパントは笑い出した。

Kの合流／レミアアを止めろ

ヒユウウン

ピュンピュン

「クツ…フツ！」

ドオオン

霊夢は次々と射出される光の剣を御札で撃ち落とす。

「ふふふ…まだまだ終わりじゃないわよね？」

霊夢の所にスマートなボディに所々が鎧で覆われ、修道女の様な姿をした存在が笑いながら歩いてきた。

この存在こそ紅魔館のメイド長である十六夜咲夜が教会の記憶のメモリのチャーチメモリで変身した怪物^{細人}、チャーチ・ドーパントである。

「それにしてもお嬢様も人が悪い………よりにもよって教会のメモリをお渡しになるなんて……嫌な記憶を思い出してしまいました」

チャーチ・ドーパントは愚痴りながら自身の武器である十字架型の剣エスカクロスを構える。

「まあ…そのおかげで博麗の巫女を追い詰められるのですが」

「…追い詰める？…馬鹿言わないで頂戴」

霊夢は立ち上がる。

「この程度で私が屈服するとても？…メモリの力に過信してるあんたなんかには負けるほど…落ちぶれて無いわよ」

「…過信してる？私？…お嬢様の天敵であるこのメモリを？…冗談じゃない…私はこのメモリが嫌いだ…過信した事等一度たりとも無い！」

ヒュウウン

チャーチ・ドーパントの周りに光の穴が出現し、中から無数の光の剣が出現した。

「お嬢様には悪いけど…このメモリをお嬢様から賜った時…すぐにでも叩き割ってやりたかった…嘗ての私を思い出してしまった…ああ忌まわしい…お嬢様にナイフを突き付けた愚かな私を思い出す…教会の命令で吸血鬼を狩っていたあの頃を…名前すら無かった私…教会の道具だった私…ああアア忌まわしい！忌まわしい忌まわしい！！」

チャーチ・ドーパントは壊れたカセットテープの様にブツブツ言いながら光の剣を無造作に射出していく。

無造作に射出した光の剣は一本も霊夢にカスリもしなかった。

「……………これが来雪の言つてた事なのね…一度メモリを使えばその強大な力でおかしくなる…なるほど確かに悪い葉だわ」

霊夢はお祓い棒と御札を構えた。

「十六夜咲夜…だつたかしら？…今その呪縛メモリから解き放つてあげるわ」
「アアアアアアアアア!!」

チャーチ・ドーパントは形振り構わず光の剣を射出する。

「ハア!」

霊夢は走り出し、自身に向かつてきた光の剣を御札で撃破していく。

「グウウウ!」

エスカクロスを振り上げるチャーチ・ドーパント。

だが理性を失っているドーパント相手に手加減するほど霊夢も甘くなかった。

「読めてるわよ」

キン

「グウ!?!」

エスカクロスは空中で動かなくなつた。

よく見ると霊夢の御札がエスカクロスに張り付いていた。

「封印術は私の十八番なのよ…私が封印を解くまでそれは使えないわよ」

霊夢はチャーチ・ドーパントの懐に飛び込んだ。

「ウ?!」

「博霊式霊術…封魔掌!」

そして霊力が溢れた掌で、チャーチ・ドーパントの腹部を突いた。

「ガアツ?!」

「ドーパント相手に手加減はいらない…頑丈なのは知ってるからね…あんたが言ったことよ…出し惜しみは無しってね!!」

ドスドス

今度は顔面を突き、更に鳩尾に食らわせた。

「ググツ」

「ハアツ!」

怯んだチャーチ・ドーパントに霊夢は両手を突き付け、チャーチ・ドーパントを突き飛ばす。

ドスン

チャーチ・ドーパントはそのまま壁にめり込んだ。

「ガハツ」

「そのまま寝てなさい!」

霊夢は陰陽玉をチャーチ・ドーパントに叩き込む。

「夢想封印！」

「ッ!？」

ドドドン

ドガアアン

夢想封印をチャーチ・ドーパントに叩き込むと、チャーチ・ドーパントは壁を突き破りそのまま吹き飛ばされる。

そして耐えられなくなり、大爆発を起こした。

カチャカチャ

大穴が空いた壁の向こう側には、瓦礫に横たわっている咲夜とチャーチメモリが転がっていた。

「……」

霊夢はその様子を見ていた。

「なっなんか凄いことになってる!？」

そこにフランドールを連れた来雪がやって来た。

「あられ雪…心配はしてなかったけど勝ってたのね」

「うん…美鈴さん凄く強かったよ」

「ん?…そいつは」

霊夢はフランドールを見ていた。

「あつこの子はフランちゃん…えつとこの館の主さんの妹さんで…さつき戦ったんだ」

「ふくん…一緒にいるって事は勝ったのね」

「まあ…そうかな…」

「ねえ…そこで倒れてるのって…」

フランドールは大穴が空いた壁を見つめて言った。

「メイド長よ…メモリに囚われてたから本気で相手したのよ」

「……咲夜…あのメモリを嫌ってただけど…お姉様に渡されたからって…」

来雪は咲夜の近くに行き、メモリを回収した。

「……チャーチ…教会の記憶か…フランちゃんのプラッシュドールやフリートみたい

に知らないメモリだ」

「あなたの記憶に関係あるかもしれないし…とりあえず持つときなさい」

「…うん」

来雪はチャーチメモリを懐に仕舞った。

「…そう言えば魔理沙さんは？」

「さあ?…まあそのうち来るでしょ」

霊夢が適当に流すと

「おっ！霊夢！来雪！ここに居たのか」

丁度そこに魔理沙が来た。

「ほら来た」

「うひゃく派手にやったな」

魔理沙は大穴が空いた壁を見て言う。

「まあ本気でやったからね」

「霊夢が本気……ねえ」

「………全く……誰がこれを直すと思ってるのよ」

そこにここに抱えられるパチュリーがやって来た。

「あつパチュリーに小悪魔」

「フラン……その様子だと能力も安定してるみたいね」

「うん……ちよつとスツキリした感じ」

パチュリーはフランドールの様子を見て笑みを浮かべる。

「何よ大所帯になつてきたわね……魔理沙は何でそいつらと来たわけ？」

「戦いの最中にパチュリーに止められてな……まあ小悪魔のドーパントめつちや面倒くさかつたぜ」

魔理沙はクラウンメモリとウイズダムメモリを来雪に渡す。

「ほらよ来雪…パチュリー達のメモリだ」

「ありがとう魔理沙さん…クラウンにウイズダム…道化師に叡智の記憶…このメモリも私の知らないメモリだ」

「あなたが園田来雪…メモリの専門家ね」

パチュリーが来雪に話し掛ける。

「専門家って訳じゃないけど…他の人よりは知ってるって感じかな」

「なら単刀直入に言うわ…レミイを…私の親友を助けて欲しい」

パチュリーが来雪に頭を下げた。

「ツ…パチュリー」

「フラン…あなたも知ってるでしょ…メモリを使ってからレミイや咲夜がおかしくなったのを…そこそあなたも精神的におかしくなってたじゃない」

「……」

「どういふことか説明してもらえるかしら？」

霊夢達は事の経緯を聞く。

「お嬢様がおかしくなったのはこの幻想郷に幻想入りする前の事です」

小悪魔が説明を始めた。

「幻想郷の賢者…八雲紫の誘いで幻想郷に移住する事を決めたお嬢様の元に…ある来訪者が来たんです」

「来訪者？」

「名前までは分かりません…ただ彼らは自身をミュージアムと名乗っていました」

「ツ!?…ミュージアム」

来雪はミュージアムと聞き、反応する。

「知ってるの来雪？」

「…この世界にある街、風都でガイアメモリを…この子達を量産して流通させた組織だよ」

来雪はTレックスメモリを見つめながら言った。

「ガイアメモリを流通…どう考えても悪い組織よね」

「…でも…」

来雪は浮かない顔をしていた。

「なんか気になるのか？」

魔理沙が来雪に聞いた。

「…ミュージアムは既に壊滅してるんだよ…何で壊滅したのかはまだ記憶が曖昧だから覚えてないんだけど」

「でもあの黒服達はミュージアムと名乗ってたわ…私もレミイの隣で聞いてたから間違いない」

「……」

来雪はTレックスメモリを見つめた。

「…話を続けるわね…黒服達はレミイや私にビジネスの話をしたいって持ち込んできたのよ…その男達がトランクの中を見せると無数のメモリが入ってたわ…男達はメモリについて色々語ってたわ…メモリを使えばフランの容態は安定するし、太陽の光をいちいち恐れる事も無くなるってね…」

霊夢達は怪しみながらも話を聞いていた。

「私もレミイも最初は半信半疑だったわ…でも試しにとってレミイにメモリを使用するように勧めたの…私は反対したのだけどレミイったら珍しい物が好きでね…試しにメモリを使ったの…したら太陽の下を歩けたのよ…ドーパントの姿になれば弱点を克服出来る…それからよ…レミイがおかしくなっていたのは…」

「メモリによる中毒症状…メモリに内蔵されてる記憶に飲まれちゃったんだね」

「おかしくなって異変を起こしたって訳？」

霊夢の言葉にパチュリーは首を振った。

「いいえ…異変自体は初めから起こすつもりだった…この異変はレミイやフランが日中

でも外で楽しめる様になって考えで起こしたものだからね」

「本来であればそれで済む筈だったんですよ」

声のする方向を見ると門番の美鈴が歩いてきていた。

「美鈴さん！」

「無事の様ですね来雪さん…妹様も」

「うん…来雪お姉さんにメモリについて教えて貰ってたんだ」

「…申し訳ありませんパチュリー様…あの時私があの方達を追い返していれば…こんなことには…」

美鈴はパチュリーに頭を下げた。

「頭を上げて頂戴美鈴…それは私にも言えたことなんだから」

「パチュリー様…」

「今のレミイは度が過ぎてる…このままこの霧が出続ければ…幻想郷が滅びかねないわ」

「はあ!?!幻想郷が滅ぶだあ!?!」

「どういう事よ!」

パチュリーの言葉に霊夢と魔理沙が反応する。

「この霧は本来、私の魔力で作り出す予定だったのよ…でもそうじゃない…この霧は

レミイの持つメモリの力で起こしてるのよ」

「メモリの…力で？」

「メモリの名前はドラキュラ…吸血鬼の記憶を宿したメモリらしいけど…」

「ドラキュラメモリにそんな力は無い…ましてや世界を滅ぼしかねない程の霧を発生させるなんて…」

「ハア…どう考えても賢者案件でしょこれ…まあ何にしても…行つてみれば分かるわよ」

霊夢が愚痴りながら呟く。

「だな…幻想郷の危機だそのままにしとけねえしな」

「美鈴…咲夜を図書館に退避させといて頂戴…私はレミイの所に行くわ」

「分かりました…退避させ次第私も向かいます」

パチュリーの命令で美鈴は倒れている咲夜を抱えて走る。

「こあ…あなたは咲夜を」

「何言つてんですかパチュリー様…あなたがお嬢様の所に行くなら私も行きますよ…それに私はパチュリーちゃんの使い魔であつてレミア・スカーレットの使い魔じゃない…それはここに来たときから話を通してある筈ですよ」

「ハあ…」

「ということでは来雪さんでしたっけ?…少しの間クラウンメモリを貸して貰えませんか?」

「えっ?」

突然の申し出に戸惑う来雪。

「お嬢様と戦闘になったときにドーパントが多い方がいいはず…安心してください…クラウンメモリは私との適合率バリ高なので!」

「………分かりました…でも終わったら」

「分かっています」

来雪は渋りながらもクラウンメモリをこゝかに渡した。

「あの…来雪お姉さん」

「ん?」

「私にも…プラッシュドールメモリ貸してくれない?」

「フランちゃん…」

「だって私も当事者だもん…私もお姉様を止めたい…元のお姉様に戻って来てほしいから…お願い!」

フランドールの目を見た来雪は決断する。

「…分かったよフランちゃん…でも小悪魔さんと同じ様に…」

「うん！終わったらちゃんと返す！約束する！」

「…うん」

来雪はフランドールにプラッシュユドールメモリを渡す。

「使いすぎたら駄目だよ…いくら適合率が高くても暴走の危険はあるから」

「分かってますよ」

「うん！」

「話は纏まったかしら？…それじゃあ行くわよ」

そんな様子を見ている者達がいた。

「とんでもない事になってるわね」

「紫様！我々も行きましよう！」

それは幻想郷最古の妖怪の一人、妖怪の賢者八雲紫とその式八雲藍だった。

「そうね…流石に霊夢達だけじゃ心配なもの…藍、準備して頂戴」

「承知しました！」

紫達も現地に向かおうとする。

しかし

「そいつは困るなあ」

『!?』

紫達の後ろにガイアドライブバーREXを腰に巻いた男が立っていた。

「貴様……どうやってここに」

藍は驚愕していた。

「幻想郷の賢者八雲紫……単刀直入に言う……邪魔すんな……これは来雪が成長するのに必要な事なんぞな」

「来雪……園田来雪ね……霊夢が面倒見てるみたいだけど……あの子も貴方の仲間って事で良いのかしら?」

「うくん……現状では違えな……今のあいつかからしたら俺達は害悪そのものだ……なんせあいつが大切にしてるガイアメモリを悪用してる訳だしな」

男はヘラヘラしながら答える。

「そう……今はそんなことどうでもいいわ……幻想郷の危機なのよ……此処で大人しく見てるなんてこと賢者として出来るわけないでしょ」

「おいおい……俺は親切心で言っただけ……それとも本気で言わなきゃ分かん

ねえか?…引っ込んでろつつてんだよ…:テメエ等纏めて此処で殺しても良いんだぜ
俺は」

『ツ!』

男は殺気を放ちながら言った。

その殺気はもやは人間が出せる殺気では無かった。

「…まあ…此処でお前さんらを殺しちや俺達の計画に支障が発生するからな…悪かった
…:これも俺は争いなんて無意味な事は嫌いだね…お前さんらには異変が解決する
までここに居て貰う…:その為にここに来たんだよ俺は」

【FRIEND!】

ガチャン

男はフレンドメモリをガイアドライバーREXに挿し込んだ。

男の姿が変わった。

全身の色は焦茶色。

頭は人の顔が割れて黄色と赤のサークルが描かれた頭がでているデザインで手には
黄色の手袋をしており、両肩には大きな手がついている。

胴には顔と同じ黄色と赤のサークルの模様があり、腰にローブをし人の手が握手して

いる装飾がついている。

そして左右非対称の靴のような足をしている。

男は友達の記憶の怪物^{超人}、フレンド・ドールパントに変身した。

「そういうことだから…大人しくここに居てくれや…じゃねえと…思わず殺しちゃう
かもしんねえからよ」

「…紫様」

（本当なら今すぐでも霊夢の助けをしたいけど…無理そうね…霊夢…魔理沙…そして園
田来雪さん…幻想郷を頼んだわよ）

変貌のR／家族の想い

レミリアを止めるべく、紅魔館のメンバーも霊夢達と行動を共にした。

「レミイは恐らく時計台にいる…そこで霧を散布してる筈よ」

「だったら急ぐわよ…早くこの異変を終わらせなきゃ」

「そうそう…異変は終わった後が大変だからなあ」

「えっ?…そうなんですか?」

魔理沙の言葉に来雪は首を傾げた。

「異変が解決したら毎回博麗神社で宴会だもの…全く面倒だったらありやしない」

「そう言ってお前だって楽しんでんじやねえか」

「折角の宴会よ…楽しまなきゃ損でしょ…あんた達にも参加してもらおうからそのつもりで」

霊夢はパチュリー達に言った。

「私達も?」

「宴会は異変の首謀者含めて参加したい奴が来るのよ…異変に関係してない奴とかね……異変企てたあんた達が欠席出来るとは思わない事よ…無理矢理にでも連れて行く」

わ…勿論…レミリアって奴もね」

「博麗霊夢…」

「良いですね、その時は。パーツと盛り上がりましようね。パチュリーちゃん」

小悪魔がパチュリーの肩に手を回した。

「こあ…そうね…外出するの何時ぶりかしら」

「私も行って良いの？」

「おう！誰一人欠けることねえ様にな」

フランドールの間に魔理沙が答える。

「……近い」

「……来雪は感じるのね…メモリの力が」

「うん……レミリアさんはこの先に居る」

「そんなじゃ…覚悟を決めなさい」

霊夢の言葉に全員が身構える。

「……行くわよ！」

全員が時計台に辿り着いた。

時計台には赤いメモリを持ったフランドールに似た少女が立っていた。

「レミィ!!」

「……あらパチエ…フランに小悪魔も…侵入者と一緒に居るって事は…私を裏切るのね」

レミリアは不気味な笑みを浮かべながら紅魔館組を見つめる。

「お姉様…もう止めようよ…これ以上この霧を散布し続けたら幻想郷が…」

「滅びる…でしょ?」

『!?』

レミリアは分かっていたかのように答えた。

「滅んだ所でどうって事無いわ…これを使えば…私達が暮らしやすい世界に出来る…

ああ…ガイアメモリ…なんて素晴らしい代物かしらね」

レミリアは自身のドラキュラメモリを見つめてうっとりしていた。

「それ以上そのメモリを使えば…あなたは戻れなくなる!…お願いですレミリアさん!

…メモリをこっちに渡して下さい!」

来雪は一步出てレミリアに訴えかける。

「メモリを…あなたに?」

「そうです…あなたはまだ戻れる…あなたの愛する家族の元に今なら…フランちゃんや

パチユリーさん達の為に…そのメモリを捨てて下さい!」

「……ウフフ…フフフ」

レミリアは笑い出した。

「アハハハハ……メモリを捨てる位だったら……私は家族を捨てるわ」

「ツ!？」

「お姉様……」

「レミイ……あなた……」

レミリアの中毒症状は最早末期だった。

「私からメモリを奪おうって言うなら……やってみる事ね」

レミリアはメモリの他にあるアイテムを懐から取り出した。

「何だ……あれ」

「ツ!?!……レミリアさん……それを何処で!？」

「メモリを売りに来た売人から買い取ったのよ……私のメモリを更にパワーアップさせてくれる夢のアイテムだって言うからね……アハハハハ」

ガシャン

レミリアはメモリにそのアイテム、ガイアメモリ強化アダプターをセットした。

【DRACULA!UPGRADE!】

ガイアメモリ強化アダプターにUPGRADE LOADINGの文字が浮かんだ。「さあ始めましょう……こんなにも紅いから……フランやパチエ相手でも本気で殺すわよ……楽しい夜になりそうね……アハハハハ」

レミリアの目は狂気で濁っていた。

キュピーン

レミリアは左頬の生体コネクタにメモリを挿し込んだ。

レミリアの周りにコウモリが集まり始め、姿を形成していった。

その姿はドラキュラというよりはコウモリをグチャグチャにしたような筋肉質の化け物だった。

強化アダプターによってアップグレードされた肉体には血管が浮き上がり、右脚に左腕、首筋から破裂した血管が飛び出ており自身の体を血塗れにしているグロテスクな姿。

生体コネクタがあつた左頬にはガイアメモリ強化アダプターが露出しており、右頬は裂け口の中が見えている。

レミリアは強化された吸血鬼の記憶の超人、ドラキュラ・ドーパントに変身した。

「レミィ……あなた……心まで怪物になってしまったの……」

パチュリーはそんなレミリアの成り果てた姿を見て静かに涙を流していた。

「下がってパチュリーちゃん…此処は私が殺る」

「お姉様…そんな姿のお姉様見たくなかったよ！」

小悪魔とフランドールがメモリを構える。

【CROWN！】

【PLUSHDOLL！】

キュピーン

小悪魔は舌の生体コネクタに、フランドールは首筋の生体コネクタにメモリを挿し込んだ。

そして二人はそれぞれクラウン・ドーパントとプラッシュドール・ドーパントに変身した。

「霊夢さん魔理沙さん…行きましょう」

来雪はTレックスメモリを構える。

「ええ…何が何でも戻すわよ」

「ああ…認められつかよ…こんなの！」

霊夢はお祓い棒と御札、魔理沙はミニ八卦炉を構える。

「レミリアさん…あなたを救って見せる」

【T-R-E-X!】

キュピーン

来雪は左肩にTレックスメモリを挿し込んだ。

そしてTレックス・ドーパントに変身した。

「…ガアアアアアアア!」

Tレックス・ドーパントが先制し衝撃波を放つ。

「フツ」

ドラキュラ・ドーパントが衝撃波を飛んで避ける。

「…ツ!」

ドラキュラ・ドーパントは飛んだ先で綿と糸で脚に絡ませていた。

それはブラッシュドール・ドーパントの綿と糸だった。

「小悪魔!」

ドラキュラ・ドーパントの目の前にクラウン・ドーパントがいつの間にか飛んでいた。

「開け!マジックボックス!」

クラウン・ドーパントは両肩にある箱を開ける。

すると中から鉄球やら杭やら無数の武器が飛び出した。

「フツ」

武器が命中する前にドラキュラ・ドーパントは霧化した。

「なっ!?!」

霧化したドラキュラ・ドーパントはすかさずクラウン・ドーパントの真後ろに現れた。

「ツ!こあ!」

パチュリーが魔法でドラキュラ・ドーパントを攻撃する。

「クツ…パチエ!」

攻撃魔法を食らったドラキュラ・ドーパントは再び霧化する。

「また霧化かよ!」

「ツ!パチュリー!狙いはあなたよ!」

霊夢は直感で感じ取った。

霊夢の言った通りドラキュラ・ドーパントはパチュリーの後ろに現れた。

「パチエエエエ!!」

「ツ!」

ドラキュラ・ドーパントは爪を巨大化させ、パチュリーを切り裂こうとする。

ガキン

ドラキュラ・ドーパントの爪を受け止めた物が現れた。

「【時間を操る程度の能力】……これで数々の吸血鬼の命を奪ってきました!」

それは霊夢に倒された十六夜咲夜だった。

「ツ!? 咲夜!」

「申し訳ありませんパチュリー様……ここからは私も戦います!」

「サクヤアアアア!」

「お嬢様……再びあなたにナイフを向ける事を……お許し下さい……美鈴!!」

ブンッ

ドスン

「ガッ!」

咲夜の合図で美鈴がドラキュラ・ドーパントの頭にミサイルキックした。

「美鈴さん!」

Tレックス・ドーパントは美鈴にあるものを投げた。

カチッ

「これは……来雪さん……あなたの信頼……受け取りました!」

Tレックス・ドーパントが美鈴に投げたのは魔性の小箱ガイアメモリだった。

【TRICERATOPS!】

キュピーン

美鈴は左の太腿の生体コネクタにメモリを挿し込んだ。

美鈴はトライセラトップス・ドーパントに変身した。

「行きます…お嬢様！」

トライセラトップス・ドーパントは身体からダイナソアクラブを作り出した。

「ハアツ」

カンツ

カンツ

ダイナソアクラブでドラキュラ・ドーパントを攻撃する。

「メイリインンンン！」

「お嬢様…私が命に変えても支えようと決めているのは…今のあなたではない！私達が

あなたを元に戻します！」

キユウウン

トライセラトップス・ドーパントは右手に紫のエネルギー弾を作り出す。

「ハアツ！」

そのエネルギー弾をドラキュラ・ドーパントに放つ。

「頼みますよ咲夜ちゃん！」

「ザ・ワールド！」

ドウウン

カチツ

咲夜以外の時間が止まる。

というのもこの能力は本当に時間を止めてる訳では無い。

咲夜以外の時間の流れが遅くなっているだけなのだ。

「…久しぶりね……美鈴に咲夜ちゃんって呼ばれるのは…何時からだっただろう…咲夜さんって呼ばれる様になったのは」

咲夜はドラキュラ・ドーパントの後ろまで歩く。

「…流石博麗の巫女…私達が何をしたいのか分かってるなんて」

咲夜が霊夢を見ると霊夢は夢想封印の構えで止まっている。

「美鈴のエネルギー弾…そして博麗霊夢の夢想封印…この2つを受ければいくらお嬢様でも…」

咲夜はドラキュラ・ドーパントをエネルギー弾と夢想封印の軌道に蹴る。

「時は…動き出す」

キュウウウン

時は再び刻み始めた。

「ッー」

ドラキュラ・ドーパントが気付いた時にはエネルギー弾と夢想封印は既に射程内だっ

た。

「夢想封印！」

「終わりです！」

ドオオン

ドラキュラ・ドーパントは夢想封印とエネルギー弾を受けて爆発した。

「グイイイ」

ドラキュラ・ドーパントはなんとか耐えていた。

「魔理沙！来雪！」

「グツ!？」

ドラキュラ・ドーパントの目の前にTレックス・ドーパントからチャーチ・ドーパントに変わった来雪とマスタースパークの構えを取る魔理沙がいた。

「決めるぞ来雪！」

「はい！」

ヒュウウン

チャーチ・ドーパントは巨大な光の剣を出現させる。

「グッ！」

ドラキュラ・ドーパントが霧化で逃れようとするが、霧化出来なかった。

「ナ…ニイイツ?!」

ドラキュラ・ドーパントの背中にいつの間にか霊夢の御札が貼り付けてあり、更に束縛魔法が掛けられていた。

「霧化させないわよレミィ！」

「封印術は十八番なのよ！決めなさい魔理沙！来雪！」

「マダアアアア！」

物理的に逃れようとするドラキュラ・ドーパント。

「開け！マジックボックス！」

「エイツ！」

そこにクラウン・ドーパントとプラッシュドール・ドーパントがドラキュラ・ドーパントに拘束器具と綿糸を巻きつける。

「逃しません！今です魔理沙ちゃん！」

「やっちゃえ来雪お姉さん！」

「魔理沙ちゃん言うな！行くぜ最大火力!!」

「これで終わりです!!」

そして魔理沙とチャーチ・ドーパントが渾身の一撃を放つ。

「マスタースパーク!!」

「ハアアアア!!」

ドユウウウウン

ピユウウウン

マスタースパークと光の剣が一つになりドラキュラ・ドーパントに放たれる。

「コノワタシガアアアアア!!」

光に飲み込まれるドラキュラ・ドーパント。

ドガアアン

そして威力に耐えられなくなり、大爆発を起こした。

爆煙が晴れるとボロボロになったレミアが倒れており、その付近にドラキュラメモリが転がっていた。

そして場所は変わり、その光景を見ていた紫達は喜びを露わにしていた。

「紫様！」

「ええ…良くやってくれたわ」

「ふう…先ずは第一段階クリアだな」

フレンド・ドーパントは来雪の勝利に満足していた。

「結局あなたは何がしたいのよ」

紫はフレンド・ドーパントに尋ねる。

「言っただろ…来雪が成長するのに必要な事だつてな…さてと…俺の仕事はここままで…後はあいつに任せるか」

フレンド・ドーパントはメモリを取り出した。

【ZONE！】

フレンド・ドーパントはゾーンメモリをガイドライバーREXの左側に挿し込んだ。

フレンド・ドーパントの左腕が角張った作りになり、手が形を変えて眼球になった。「そんなやな八雲紫…お前さんから幻想郷の者たちが来雪を成長させてくれることを願ってるぜ」

左手の眼球の瞳が光るとフレンド・ドーパントはその場から消えた。

「待てー！」

「よしなさい藍」

「紫様！宜しいのですか!?!」

「……」

紫の目は怒りに燃えていた。

「…いずれ戦うことになるでしょう…その時は…」

また場所は変わり、紅魔館近くの森の中。

「……………」

一人の少女が空を眺めていた。

「……に居たか」

「…ん」

そこに先程紫の所から姿を消したフレンド・ドーパントが現れた。

「仕事だ…レミリア・スカーレットが持つてるもう一つのメモリを回収してこい」

「…分かった」

少女は立ち上がると腰にガイアドライバーREXを付けた。

そしてメモリを取り出す。

【G I A！】

少女はギアメモリをガイアドライバーREXに挿し込んだ。

大きさがまちまちな無数の歯車で体を構成した小柄な姿に変わった。

少女は歯車の記憶の怪物^{超人}、ギア・ドーパントに変身した。

「…行ってくる」

ガチャン

ギア・ドーパントがそう言うのと自身の体をバラバラにし、歯車の状態で飛んでいった。

「…相変わらず面白いメモリだな…」

フレンド・ドーパントはギア・ドーパントの飛んでいった方向を見ながら呟いた。

「お嬢様！」

「お姉様！」

咲夜とフランドールが倒れてるレミリアに駆け寄る。

「…うつ…咲…夜…：…フラン」

「はいお嬢様！十六夜咲夜です！お気を確かに！」

「お姉様！」

「…私…あなた達に酷いこと言ったわね…御免なさい…家族を捨てる…そんな馬鹿なことを私は…」

レミリアはメモリの影響で言い放った言葉に後悔していた。

「たとえ人間より上位種である吸血鬼でも…メモリの強大な力には勝てないんですね」

そこに来雪達がやって来た。

「…：…来雪…：だったわね…：ありがとう…：私を開放してくれて」

「私だけの力じゃないです…：霊夢さんや魔理沙さん…：それに紅魔館の皆さんがレミリアさんを元に戻したんですよ」

「…：そうね」

「さてと…：これで異変解決ね…：あんたを倒した事で霧も晴れ始めて…：つて太陽！あんた

達吸血鬼でしょ!?早く中に!」

霊夢が段々陽の光が照りつけて来る状況を見て焦りだす。

「心配無いわ…魔法で一時的な結界を張ってるわ…そんなに長い時間は維持できないけどね」

パチュリーが霊夢に説明をする。

「パチエ…迷惑掛けたわね」

「全くよ…珍しい物に目が無いその性格…次からは気をつけて頂戴」

「……善処するわ」

「とりあえず中入ろうぜ!何時までも外で話しててもしょうないだろ?」

魔理沙の提案に皆が納得し、中に入ろうとした。

その時だった。

ヒュンヒュンヒュン

ザザン

「うわッ!」

レミリアに肩を貸していたフランドールが空から降ってきた歯車に弾かれた。

『ッ!?!』

「ッ! フランシー！」

レミリアがフランドールに駆け寄ろうとするとレミリアの目の前で歯車が一つになり、ギア・ドーパントに変わった。

ガシッ

「ウッ」

ギア・ドーパントはレミリアの首を締め、持ち上げる。

「レミィー！」

「ドーパント!?!」

「お嬢様！」

咲夜と美鈴がレミリアを救出する為に動くようにする。

「…動かないで」

『ッ!?!』

「…動いたら…この子の首がネジ曲がる事になるよ?」

その言葉を皮切りにレミリアの首を掴んでいる腕に歯車が集まり、レミリアの首辺りに噛み合い始めた。

「…私の意志で…歯車はこの子の首にはめ込まれ…時計の様に頭が回転する…つまり

…何時でも殺せる」

「クツ…あなた…何が…目的？」

レミリアが苦しみながらギア・ドーパントに聞く。

「仕事…あなたのメモリを…回収しに来た」

「レミイのメモリ？…ドラキュラメモリの事」

「それじゃない…私が欲しいのは…こつち」

ギア・ドーパントはレミリアの服のポケットに入ったメモリを取った。

「2本目のメモリ!？」

「…仕事終わり…」

バツ

ギア・ドーパントはレミリアをフランドールの所に投げた。

「お姉様！」

「ゲホゲホ」

「…確かに…頂いた」

【UNION!】

ギア・ドーパントはメモリを押しした。

「ユニオン…同盟の記憶？」

「実験には必要…私は良く分からないけど…また会おうね…来雪」

「えっ？どうして私の名前を…」

「いずれ…分かる」

ガチャン

ギア・ドーパントは体をバラバラにし、歯車の状態で飛んでいった。

「あのドーパントは一体…私を知ってるの？」

ギア・ドーパントの乱入で一悶着あったが、こうして紅霧異変は解決した。

Kの宴会／来雪の住居

紅霧異変から四日後。

博麗神社にて、宴会が開かれていた。

「イエーイー！」

「なのだ〜！」

「待ってよチルノちゃん！ルーミアちゃん！」

テンションが上がリ飛び回っているチルノとルーミアを起きかける大妖精。

ガヤガヤ

良く見ると、異変に直接関わっていない者達も参加していた。

「ハアア…宴会つて憂鬱だわ」

「楽しいからいいだろ？」

霊夢が溜息をつき、魔理沙がそんな霊夢の肩を叩く。

「関係無い奴らもぞろぞろと…：ハア」

「そーいや来雪は？あいつも立役者だろ？」

「ああ…あそこよ」

「靈夢が指差した先には質問攻めを受けている来雪がいた。

「あややや！地球の記憶を内蔵したガイアメモリ！そしてそれを使って変身したドーパント！興味深いです！是非取材を！」

「イヤイヤそれより私にガイアメモリを見せておくれよ！技術者として凄く興味がある！」

「へえ…超人…ねえ…少し私と遊ばない？…大丈夫よ手加減してあげるから」

「あわわわわ」

来雪は妖怪達から質問攻めや戦い^{遊び}に誘われる等され混乱していた。

「見事に囲まれてるな…文にとりかはわかるけど…幽香まで来雪に興味持つてるとはな」

「ドーパントの力を聞いて戦いたくなっただんではよ…あいつ血の気多いし」

「聞こえてるわよ靈夢…あなたが遊んでくれるのかしら？」

「さて何のことやら〜」

靈夢はそそくさとお酒を取りに行った。

それを幽香が追い掛ける。

「あいつ逃げやがったな…しようがねえ…おいおいお前から来雪が困ってるだろ、そろそろ開放してやれ」

魔理沙が来雪の元まで歩いていく。

「あややすみません！私とすることが少し興奮してました！ごめんなさいね来雪さん」

「あつ…えつと…いえ、その…大丈夫です」

「いやあ悪いね盟友！まさか幻想郷にこんな代物があると思ってなくてね！」

「あついえ…盟友？」

「ああ！人間と河童は古来からの盟友だからな、だから盟友って呼ぶよ」

にとりが笑いながら言った。

「珍しいですね、にとりさん人見知りの筈なのに」

「ん…まあ…何なんだろうな？盟友とはなんか気楽に話せるっていうか」

「あはは…そう思ってもらえれば嬉しいです」

来雪は笑みを浮かべながら言った。

「あら…もう始まつてるのね」

そこにレミリア達紅魔館勢がやって来た。

「あつレミリアさん！それに皆さんも来てくれたんですね！」

「折角の招待、出席しなきゃ失礼なもの」

来雪はレミリア達の歓迎をした。

「あややあなた方が紅魔館の」

「此処は…幻想郷にようこそって言うとかかね？」

文、にとりが紅魔館勢に話し掛ける。

お酒を飲みながら話は続いていった。

「はいフランちゃん」

「ありがとう！」

来雪はフランドールに料理を渡した。

「…ねえ来雪」

「なんですかレミリアさん」

「それ！その言い方」

「へっ？」

レミリアは来雪に言う。

「何でフランはフランちゃんなのに私はレミリアさんなのよ！そりや目上だけどフランだって目上よ！何でフランだけ！」

「えっ？…フランちゃん目上なの？」

「うーん…少なくとも495年は生きてるから目上って言えば目上だけど…私的にはフランって呼んでくれて嬉しいな！」

「そうなんだ…そっか…目上なのにフランちゃんって呼んでるし…じゃあレミリアさん

もそんな感じに呼べば良いのかな？」

「最初からそうしなさいよ……フランだけ不公平じゃない」

レミリアの許可がおり、来雪は考えた。

「うん………じゃあレミちゃん！パチュリーさんがレミイって呼んでるからレミイちゃんって言おうかなって思ってたけど……語呂が悪いし！」

「レミちゃん……初めての呼ばれ方だけ……まあ良いか」

この時から来雪はレミリアの事をレミちゃんと呼び続けた。

「あら……レミイがそう呼ばれるなら私も別の呼び方で呼んでも良いわよ？」

「そうですねか？……じゃあパッチェさんって呼びますね」

「………ごめんなさい……普通にパチュリーって呼んで頂戴」

「えっ？……分かりました」

来雪のパッチェさん呼びにレミリア達は笑いを堪えていた。

「笑い堪えてんじや無いわよ！」

「ご、ごめんパッチェ……じゃない。パチェ……パッチェさん……ブッフ」

「レミイイイイ！！」

「はいはいパチュリーちゃん落ち着いて落ち着いて」

レミリアに殴りかかろうとするパチュリーを小悪魔が抱えて抑える。

「離しなさいこあ！美鈴直伝の必殺カンフーを今こそおおお!!」

「あの…私そんなの伝授した覚え無いのですが…」

美鈴が苦笑いしていた。

「全くホント賑やかよね」

そこに霊夢がやって来た。

「おうお帰り、幽香は撒けたのか？」

「一応ね、ハア」

「お邪魔してるわよ霊夢」

レミリアが霊夢に話し掛ける。

「ええ…あれからどう？」

「絶好調よ」

レミリアが笑みを浮かべながら言った。

「そう」

「所で霊夢…ものは相談なのだけれど」

「何よ？」

「来雪を家で住まわせても良いかしら？」

「えっ？」

レミリアの言葉に来雪が固まった。

「……何で私に聞くのよ？」

「来雪の今の保護者ってあなたでしょ？宿が見つかるまで此処で面倒を見てるって聞いたから」

「誰に聞いたのよ……」

「いや私じゃないぜ？」

第一候補だった魔理沙が否定した。

「……まあ魔理沙じゃなければあいつしか居ないわよね……紫？」

ヒュオン

空間にスキマが空いた。

「あら……よく分かったわね霊夢？」

「来雪が神社に住んでるの魔理沙以外だったらあんたとその式しか知らないでしょうが……」

「この人が……紫さん」

来雪は紫を見ていた。

「こうして話すのは初めてね……幻想郷の賢者八雲紫よ」

「あつ初めまして……園田来雪です」

「ええ…霊夢達と異変解決に乗り出してきてくれてありがとう…：ガイアメモリというイレギュラーが現れた以上…：その知識を持つあなたにもこれからも異変解決に乗り出して貰いたい…：良いかしら？」

「はい…：この子達が悪い事に使われない様に…：これからもこの子達を回収したいと思いません」

来雪はTレックスメモリを取り出して見つめた。

「お願いするわ…：ようこそ幻想郷へ…：幻想郷はあなたを歓迎するわ園田来雪さん」

「それで？何で紅魔館なの？」

「理由は特に無いわよ…：最終的には彼女の意思だし、ただ宿が見つかるまで神社に住んでる事を言ったら異様に食い付きが良かったのよねえ」

「本人達の目の前で食い付きって言うのね」

レミリアが苦笑いしながら呟いた。

「話を戻すけど…：来雪…：私達の所に来ないかしら？フランもこの通りあなたのこと気に入ってるし、あの美鈴があなたを推してたし」

「お嬢様」

美鈴は顔を赤くしながら呟いた。

「恥ずかしがらなくても良いじゃない…：勿論私もあなたのこと気に入ったのよ…：どうか

しら？ 私達の所に来ない？」

「……………」

来雪は沈黙しながら霊夢を見る。

「…来雪…これはあなたが決めるべきものよ？…そりゃあ短い時間だったけどあんたと居て楽しかったわよ？…でもこうなることは分かった…初めに言ったでしょ？宿が見つかるまでの間は面倒を見るって…いずれはここを出てあなた自身で生きていかなきゃいけない…今がその時じゃないかしら？」

霊夢は笑みを浮かべていた。

「霊夢さん……………私……………」

「ああもう！辛気臭いわね！永遠に別れる訳じゃないんだからそんな顔しない！」

霊夢が来雪の背中を叩いた。

「大丈夫…不安になること無いわよ」

「……………霊夢さん」

来雪は泣きそうな顔で頭を下げた。

「今まで…ありがとう…ごさいました！」

「重いから！だから言ってるでしょ！永遠の別れじゃないって！ああもう何泣きそうな顔してんのよ！」

霊夢が来雪の顔を布巾で拭いた。

「…こーやって見ると…霊夢って面倒見が良いのね？」

「だろ？だから人間だろうと妖怪だろうとみんなに好かれてんだぜ？」

レミリアの言葉を魔理沙が肯定した。

「全く…レミリア…来雪を宜しくね…あんた達なら預けられるわ」

「任せて頂戴…来雪…今日からあなたも私達の家族よ！これからも宜しく」

レミリアが来雪に手を差し伸べた。

「レミちゃん…うん…これからよろしくお願いします！」

そして来雪はレミリアの手を握った。

この日より、紅魔館に新たな家族が増えた。

宴会が無事終わり、霊夢と来雪は宴会の片付けをしていた。

「別に良いのに」

「ううん…私にもやらせてください」

「律儀ね…魔理沙とは大違いだわ」

宴会に参加したメンバーはみんな帰っていた。

「紅魔館には行かないの？」

「えっと…レミちゃんにお願いして…今日だけ此処にいたって思っ
て…」

外の片付けが終わり、二人は最後に残った洗い物をしている。

「…来雪」

「はい？」

「ありがとう…あなたのおかげで異変も無事解決出来たわ」

「そんな…私は何も」

「謙遜すること無いわよ…紫の言う通りガイアメモリって物を撒いてる奴らがこの幻想郷に居る…その知識を持つてるあなたが異変解決に協力してくれるのはすごく助かる…これからも宜しくね来雪」

「霊夢さん…」

来雪は洗い物をしている手を止めた。

「…私も…霊夢さんには感謝してます」

「ん？」

「自分自身の記憶が無い…でもガイアメモリの記憶はある…こんな私を今日まで面倒見
てくれて…料理とか洗濯とか…身の回りの事を教えてくれて…分からない事だらけの
私を導いてくれた…本当にありがとう…ございます」

「…ん…面と向かって言われると照れるわね」

　　霊夢は頬を赤くして照れていた。

「…あの…霊夢さん」

「ん？」

「明日から紅魔館でお世話になる訳ですけど…その…今後も此処に遊びに来て…良いですか？」

「…ふふ…何当たり前な事聞いているのよ…良いに決まってるでしょ？寧ろこれではいさよなら何て薄情な事言ったらぶっ飛ばしてた所よ」

「あはは…そうですね…ありがとうございます…霊夢さん」

「…ええ…こつちこそありがとうございます…私を普通の霊夢として見てくれて」

「え？」

　　霊夢の言葉に来雪は首を傾げた。

「私は知つての通り博麗の巫女…私の知人以外は私の事を博麗の巫女として見ている…それが当たり前なんだけどね…でもね…鬼巫女だとか呼ばれてるけど私だって普通の女の子として居たいと思つたことはいくらでもある…正直あなたが初めてじゃないかしら…初めて会つてから私を博麗の巫女の霊夢じゃなくて普通の霊夢として扱つてくれたのは」

「……」

「それが嬉しかった…本当に…嬉しかったのよ」

霊夢は笑っていた。

「霊夢さん…」

「…ごめんなさいね…しんみりしちゃったわね…さてと早く片付けるわよ」

「…はい！」

そしてその夜。

「何で同じ布団なのよ…」

「えへへ…今日くらいは霊夢さんと寝たくて…」

「…全く」

二人は同じ布団で寝ることにした。

「…あの霊夢さん」

「…何よ」

「もし良ければなんですけど…霊夢って呼んでも良いですか？」

「……」

霊夢は無言だった。

「私…霊夢さんと…その…友達になりたいなって…その」

「…好きにしなさい」

「っ！…うん！好きにするよ！ありがとう霊夢！」

来雪は敬語だった口調を崩した。

「…ふふ…ええ…こちらこそ」

二人は眠りに就き、来雪は幻想郷に来てから住んでいた博麗神社を出て新たな住居へ引越していった。

空白期編

Eの妖怪／霊夢の苦悩

来雪が晴れて紅魔館の一員になってはや一週間が経過した。

ズズズツ

「ハア……平和ねえ」

霊夢は博麗神社で一人お茶を飲んでいた。

「……来雪大丈夫かしら……」

一週間も経っているのに未だに心配している霊夢。

保護者として来雪と暮らしてきた分、一人になって若干寂しく思っていた。

霊夢が寂しがっているその頃、その来雪はと言うと……

紅魔館のレミリアの部屋

「レミちゃん、紅茶淹れてきたよ」

「ありがとう来雪」

来雪はメイド服姿でレミリアの紅茶を持ってきた。

「ご賞味あれ」

「ええ…頂きたくわ」

レミリアが来雪の淹れた紅茶を一口飲んだ。

「ブフウウウー！」

盛大に吹き出した。

「マツズツ！」

「ええ!?!また!?!」

何故か分らないが、来雪の淹れる紅茶は毎度クソマズだった。

「えええ…咲夜ちゃんの言われた通りに淹れたのに…」

来雪は咲夜の事も咲夜ちゃんと呼んでいる。

「………咲夜」

「はい、お嬢様」

レミリアが咲夜を呼ぶと、一瞬で咲夜がレミリアの隣に立っていた。

「来雪が淹れた紅茶…飲んでみなさい」

「では失礼して…」

咲夜が来雪の紅茶を飲んだ。

「………マズツ」

「咲夜ちゃんまで！咲夜ちゃんの言われた通りに淹れたよ！」

「それは本当かしら咲夜？」

「はい、1から順に丁寧に教えました…教えたのですが…」

咲夜も不思議に思っていた。

来雪は料理は出来る、霊夢の所に居たときは交代で料理を作っていたからだ。

だが何故だが紅茶だけはクソマズになってしまふのだ。

「ううう…何で紅茶だけ……」

「不思議ねえ……」

「不思議ねえ…じゃないわよ！何で料理は美味しいのに紅茶はクソマズなのよ！」

「クソマズ……そこまで言わなくても…レミちゃん…」

レミアの言葉に来雪は涙を流した。

紅魔館は今日も平和？であった。

ズズズツ

「ハア…」

何度も言うが霊夢はお茶を飲んでいた。

「……暇ねえ…誰か来ないかしら」

今までの霊夢なら絶対に言わない言葉だが、来雪と過ごしている内に変わったのだから。

そこにお客がやって来る。

「霊夢さ〜ん!」

「ん? あら凜じゃない、いらつしやい」

その少女は来栖凜くるすりん、人里に住んでいる何の変哲もない町娘である。

来雪が幻想入りする前に妖怪に襲われていた所を助け、それ以来霊夢と仲良くなり偶にこうして博麗神社まで来るのだ。

「あなたまた一人で来たの? 危ないから止めなさいって毎回言ってるでしょ…妖怪に襲われたらどうするのよ」

「大丈夫ですよ! 霊夢さんの作ってくれた御守りがあるので!」

凜の手には霊夢お手性の御守りが握られていた。

「全く…それがあるからって安心してちゃだめよ? 何時までも効力を発揮してる訳じゃないんだから」

「心配性ですね霊夢さんは…あつこれお兄ちゃんから」

凜はお茶菓子差し入れる。

「お兄ちゃんが『何時も妹と仲良くしてくれてありがとうございます』って」

「別に良いのに：全く：まあありがと：折角持つてきてくれたんだからありがたく頂きたくわ、今お茶淹れるからあなたもどう？」

「えっ？良いんですか？ありがとうございます！」

霊夢と凜はその後お茶とお茶菓子を頂きながら他愛もない話をした。

「あつそうだ霊夢さん！この前の異変解決お疲れ様でした！いきなり空が真つ赤になつて、人里でも大騒ぎでした」

「正直な話、あれは私一人が解決した訳じゃないのよねえ」

「てことは魔理沙さんと一緒にですか？」

「まあ魔理沙もいたけど、もう一人居たのよ」

「えっ？魔理沙さん以外に居ましたっけ？」

凜は首を傾げた。

「最近幻想入りした子でね、園田来雪って言う女の子よ：歳はあなたと変わらないんじゃないかしら？見た感じだけ」

「へえ、園田来雪さんかあ：会ってみたいなあ」

「そのうち会わせてあげるわ」

「ホントですか？約束ですよ！」

「はいはい」

「あつ…霊夢さんごめんなさい…この後用事があるので此処で帰らせて貰いますね」
凜は申し訳無きそうに立ち上がる。

「ええ、気をつけて変えるのよ？寄り道しないように」

「お兄ちゃんと同じこと言わないで下さいよ！分かってます！それじゃ霊夢さんまた今度！絶対会わせて下さいよ！」

「分かったわよ…気をつけてね」

凜は博麗神社を出て、帰っていった。

「わざわざ人里から此処まで来てくれるなんてねえ…大丈夫かしら……」

凜は人里に向けて歩っていた。

「霊夢さんやっぱり格好良いなあ…私もあんな風になりたいなあ」

凜にとつて、博麗霊夢は憧れの存在だった。

妖怪から助けてもらう前は皆から聞いた話しか知らなかった。

博麗の巫女という存在は、自分達とは違う存在…そう周りの大人達は言うが、実際に話してみてもそれは間違いであることを知った。

博麗霊夢は自分達と同じ人間である。

なんの感情もない存在では無かった。

だからこそ凜は話してみたいと思い、人里から離れた博麗神社まで通うようになった。

次第に凜は博麗霊夢という人間を好きになり、そして憧れるようになったのだ。

「最近の霊夢さん前より明るくなつた様な…園田来雪さんつて人と会つたからかな？…私も早く会いたいなあ」

カチャカチャ

「うん？」

凜は何かを蹴飛ばしてしまった。

そしてその蹴飛ばしたものを拾った。

「なにこれ？…箱？」

その箱には凜が読めない言語でこう書かれていた。

ENIGMA

凜が拾ったのはただの箱では無く、一度使えばその強大な力で人を魅了する魔性の小箱、ガイアメモリである。

そしてそのメモリは謎の記憶が内包されたエニグマメモリだった。

そんなことは露知らず、凜はエニグマメモリを見つめている。

「変な形の箱…誰かの落とし物かな？」

ガサガサ

「ツ!？」

そう呟いて居ると、茂みの中から妖怪が現れた。

「ヒツ妖怪ツ!!」

凜は人里まで走る。

だが凜を餌と見た妖怪の方が早く、凜は呆気なく捕まってしまった。

「イヤ…イヤ…助けて…霊夢さん…嫌アアアアアアアア！」

しかし凜の思いは届かず、凜はその妖怪に殺されてしまった。

そして運命の悪戯か、そんな凜に魔性エニグマメモリの小箱が反応した。

【ENIGMA!】

その様子を見ていた者達があった。

それは黒服を来た男女だった。

「実験は成功ね」

「良いのか姉貴…あのメモリボスから貰ったメモリなんだろう？」

「良いのよ…私にはあのメモリは使えないし…それに私にはこの子があるしね」

女は懐からCELLと書かれたメモリを取り出す。

「姉貴が良いなら俺は別に良いんだがよ…んでこの後どうすんだ？エニグマの様子でも見てんのか？」

「まさか…少し引つ掻き回して貰って誘き寄せるのよ」

「誘き寄せる？…誰を？」

「馬鹿ね、来雪と博麗霊夢に決まってるでしょ？あの子…博麗霊夢の知人らしいし…きつと面白い事になるわよ？」

女は邪悪な笑みを浮かべながら言った。

「出た出た…姉貴ったらホント性格悪いよなあ…いい死に方しねえぜ？」

「あら…あなたは不満？」

「冗談…姉貴が喜んでくれるなら俺はそれを実行するのみよ」

「だと思つた…これだから私はあなたが好きなのよ」

「俺も姉貴の事大好きだぜ」

女は男の頭を撫でながら言った。

「さて…じゃあ見に行くのでしょうか」

「あいよ姉貴」

【CELL!】

【TYRANT!】

二人はいつの間にか腰に巻いたガイアドライバーREXにメモリを挿し込んだ。

女は仮面ライダーWの後輩にあたる仮面ライダーエグゼイドが戦ったコラボスバグスターに似た姿になった。

違いといえばコラボスバグスターより生物感があり、色が白いことだろう。

男は筋肉質の大男の姿なのだが腕が異常に発達しており、巨大な鋭い爪を持った姿になった。

まるでその姿は某ホラーゲームに登場する生物兵器の大男に似ている。

女は細胞の記憶の怪物^{超人}、セル・ドーパントに変身し、男は暴君の記憶の怪物^{超人}、タイラント・ドーパントに変身した。

「ああ…楽しみねえ…フッフ」

セル・ドーパントは不敵に笑う。

その頃、人里に買い物に来ていた咲夜と来雪。

紅茶騒動の後、今夜の料理に使う食材の買い出しに赴いていた。

「ごめん咲夜ちゃん…紅茶上手に淹れられなくて…」

「まだ言ってるの？ 済んだことは良いわよ…それより今夜の献立を考えないと」

「えっと…如何にしてピーマンを分からなくするか…だっけ？…レミちゃんってピーマ

ンが苦手なんだね…フランちゃんは大丈夫なのに」

「お嬢様は舌が子供だから…」

「500年近く生きてるのにね…」

「それは言わない」

二人して途方も無い話をしながら笑っていると、辺りが騒がしくなってきた。

「何かしら？」

「急に騒がしくなってきたね…咲夜ちゃん、ちよつと私見てくる！」

「ちよつと！来雪!？」

来雪は何かを感じていた。

「待ちなさいよ！どうしたのよ！」

「この感覚…覚えがあるの…これは…メモリが近くにある」

「ッ!？」

「それに…メモリ…ドーパントが人里に近付いてる」

咲夜はドーパントという言葉を聞き、状況を理解した。

「なるほど…行かなきゃいけないって訳ね」

「うん…咲夜ちゃんは紅魔館に…」

「何言ってるのよ…家族を置いて行けるわけないでしょ？もしこのまま帰ったらお嬢様に怒られてしまうもの…私も行くわ」

「咲夜ちゃん…でもドーパント相手に…」

「…その時はこれを使うまでよ」

咲夜がポケットから取り出したのは、チャーチメモリだった。

「咲夜ちゃん」

「今でもこのメモリは嫌いよ…でも適合率はこれ以外に高いやつは無かった…まあ使う気は無いけど」

「出来ればそうして欲しいな…美鈴さんや小悪魔さんみたいに影響が無ければ良いんだけどね」

「まあいざというときの為よ…行きましょう」

「うん」

人里の入口に、謎の存在が浮遊していた。

姿形すら言葉では表せない：兎に角謎の存在が人里に入ろうとしていた。

「妖怪だ！」

「妖怪が来たぞ！」

本来、人里に妖怪が入るには通行手形が必要である。

これによりルーミアや紅魔館組の妖怪は人里に入ることを許可されている。

しかしこの妖怪は通行手形を持っておらず、なおかつ人里に無断で入ろうとしていた。

人里の自警団がその謎の存在を追い返そうと奮闘するが、謎の存在は特に攻撃をしな
い。

逆に自警団の攻撃は謎の存在に効いてすらなかった。

「大丈夫ですか!？」

「あつあんた達は紅魔館の……」

「此処は私達が対処するから離れなさい！」

咲夜の言葉に自警団の人間達は人里内に避難した。

「……………」

謎の存在は何も言わずにただ浮遊していた。

「来雪…どう?」

「ドーパントであることは間違いない…でもこんなドーパント見たことない…フランちゃんや小悪魔さん、咲夜ちゃんが持つてるメモリと同じ私の知らないメモリのドーパントみたい」

「幻想郷にもメモリがある事は聞かされてたけど…あなた以外でこんなにも早く見るとはね」

「……………」

来雪と咲夜は謎のドーパントの様子を伺う。

「…何も…してこない…?」

「…何が目的なのかしら?」

「……………」

謎のドーパントは人里を見ていた。

「……………」

「今…喋った」

「何かを訴えてる?」

「…かえ…り…たい…」

謎のドーパントは帰りたいと呟いていた。

「帰りたい…人里に？」

「このドーパント…まさか人間？」

「人間が人里から出ることってあるの？」

「私に聞かないで頂戴…あなたの方が幻想郷に長くいるでしょ？」

「そんなこと言っても…」

そこにある人物が飛んできた。

「来雪！ 咲夜！」

「ツ！ 霊夢！」

「霊夢…あなたどうして？」

「変な胸騒ぎがしたから飛んできたのよ…それで…ドーパントよね？」

「うん…帰りたいってずっと呟いてるんだ」

「帰りたい？」

謎のドーパントは霊夢を見ると、何かを呟き始める。

「…これ…さ」

「ん？」

「…これ…いむ…さ…ん…」

「ツ!？」

謎のドーパントは今度は帰りたではなく、霊夢さんと呟いていた。

「霊夢さん?……霊夢……このドーパントと知り合い?」

咲夜が霊夢に聞く。

「……………」

霊夢は無言だった。

「霊夢?」

来雪は霊夢の反応に困惑した。

何故なら霊夢は少しだけ震えていたからだ。

「……まさか……凍?……」

「……れ……いむ……さ……ん……」

霊夢は謎のドーパントの正体を見破った。

それは先程まで一緒にお茶を飲みながら楽しく話していた町娘、来栖凜だったのだ。

「何で……何であなたがドーパントになってるのよ……凜!」

「凜?……霊夢……凜って?」

「この子の名前よ……来栖凜……人里に住む普通の町娘よ……あなたが幻想入りする少し前に妖怪から助けてね……それ以来私の所に遊びに来るようになった子よ」

「……………」

謎のドーパント…エニグマ・ドーパントは霊夢の名前を呟く事しか出来なかった。

「れ……いむ……さん……」

「凜……メモリを渡しなさい…今なら間に合うわ…」

霊夢はエニグマ・ドーパントに近づきメモリを渡すように言った。

「………」

「…メモリを渡して……じゃないと…私はあなたを退治しなきゃいけない…」
霊夢は訴える。

しかしエニグマ・ドーパントは無反応だった。

「ツ！お願いよ凜!!…メモリを渡して!!」

「………」

エニグマ・ドーパントは無言だった。

するとそこに乱入してきた者達があった。

「無理に決まってるでしょ…だって…自分がドーパントだって理解してないんだもの」
『ツ!?!』

そこに現れたのはガイドドライバーREXを付けた2体のドーパントだった。

「ドーパント!?!」

「あれは…ガイドドライバーREX!?!…てことは…幹部級!?!」

「はあい…初めましてね…訳あって本名は言えないけど…私はセル・ドーパント…この子はタイラント・ドーパントよ」

「セルにタイラント…細胞に暴君の記憶…また聞いたことないメモリだ」

「そんなことはどうでもいいわよ！あんた達ね…凜をこんな姿にしたのわ！」

霊夢はキレていた。

自分の知人をドーパントにされて怒らない訳が無い。

「それは誤解よ…私達は彼女に生きるすべを与えただけよ？」

「よく言うぜ…そう仕向けたのは他でもねえ姉貴じゃねえか」

「…フーン！」

セル・ドーパントがタイラント・ドーパントの足を踏み付ける。

「イツてええ!!ひでえよ姉貴！ドーパントの力で踏み付けるかよ普通！」

「黙ってなさい…さてと…バラされちゃったけど確かに彼女がドーパントになった原因を作ったのは私よ…でも良いの？その子からメモリを回収して？」

「…どういふことよ？」

「その子はね…既に死んでるのよ」

『ツ!?!』

セル・ドーパントは笑みを浮かべながら言った。

「道中で妖怪に切り殺されたのよ……その反動でエニグマメモリを挿し込んで、自分の目を遂行する為に動いている……彼女の場合は帰る事かしら？」

「帰る……事」

霊夢が呟いた。

「にしても……つまらないわねえ……折角ドーパントになったんだからその力を振るえば良いのに……エニグマは下手をすればボスのメモリと同等の力を持つメモリなのに勿体無いわねえ」

つまらない……セル・ドーパントはつまらないと言った。

人が死に、死んでも自分の居場所に帰りたいたいと思ったエニグマ・ドーパントをつまらないと言ったのだ。

「巫山戯るなあああ!!」

【T—R—E—X—!】

キュピーン

来雪はTレックス・ドーパントに変身し、セル・ドーパントに突進した。

「オラよ!」

セル・ドーパントの前にタイラント・ドーパントが立ち、Tレックス・ドーパントをたつた一振りで吹き飛ばす。

「うわあああ！」

ドユウウウウン

その一振りで変身が解除されてしまった。

「おいおいおい……いくら来雪でも姉貴に手を出すとか……死にてえ様だな？」

「やめなさい……殺したら私達がボスに殺されるわよ」

「けどよ姉貴！」

「いいから……良い子だから大人しくしてて頂戴」

「……ケツ」

タイラント・ドーパントはセル・ドーパントの後ろに下がった。

「来雪……その調子でどんどん成長しなさい……あなたが成長することを私達は望んでいる……これはその第一歩ってやつよ」

セル・ドーパントがエニグマ・ドーパントに手を向ける。

セル・ドーパントの掌から謎の粒子が射出され、エニグマ・ドーパントを包み込んだ。

「グッ……グオオオオオオオオオオ!!」

エニグマ・ドーパントは突然凶暴化した。

「ツ！凜！」

「あなた何を！」

「セルの力で細胞を送り込んだのよ……対象を凶暴化させる細胞をね？博麗霊夢……あなたの知人は既に死んでる……だったら冥府に送ってあげるのも……巫女の務めじゃないかしら？」

「ツ……あんた達!!」

「ウフフ……精々楽しませてよね？……来雪……ボスも待つてるわよ？……あなたが成長するのを……行くわよ」

「おうよ！」

セル・ドーパントは背中にドラゴンの羽を生やした。

「待ちなさい！」

「オラあ！」

咲夜が止めようとするがタイラント・ドーパントが怪力で地面を抉り、土煙をあげる。

「エニグマの相手をしてなさい……最も……エニグマを倒すことは出来ないけどね？」

「クツ」

セル・ドーパントとタイラント・ドーパントは姿を消した。

「グオオオオオオ！」

エニグマ・ドーパントが3人に襲い掛かる。

「やめなさい凜！お願いよ凜！」

「ウアアアアア！」

霊夢は必死に呼び掛ける。

エニグマ・ドーパントの攻撃を躲しつつ呼びかけ続けた。

「凜！もうやめなさい！私はあなたとは戦いたくない！」

「霊夢！」

来雪と咲夜がメモリを挿し込もうとする。

「手を出さないで！」

「ツ！でも！」

「私にやらせて頂戴…お願いよ」

「霊夢…」

「来雪…：…此処は霊夢に任せましょう」

「…：…うん」

来雪と咲夜は下がった。

「…：…ッ」

霊夢はエニグマ・ドーパントを見つめる。

「グツウウウウウ」

「…凜…」

霊夢はエニグマ・ドーパントに向かって歩き出す。

「帰りましょ…あなたが居るべき場所に」

「ウウウウウー！」

ズバツ

「ツ……」

霊夢はエニグマ・ドーパントに肩を切り裂かれる。

「霊夢……」

「大丈夫よ…来雪…私を信じなさい」

霊夢は構わずエニグマ・ドーパントに近付く。

「怖かったでしょ？…痛かったでしょ？…凜…ごめんなさい…あの時…私があなたを送り届けてれば良かった…ごめんなさい…凜」

「ウツ……ウウウ……」

エニグマ・ドーパントは動きを止めた。

「帰りましょ…凜」

霊夢はエニグマ・ドーパントを抱き締めた。

「……………れ…いむ…さ…ん…」

ドユウウウウン

エニグマ・ドーパントからエニグマメモリが出てきた。

「…あ…りが…と…う…霊夢…さん…」

エニグマメモリが抜けた事でエニグマ・ドーパントは元の来栖凜の姿に戻った。

だがその姿は目を覆いたくなるほど酷かった。

肩から腰まで斜めに裂かれた同体からは夥しい程の血が出ており、その顔は恐怖に怯え涙を流した状態だった。

そしてその手には霊夢が作った御守りを握り締めていた。

「凜……………ごめんね……………ごめんね…」

霊夢は凜の亡骸を抱き締めた。

そしてその瞳からは涙を流していた。

「霊夢……………」

「……………」

そして凜の亡骸はたった一人の家族である兄、くるすあると来栖有斗の元に帰された。

有斗は酷く悲しんだ。

たった一人の家族が妖怪によって無惨にも殺されたのだから無理もなかった。有斗は凜を送り届けた霊夢に掴みかかる。

何故助けてくれなかったのか……どうして一緒にいてくれなかったのか等霊夢を罵倒し続けた。

来雪が止めに入ろうとするが、それを咲夜が止める。

霊夢はただ、有斗からの罵倒を聞くことしか出来なかったからだ。

罵倒し続けた有斗だったが、冷静になったのか霊夢に謝罪をし、凜の亡骸にしがみつき泣き叫んだ。

その様子を来雪と咲夜、そして霊夢はただ見守る事しか出来なかった。

Cの事件／新たな仲間は犬妖怪？

エニグマ・ドーパントの一件があつて数日。

人里、人通りの少ない裏通りにて二人の男女が話していた。

「ホントなんだろうな？……これがあれば俺は超人に……」

「はい……ただこれは安い買い物ではありません……良くご覧になって、じっくり考えて下さい」

黒服の女が持つのは複数のガイアメモリが収納されているトランクで、男はその複数のガイアメモリを一つずつ手に取り見定めている。

そして考えに考え抜いた結果、男はC O C K R O A C Hと書かれたメモリに決めた。

「お客様お目が高い……それは量産型で他のメモリよりもお安い値段設定の割に性能面が良く、大変人気の商品になっております……そちらに致しますか？」

「……ああ……これにする」

「毎度有難うございます……では手続きの前に再度確認を……購入後は返品等出来ませんので良くお考えになり購入してください……そのメモリは他のメモリよりはお安いと言えど、決して安い買い物では御座いません……本当にそちらで宜しいですね？」

「……ああ」

女は笑みを浮かべた。

「畏まりました…ではお支払いは前払いですので…今回は初めての購入ということですので…特別に〇〇万円でご提供させて頂きます」

「…良いのか？」

「ええ…今後ともご鼻屑に」

女は笑みを浮かべながら言った。

男はメモリを購入、生体手術を施した後にその場を去った。

「……」

女は無言で男が去った方向を見ていた。

そこに一人の女がやって来た。

「売れた様ね…」

「ああ村瀬さん…ええ…コックローチのメモリが先程売れました」

その女の名は村瀬着火^{むらせつき}。

ガイアメモリを幻想郷に流通させる組織・ミュージアム（仮）に所属する売人達を束ねるリーダー格の一人である。

「量産化出来る上に性能面も良い…その上本物のゴキブリ同様生命力の高さからユ一

ザーから人気を勝ち取ってるメモリ…ほんとに実用性が高いメモリよねえ」

「ええ…ゴキブリは苦手ですが…おすすぬ商品ですからね」

「さてと…それじゃ玖伊那ちゃん…メモリをじゃんじゃん売って頂戴ね」

着火は売人の女、有国玖伊那あるくにくいなに笑い掛けながら言った。

「分かっていきます…幻想郷に住まう人々の発展の為に…全力を尽くすつもりです…まあ私は獣人なのですが…」

玖伊那は頭に付いている獣耳を動かした。

「ハア…ハア…ハア…ハア！」

「重心が乱れてますよ…突きも甘い！」

紅魔館の庭で来雪は美鈴に稽古をつけて貰っていた。

「はい！」

「良い返事ですが型がまだなっていない！もう3セットです！」

「は、はいく!!」

来雪は美鈴の言われるまま型の稽古をする。

「美鈴ったら張り切ってるわね」

「それ程良い弟子が出来て嬉しいんじゃないかしら？」

その光景をレミリアとパチュリーがテラスで紅茶を飲みながら見学していた。

「それにしても…何で来雪の紅茶はクソマズなのかしら…」

レミリアは咲夜が淹れた紅茶を飲みながら呟く。

「クッキーとかお菓子は美味しいのよね」

パチュリーは来雪の作ったクッキーを一口齧って呟く。

「はい！今日はこの辺にしましょうか」

「ハア…ハア…ハア…はい…ありがとうございます…ハア…ございました…ハア」

来雪は尻もちついた状態で美鈴に礼を言った。

そこにフランがやって来た。

「来雪お姉さんお疲れ様！」

フランは来雪にタオルを渡す。

「ハア…ありがとうフランちゃん」

「美鈴もお疲れ様！」

「いえ私はそんなに疲れてませんよ妹様、ですがありがとうございます」

美鈴は微笑みながら言った。

「うひゃ～美鈴さん疲れてないんですか？…私もうクタクタですよ」

「私は妖怪ですからね…人間の来雪さんより頑丈かつ経験が違いますから」

「来雪く美鈴くフランく終わったならお茶にしましょう」

レミリアが3人を呼んだ。

「は〜い」

「分かりましたお嬢様」

「今日のおやつ何〜?」

「あつ今日のおやつは私が作ったクッキーだよ」

「やった! 来雪お姉さんのクッキー美味しいから楽しみ!」

来雪の答えにフランは喜んでいた。

「…咲夜、あなたも此処に座ってお茶にしましょう?」

「はいお嬢様…ではお言葉に甘えて」

四人もテラス席に付きお茶を楽しむことにした。

「ああ! 酷い私は仲間外れですかあ!?!」

そこに新聞を持った小悪魔がやって来た。

「そんな訳無いでしょ?…こゝも早く来なさい」

「流石はパチュリー様」

小悪魔は笑いながら席に付く。

「こうして家族全員でのお茶は最高ね」

レミリアが呟く。

「そうですね〜…あつそうそうこれ見てくださいよ」

小悪魔がみんなに新聞の記事を見せた。

「これ…射命丸さんの？」

「そうなの…でこの記事なんだけど…」

小悪魔が見せたのは人里で起こっている事件の記事だった。

「人里で変死体！この短期間で既に4件目？…変死体ねえ」

レミリアが記事を読んだ。

「射命丸ちゃんから聞いたんですけど〜…その死体…青い粘液の様な物で顔を覆われていたらしいですよ？」

小悪魔が来雪を見ながら言った。

「来雪さん…これ…ドーパントによる事件じゃないですか？」

「…小悪魔さんの言う通り…似たような能力を持ったドーパントは幾つか存在する…でも実際に見た訳じゃないから断定できないんだよね」

「この前のエニグマ事件といい…ガイアメモリによる被害が増えてきてるわね」

咲夜は数日前のエニグマ・ドーパントの件を思い出す。

「…そういえば霊夢は大丈夫なの？咲夜から聞いたけど知人が亡くなったって」

フランは霊夢の心配をした。

「うん…かなり参つてたと思う…：返事も上の空だったし…：まあ魔理沙さんがフオロ―してくれてたけど…：やっぱり心配だな」

来雪は暗い顔しながら言った。

「来雪さん…」

「…兎に角…：私この事件を調べてみようと思う…：ドーパントによるものなら止めたいし…：これ以上悪事にメモリの力を使われたくないから」

「…そう…：分かったわ…：美鈴…：あなたも来雪に協力してあげなさい」

レミリアが美鈴に言った。

「最初からそのつもりでした…：お嬢様」

「流石美鈴ね」

「すみません美鈴さん…：私の修行を見てくれるのにメモリ探しまで…」

「気にする必要はありませんよ来雪さん…：私がやりたいと思っただけです」

来雪の反応に美鈴は微笑みながら言う。

「美鈴が居るから大丈夫だとは思うけど…：来雪…：気をつけなさいよ」

「うん！」

レミリアは来雪にそう言った後無言で美鈴を見つめる。

それに答えるかの様に美鈴も頷いた。

(もし来雪が無茶しそうになったら止めなさい)

(分かりましたお嬢様)

二人は目で会話していたのだ。

長年共に暮らしている家族としての信頼でこういった事が出来るみだいである。

「ん？レミちゃんと美鈴さん……何で見つめ合ってるの？」

「気にする事無いわ来雪」

「ええ……来雪さんにはまだ早いですかね」

「ええ！教えてくれても良いじゃないですか！」

来雪の反応に皆が笑い出した。

いつの間にか来雪も紅魔館の一員としての役割を得たみたいだった。

場所は変わり、紅魔館近くの森の中。

ポツンとある小さな家から一人の少女が出てきた。

その少女の頭と腰には犬耳と尻尾が生えていた。

「クンクン……嫌な匂い……何かが起こりそうだね」

犬耳少女の手には紫色のメモリが握られていた。

人里にて来雪と美鈴は聞き込みをしていた。

だがどれもこれも信憑性の薄いものばかりで調査は難攻していた。

「ハア…全然手がかりが見当たらない…」

「仕方ありませんよ…ガイアメモリが事件に関係あるかどうかすら謎なのですから…」

「でも顔を青い粘液で覆われた死体って…」

「もしかしたらそういう能力を持った何者かがドーパントの事件の様に見せている…という可能性もありますし…」

「何者かって？…あまりドーパントとかメモリとか認知されていないんですよ？何でメモリの事件にする必要があるんです？」

「……さあ？」

来雪の間に美鈴は答えられなかった。

「ハア…」

溜息をつく来雪。

「クンクン…クンクン…クンクン」

「ん？」

来雪の近くに犬耳少女が匂いを嗅ぎながら近付いてきた。

「近いなあ…クンクン…クンクン」

「何?…匂いを嗅いでる?」

「この人?…段々来雪さんに近付いてませんか?」

「え?」

「クンクン…クンクン」

そして犬耳少女は遂に来雪の足元に鼻を近付けた。

「ヒッ」

来雪は若干引いていた。

「クンクン…ん?」

犬耳少女と来雪の目が合った。

「えつと…何か?」

「クンクン…匂いの発信源は君だね」

犬耳少女の答えに来雪は顔を青くした。

「匂いの…発信源…美鈴さん…私…臭いですか?」

来雪が涙目で美鈴に聞いた。

「えっ!?イヤイヤ…紅魔館出る前にお風呂にも入ってますし!…汗臭くは無い…はず

…」

「目を逸らさないで下さいよー！」

来雪は泣きながら美鈴に怒鳴った。

「あつ違う違う！別に君が臭いとかそんなんじゃない！私からしたら人間の匂いって多少の違いくらいで殆ど同じっていうか…じゃなくて！ああまた私やつちやつたあ！ごめんなさい！」

犬耳少女は慌てて訂正した。

「突然ごめんなさい…人里に入った辺りからこれと同じ匂いを感じたから追跡してたんだ」

犬耳少女は懐からガイアメモリを取り出した。

『ツー！』

二人はガイアメモリを見て反応した。

「やっぱりこれのこと知ってるんだね…これを知ってる人をずっと探してたんだ」

「あなた…何処でそれを？」

来雪が犬耳少女に問う。

「一年以上かな？…私が住んでる森で落ちてるのを拾ったら、これが私の二の腕に刺さって凄い力をくれたんだよね」

犬耳少女はガイアメモリについて語る。

これを使つてから弱小妖怪だった自分がそこそこ強くなったこと。変身してなくても嗅覚が更に良くなったこと等等。

「だからこれを知つてる人を探してたの……これが何なのか私も知りたかつたし」
「……」

来雪は犬耳少女の話を聞いて考えていた。

（変身してないのに能力が向上した……もしかしてハイドープに？……でもメモリの毒素にやられてる様子もない……うゝん）

「あなた……それを使つて何とも無かつたんですか？」

美鈴が犬耳少女に聞いた。

「えっ？何ともつて？」

「えつと……それはガイアメモリって言って……」

今度は来雪が語りだした。

外の世界にある風の街風都で流通するガイアメモリの事を。

「へえ……そつか……危険な代物なんだね……これ」

犬耳少女はガイアメモリを見つめながら言った。

「でもあなたは毒素にやられてる様子がない……寧ろその力を使いこなしてる節まである……」

「こう言っただけなんですけど……あなたはそのメモリを手にしてこれまで何をしましたか？」

美鈴が犬耳少女に聞き出す。

「え？……うーん……私はさつきも言った通りこれを使うまでは弱小妖怪だったんだ……妖怪の世界は何かと物騒でさ……弱肉強食で弱い奴から死んでいく……私もその枠組みだった……これを使ってから枠組みから外れてね……護身用として使ってたんだ……使ってから私も強くなってる……正直な話……今これを手放せって言われたら……うーん……まあでも危険な代物だし……知ってる人が持ってたほうが安全だよね……うーん」

犬耳少女はガイアメモリを来雪に渡そうとする。

「え？？」

「これはあなたが持っているべき物なんですよ？……じゃあ返すよ……今まで借りててごめんなさいね」

「でも……」

来雪は考えていた。

犬耳少女はこのメモリに選ばれている。

このメモリは彼女を主と認めているのだ。

「……うーん……それはあなたが持ってる」

「えっ？でもこれは……」

「その子はあなたを選んだ……ましてや毒素に影響されて凶暴化してないのにその子をあなたから引き剥がすのはその子に悪いかなって……私はメモリを悪い事に使わなきゃそれでいい……それにその子はあなたと一緒に居たがってる……そんな気がするんだ」

「……」

犬耳少女はメモリを見つめる。

そしてメモリを見つめて微笑んだ。

「ありがとう……えっと……」

「あっ私は園田来雪って言います……こつちが私の師匠で家族の紅美鈴さん」

「紅美鈴です……宜しくお願いします」

「来雪さんに美鈴さん……うん……私は犬飼紗綾……見ての通り犬妖怪だよ……宜しく」

来雪と紗綾は握手した。

「あっそうだ！」

来雪が何かを閃いた。

「うん？」

「紗綾さん！あなたにお願いが！」

来雪達一行に新たな仲間、犬妖怪の犬飼紗綾が加わった。

Kの雄叫び／番犬の超人

来雪は紗綾に事情を説明した。

「青い粘液で顔を覆われた死体……物騒ですね」

「うん……もしかしたらそれを引き起こしているのがドーパントの可能性があるんだ……紗綾さんの嗅覚ならメモリを追えるんじゃないかなって」

「なるほど……分かりました……出来るか分かりませんがやってみます」

紗綾はそう言うともメモリを嗅いだ。

「メモリの匂いって独特で……殆ど同じ匂いをしてるんですよ……匂いを嗅いでて思いました」

「メモリに匂いがある事自体驚きですよ」

紗綾の感想に美鈴が苦笑いする。

「クンクン……クンクン……クンクン……ん？」

紗綾があることに反応する。

「どうしたんですか紗綾さん？」

「メモリの匂いって訳じゃないんですけど……この匂い……恐怖に怯えてる匂い」

「恐怖に怯えてる?」

「何でそんな事が…」

来雪と美鈴は紗綾の嗅覚に驚いていた。

「このメモリを使つてから嗅覚が更に良くなつてですね、人の感情や体調が匂いで分かるようになったんですよ…それより早く行きましよう!」

紗綾の嗅覚を頼りに二人は着いて行つた。

「ハア…ハア…ハア…」

一人の男が何かから逃げていた。

「何なんだよあれ…ハア…早く逃げねえと!」

男はその場から離れようとする。

しかし

バツ

男の目の前にゴキブリの様な怪物が現れた。

「ワアアアアアアア!」

男は腰を抜かした。

「逃がすと思つてんのか?」

「何なんだよお前！俺が何したってんだよ!？」

「お前は俺を怒らせた…だから消す」

ゴキブリの怪物は右手で男の頭を掴んだ。

「やめッ!!」

「フッ」

グチャアア

右手から青い粘液が吹き出し男の顔を覆った。

「フッフ…俺を怒らせた罰だ」

ゴキブリの怪物はその場から立ち去ろうとした。

「シヤアッ！」

「ッ!？」

ゴキブリの怪物は突如飛んできた斬撃を避けた。

「避けられましたか」

そこに紗綾達が駆け付けた。

「テメエ…この俺に攻撃とはなあ」

「コックローチ・ドーパント…今までの事件はコックローチの能力によるものだったんだ」

「知られたからには……此処で殺す」

ゴキブリの怪物、コックローチ・ドーパントは持ち前のスピードで来雪達に接近した。
「来雪さん！」

美鈴が来雪の前に出て、コックローチ・ドーパントの腕を掴んだ。

「ツ!?!俺の攻撃を……」

「幾ら動きが速かろうと……気を探れば防ぐのは簡単です」

「チツ！」

コックローチ・ドーパントは凄まじいスピードで連続パンチを繰り出す。

だが美鈴はそのパンチを悉く防いだ。

「無駄です……ドーパントになってもこの程度では私は倒せませんよ」

「どいつもこいつも俺をバカにしゃがって！」

コックローチ・ドーパントは距離を取った。

「ブツ殺す!!」

コックローチ・ドーパントは青い粘液を弾丸の様に飛ばす。

「やらせない！」

【ICE AGE!】

キュピーン

来雪はメモリを左掌に挿し込み、アイスエイジ・ドーパントになる。

「ハアツ!!」

アイスエイジ・ドーパントの冷気で粘液弾は凍結し、その場に落ちた。

「クソがアア!」

「フツ!」

美鈴がすかさずコックローチ・ドーパントに蹴りを入れた。

「グツ…クソツ!」

コックローチ・ドーパントは羽を広げその場から飛び逃走を凶った。

「逃がすと思つて…」

「待つて下さい美鈴さん」

後を追おうとする美鈴を紗綾が止める。

「紗綾さん?」

「私が追跡します」

紗綾がメモリを取り出す。

【KERBEROS!】

紗綾がメモリのボタンを押し、ガイアメモリからガイアウイスパーが鳴る。
キュピーン

紗綾は右太腿の生体コネクタにメモリを挿し込んだ。

挿し込んだ太腿から紫色の霧が発生し、肉体を作り上げる。

頭部と両肩が犬の頭部を模しており腕をチェーンが巻き付き、脚には脚枷が付いた姿だった。

紗綾は地獄の番犬ケルベロスの記憶の怪物、超人ケルベロス・ドープアントに変身した。

「ケルベロス…また私が知らないドープアント」

「では行つてきますね」

ケルベロス・ドープアントはその場から跳び、コックローチ・ドープアントの後を追った。

「クソクソクソ！クソが！」

コックローチ・ドープアントは悪態をつきながら飛んでいる。

既に人里から離れていた。

「あの三人は必ず殺す…まずは対策を——」

ジャララ

コックローチ・ドーパントの足にチェーンが巻き付いた。

「なッ!?何だア!？」

チェーンの先にはケルベロス・ドーパントが居た。

「思ったより離れていましたね…正直驚きですよ」

「テメエ!?!…まさかあの犬女!?!」

「燃えなさい!」

ケルベロス・ドーパントのチェーンから炎が立ち昇った。

そしてそのチェーンに繋がれているコックローチ・ドーパントに炎が燃え移った。

「アチャアアアアアア!?!」

炎が羽が燃やされたコックローチ・ドーパントは墜落した。

「さて…ここからが本番ですね」

ザザザ

「グッ…クソ!」

コックローチ・ドーパントは人里から少し離れた森に落ちた。

「鬼ごっこは終わりですよ」

ケルベロス・ドーパントが空から降りてきた。

「ワン公風情が…ブツ殺す!」

「先程からブツ殺すブツ殺すって……小者に見えますよ」

「テメエ…テメエまで俺をバカにスンのかああアア!!」

コックローチ・ドーパントがケルベロス・ドーパントに粘液弾を放った。

「やってる事がさつきと同じですよ」

ケルベロス・ドーパントは難なく躲した。

「それだけなら次は私ですよ!」

ケルベロス・ドーパントは腕のチェーンを伸ばし、鞭のようにコックローチ・ドーパントを叩く。

ズウンズウン

「ガッ!」

コックローチ・ドーパントはチェーンによる攻撃で転がった。

「クソ! 犬女ガア!」

コックローチ・ドーパントは粘液弾を放ちながらケルベロス・ドーパントに向かっていく。

「どうやら戦いにおいては素人ですね…」

ケルベロス・ドーパントは粘液弾を避けながら右手の鉤爪に猛毒エネルギーを溜めた。

「ブツ殺す!!」

「…フツ!」

ケルベロス・ドーパントとコックローチ・ドーパントは互いに攻撃を叩き込んだ。

「…多分人間でしようから教えておきますね…妖怪私達の界限では『ブツ殺す』って言葉は使用しないんですよ…弱肉強食…生きるか死ぬかの世界でそんな事言ったところで無意味ですからね」

「何イ?」

「言っている妖怪が居るとすれば…それは弱小妖怪だけです…元の私のようにね…」

コックローチ・ドーパントの身体が次第に崩れていく。

「ナツ!?!」

「あえて言いますね…ゴキブリ昆虫がケルベロス地獄の番犬に勝てる訳ないでしょう?」

「クソガアアアアアアアア!!!」

ドオオオオン

コックローチ・ドーパントは叫び声を上げながら爆発した。

パキンッ

爆煙が晴れるとそこには人間の男が横たわり、その近くには砕かれたメモリが散乱していた。

「…あっ!?メモリが!」

ドユウウウウン

ケルベロスメモリを体内から取り出した紗綾が顔を青くしながら嘆いた。

「どうしよう…来雪さんに渡さなきゃいけなかったのに…」

紗綾は砕けたコックローチメモリを拾いながら呟いた。

「紗綾さくくん!」

「ヒッ」

そこに美鈴が来雪を背負いながら飛んできた。

「大丈夫ですか?」

「あっ…はい…大丈夫なんですけど…」

来雪の間に紗綾は戸惑いながら答える。

「あの…その…すみません！」

「え？」

「メモリ…壊しちゃいました」

紗綾は砕けたコックローチメモリを来雪に見せた。

「えっ？…メモリブレイク…どうやって？」

「えっと…多分…私の能力が原因かと」

紗綾が顔を青くしながら言った。

「えっと…私は『切り裂く程度の能力』を持ってしまして…メモリを使用する様になってから能力が格段と強くなって…ある程度の物は切り裂ける…様に…すみませんすみません本当にすみません！」

「う…うん…回収出来なかったのは残念だけど…でもこれ以上被害が出ないなら…うん」

来雪は若干元気が無くなった。

「まあまあ…取り敢えずこの人を運びましょう」

美鈴が来雪を慰めながら言った。

「そう…ですね」

来雪達は男を連れて人里に戻ろうとした。

その様子を遠くから見ていた者が居た。

「ありやりや…あのお客さん負けちまった…どうするんで着火さんよ」

男は売人のリーダー格の一人である村瀬着火に尋ねる。

「どうも…どうも…あなたを呼んだからには分かっているでしょ？」

「そりやそうか…じゃあ…殺つちやいます？」

「ええ…データは取れたし…お願いね…昴君」

着火はその男、塔守とうもり 昴すばるに命令した。

「そんじやまあ、さっさと終わらせて酒でも呑みに行きますかね」

昴の額には一本の角が生えていた。

塔守昴の種族は上級妖怪である鬼。

組織では売人をしてきたが、その実績から数ある執行チームのメンバーへと昇格を遂げた存在だった。

昴は一本のメモリを懐から取り出した。

そのメモリには突きつけられる拳銃で『T』が描かれていた。

【TRIGGER!】

「そらよつと」

昴がトリガーメモリを宙に投げる。

キュピーン

そして右掌の生体コネクタにトリガーメモリが挿さり姿が変わる。

青い機械の様な姿に頭部の単眼はスコープ状。

右腕と一体化している専用武器『トリガーマグナム』が際立つ姿。

塔守昴は狙撃手の記憶の怪物^{超人}、トリガー・ドーパントに変身した。

「さてと……」

トリガー・ドーパントはトリガーマグナムの照準を合わせた。

「ターゲット……ロック……そんなじゃ……さようならつと」

ドオオン

トリガーマグナムから青いエネルギー弾が放たれた。

「ツ！二人共伏せて!!」

美鈴が来雪と紗綾に呼び掛ける。

『ッ!?!』

「アアアアアアアアア!?!」

ドオオオオン

エネルギー弾は真つ直ぐ男に向かって放たれ、着弾した。

エネルギー弾を受けた男は木っ端微塵になった。

「狙撃!?!何処から!?!」

紗綾と美鈴が辺りを見渡すが見当たらなかった。

「ほい、お仕事終了」

トリガー・ドーパントはトリガーマグナムを下げながら言った。

「(苦)苦労さま」

「いえいえ…これが執行チームのお仕事ですからねえ」

着火とトリガー・ドーパントはその場から立ち去った。

犯人の男の死亡により、コックローチ・ドーパントが起こした事件は終わった。

Dの襲来／こあの真名

塔守昴はコックローチ・ドーパントを始末し、自身が所属する執行チームのアジトに帰ってきた。

「戻ったぜー！いやあ楽な仕事で助かったわあ」

そこには人間の男女が三人いた。

「お帰りなさい昴さん…それでターゲットは？」

「木っ端微塵ですよヨルさん…あっこれヨルさんにお土産ね」

昴が渡したのはビニール袋だった。

「これは……なるほど」

ビニール袋の中には真つ赤な液体に漬かった塊が入っていた。

「あらあら…そんなものを持って帰ってきて…此処が汚れるじゃない」

「すみませんねえヘルの姐さん…こういうの持ってこないとヨルさんに俺が喰われ兼ね

ないんでねえ」

昴はヘルと呼ばれる女に頭を下げながら言った。

「私わたくしが仲間を喰う訳ないじゃないですか！」

「メモリの副作用が何処まで進んでるか分かったもんじゃないんでねえ…保険ですよ保険」

昴はヘラヘラしながら言った。

「ヨル…落ち着け…昴も煽るな…話が始められねえだろ」

「へいへい…フエンの旦那」

フエンをリーダーとした執行チームアルファAの面々が其々の席に座る。

「それで昴さん…今回の依頼はいくらなんですか?」

「ん?…○○○万円だったか?」

「はあ!?安くないですか!?!」

昴が金額を答えるとヨルは思わず立ち上がった。

「コックローチメモリのデータ収集が目的だからなあ…一般市民を一人殺したくらいじゃそんけだろうよ」

「にしても安すぎですよ! 私達わたくしの仕事がそんな金額で収まって良いんですか!?!」

「そりゃあ俺だつてもうちよつと欲しいけどよお…」

昴も不満そうに呟く。

「ハア…私達の存在価値って何なのかしらね…」

ヘルが呟いた。

「だってそうじゃなくて？ 売人を統括してる着火さん達三人はデータ収集でウハウハ：ハサンさんの所もメモリ製造で大儲け：同じ執行チームの一角の癖にバゴの所もそれなりに儲けてる：…なのに私達はこんなはした金ばかり……」

「……ッ！ やっぱり納得出来ません!! 私達の方がバゴさんの所よりも優れているのに！ 何故なんですか!?!」

ヘルの言葉に感化されたヨルが叫んだ。

「……お前達がそう思うのも無理はない……だがチームAの役割はあくまでも始末だ……ターゲットが居なければどうしようもない……」

フエンはヨルやヘルの意見を聞きながら答える。

「大体何なんですか……私達わたくしの組織の目的……何故あんな小娘が必要なのですか？」

「園田来雪……それはシルバー階級から上の幹部しか知らん……俺達の様な下っ端に教えてくれるとでも思ってるのか？」

フエンはヨルの問いに冷静に答えた。

「そういや……ターゲットを木っ端微塵にした時に居たな……あの来雪とか言う嬢ちゃん……何でボス達があんな嬢ちゃんを欲しがるとかねえ……正直ボス達がそこまで固執する様な奴には見えなかつたわあ」

「……そこまで気になるなら確認すれば良いんじゃないでしょうか？」

ヘルが眩きに三人が反応する。

「ボスの怒りを買う可能性もあるけど……知りたくありません？……園田来雪ちゃんが組織にとつてどんな影響を及ぼすのか……」

「……確かに……少し気になりますね」

ヘルの提案にヨルは乗る気だった。

「ええ……ボスの怒りを買うかもしれないのに……俺は正直嫌だなあ」

「……何れは接触する機会も巡って来るだろう……まつ……止めはしないがな」

フエンがそう眩くとヨルが動き出した。

「では私わたくしから行かせて貰います」

「えっマジで？……本気ですかいヨルさん」

昴がヨルを見つめながら言った。

「ええ……でも私わたくし自ら行くわけではありませんよ……まずは実験がてらに刺客を送り込んで様子見ですかね……丁度生贄になりそうな物を昴さんから頂きましたし……」

ヨルは先程昴から貰ったビニール袋を見せる。

「何ですかの？……悪魔でも召喚するつもりですかの？」

ヘルが訪ねるとヨルは笑みを浮かべた。

「フフフ……少しは楽しめると良いんですけどね」

そう言うとヨルは部屋を出た。

「良いんですかいフェンの旦那……ヨルさんマジでやる気ですぜ？」

「まあ……何れは仕掛けようと思っただけから……その時期が早まっただけだ」

フェンは笑みを浮かべながら言った。

執行チームがそんな話をしているとは露知らず、来雪達が関わったコックローチ・ドーパントの事件から既に数週間が過ぎた。

来雪はテラスで新しく知り合った紗綾とお茶をしていた。

「はあ……やつぱり咲夜ちゃんが淹れてくれた紅茶美味しい……何で私の紅茶は不味くなるんだろ……」

「誰にでも得意不得意はあるよ、来雪さんにとっての不得意が紅茶を淹れる事なんじゃない？」

「でもなあ……お菓子とか料理とかは出来るのになあ」

来雪と紗綾は他愛もない話をしていった。

「あら先客がいたみたいね」

そこにパチュリーを連れたレミアアがやって来た。

「あつレミちゃんにパチュリーさん」

「お邪魔してますレミリアさん、パチュリーさん」

「ええいらつしやい…まさか来雪が友達をつれてくるとはね」

レミリアが苦笑いする。

「事件の調査をするはずが…友達を作ってきたなんて」

パチュリーは笑みを浮かべながら言った。

「逃わないで下さいよ…紗綾さんのおかげでコックローチ・ドーパントの仕業だつて分かつたんですから」

「まあ…その犯人も何者かにやられましたけどね…」

「……」

紗綾の言葉に来雪は暗い顔になった。

「来雪さん、あの攻撃って…」

「…多分ドーパントのものだと思う…幻想郷に住む人達の力を把握してないから断言は出来ないけど…」

「私を助けてくれた時に現れたあいつと何か関係があるのかしら…」

レミリアは自身を襲ったギア・ドーパントの姿を思い出す。

「それは分かりません…幻想郷にメモリが流通してるのは確かだし…一般市民が変身したドーパントの可能性もあるけど…」

来雪は考えた。

だが不明な点も多い為、考えた所で答えは出ない。

「まあまあ、今考えてもしようがないですよ」

紗綾がカップを持ちながら言った。

「分からない事をいくら考えても埒が明かかないですし、今はお茶を飲んでのんびりしましょう…折角咲夜さんが淹れてくれたお茶が温くなっちゃいますし」

「そう…ですね…うん」

紗綾の言葉に来雪も頷いた。

「来雪は一人で抱え込み過ぎよ…私達は家族なのだから頼ってくれてもいいのよ？」

「そうね…何かあったら私達にも相談しなさい…まあメモリに関してはまだ調べる必要があるけどね」

レミリアとパチュリーが来雪に言った。

「レミちゃん…パチュリーさん…うん…ありがとう」

「…さあ、気を取り直してお茶会の続きよ…そう言えばパチエ、こあはどうしたのよ？」

「こあなら図書館の点検に行ってるわよ、もう少ししたら来るんじゃないかしら」

レミリアの問いにパチュリーが答えた。

場所は変わりヴワル魔法図書館内

小悪魔は無数の本を抱えながら歩いていた。

「この本が此処で……これが彼処ね……」

小悪魔は慣れた手付きで本を片付けていく。

「ふう……無駄に本が多くてしょうが無い……不要な本は処分する様にパチュリーちゃんに言い聞かせないと駄目ね」

小悪魔はパチュリーに本の選別をやらせる事を心に決めた。

ある程度の本の片付けが終わった。

「さてと……片付けも終わったし私もお茶会に行きましようかね」

小悪魔が図書館を去ろうとした。

「何だ行つちまうのか？」

突然小悪魔を呼び止める声が聞こえた。

「ツ!？」

小悪魔が振り返るとそこには一人の男が柱に寄り掛かっていた。

男の背中与腰に悪魔特有の翼と尻尾があった。

「よおリリース……おつと……今は小悪魔だっけか？まあ久しぶりだな」

男は小悪魔をリリースと呼んだ。

「……グレン」

「覚えててくれるとはな…感動で涙が出てくるわ」

グレンと呼ばれた男は笑いながら言った。

「…何しに来たのよ」

「なに…契約上の仕事さ…園田来雪って女知ってるよな？」

「………」

小悪魔は無言だった。

「にしても…変わつたなあリリス…魔界で暴れ回ってたあの頃に比べて弱体化したなあ…今のお前なら俺でも倒せそうだぜ」

「………」

「おいおい…何か言えよ無言とか悲しくなってくるだろうが」

グレンは泣き真似しながら言った。

「……仕事って言ってたわね…来雪さんをどうする気？」

「どうもしねえよ…まあ俺の契約者が園田来雪の事を調べろって契約だからなあ…それなりに殺り合うかもな」

「………」

小悪魔はグレンを無言で睨み付けていた。

「いくら弱くなったって言ってもお前も悪魔だ…悪魔にとって契約がどれだけ大事か分かるだろうよ？」

「ええ…そうね」

小悪魔は懐に手を入れる。

「…フツ…ホントに弱くなったな…そんな見え見えな行動…前のお前ならもつと上手くやってただろうに」

「別に隠す必要も無いからね」

小悪魔は懐からクラウンメモリを取り出す。

「殺ろうってか？…俺と」

「来雪さんは紅魔館の家族…つまり私の家族でもある…家族を危険に晒す位なら此処であなたを葬った方が良いでしょう？」

「ハツ…ホントに変わったなあお前……なありリス…物は相談何だが」

グレンは真面目な顔で小悪魔を見つめる。

「俺と来い…もう一度あの頃に返ろうぜ…魔界で好き勝手暴れてたあの頃によ」

「……………」

グレンの提案に小悪魔は無言だった。

Pの家族／炎の記憶と消火器

ヴワル魔法図書館に現れた悪魔・グレン。

彼の提案に小悪魔は暫く無言だったが、その口を開いた。

「…面白い冗談ねグレン：私がパチュリーちゃんを裏切る訳無いでしょ？」

「…分からねえな…リリス：お前程の悪魔があんな小娘を気にかけるなんてな？」

グレンは小悪魔の心情を理解できなかった。

「何故だ？…契約は既に済んでるだろ？…俺達悪魔は契約が全てだ…契約が済んでるならもうあの小娘といる必要無いだろ？」

「…確かに私とパチュリーちゃんの契約の期限は既に終わってる…あの子は私が居なくても大丈夫な程に成長した…信頼できる家族や気の合う友達も出来た…」

小悪魔は目を閉じながら呟く。

「母親になつて欲しい…それが…幼かったあの子が私を呼び出した時に言った契約…：呼び出されて早々そんな馬鹿げた契約を持ち出されるなんて思わなかったわよ」

小悪魔は苦笑いしながらグレンを見つめる。

「最初は期限が過ぎたら即刻帰るつもりだった…馬鹿馬鹿しいもの…悪魔の私が母親な

んで……でもね……思っちゃったのよね……あの子が死ぬまで側に居ようって……」
小悪魔はクラウンメモリのボタンを押した。

【CROWN!】

クラウンメモリからガイアウイスパーが鳴る。

「契約とか期限とか関係ない……今の私はあるの子の母親で使い魔の小悪魔なんだもの……だからグレン……あなたと一緒に行く気は無いわ」

キュピーン

小悪魔は舌の生体コネクタにメモリを挿し込んだ。

そして小悪魔はクラウン・ドールパントに変身した。

「無駄だろうけど一応言っておくわ……立ち去りなさいグレン……そうすれば見逃してあげる」

「……はあ……残念だよりリス……どうやら俺はお前を殺すしかねえみてえだ」

グレンは懐から赤いメモリを取り出した。

そのメモリには燃える炎でHの文字が描かれていた。

【HEAT!】

グレンの持つヒートメモリからガイアウイスパーが鳴る。
ブウン

キュピーン

グレンがヒートメモリを前方に投げると、メモリはグレンの元に戻り左肩に挿し込まれた。
挿し込まれた左肩から炎が吹き出し、グレンは熱きの記憶の怪物^{超人}、ヒート・ドーパントに変身した。

だがその姿はかつて風都を震撼させたテロリスト集団・NEVERの一人が変身したヒート・ドーパントの姿に酷似してるが女性型ではなく、男性型の姿になっていた。

「燃やしてやんよ……リリス!」

バシユン

「リリスじゃないわよ……小悪魔だって言ってるでしょ!」

ビツクリツパーを構えたクラウン・ドーパントに火球を放つヒート・ドーパント。

テラスでお茶会をしていた来雪達。

「ツ！」

突然紗綾が立ち上がった。

「どうしたのよ紗綾？」

レミリアが不思議がつっていると、次に来雪も反応した。

「紗綾さん！」

「来雪さんも気付いた？……この臭い……人里で嗅いだのはまた違うけど……メモリの臭い」

「メモリって……まさか」

レミリアは紗綾と来雪の反応とメモリという単語で状況を理解する。

「誰かが紅魔館でメモリを使用してる……場所は……図書館？」

「ツ!?こあ！」

体の弱いパチュリーが一目散に図書館に向けて走り出した。

「パチエ!?!あなた無茶したらまた倒れるわよ！」

「紗綾さん!行こう！」

「ええ！」

来雪と紗綾もパチュリーの後に続いた。

「ああもう!あの子達は!咲夜！」

「はー！」

レミリアの呼び掛けに音もなく咲夜が現れる。

「来雪達を追いなさい！私もすぐに行くわ！」

「承知しました」

レミリアと咲夜も動き出した。

ドオオン

ヴワル魔法図書館で爆発が起きた。

無数の魔導書が燃える中、クラウン・ドーパントは肩で息をしていた。

「はあ…はあ…はあ」

「どうした？…俺を殺るんじゃないのか？」

炎の中からヒート・ドーパントが歩いて来た。

「スゲエよな？…ガイアメモリだったか？俺の契約者から渡された物だがここまで力が湧いてくるとはなあ」

「クツ…開け！マジックボックス！」

クラウン・ドーパントは両肩の箱から様々な武器を射出した。

「無駄だ」

ヒート・ドーパントが手を上げると射出された武器が全て燃えカスになった。

「ッー」

「俺はヒートと相性が良いみたいでな…その程度の物だったら燃えカスにする事くらい造作もない…フンツ！」

ヒート・ドーパントは指先に火球を作り、クラウン・ドーパントに放つ。

「ツガアアア!？」

ドゴオン

ビックリツッパーで防御するが耐えきれずに爆発する。

ギユウウン

クラウン・ドーパントからメモリが摘出され、小悪魔に戻った。

「ウツ…クツ」

小悪魔の服はボロボロになり、所々火傷していた。

「…終わりだリリス…」

ヒート・ドーパントが先程の火球よりも更に大きな火球を作り出す。

「燃えカスにしてやる…じゃあな」

ヒート・ドーパントが火球を小悪魔に放つ。

小悪魔は動けずにいた。

(パチュリーちゃん……ごめんね……)

小悪魔は心の中でパチュリーに謝罪しながら目を閉じた。

「アグニシャイン!!」

ヒート・ドーパントの周りが炎の渦に飲み込まれた。

「クツ！何だこれは！」

ヒート・ドーパントが炎の渦から飛び出し、その場を離れた。

ヒート・ドーパントが小悪魔の方を見ると、そこには息を切らしながら小悪魔の前に立つパチュリーの姿があった。

「はあ……はあ……はあ……」

「パチュリー……ちゃん」

「小娘……貴様……」

「もう……奪わせない」

パチュリーはヒート・ドーパントを睨みながら呟く。

「あつ？」

「私は……父さんと母さんを奪われた……住む場所も奪われた……私にとって大切な物を何度も奪われた……そんな時に呼び出した使い魔……それが力を失う前のこあだった！」

パチュリーは一筋の涙を流す。

「こあとの時間は…幸福そのものだった…：両親を奪われた私にとって…こあは私の拠り所だった…：契約の関係だったとしても…私はこあを…リリスを母として慕ってた!!」
「パチュリーちゃん…」

「短命だった私を助けてくれたのはリリスだった…：自分の力を失ってまで私を生かしてくれた…もうこれ以上…私から何もかも奪わせない!!私のこあに手を出すあんたを私は許さない!!」

パチュリーは怒りの表情を浮かべ、ヒート・ドーパントを睨みつける。

「チィ…ガキが…悪魔である俺に喧嘩を売るとはなあ…：ならリリス共々あの世に送ってやるよー!」

「そんなことさせる訳ない!」

そこに遅れて駆け付けた来雪，紗綾，レミリアがいた。

「姿は違うけど…ヒート・ドーパント…：T2ガイアメモリまであるなんて…」
「小悪魔さんにパチュリーさんは殺らせませんよ!」

「私の家族に手を出しておいて…あなた…：ただで済むと思うなよ」

「どいつもこいつも…良いだろう…：ならこの館ごと燃やし尽くしてやるよ!」

ヒート・ドーパントの周りに陽炎が発生し、辺りを燃やし始める。

ウオンウオン

そこにズーメモリが現れる。

「えっ？ズーちゃん？……どうして？」

ズーメモリは来雪にあるメモリを投げた。

ウオンウオン

「えっ？……これは……使えってこと？」

来雪はメモリのボタンを押した。

【FIRE EXTINGUISHER！】

メモリからガイアウイスパーが鳴り響く。

「ファイア・エクステイングイッシュャ……消火器の記憶？」

来雪が呟くとメモリは宙を浮き、額に挿さる。

キュピーン

挿さった額から消火剤が吹き出し、来雪を包み込んだ。

消火剤が弾け飛ぶと変化した来雪が姿を表す。

左腕はホース、右腕が消火器の外装の鎧、両足にホースが巻き付いている頭が消火器のピン。

右手には武器として手斧を持っている。

来雪は消火器の記憶の怪物^{超人}、ファイヤエクステイニングイッシャー・ドーパントに変身した。

「変わった姿のドーパントね」

レミリアは苦笑いしながら言った。

「私も加勢しますね!」

【KERBEROS!】

紗綾も右太腿の生体コネクタにメモリを挿し込み、ケルベロス・ドーパントに変身した。

「ドーパントが増えようが俺の炎は止められないぜ!」

「それはどうかな?」

ファイヤエクステイニングイッシャー・ドーパントの左腕であるホースから消火剤が散

布された。

消火剤によって辺りを覆っていた炎が徐々に消火されていく。

「何ッ!？」

「このメモリはどうやら炎に絶対的な耐性があるみたい…火を消す事に特化したメモリだから攻撃は弱いけど…火ならどんなものでも消せる!紗綾さん!!」

「勝機だね!すぐに終わらせる!!」

「クソっ!」

ヒート・ドーパントが逃げようとするが…

「レイジイトリリトン」

パチュリーの魔法により、地面から岩の杭が出現しヒート・ドーパントの足を貫き固定した。

「何いい!？」

「今よ!」

「これで…終わり!!」

ジャキイイン

ケルベロス・ドーパントの爪がヒート・ドーパントを斬り裂いた。

「ガアアアアアアア」

ドオオオオン

ヒート・ドーパントは大爆発した。

カラカラ

こあの所にヒートメモリが転がる。

爆煙からグレンが飛び出す。

「クソ！こんな所で死んでたまるかよ！」

「言った筈よ……ただで済むと思うなって」

「ッ!？」

グレンが見つめた先にはグングニルを構えるレミリアが居た。

「死になさい……スピア・ザ・グングニル！」

ビュン

ズバァア

投擲されたグングニルはグレンの心臓を貫通した。

「ば……かな……この……おれ……がぁ……」

グレンはそのまま塵となった。

「グレン……」

小悪魔は塵になったグレンを見て、悲しそうな顔をした。

「あらあら……あの悪魔……死んでしまいましたか」

その光景を別の場所から見ていたヨルはつまらなそうに呟いた。

「まあ良いでしょう……所詮は捨て駒……何れは私わたくし自ら相手をして差し上げますわ」
ヨルはその場を立ち去った。

春雪異変編

Yの企み／春に広がる雪景色

冥界

それは死者達の魂が流れ着く場所。

そんな冥界にある広大な建物・白玉楼の敷地内に聳える巨大な桜の木を見つめる二人の女性が立っていた。

「幽々子様……全て手筈通りです」

二振りの刀を腰に備えた白髪の少女が、自身の主である女性に報告する。

「そう……じゃあ始めましょうか……妖夢……頼りにしているわよ……貴女の新たな力……」

「勿論です幽々子様……あの人から受け継いだこの力で、たとえ博麗の巫女であろうと撃退してご覧に入れます」

白髪の少女・魂魄妖夢の手には『N』のマークが描かれた金色のメモリが握られている。

場所は変わり紅魔館では……

「よいしょっと」

美鈴が門の辺りに積もっている雪の片付けをしていた。

「美鈴さ〜ん…」

門から来雪が顔を出す。

「敷地内の雪掻きは終わりましたあ」

来雪は疲れた様子を見せながら美鈴に報告した。

「お疲れ様です来雪さん」

「…ねえ美鈴さん…これ…異変ですよね？」

来雪は辺りの雪景色を見ながら呟いた。

「そうでしょうね…春なのに辺り一面雪景色…冬が長引いたにしてもこれは異常です

よ」

「……霊夢達…異変解決に動いてるよね…」

来雪が浮かかない顔をしながら呟いた。

「…行きたいのですか？異変解決に」

「……うん…この前のこあさんの一件を考えると、ミュージアムって名乗ってる組織が

関係してるかも知れないし…」

「ミュージアム…無いとは言い切れませんね」

来雪の推測に美鈴は過去を振り返りながら納得した。

「…まあ異変解決に行こうにもレミちゃんへの許可を取らないと行けないけど…」

「その心配は無いわ」

来雪が呟くと紅魔館の中から咲夜が出てきた。

「咲夜ちゃん？」

「お嬢様から許可は取ったわ…まあ来雪一人で行かせる訳にもいかないから付き添いとして私が同行はするけど」

「うん？…咲夜さんにしては珍しいですね、お嬢様から命令されてもいないのに…」

「…私だって来雪の家族なのよ…来雪が大切にしている物を私だって守りたいのよ」

美鈴の問いに咲夜が当然の様に答えた。

「咲夜ちゃん…ありがとう！」

来雪は笑顔でお礼を言う。

「別に良いわよ…それより行きましよう、いい加減雪景色も飽きてきたし」

「うん！美鈴さん、レミちゃんに行つてくるつて伝えといて下さい！」

「分かりました…咲夜さんに来雪さん…気をつけて」

美鈴に見送られながら二人は異変解決に乗り出した。

更に場所は変わり人里

「ふうく…：やつぱ仕事終わりのコレは格別だなあ」

スーツを来た男が煙草を吸いながら呟いた。

「ふうく…：雪も酷くなる一方だなあ…」

「少し良いかしら？」

男が煙草を吸っていると一人の女性が話し掛けてきた。

「ん？おっとこれはこれは金石様…：いかがなされました？」

男は吸っていた煙草の火を消し、やって来た女性・金石愛に挨拶をする。

「ええどうも…：実はメモリを幾つか頂きたいのだけれど」

「ええ構いませんとも…：どんなメモリをご希望で？」

男はトランクをその場で開き、幾つものメモリを見せる。

「そうね…：じゃあこの4本頂こうかしら？」

金石が選んだのはそれぞれ『F』『C』『R』『Z』のマークが書かれたメモリだった。

「4本…：ですか…：こちらとしてはありますが…：お高いですよ？」

「構わないわ…：この4本をお願ひ」

「それでは4本お買い上げで…合計〇〇〇万ですかね」

「……ホントに高いわね……まあ良いけど」

金石は言われた額を男に支払った。

「毎度ありがとうございます……これからもどうぞご贖目に」

「ええ……また何かあれば寄らせてもらうわ」

金石はメモリを受け取るとその場を去った。

「4本も買ってどうするのかねえ」

男はそう呟くと、懐から新しい煙草を取り出す。

「……横田」

「ん？」

男・横田万が呼ばれた方向を見ると、そこには小さな女の子がいた。

「うおっと！これはこれは愛花様！お疲れ様でございます！」

横田はその少女・藍原愛花を見るやいなや煙草を即座にポケットに突っ込み、挨拶をした。

「シルバークラスの幹部で有らせられる貴女様が何故此処に？」

「仕事……ボスの指令を伝えるに来た」

「えっ……ボスから？……一介の売人である俺にですかい？」

横田はまさか自分にボスから指令が来るとは思っておらず固まっていた。

「この雪は異変によるもの……今来雪が異変解決に乗り出した……クロードと一緒に来雪の障害として立ちほだかれ……だって」

「来雪……園田来雪でしたかい？」

「そう……今の来雪のデータを取って貰いたい……出来る？」

愛花は首を傾げながら言った。

「ご命令とあらば遂行しますぜ……にしてもクロードの奴も一緒とはね……殺さね兼ねませんぜ？」

「……その時はその時……まだ早かったと判断するだけ」

「はあ……それじゃあ行きますか」

横田はその場を離れ、人里の外へと歩いていった。

「……最も……今の来雪ならあの二人が相手でも問題ない」

愛花の腰にはガイアドライバーREXが巻かれていた。

【G I A！】

愛花はギアメモリをガイアドライバーREXに挿し込んだ。

次第に愛花の身体に大小無数の齒車が重なり合い、その姿を変える。

愛花は齒車の記憶の怪物超人、ギア・ドローパントに変身した。

「春雪異変…前回は此処で終わった…：…今回はどうだろうね」

ギア・ドローパントはそう呟くと、自身の身体をバラバラにしてその場から飛び去った。

そんな中、霊夢と魔理沙の二人はそれぞれピンチに陥っていた。

「チィ…」

「あらあら博麗の巫女がこの程度なの？」

霊夢の前には複眼状の右眼を持つ緑の旋風のような妖怪が凄まじい突風を起こしながら立ちはだかり…：

「才腹空イタ…食べ足りナイ！」

「おいおい…マジかよ…」

魔理沙の前には後頭部や背中に波打つ帯状の器官が生えたまるでコンクリートの様な体色をした怪物が無数の野良猫を喰らう現場に居た。

Aの継承／振り切る霊夢

来雪達が異変解決に乗り出す少し前の事……

「春だつてのに雪景色……はあ」

博麗神社にて、霊夢は現在起こっている異変に溜息を吐いた。

「全く……どうしてこうポンポンポン新たな異変が起きるのかしら……」

霊夢は呟きながら空を飛んだ。

（でも……彼奴らが関わってるかも知れない……凜の仇は私が……）

霊夢は今も来栖凜を利用した二人のドーパントを許せずにいる。

「雪景色……取り敢えず彼奴に当たってみましょ」

霊夢は広がる雪景色を見つめながら思い当たった人物を探した。

「たくよお霊夢の奴……あたしを置いて一人で異変解決に出るとか酷いぜ全く」

霊夢が博麗神社から飛び立って数分後に魔理沙が来たが、既に霊夢が居ないことにボヤいていた。

「はあ…取り敢えずチルノでも捕まえてみるか…雪景色出しな…ん？」

魔理沙がチルノを捕まえようと考えて居ると、森の中に一人の妖怪を発見した。

「彼奴は……」

「はつくしよん」

犬妖怪の犬飼紗綾は春だと言うのに広がる雪景色の中、薪となる木の枝を探していた。

「もうう…春になって暖かくなるから必要分の薪しか集めてないのが裏目に出た…だつてしようがないじゃない！ここまで冬が長引くとは思わないじゃない普通!!」

紗綾は一人、枝を探しながらツツコんだ。

「はあ…」

「お〜い」

「はえ？」

紗綾が声のする方を見ると、こちらに飛んでくる魔理沙がいた。

「おや…貴女は」

「お前来雪と最近仲良くなった奴だよな？」

「来雪さんですか？…まあそうですね…それで貴女は確か…博麗の巫女と一緒に居る

白黒魔法使いさんですよね?」

「白黒魔法使いって…あたしは霧雨魔理沙、普通の魔法使いさんだぜ」

「魔法使いに普通も異常も無いと思うんですが…それで何の用です?」

紗綾が魔理沙に聞くと、魔理沙は話し出した。

「この異変について何か知ってる事あれば教えてくれ!何でもいいからさ!」

「異変ですか?…ああやっぱり異変なんですよ…ホント勘弁して下さいよ…冬が長引くとか…はあ」

「何だよ…お前見たところ犬妖怪だろ?犬って冬でも外を駆け回るもんじゃねえの?」

「犬でも寒いものは寒いんですよ!全犬種が揃って冬好きだとは思わないで貰いたい!!」

「お、おう」

紗綾の圧に思わず気圧される魔理沙。

「はあ…ああそう言えば…異変と関係あるかどうか分かりませんが…少し気になる事が…」

「お?何だ?」

「ここ最近橙ちゃんを見掛けないんですよ…この間までは家に温まりに来てたりお喋りしたりしてたんですけど…ある日を堺にパツタリ来なくなってます…」

「橙?…あの紫の式の式だろ?ていうかお前彼奴と仲良かったのか?」

「来雪さんと仲良くなる前から仲良くしてましたよ?何ていうか橙ちゃんを見てると放つとけないって言うか?…そう言えば橙ちゃんを見なくなってから辺りの野良猫の姿も見えない様な……」

紗綾の呟きを聞いた魔理沙は行動に出る。

「何か怪しいな…良し!橙を探してみるか!」

魔理沙はそう言う空へ飛んだ。

「あつーちよつとー……行っちゃった……うーん」

紗綾は少し考えた。

(異変どうこうの前に何か嫌な予感がしますね…橙ちゃん…もしかして…)

紗綾は自身のケルベロスメモリを見つめながら考える。

(だとしたらまずいですね)

紗綾は集めた杖を投げ捨て走り出した。

「やっと見つけたわよ」

「ん?…あらあら?」

霊夢の目の前に一人の女性がいた。

「この雪景色…あんたの仕業?…レ・テイ・ホワイトロック」

その女性の名前はレ・テイ・ホワイトロック

『寒気を操る程度の能力』を持つ妖怪・雪女で、冬だけに出現する妖怪である。

「博麗の巫女ですか…私の仕業って…この雪景色がです?」

「雪女のアんなならやりかねないでしょ?」

「そうですね…確かに一年中雪景色なら私もありがたいんですけど…残念…今回は私では無いですよ?私は唯この景色を眺めながら浮遊してただけですし」

「あそう…宛が外れたわ」

「それはそうと…博麗の巫女って強いんですよ?」

レ・テイは霊夢を見つめながらニヤリと笑った。

「は?」

「いやね…博麗の巫女相手なら…これ…試せるかなあって」

レ・テイの手に緑色のメモリが握られていた。

そしてそのメモリには旋風でCの文字が描かれていた。

「ツ!」

「この力を試したいんですが…試せる相手が居なくて…ここら一带の妖怪で試してみたいのですがみんな一撃で終わってしまつてつまらなかつたんですよえ」

レテイの顔は狂気に満ちていた。

「私のメモリの力……味わってみて下さい」

【CYCLONE!】

サイクロンメモリからガイアウイスパークが鳴る。

ブウン

キュピーン

レテイがサイクロンメモリを前方に投げると、メモリはレテイの元に戻り項に挿し込まれた。

挿し込まれた項から突風が吹き荒れ、レテイは風の記憶の怪物、超人サイクロン・ドーパントに変身した。

「ドーパント……あんた……そのメモリ何処で……」

「これ？落ちてたのを拾ったの……最初は吹雪を作るために使ってたのだけどね……その内これの力を試したくなっちゃってね！」

サイクロン・ドーパントは突風を巻き起こした。

「クッ」

「さあ付き合って貰うわよ博麗の巫女！」

サイクロン・ドーパントは自身の寒気を操る程度の能力とサイクロンの力を合わせて作り出した雪玉を弾丸の様に飛ばす。

「ッ！フッ！」

霊夢は咄嗟に御札を投げるが、弾丸の様に放たれた雪玉はまるで本物の弾丸の様に御札を粉碎し霊夢の身体を貫いた。

「ガククツ」

貫かれた部位から血が滴りだし、霊夢はその部位を抑え止血する。

「あらあら博麗の巫女がこの程度なの？」

サイクロン・ドーパントが腕を上げると、辺りに竜巻が発生し始めた。

「チィー！」

霊夢は自身の大技である夢想封印の構えを取る。

「あらあ？」

「夢想…」

「遅いわよっ！」

バババン

今度は霊夢の背後に発生した竜巻から氷柱が発射され、霊夢の背中に数本突き刺さつ

た。

「アツ……」

「アハハハ……流石に串刺しには出来なかったわねえ」

サイクロン・ドーパントはすかさず雪玉を霊夢に放つ。

氷柱が突き刺さり動きが鈍くなつた霊夢。

そんな霊夢の身体雪玉は容赦なく貫いた。

「ッ……」

霊夢はそのまま下の森に落ちていった。

「アハハハ！まさか私が博麗の巫女を倒せるなんて……最高の気分だわ！アハハハハハハ
！」

ズシヤ

雪が広がる森に墜落した霊夢。

サイクロン・ドーパントが発生させた竜巻により、辺りは猛吹雪になっており無慈悲にも霊夢の身体を雪が覆っていった。

（私……負けた？……こんな……所で？……博麗の……巫女が……こんな……）

霊夢の意識が遠退き始める。

(ああ……出血が酷い……死ぬ?……ここ?……紫……ごめん……私……)

猛吹雪の中、霊夢の意識が刈り取られた。

「……ん」

霊夢が目を覚ますとそこは何もない白い空間だった。

「……私……死んだのね……死後の世界ってこんな殺風景な場所なのね……情けない……」

霊夢は何時しか涙を流していた。

「こんな所で死ぬなんて……まだ凜の仇も取ってない……来雪と約束したのに……メモリ回収……協力するって……なのに……」

コツコツコツ

「?」

背後から足音が聞こえ、霊夢は振り向いた。

そこに居たのは赤いライダーズーツに革ジャンを着た男性だった。

「……貴方は?」

「俺に質問するな」

男は霊夢の問を一言で片付けた。

(何なのよこの人……ちよつと怖いんだけど)

「お前は何を求める?」

「…え?」

「こんな所で死ねない…約束を果たせてない…ならお前は何を求める?」

「…何を…求める…」

霊夢は考える。

(異変解決は博麗の巫女の役目…でもレティみたいにメモリによって強くなった者も沢山いる…今の私じゃ勝てない…ましてや来雪の手伝いなんて出来るわけない…私が求めるもの…それは…)

「……が欲しい」

「…」

「力が…欲しい…今の私じゃ…彼奴らは疎か…レティにすら勝てない…来雪との約束を果たせない…そんなの嫌だ…自分が言い出した事なのよ?…来雪を手伝うって…こんな所で投げ出したくない!!」

「……ならどうする?…今のお前では勝てないのだろうか?」

「……分からない…何をすれば良いのかなんて…私には分からない…でも…私は…博麗の巫女として……幻想郷に撒かれてるメモリをどうにかしたい……私はあの時誓ったのよ!…これ以上凜みたいな被害者を増やしたくない…私が幻想郷を守るんだって!!」

霊夢の叫びを男は唯黙って聞いていた。

「…メモリを根絶させる…それは長い茨の道だ…それでもお前はやり遂げられるのか？」

「…今この私じゃ無理…メモリの力はそれだけ強大だった…レティと戦って思い知らされた…私はもつと強くならなきやいけない…強くならなきや…誰も守れないもの」

「…ふん」

男は霊夢の肩を叩き、その場を通り過ぎた。

「？」

「なら強くなってみせろ…お前の大切なものを守る位にな…」

男は一本のメモリを霊夢に向けて投げる。

「ッ!?…これ…」

「だが忘れるな…メモリは一種の麻薬だ…使い方を間違えればたちまちお前はメモリの力に吞まれる事になる…復讐心に囚われ、大切な事を忘れていた嘗ての俺みたいにな」

男の身体が透け始めた。

「ッ！ちよつと待って！貴方は誰なのよ！」

「俺に質問するなど言っただは…すぐに分かる…博麗の巫女…そのメモリがお前を導く事を祈ろう…」

男がそう言い残すと辺りが光り出した。

「……………ッ！」

身体中の痛みを耐えながら、霊夢は立ち上がった。

「今のは…夢？……ッ!？」

霊夢の手には先程見た夢の中で男に渡されたメモリが握られていた。

「夢じゃ…ない？……ッ！」

メモリを見つめると、霊夢の頭の中に男のヴィジョンが映し出される。

それは風の街にて、ガイアメモリ犯罪に立ち向かう一人の男が歩んだ物語だった。

「……………照井……………竜……………フツ……………貴方から受け継いだこの力……………幻想郷を守るため……………来雪との約束を果たすために使わせて貰うわ」

霊夢は血が不足し始めた身体に鞭打って空へ飛ぶ。

「アハハ……………あら？」

サイクロン・ドーパントの前に霊夢が再び現れた。

「博麗の巫女……………まだ死んで無かったのね？」

「死ねるもんですか……………幻想郷を守るのが私の使命だもの」

「それで?…私にまたやられに来たの?」

「……私に……」

「うん?」

霊夢は男・照井竜から受け継いだメモリを構え、言い放つ。

「私に…質問しないで!」

【ACCEL!】

アクセルメモリからガイアウイスパークが鳴る。

「変………身ツ!!」

ブウン

キュピーン

霊夢がアクセルメモリを前方に投げると、メモリは霊夢の元に戻り腹部に挿し込まれた。
た。

挿し込まれた腹部から蒸気が吹き荒れ、霊夢の姿を変えた。

その姿は照井竜が変身する仮面ライダーアクセルに似た姿だった。

違いとしては腰にアクセルドライバーが着いていないのと、腕にバイクのタイヤ、肘にマフラーが二本ずつ生えている。

霊夢は加速の記憶の怪物^{超人}、アクセル・ドーパントに変身した。

ブウンブウン！

アクセル・ドーパントのマフラーから爆音と共に炎が吹き出した。

「さあ……振り切るわよ!!」

高熱のA／飢えた猫妖怪

ブウンブウンブウン

アクセル・ドーパントが、肘にあるマフラーを蒸す。

「あらあら貴女も持ってたのねえ…でも私には及ばないわ!!」

サイクロン・ドーパントは再び竜巻を発生させる。

「串刺しにしてあげるわ!」

竜巻から氷柱が射出された。

「…フツ!」

ブオオン!

アクセル・ドーパントのマフラーから爆音と共に炎が吹き出し、凄まじいスピードで氷柱を回避に成功した。

「へえ…じゃあこれは!」

サイクロン・ドーパントの能力でアクセル・ドーパントの周りに竜巻が発生し、四方八方から氷柱が射出された。

「ハアアアアア!」

ブウンブウンブオオン!

アクセル・ドーパントが叫ぶ。

するとアクセル・ドーパントの周りに陽炎が立ち昇った。

アクセル・ドーパントは自身のエンジンを燃焼し、体温を高めたのだ。

陽炎が立ち昇る程の高温に射出された氷柱は瞬時に溶けて無くなった。

「ッ」

「フッ!!」

ブウンブオオン!

サイクロン・ドーパントの一瞬の隙を突き、加速したアクセル・ドーパント。

「ッ!?ガアッ!」

アクセル・ドーパントの加速付きパンチを腹部に受けたサイクロン・ドーパント。

「まだまだ…ぶつちぎる!!」

ブウンブウン!

「ダアアアアアアア!!」

アクセルの機動力を活かした連打を叩き込むアクセル・ドーパント。

「グフッ!?!…調子に…乗るなアアアアアアア!!」

サイクロン・ドーパントの突風でアクセル・ドーパントは距離を稼がれた。

「本気で始末してやるッ！博麗の巫女!!」

サイクロン・ドーパントの周りを突風が吹き荒れる。

「これは…」

「マキシマム……ドライブ!!」

マキシマムドライブ

それは自身のメモリの力を最大限に開放すること。

しかしそれはマキシマムスロットを持つ風都の仮面ライダー達にしか使うことが出来ない。

一部の例外を除いてドーパントがマキシマムドライブを発動させることは不可能。

しかしレティの持つメモリは風都で造られたメモリでは無く、霊夢達が追っているミュージアム（仮）によって幻想郷に適応する為に製造されたメモリ。

本来の幻想郷で存在するスペルカードによる弾幕の要領で数回だけ使用する事が出来る奥の手である。

「マキシマムドライブ……ライダーにしか使えないんじゃないの?」

「これで……終わりだアアア!!」

サイクロン・ドーパントは自身の起こした突風を纏い、アクセル・ドーパントに向けて構えた。

「ッ」

「サイクロンエクストリーム!!」

サイクロン・ドーパントが突風を纏い、両足蹴りを放った。

「なら……こつちも振り切る!!」

『見せてみる……お前と……アクセルの力を』

アクセル・ドーパントが構えると、その隣に霊夢にメモリを託した男・照井竜が薄っすらと現れ、アクセル・ドーパントを見つめていた。

「照井さん……行きます!!」

【ACCEL! MAXIMUM DRIVE!】

アクセルのガイアウイスパークが鳴った気がした。

「決める!」

アクセル・ドーパントは、前方に向かって後ろ回し蹴りを繰り出した。

「アクセルグランツァー!!」

ドスン!!

二人のマキシマムドライブがぶつかり合った。

「ウアアアアアア!!」

「ハアアアアアアア!!」

技と技のぶつかり合い。

勝利したのはアクセル・ドーパントだった。

サイクロン・ドーパントはアクセル・ドーパントのパワーに押し負け、アクセルグランツアーを諸に受けた。

「ガッ!?!」

「…絶望が…アンタのゴールよ…レティ」

「バカナアアアアア!?!」

ドオオオオオン

サイクロン・ドーパントはアクセルグランツアーの威力に耐えきれず爆発した。

爆煙から変身解除されたレティが落ちていくのが見えた。

「…ふう」

霊夢はアクセル・ドーパントの変身を解いた。

「…そうだメモリ!」

霊夢は恐らくレティと落ちたであろうサイクロンメモリを探すため地上に降りた。

しかしサイクロンメモリが見つかる事は無かった。

「……アクセルメモリ……何で博麗の巫女が？」

レティの落ちた森で佇む少女・藍原愛花は、落ちてきたサイクロンメモリを回収した。「あのメモリは製造してない……何で博麗の巫女が持つてるのかな？」

愛花はサイクロンメモリを見つめながら言った。

「……ボスに報告しないとね……サイクロンメモリ……まだ使えそうだね……次は誰にあげようかな？……あの春告精とか良い素材かも……さて……ロードの方はどうか？……今頃空腹に飢えてる頃だね」

愛花は呟きながら森の奥に消えた。

グチャクチャグチャ

橙を探していた魔理沙は信じられない光景を見ていた。

グチャグチャ

「お……おい……嘘だろ？」

それはありえない光景だった。

なんせ化け猫である橙が、同族である猫をボリボリと捕食していたからである。

「ウウウ……足りナイ……」

橙の目は白目が青がかった灰色になり、瞳は赤に変色していた。

「橙……お前……」

「ウウウ？……魔理……沙？……アハハ……良イトコロニ来タ」

そして魔理沙の存在に気付いた橙の標的が魔理沙に移った。

「魔理沙……才願イガアルノ……食べサセテクレナイカナ？」

「は？」

「足りナイノ……幾ラ食べテモ足りナイノ……食べテモ食べテモ……飢エガ……飢エルノガ
早スギテ……抑エ切レナイノオオオオ!!」

【ROAD!】

橙がロードメモリを起動する。

ガイアウイスパーが流れ橙は首筋にロードメモリを挿し込んだ。

キュピーン

挿し込んだと同時に首筋から血のような液体が吹き出し、道路の様な物に橙は包み込まれた。

そしてその姿を変える。

円や直線を基本にした無機質なデザイン

顔も仮面のように生物らしさは感じられないが、口を開けば鋭い牙状の歯が幾重にも並んでおり、怪物らしい生々しさも兼ね備えている特徴。

後頭部や背中に生える、波打つ帯状の器官、

橙は路上の記憶の怪物^{超人}、ロード・ドーパントに変身した。

「グギャアアアア!!」

ゾクッ

ロード・ドーパントの雄叫びを聞いた魔理沙は背筋が凍りついた。

そして自身の本能が魔理沙に知らせる。

「逃げる」と…「この場に居たら喰われる」と危険信号が鳴り止まなかった。

「おいおい…マジかよ…」

ロード・ドーパントの絶叫に魔理沙は恐怖した。

魔理沙がそんな恐怖と戦っているその頃……

「ハア…ハア…ハア…」

ヒート・ドーパントに変身している来雪は…

「……」

「……」

目の前に居る四人のドーパント相手に苦戦していた。

「フッフ…さあどうするの？」

その内の三人のドーパントの背中から糸のような物が繋がれており、一人のドーパントによって人形と化していた。

「まさか…ここまで適合した人が居るなんて…」

「人？違うわよ…私は魔法使いで…人形師よ」

Tの介入／コンビの復活

「グギャアアアアアアアアアア!!」

ロード・ドーパントに変身した橙は雄叫びを上げながら魔理沙に向かって突っ込んできた。

「ヤベッ!」

向かって来たロード・ドーパントを躲した魔理沙。

「ヨケナイデヨオオオオ」

「避けねえと死ぬだろうが!」

ロード・ドーパントの囁きにツツコむ魔理沙。

(どうする…橙の奴…完全に理性を失ってる…それほどあのメモリが危険だったのか?)

…メモリを使ってる橙に勝てるか?)

魔理沙はロード・ドーパントをどうやって打倒するか考えた。

「コンドコそいただきマスウウウ!!」

ロード・ドーパントは左右の前腕と両脚の間に計3つの車輪状のエネルギー体を形成した。

「ッ!？」

「アハハハハハハハッ!」

ウウウウウウ

ロード・ドーパントが両肩の回転灯がサイレンを鳴らしながら疾走した。

速度を増したロード・ドーパントを、魔理沙は箒に乗り飛ぶことで回避した。

「おいおい……ただでさえすばしっこい癖に更に速くなるとか反則だろ!」

「ウウウウ……逃がさなアアアアアアアアアイ!!」

ロード・ドーパントは口から体組織を吐き出し、赤黒い道を作り出した。

「はあっ!？」

「しゃアッ!」

体組織で作りに出した道をロード・ドーパントは爆走する。

「待てマテエエエ!!」

「クソっ!」

魔理沙はミニ八卦炉を取り出す。

「これでも喰らいやがれ!!マスタースパーク!!」

魔理沙はマスタースパークをロード・ドーパントに向けて放った。

「アハッ」

だがマスタースパークがロード・ドーパントに当たることは無かった。

ロード・ドーパントはすかさず右腕の車輪を前に投げ、マスタースパークを相殺したのだ。

車輪の無くなった右腕には、また新たな車輪が生み出されていた。

「嘘……だろ？」

魔理沙はマスタースパークを相殺された事に自身を無くしそうになった。

その一瞬の隙をロード・ドーパントは見逃さなかった。

「隙アリイイイ」

ドドドドン

ロード・ドーパントは右手の指先から高熱弾を撃ち出した。

高熱弾は容赦なく魔理沙の身体を撃ち抜いた。

「ツ!!？」

身体を撃ち抜かれた痛みに悶える魔理沙。

「アハハアアアッ！」

ロード・ドーパントはそのままスピードを上げ、箒に乗る魔理沙に突撃した。

その衝撃の強さに乗っていた箒は折れた。

「ガハッ」

箒から投げ出され、魔理沙は墜落する。

「アハハハハハハハハ」

ロード・ドーパントは墜落する魔理沙を笑いながら追いかける。

「グツ…グツ…ヤベエ…腕が…」

ロード・ドーパントの体当たりで、魔理沙の右腕は無慈悲にも砕かれた。

「もう鬼ごっこは終ワリイイ?？」

怪我を負い倒れている魔理沙にロード・ドーパントが詰め寄る。

「じゃア…もう食ベテモいいよネエ?」

「ク…ソツ…」

ロード・ドーパントはその生物らしさのない機械的な顔で笑いながら口を開く。

ガシツ

「ガツ」

魔理沙の頭を掴んだロード・ドーパント。

「いただきマアアアス」

ロード・ドーパントは魔理沙の首元目掛け、その鋭い歯を突き立てようとする。

魔理沙は橙を救えない自分の無力さに悔しんだ。

普段は泣かないようにしている魔理沙だが、この時は負けた悔しさと今から喰われる

恐怖で一筋の涙を流した。
そして……

魔理沙はロード・ドーパントの餌食に……

なる寸前だった。

ドオン

「ガッ!?!」

ロード・ドーパントの背中が突然爆発し、魔理沙は開放された。

ドサツ

「クツ…何だ?」

魔理沙はふと空を見ると、そこには異型の存在が浮遊していた。

赤い女性の上半身に芋虫のような下半身をした形状。

顔には眼に当たる部分が存在せず、裂けた口は縫いつけられた状態になっており、そして足のつま先に当たる所に目がついている。

頭には髪の中で燃えるような紅い女性型の人形

左肩に骸骨

右腕のベルト

襟の後ろ部分の顔

左掌の眼等々、今まで出会った妖怪よりも悍ましい姿の異型だった。

「……」

異型はじつと魔理沙を見つめていた。

「何だ…アイツ…ドーパント…だよな？」

「グギギギギ…邪魔スルなあアアア!!」

ロード・ドーパントはその謎のドーパントに高熱弾を撃ち込んだ。

だが謎のドーパントは意図も容易く高熱弾を避ける。

「……フツ」

謎のドーパントの周りに紅い光弾を出現させ、ロード・ドーパントに放つ。

ドンドン

「グツ!?グギヤアア!」

光弾はロード・ドーパントに命中する。

「……」

謎のドーパントは魔理沙の前にまるで守るかのように降り立った。

「あんだ…一体…」

魔理沙は謎のドーパントを見上げながら言った。

「グギギギ……もうイイ……魔理沙のマエにオマエを喰ウ!!」

ロード・ドーパントは再び車輪を出現させ、謎のドーパントと魔理沙に向かって爆走する。

「手始めに魔理沙モロトも轢き殺シテやるうう!!」

「……………」

謎のドーパントはまた光弾を作り出す。

だがその光弾は先程の光弾とは少し違うことを魔理沙は見抜いた。

（これは……魔力が込められてる?……てことはコイツの本体は魔法使いなのか?）

「死ネエエええ!!」

そして謎のドーパントは魔理沙に聞こえない位小さな声で呟いた。

「……………既に死んでるわよ」

謎のドーパントはそう呟くと魔力の籠もった光弾を爆走してくるロード・ドーパントに放った。

光弾は車輪に当たり、ロード・ドーパントはバランスを崩した。

「ナッ!?!」

謎のドーパントはすかさず魔理沙を掴み、その場を飛んだ。

「なっ!? おい!」

「……………」

バランスを崩したロード・ドーパントはそのまま炎に包まれながら跳ね上がった。

「ナアアアアニイイイイイイイ!」

ドオオオオン

跳ね上がったロード・ドーパントはそのまま地面に落ちると同時に爆発した。

「にや……に……」

爆炎から大火傷を負った橙が出てきた。

そしてその場に倒れる。

パキン

橙の握っていたロードメモリはその場で砕けた。

「倒しちゃった……あんた……」

「……………」

バサッ

「おわっ!?!」

謎のドーパントは掴んでいた魔理沙を離れた。

ドサッ

「イツテエエエー……おい！腕折れてんだからもっと優しく降ろせよ！」
「……………」

謎のドーパントは文句を言う魔理沙を無視し、折れた右腕を掴んだ。

「イデデデデデ！冗談だと思ってるのか!?マジで折れてんだよ！離せよ！」
「……………」

謎のドーパントは魔理沙を無視して腕にあることをした。

「ツ!？」

魔理沙は自身の腕の痛みが引いているのを感じた。

「痛みが…消えて…おっ?」

謎のドーパントが腕を離すと、魔理沙は折れた筈の腕を上げる。

「へっ?…何ともない?…折れてた筈なのに…これって…まさか治癒魔法か?…さっきの光弾もそうだったけど…やっぱあんた魔法使いなのか?」

「……………」

謎のドーパントは魔理沙の間を無視すると、浮遊しその場を去った。

「あっ!おいちよつと!」

魔理沙が気付いた時には謎のドーパントはもう見えなくなっていた。

「…何なんだよ…つたく」

魔理沙は倒れている橙の所に向かった。

とある森——

「……………」

先程魔理沙を助けた謎のドーパントは離れた森にて変身を解いた。

その姿は瞳の色と同じ緑のロングヘア、黄色い太陽が描かれた青い三角帽を被り、全体的に青色の装飾がされた服装に青いマントを羽織っており、三日月を象ったステッキを持った女性だった。

ただ普通の女性ではなく、その女性はあるべき筈の下半身が無く幽霊の様に透き通っていた。

女性の名は【魅魔】

かつての魔理沙の師匠兼母親代わりの悪霊である。

「…はあ…やっちゃったわね…介入する気は無かったんだけど…これで組織にとつての裏切り者になったのは確実よね…はあ」

魅魔は溜息をつきながら呟いた。

「まあ……………あの子が無事ならそれでも良いか……………私はずっとここに居るわよ魔理沙…あ

んたが長く生きて人生を全うするその時まで…ね」

魅魔は魔理沙が居るのであろう場所を見ながら言った。

「全く…相変わらず親バカよね…魅魔」

そこに一人の女性が現れる。

その女性は現博麗の巫女である霊夢の着る巫女服に非常に良く似た巫女服を着ていた。

ただ霊夢と違う所も存在する。

霊夢とは違い大きなリボンを着けておらず、巫女服の下に黒のアンダーウェアを着ている。

「お前にだけは言われたくないぞれいか霊?…組織の勧誘を即答で断り、理由が娘の敵になるのは嫌だと断言し追われる身になったお前にだけはな」

「あれ? そうだっけ? まあ霊夢の敵になるのは嫌だし…何より今の霊夢の実力じゃ仮に敵になった時に誤って殺しちゃうから」

女性の名は【博麗霊?】

行方知れずになっていた先代博麗の巫女であり、血縁関係は無いが霊夢の母親でもある人物だった。

「…フン…流石は手加減の出来ない脳筋巫女だな…誤って娘を手に掛けると言っ

る辺りは昔から変わらないな」

「誰が脳筋よ！ 魅魔だつて魔法研究の為に自分から悪霊に成り下がった変態魔法使いの癖にー！」

「なっ!? 変態だど!? お前に変態呼びされる筋合いないわ筋肉バカが！」

「何をおお！ もう許さないわよこの緑もやし！ 絶対成仏させてやる！」

「上等だ掛かつてこいゴリラ女！」

霊？ は御札を取り出した後に拳を構え、魅魔はステッキを構えた。

「お取り込み中の所申し訳ないが…」

「ああー！」

「何よー！」

二人が向いた先に一人の男がいた。

「……Dr. ガイスト」

「誰？ 知り合い？」

「まあ…組織の人間…いや半人半霊よ」

「困りますなあ魅魔殿…組織の者でありながら妨害…ましてや研究材料を倒してしまう

とは…」

Dr. ガイストはニヤけながら言った。

「…娘が喰われそうになつてんのに…動かない母親がいるかしら?」

「娘…貴女と霧雨魔理沙に血の繋がりは無い…ましてや種族も違う…それで親子関係が成り立つ訳…」

「種族とか血の繋がりとか関係無いよ」

Dr. ガイストの言葉に霊?が反応する。

「生まれがどうであれ、血の繋がりが無かろうと家族と言えば家族なのよ…家庭の事情に部外者が入り込むのはどうかと思うけど?」

「…先代博麗の巫女…博麗霊?...貴女も馬鹿な方だ…ボスが気に入っていたのに…誘いを断るとは…まあ私には関係ありませんがねえ」

Dr. ガイストはメモリを取り出した。

【GHOST!】

ガイアメモリからガイアウイスパークが鳴る。

キュピーン

Dr. ガイストは額の生体コネクタにメモリを挿し込んだ。

挿し込んだ額から無数の幽霊が出現し、肉体を作り上げる。

顔は包帯の様な物で覆われ、それを隠すように伸びた黒い髪。

身体は骨をイメージした鎧を身に纏い、腕は継接ぎだらけの腐敗した人の腕。

下半身は黒いボロボロの布で覆われた姿だった。

Dr. ガイストは幽霊の記憶の怪物、ゴースト・ドーパントに変身した。

「お二人共私の手であの世に……いや私の実験体として迎えて差し上げましょう」

「……フン出しゃばるな老害が……お前如きの実験体にされる程軟な生き方してないわよ」

「生き方って……魅魔もう死んでるじゃない」

「うっさいわね！ 霊?! あんたも手伝いなさい」

「仕方ないわね……久々に無敵タッグの復活ね……背中預けたわよ相棒」

「……フン……相棒と呼ぶな」

二人はそれぞれ構える。

Pの遊戯／魔界からの人形師

「ホントに辺り一面の雪景色…絶景には違いないんだけどなあ」

霊夢と魔理沙がドーパントと戦っている最中、紅魔館を出発した来雪と咲夜は雪景色を眺めながら飛んでいた。

「春なのに一面の雪…流石に飽きたわよ…というより来雪…あなたいつの間に飛べるように？」

来雪はフリート・ドーパントにならずとも飛べていた。

「美鈴さんに舞空術を教えて貰ったんだ！何時までもメモリに頼って飛んでる様じゃまだまだってシゴカれた…」

「そうね…一々ドーパントに変身しなきゃ飛べないってのもね」

咲夜は苦笑いしながら言った。

「霊夢達大丈夫…だよね」

来雪は不安そうに言った。

「私よりあなたの方が霊夢と付き合いが長いんだから信じてあげなさいよ」

「…そうだね…うん…ツ…この感じ…メモリが近くにある」

「ツ……そう……じゃあそこに急ぎましょう」

「うん」

来雪と咲夜はメモリの気配を辿る為に一度地面に降りる。

「ふう〜」

来雪達が降りた所に、一人の男が煙草を吸いながら木にもたれ掛かっていた。

「おっ……来たか」

「メモリの気配……あなたがメモリを？」

「ほくん……ホントにメモリの気配が分かるんだな……当然だろ、こちとらメモリの売人だからな……園田来雪……ボスの命令でな……相手して貰うぜ」

「売人……ミュージアムの一員って事ね」

咲夜は男が売人だと知ると睨みつけた。

「おお怖い怖い……俺は横田万……しがない売人だ……紅魔館のメイドさんには悪いが退場して貰うかね」

万がそう言うといつの間にか背後に現れた黒服の男が、咲夜の首目掛けてナイフを振り下ろした。

（貰った）

「ツ!? 咲夜ちゃん!!」

「ザ・ワールド」

ドウウン

カチツ

咲夜はすかさず懐中時計を取り出し時間を止めた。

「奇襲を掛けるならもつと上手くやりなさい」

咲夜は来雪を抱えて、数歩下がった。

「時は…動き出す」

キュウウン

再び時は動き出した。

「ツ!?」

「なっ!?」

万と黒服の男は咲夜達が安全圏にいた事に驚いていた。

「あれ?…これ咲夜ちゃんのか?」

「ええ…リサーチ不足ね…私の能力も調べないで奇襲を掛けるなんて」

「…ふむ…どうやらそうらしいな」

黒服の男は顎を擦りながら言った。

「おいおいクロード…何失敗してんだよ」

「想定外だが問題無い…暗殺が失敗したら次は本格的な虐殺をするまで」

黒服の男…クロードは懐からメモリを取り出した。

「ツ…バットメモリ…まさかそのメモリまで幻想郷にあったなんて…」

「メモリの知識は豊富らしい…さて…殺すとするか」

【B A T T！】

クロードの右の首筋に生態コネクタが浮かび上がる。

そしてクロードは生態コネクタにバットメモリを挿し込んだ。

クロードの周りに無数のコウモリが群がり、形を変えていく。

クロードは蝙蝠の記憶の怪人^{超人}、バット・ドーパントに変身した。

「結局こうなるのね…はあ面倒だが愛花様…ひいてはボスの命令だしなあ」

【C I G A R E T T E！】

万の右頬に生態コネクタが浮かび上がり、万はメモリを挿し込んだ。

挿し込まれた右頬から煙が吹き上がり、形を変えていく。

頭部は燃える煙草の先端になり、身体中に棘の様に変化した紙巻煙草が生えている。そしてその突起から煙が上がっている。

万は紙巻煙草の記憶の怪人^{超人}、シガレット・ドーパントに変身した。

「ふう〜…やっぱ俺好みのメモリだねえ…」

「シガレット…また聞いたことないメモリ…」

「それより煙草臭いわね…私煙草嫌いなものよ」

咲夜は煙草の煙の匂いが嫌いな様で、不快に思っていた。

「なんだよ勿体ねえ…これが良いんじゃないやねえか」

シガレット・ドーパントはそう言うのと煙の質を上げた。

「臭っ」

煙草嫌いな咲夜は思わず鼻を摘んで一歩下がった。

「咲夜ちゃん…無理しなくて良いよ？」

「いいえ…ここで引いたらお嬢様に顔向け出来ないわ…一気に決めましょう来雪…特にあの煙を真っ先に潰すわよ！」

【CHURCH!】

「うん…分かった」

【HEAT!】

咲夜は左手の生態コネクタにチャーチメモリを挿し込み、来雪は左肩にヒートメモリを挿し込んだ。

二人はそれぞれチャーチ・ドーパントとヒート・ドーパント（女体）に変身した。

「そんじゃ始め…」

キュイン

シガレット・ドーパントが仕掛けようとした瞬間に、突然動かなくなり項垂れ始めた。

「ん？万？どうした？」

バット・ドーパントはシガレット・ドーパントに声を掛けた。

しかしシガレット・ドーパントは答えなかった。

「あら？」

「どうしたの？」

二人もその光景を不思議に思った。

「おいーどうし…」

キュイン

詰め寄るバット・ドーパントだったが、シガレット・ドーパントの様に突然動かなくなり頂垂れ始めた。

「えっ?」

「何?何なの?」

すると森の奥から一人の女性が歩いてきた。

「全く…人様の家の近くで騒がないで頂戴迷惑だわ」

その女性はウエーブのかかった短い金髪。

青のワンピースのようなノースリーブに、ロングスカートでその肩にケープのようなものを羽織り、頭にはヘアバンドのような赤いリボンが巻いている姿だった。

「で?…貴女達も…この煩い連中の仲間かしら?」

「へ?あ、いや違います!」

来雪は慌てて変身を解いた。

「……」

来雪が変身を解いたのを見て、咲夜も変身を解いた。

「あら?あなた確か最近幻想入りした紅魔館のメイドよね?」

「ええ…それで貴女は？」

「あらごめんなさい…私はアリス・マーガトロイド…ここ魔法の森に住んでいる魔法使いよ」

「アリス？…どつかで聞いたような…あつ…魔理沙さんが言つてた物を使う能力持ちが確かアリスつて名前だったような」

来雪は紅霧異変当初に魔理沙が言つていた事を思い出した。

「魔理沙…あの白黒魔法使い…まあ間違つては無いわね…人形を操る程度の能力…まあ人形と言つても人形だけを操る能力じゃないわよ…この様に」

アリスが指を動かすと、二体のドーパントがぎこちない動きをし始めた。

「魔力を込めた糸を使って生物すらも操る事が出来る…人形使いより傀儡師の方が近いかしら？…それで？私は名乗つたわよ？」

「あつごめんなさい！私は園田来雪つて言います！」

「…十六夜咲夜…紅魔館でメイド長を仰せつかつております」

アリスは少し微笑みながら顎を擦った。

「ふくん…園田来雪…あの鴉天狗の新聞に載つてた新米…ねえ…」

「あのお…アリスさん…出来ればそのドーパントを倒したいのですが…」

「あらごめんなさい…でもそれは出来ない相談ね」

「え？」

アリスは笑いながら言った。

「経緯はどうあれ…折角外に出たんですもの…少し運動に付き合って貰うわよ…コレの力も試したいし」

アリスが操る上海人形がある物を持って浮遊していた。

「ツ!?パペティアーメモリ!?どうしてそれを!？」

「そうね…いきなりやって来て私の人形を壊した連中が持ってた物を拝借したのよ…魔力とは違う別の力が働いてたから興味深くてね…運動がてら実験に付き合っで貰うわよ」

【PUPPETEER!】

アリスはそう言うのとメモリを起動する。

「待って下さい!生態コネクタも無しに使ったら大変な事に!」

「あらそうなの?でも大丈夫よ?私は純粋な魔法使いじゃなくて魔界出身の魔族だから…少しの毒なら耐性を持つてるし…最もリスク無しの実験に意味なんて無いじゃない?」

アリスは来雪の説得に応じず、メモリを下顎に挿し込んだ。

そして白いスーツに黒いズボンという道化師のような身体と悪魔のような黒い頭部を持った姿に変わった。

アリスは人形遣いの記憶の怪人^{超人}、パペティアー・ドーパントに変身した。

「成る程ね…この二体もさっきので変身した姿なのね…面白い…実に面白いじゃないの」

アリスの魔法の糸とパペティアーの糸が融合し、先程のぎこちない動きが嘘のように二体のドーパントは軽々と動き始めた。

「ちよつと悔しいけど操作技術も飛躍的に向上している…これなら私の悲願達成も…」

「咲夜ちゃん…パペティアーの糸に気を付けて」

「わかってるわよ」

【CHURCH!】【HEAT!】

二人はすかさずドーパントの姿に変身した。

「あら…さっきの姿…貴女達も持ってたのね…まあ予想はしてたけど」

パペティアー・ドーパントは指を動かす。

するとパペティアーの能力で操られている二体のドーパントが二人に襲い掛かる。

「ハアツ！」

ヒート・ドーパントの火球が二体のドーパントに直撃し、小規模な爆発が起きる。

「咲夜ちゃん！パペティアーの戦闘能力は殆ど無い！本体を直接叩いて！」

「了解したわ！」

チャーチ・ドーパントは光の剣を作り出し、パペティアー・ドーパントに向けて投げつける。

「甘い」

ヒュン

ドオオオオン

パペティアー・ドーパントが右腕を引つ張ると爆煙からシガレット・ドーパントが飛び出し、光の剣を代わりに受けた。

光の剣を受けたシガレット・ドーパントは傷だらけになっている。

「クツ」

「人形遣いのメモリを使ってるのよ？対策くらいするわよ…最も直接攻撃が出来ない訳じゃない…人形師とはいえ私も魔法使い…魔理沙程強力な攻撃魔法は無いけど…それなりに攻撃魔法も使えるのよ？」

ヒュン

パペティアー・ドーパントは先程まで片手で二体のドーパントを操っていたが、両手に変えた。

「人形師の戦い方…見せてあげるわ」

パペティアー・ドーパントは左手の指を動かす。

するとバット・ドーパントが宙に浮かぶ。

「つまさか!?!」

ヒート・ドーパントの嫌な予感は的中する。

「ウオオオオオオオオ!!」

バット・ドーパントの雄叫びと共に超音波が放たれた。

「ウツクツ何よこれ!?!」

二人は耳を抑えた。

「隙ありね」

「…爆煙弾」

右手の指を動かし、シガレット・ドーパントの煙を銃弾の様に射出した。

「ツ！ザ・ワールド！」

ドウウン

カチッ

チャーチ・ドーパントは自身の能力で時間を止めた。

「危なかったわ」

ヒート・ドーパントを抱えると、爆煙弾の軌道から逸れた。

「時は動き出す」

キュウウウン

「あら？ 軌道が逸れた？」

「ありがとう咲夜ちゃん！」

「あの人形師…強いわね」

二人はパペティアーに適合しているアリスの異様な強さに面食らっていた。

「さてと…試運転はこれくらいにして…少し本気で行くわよ？」

パペティアー・ドーパントが両手の指を動かした。

二体のドーパントが再び襲い掛かる。

「何度も同じ手が通用すると…」

「そうかしら？」

チャーチ・ドーパントの腕をシガレット・ドーパントが掴んだ。

「なっ…しまっ」

「掛かった」

キュイン

掴まれたチャーチ・ドーパントの動きが止まり項垂れ始めた。

「咲夜ちゃん！」

「さて…これで手駒は三体ね」

二体のドーパントに加え、チャーチ・ドーパントすらも手駒になってしまった。

「時間を操る能力…成る程さつき軌道が逸れたのはそういうことね」

「ッ！」

「この姿は便利ね…操る手駒の能力すら把握出来るんだもの」

（最悪だ…どうする…どうすれば咲夜ちゃんを助けられる？）

ヒート・ドーパントは考えたが、名案が浮かばなかった。

「まさか…ここまで適合した人が居るなんて…」

「人？違うわよ…さつきも言ったでしょ？私は魔法使いで…人形師よ」

パペティアー・ドーパントが両手の指を動かした。

そしてチャーチ・ドーパントを含めた三体のドーパントが一斉に襲い掛かる。

「クッ」

場所は変わり、組織の追手であるゴースト・ドーパントは苦戦していた。

「フッ」

ゴースト・ドーパントの懐に、霊繋が入り込んだ。

そして得意のパンチを繰り返そうと構える。

「碎けるー！」

「フッ」

ゴースト・ドーパントは霊体化し、パンチは空振った。

「ああもう面倒な相手ね！」

「筋肉馬鹿が！仮にも霊体だぞ！殴りに掛かる馬鹿が何処にいるー！」

「此処にいるー！」

「そうだったなクソ！」

霊繋の反応に魅魔は悪態をついた。

「まさかこれ程とは…私はどうやらあなた方を見縊っていた様だ」

ゴースト・ドーパントは一定の距離を保ちながら霊体化を解除した。

「はあ…Dr. ガイスト…コイツと私が一緒に戦っている時点でお前の負けだ…諦めて組織に帰るんだな」

「おっ？ 何魅魔？ 私とコンビ再結成してもしかして喜んでる？」

「お前は黙れ！」

「……いやはやなんとも……喧嘩するほど仲が良い……とはよく言った物ですな……まさか此処で切り札を出す羽目になるとは……」

「……何？」

魅魔はゴースト・ドーナントの言う切り札が分からなかった。

「切り札？ 霊体化が切り札じゃないわけ？」

「まさか……霊体化がゴーストメモリの真の力ではない……ゴーストメモリの真の力……それは……フーン！」

ゴースト・ドーナントは両手を合わせた。

すると地面から棺桶の様な物が3つ出てきた。

「ツ！」

「何だ？ 棺桶だと？」

「フフフフ……博麗霊繫殿……十二代目博麗の巫女である貴女はご存知の筈……」

ガガガガ

ドスン

棺桶が開くと中から三人の女性が出現する。

三人共肌は薄黒くヒビだらけで、まるで屍の様だった。

その中の一人を二人は見覚えがあった。

「はあっ!? 先代!? 米亜理さん!? 何で棺桶から!？」

「行方不明になったって聞いたけど……ちよつと待つて……米亜理さんもだけど……あの二人……まさかつ!？」

「そのまさか……ですよ」

ゴースト・ドーパントがその答えを言った。

「初代博麗の巫女……博麗初夢……八代目博麗の巫女……博麗靈斬……そして十一代目博麗の巫女……博麗米亜理……ゴーストメモリの真の力……それは死者の魂を使役するこの能力にある!？」

ゴースト・ドーパントが棺桶から出したのは、楽園を守護する歴代博麗の巫女達であった。

Gの切り札／蘇りし樂園の巫女

春雪異変が起こる数日前に遡る。

魔法の森にてギア・ドーパントこと藍原愛花は、空を眺めながらブーツとじていた。

「……………」

そんな彼女の元に一人の男性が訪れる。

「愛花様」

「ん？…八城？」

その男の名は八城やしろう一騎。

組織に所属する準幹部の一人である。

「ボスより『裏』 定例会議の出席を言付かっております」

「ん…分かった…良いよ」

愛花の返答を聞くと、一騎は懐からメモリを取り出した。

【FORTRESS!】

メモリを起動し、ガイアウイスパーが流れる。

一騎の額に生態コネクタが出現し、フォートレスメモリを挿し込んだ。すると一騎の体は変化した。

砦の様な体――

大砲や投石機が散りばめられた手足――

そして体の中央に門の様な突起物が付いている。

一騎は要塞の記憶の怪人^{超人}、フォートレス・ドーパントに変身した。

「ではこちらへ愛花様……他の幹部も『裏』幻想郷でお待ちです」
「ん」

フォートレス・ドーパントが中央の門を開くと、愛花は門の中に吸い込まれ消えた。

『裏』幻想郷

それは幻想郷の裏側の世界。

フォートレス・ドーパントの門を入口にし、世界^{そしき}に所属する幹部達が集まる異空間である。

幻想郷に散らばるガイアメモリは此処で製造されている。

「愛花…漸く来たか」

「ん…来た」

幻想郷の博麗神社がある場所には「裏」幻想郷の幹部達が「裏」定例会議を行う為の城が建てられており、ボスの命令で召集されたシルバー幹部及びゴールド幹部達が集まるのだ。

「遅いんだよガキンチョ…もう少しで姉貴に八つ当たりされる所だっただろうが」

暴君の記憶のメモリ適合者

もんどりゅうじ

門藤龍司

「龍司…その程度で私があんたに八つ当たりなんかするわけ無いでしょ…適当な事言つてると潰すわよ」

細胞の記憶のメモリ適合者

おおくらさか

大倉冴香

「相変わらず野蛮な姉弟ですねえ…二人共カルシウム採った方が良いんじゃないですか？」

季節の記憶のメモリ適合者

にのみやふゆき
二乃宮冬雪

「止せよ二乃宮…言った所で無駄だ…無駄な体力を消費するのがオチだ」

螺旋の記憶のメモリ適合者

さざぬまむつき
鷺沼夢継

「ええい貴様ら！そろそろ黙らんか！ボスがそろそろお見えになるのだぞ!!」

地震の記憶のメモリ適合者

とつてつみんぎ
饗養明忌

「…愛花ちゃん…こつち席空いてるから座つてね」

審判の記憶のメモリ適合者

庭瀬巧にわせたくむ

「ん…ありがとう巧」

愛花は巧の言う通り、席に座った。

「全く貴様らと来たら…出会い頭に喧嘩ばかり…いい加減にしろー!」

「しょうがねえだろうが…シルバー幹部と言つても俺達是一般兵と同じ扱いだ…功績を上げなきゃ明日すら危うい…馴れ合つてる暇がねえんだよ」

明忌の言葉に夢継は反論した。

「そう言えば冴香さん…貴女エニグマメモリを紛失したんですつて? ボスから頂いた貴重なメモリを奪われるなんて情けないわねえ」

「あつ? テメエ姉貴に文句でもあんのかコラア!」

「止めなさい龍司…二乃宮の言つてる事も一理あるからね…あのメモリは私には扱いが難しいと判断した結果よ…お陰で良いデータが取れたしね」

冬雪の皮肉に過剰反応する龍司を、冴香は止めつつ報告した。

「…ねえ愛花ちゃん…来雪お姉ちゃんどんな感じだった？」

「…そんなに強くない…でもまだまだ成長中かな」

巧の問に答える愛花。

その時、三人の人物が入ってきた。

「おいおい相変わらずバチバチしてんなあ…まつその方がらしいっちゃらしいか」

友達の記憶のメモリ適合者

小野塚克巳おのづかかみ

「あらあら…またいつものかしら？懲りないわねえ」

嫉妬の記憶のメモリ適合者

蘆屋董香あしやとうか

「待たせたね…それじゃあ始めよつか…裏 定例会議を」

歴史の記憶のメモリ適合者・「裏」幻想郷ボス
冴月麟さつきりん

ゴールド幹部の二人とボスである麟が来たことにより、先程まで騒いでいたメンバーが黙った。

「冴月麟様…御壮健で何よりです」

明忌は立ち上がり、頭を下げた。

「うん…僕は何時でも元気だよ…ありがとうね明忌…さてと早速始めようか…克巳…その後の来雪はどんな感じかな？」

「そうだなあ…：現在は紅魔館のメイド見習いをしてるみたいだな…紅美鈴の指導の元メモリに頼らない戦闘訓練も欠かさず行っている」

克巳が報告書を見ながら来雪の様子を話した。

「そっか…：今回は紅魔館のメイドになったんだね」

「まあ前回は春雪異変で終わってしまいましたね」

董香が苦笑いしながら言った。

「それはまあ…：今回はそうならないように色々やらないとね…：愛花…：売人達の様子はどうかな？」

「ん…問題無い…着火の報告だと人里でもメモリの流通が始まつてる…このまま行けば地上はメモリ使用者で溢れるのも時間の問題」

麟の間に、愛花は立ち上がり報告する。

「そう…順調の様だね…夢継…執行チームの様子は？」

「今の所問題無い…ただチーム Aアルファの連中が不満みたいでな…その内来雪にちよつかいを掛けるかもな」

夢継も立ち上がり、報告する。

「チーム Aアルファ…フェンの所だね…まあ良いよ…来雪の成長を促進するいい機会になるだろうし…さて…春雪異変が始まるまで残り数日…各自万全の体制で臨むように」

『御意』

「分かりました」

「ん」

巧と愛花以外は同時に返事をする。

「さて…次は…」

麟が次に進めようとした時——

「裏、定例会議中に申し訳ありません」

そこに入ってきたのはD r. ガイストだった。

「ガイストテメエ！勝手に何入って来やがる!？」

夢継がD r. ガイストを睨みながら叫ぶ。

「申し訳ありません夢継様…実は麟様に進言したい事がございます」

「おい…テメエ誰に言ってるのか分かってんのか!？」

「良いよ夢継」

D r. ガイストに掴み掛かろうとする夢継を止める麟。

「ボス!？」

「それで？僕に進言したい事って何かな？」

麟はD r. ガイストを見つめながら言った。

「ハッ…麟様は私の持つメモリについてご存知でしょうか？」

「君のメモリ?…確かゴーストメモリだったかな？」

「左様に御座います…実はゴーストメモリの能力実験を行っているのですが…如何せんこれといった魂が見つからなく…麟様のお力添えを頂けますよう、お願い申し上げます」

D r. ガイストは跪きながら言った。

「おいガイストテメエ!」

「夢継…少し黙ってようか？」

声を荒げる夢継に対して、麟は威圧を掛けながら言った。

「ッ！申し訳ありませんボス！」

「……さて：ガイスト……僕に何をさせたいんだい？」

「ハッ……麟様にとある魂を集めて頂きたいのです」

「ふ……ん……で？誰の魂かな？」

麟の間にD r. ガイストは答えた。

「……三代目博麗の巫女……博麗幻夢……十一代目博麗の巫女……博麗米亜理めありに御座います」

「ん？三代目と十一代目だあ？確かまだ生きてるよなそいつ等」

D r. ガイストの答えに、克巳は疑問を抱いた。

「はい……克巳様の仰る通り……三代目と十一代目はまだ生きております……であるからこそ麟様のお力……ヒストリーメモリの力をお貸し頂きたいのです」

「……成る程ね……確かにヒストリーメモリを使えば三代目と十一代目が死んだ歴史から魂を持つてこれるね……でもどうして博麗の巫女何だい？」

「幻想郷が出来てから今まで幾度となく、楽園を守護してきた博麗の巫女ならば……我等の手駒としても……そしてメモリ実験の被検体としても使用可能と考えております……ゴーストメモリによって蘇らせた者達は皆不死身……多種多様なデータが採れるかと……」

「……」

麟は少し考える。

そして答えを出した。

「……分かった……良いよ……三代目と十一代目だけで良いんだね？」

「はい……僭越ながら、三代目と十一代目……そして先代に現巫女以外は既に準備が整っておりませぬ」

「抜かり無いね……分かった……じゃあ早速取ってくるかな……そんな訳だから……今回の『裏』定例会議はお開きね……みんなしつかり働くように」

『御意』

「分かりました」

「ん」

全員が答えると、麟は克巳と董香を連れて出て行った。

「……ガイスト……テメエ」

夢継がD r. ガイストを睨み付けた。

「誠に申し訳ありません夢継様……しかし博麗の巫女の力が強大なのは事実……手駒に加えられるれば『裏』幻想郷にとっても利益になるかと」

「確かに……その爺さんが言う事も一理あるわね」

D r. ガイストの言い分に冴香も肯定した。

「何より面白そうじゃない…楽園の巫女が自分達が守ってきた楽園に仇なす存在になるなんて…ゾクゾクするわ」

「出た出た姉貴の悪い性癖が…」

「では…私は復活の儀式の準備を…」

そう言うのとDr. ガイストは出て行った。

「ねえ愛花ちゃん…どうなるのかな？」

「……さあ？」

そして数時間後――

『裏』 幻想郷にあるDr. ガイストの研究所に、麟、克巳、董香が訪れた。

「良くいらつしやいました！我が研究所へ！」

「御託は良い…それで？そこに転がってんのはなんだ？」

克巳が指差したのは、研究所の敷地内に転がっている十一人の女、子供だった。

「あれは器ですよ…死者の復活…そうですね…外の世界の書物に良い名前がありましたな…確か…穢土転生でしたな」

（それ…書物というより漫画じゃない？）

元ネタを知っていた董香は苦笑いしていた。

「今後穢土転生と呼びますが…ゴーストメモリによる穢土転生を行うには必要な物が御座います…一つは蘇らせる死者の魂…そしてもう一つがその魂を入れる器…所謂生け贄です」

「へえ」

「書物に描かれていた穢土転生は復活させる者のDNAが必要でしたがゴーストメモリの能力にDNAは必要ありません…その者の魂さえあれば事足りるのです…ですが魂を実体化させるとなると…私の能力では不十分でした」

D r . ガイストは三人に報告書を渡す。

「報告書にも記載されている様に、実体化させる事は可能でしたが…直ぐに崩れてしまった…そして再び冥界に誘われてしまい…そこで私は考えたのです…あの書物に描かれていた様に器を用意すれば可能ではないかと！」

報告書には成功例が幾つも書かれていた。

「試しに色々と亡霊を復活させてみましたが…器を用意した者達は復活出来たのです！そこで私は博麗の巫女達を穢土転生させようと考えた…現博麗の巫女…博麗霊夢は歴代最高の巫女と呼ばれている…そんな博麗霊夢がメモリの力をもし使ったとしたら？我々にとっても無視できない案件かと」

「そうねえ…それはそれで少し面倒ね」

「まっ前の段階では無かったな？」

「そうだね…あり得ない話ではないね」

三人は報告書を見ながら言った。

「博麗霊夢は脅威になりかねない…ならばどうするか…あの者の前任者達をぶつけられれば良い…私はそう結論付けたのです」

「極端過ぎだろ」

D r. ガイストの発言に苦笑いする克巳。

「さて…では始めるとしよう…麟様がお持ちになられた三代目と十一代目の魂も早速使わせて頂きます」

「いやあ大変だったよ…あの二人中々死んだ歴史が見つからなかったんだ」

「お手数をお掛けし申し訳ありません」

【GHOST!】

ガイアメモリからガイアウイスパーが鳴る。

キュピーン

Dr. ガイストは額の生体コネクタにメモリを挿し込んだ。
Dr. ガイストはゴースト・ドーパントに変身した。

「さて…では御覧頂こう！」

器となる女、子供の真上に十一の魂が浮遊する。

「秘術・穢土転生！」

ゴースト・ドーパントは両手を合わせた。

（あつ…名前もう穢土転生で決まりなのね）

董香は能力の名前が穢土転生に決まった事に苦笑いする。

十一人の女、子供の身体に魂が重なった。

すると彼女達の身体に塵の様な物が纏わり付き始めた。

『アアアアアアアアアアアアアアアア！』

塵に纏わり付かれた彼女達は呻き声を上げながら全身を包み込まれる。

「さあ！遂に来ますよ！！」

体を包んだ塵が形を変え始める。

そして白目が黒ずみ、体の各所に罅が見られる巫女の姿になった。

「歴代博麗の巫女の復活です！！」

「裏」 幻想郷にて樂園を守護してきた博麗の巫女達が復活した。

「……これは……一体何が？」

初代博麗の巫女

博麗初夢^{ういむ}

「私は……どうして？」

二代目博麗の巫女

博麗次夢^{つくむ}

「何よ何よ……どうなってるの？」

三代目博麗の巫女

博麗幻夢^{げんむ}

「えっ!?!何?何これ?」

四代目博麗の巫女

博麗夢陽むよう

「おいおい…どうなってんだこりゃ?」

五代目博麗の巫女

博麗回夢かいむ

「あら?…私は…あの人に看取られて…それで…」

六代目博麗の巫女

博麗霊結れいゆ

「……何ですかこれ…私は…」

七代目博麗の巫女

博麗夢蟲むじこ

「む？…何じゃ？…わしは死んだ筈じゃが？」

八代目博麗の巫女

博麗靈斬れいき

「あら？…此処は何処ですか？」

九代目博麗の巫女

博麗美靈びれい

「此処は…蘇った？…いや…死んだまま喚ばれた様だな」

十代目博麗の巫女

博麗狂夢^{きようむ}

「ほえ?…何だいこりや?…ええつと…落ち着こうか…何だこりやあああああ
!」

十一代目博麗の巫女

博麗米亜理^{めあり}

「おいおい…個性派揃いだなこりや…特に十一代目」

「…思っていた巫女と違いますね」

克巳と董香は十一代目のキャラに戸惑っていた。

「…貴女は…初夢さん?」

「ツ…そういう貴女は…次夢ちゃん…」

次夢は隣に居た初夢を見て驚いた。

「何なのこれ?何で先代と先々代が居るわけ?」

「それを言うならあんたもだぜ三代目…あんた何で死んでんだい?」

幻夢が次夢と初夢を見てツツコんだが、回夢がそれを更にツツコんだ。

「何ですかこれ…ああ修羅場の予感…」

「ていうか何ここ研究所?…は!遂に私何処かの組織に捕まった!?!おのれ深〇棲〇許すまじ!!」

「おまえさん何訳分からぬ事騒いでおるのじや?」

夢蟲はネガティブになり、まるで意味不明な事を騒ぐ米重理にツツコミを入れる霊斬。

「……こ、個性的な人達…だね?」

麟は苦笑いしながらゴースト・ドーパントを見つめた。

「…んんツ!博麗の巫女達よ」

『?』

「私はDr. ガイスト…この姿の名はゴースト・ドーパント…お前達を復活させたのは私だ…お前達はこれから我等『裏』幻想郷の手駒として尽くして貰う」

「はあ?いきなり何言ってるの?頭パープリンなんですか?」

幻夢が自分の頭を指さしながら言った。

「ドーパントだかトーバンジャンだか知らんが…要は敵って事じやろ」

霊斬が自身の愛刀・宝桜ほうおうを抜こうとする。

だががしー

「…む？…抜けぬ…これは」

「お前達の人格及び行動全ては私の管理下にある…故にお前達が私に齒向かうこと等…無駄な事だ」

（成る程…あやつ術か…ふむ…もう少し泳がせておくとするか…この程度の力…何時でも解けるからな）

狂夢は心の中でそう考えた。

「ふむ…厄介な術じゃな」

靈斬は宝桜から手を離す。

「おーほっほっほっほっほっ！それにしても経緯はどうあれ…これだけ巫女が揃うなんて素晴らしいですわね！」

「じゃじゃじゃ…相変わらずな人だな美靈さんや」

「ええ…私は何時如何なる時でも平常ですわ！」

美靈のポジティブさを見て笑う狂夢。

「まあ…何れ術が解ける時が来る…それまでの辛抱だな」

「あら…回夢さんもいらつしやっただんですね？」

「霊結そりやねえだろ…」

「術が解ける時が来る…あり得ませんな…私の穢土転生は完璧だ…お前達は我等の目的

の為の手駒として動いていれば良いのだ」

ゴースト・ドーパントの言葉に歴代博麗の巫女達は睨み付けた。

そしてそんな彼女達を代表して、初代博麗の巫女である初夢が口を開いた。

「Dr. ガイストさん…でしたか…一つだけ忠告しておきますね」

「ふむ…忠告と…して…何かな？」

「……余り博麗の巫女を嘗めないで下さい…何れあなたは後悔する事になる…私達全員を蘇らせた事を…」

『ッ！』

初夢から放たれた威圧感で、ゴースト・ドーパントは疎か、麟達三人すら戦慄する。

「ふ、ふむ…忠告痛み入る…だが今の状況が覆らないのも事実…その時までお前達は待機している」

ゴースト・ドーパントが言うと、博麗の巫女達の背後に棺桶が出現する。

博麗の巫女達はそのまま棺桶の中に収納された。

Gの実験／暗躍する者達

チャーチを含めた三体のドーパントを操るパペティアー・ドーパントの猛攻に、ヒート・ドーパントは大苦戦していた。

「クツ……ここまでパペティアーの力を使いこなせてるなんて……」

「フフフ……少しの運動のつもりだったのだけど……なんか楽しくなってきたわね」

パペティアー・ドーパントは笑いながら、ドーパント達を操る。

「さあさあ踊りなさいな！」

「ツ！」

バット・ドーパントが空を飛び、シガレット・ドーパントが煙弾を放つ。

「クツハアツ！」

ヒートの力で炎の壁を作り、煙弾を防ぐ。

だが——

ジャン

「アアツ」

ヒート・ドーパントの後ろに突然現れたチャーチ・ドーパントが、光剣で斬り裂いた。

「ウオオオオオオ！」

「ウツ…アアツ」

バット・ドーパントの超音波が、ヒート・ドーパントを苦しめる。

「もう終わりかしら？」

「ウツ…」

パペティアーとの適合率が高いのか、本来以上の力で押されている。

「魔理沙から貴女の事を聞いて少し期待してたのだけど…期待外れね」

パペティアー・ドーパントが指を動かす。

それと同時に三体のドーパントがヒート・ドーパントに襲い掛かる。

（マズイッ！）

ヒート・ドーパントは指先に炎を溜めるが間に合わない。

「終わりね……」

「終わらせませんよ！」

ジャキン！

チャーチ・ドーパントを操る糸を乱入して来た者が切り裂き、解放させた。

「ッ！」

（今ッ！）

パペティアー・ドーパントの隙を狙い、溜めた炎を二体のドーパントに放つ。

ドオオオオン

二体のドーパントは爆炎に包まれる。

「クツ…邪魔が入ったわね…誰かしら？」

ヒート・ドーパントの前に一人の少女が立っていた。

「紗綾さん！」

「大丈夫ですか来雪さん？」

それは橙を心配して辺りを探していた紗綾だった。

「貴女…紗綾じゃない」

「えっ？…この声…もしかしてアリスさんですか？」

紗綾はパペティアー・ドーパントの声を聞いて答えた。

「紗綾さん…アリスさんと知り合いなんですか？」

「ええまあ…アリスさんの作る人形はどれも可愛くて…私も幾つか作って貰ってたんですよ…つてそうじゃなくて！アリスさん…貴女もドーパントに…」

「ええ…まあ私は実験の一環でなつたに過ぎないけど…邪魔するなら貴女も怪我するわよっ。」

パペティアー・ドーパントは残った二体のドーパントを操る。

「気を付けて紗綾さん…パペティアーの能力は…」

「ええ分かつてます…アリスさんらしい能力ですね」

紗綾はそう言うパペティアー・ドーパントに向かつて走り出した。

「返り討ちにしてあげるわ」

二体のドーパントが紗綾に襲い掛かる。

だが…

ジャキンジャキン

紗綾が二体のドーパントの横を通り過ぎると、突然動かなくなり倒れた。

「ッ!？」

「遅い!」

紗綾の爪が、パペティアー・ドーパントの喉元を捉えていた。

「パペティアー…人形遣いのメモリですからね…糸を切っちゃえば本体は無力です…幾

ら魔法使いのアリスさんでも喉元を捉えられては魔法も迂闊には使えないでしょ？」

「……はあ……犬妖怪は相変わらず速いわね……分かったわ……降参よ降参」

そう言うとパペティアー・ドーパントはメモリを摘出し、元のアリスに戻った。

「でも残念ね……折角良い研究材料が見つかったというのに」

アリスはパペティアーメモリを見つめながら言った。

「……あつ！アリスさん！体の具合はどうです!?何もなつてないですか!?」

ヒート・ドーパントがアリスに駆け寄り、具合を確かめる。

「別に何とも無いわよ？生態コネクタ無しメモリの副作用とやらも特に感じられないわ」

「えっ!?アリスさん生態コネクタ無しでドーパントに変身してたんですか!?」

アリスの答えに紗綾も心配そうにアリスの具合を確かめ始めた。

「だからそんなに心配しなくても大丈夫よ……そもそも魔界人は病気とかそういうのになり難い体質だし……」

自身の具合を確かめる二人を宥めるアリス。

そこに――

「何勝手にほのぼのとした光景作つてんだオメエ等!!」

先程までアリスによって操られていた二体のドーパントが立ち上がり、三人を睨み付

けていた。

「あらもう起きたのね」

アリスが二体のドーパントを見て言った。

「様子見が目的だったが関係ねえ!!オメエ等此処で殺す!」

普段は大人しいシガレット・ドーパントが激怒していた。

「殺す? 貴方達如きが私を殺せると思ってるのかしら?」

アリスは殺気立つ二体のドーパントを嘲笑う。

「ツ??調子に乗ってんじやー!」

シガレット・ドーパントがアリス達に向かって駆け出そうとした瞬間だった。

ボコッ

突然二体のドーパント達が立つ地面が水の様になり、二体の体を引き摺り込もうとした。

「なっ!?!何だこりゃ!?!」

「クッ! 動けん!」

その光景を見た三人は驚愕した。

「えっ!?!何!?!」

「アリスさん? これ貴女の魔法ですか?」

「違うわよ……私じゃない」

紗綾はアリスに尋ね、違うのを確認すると辺りを見回した。

「何なんだよチクシヨウ！俺達はまだ！」

「クソ……クソオオオ!!」

遂に二体のドーパントは地面の中に完全に飲み込まれた。

「……………」

アリスが二体の立っていた地面まで歩き、確かめる。

「普通の地面ね……流砂でも起きたの？……………それにしては不自然過ぎる……」

「どういう事……なの？」

ヒートメモリを摘出し、来雪は元の姿に戻ると紗綾を見つめた。

「……………」

紗綾は辺りを見回し、原因を探る。

「……………ん？」

紗綾がある者を見つけた。

木の木陰にそれは立っていた。

赤茶色の髪に緑色の瞳、背中には昆虫を思わせる茶色の翅がある褐色肌の少年の姿が

あった。

だが皮膚が所々罅だらけで尚且つ白目の部分が黒ずんでいた。

「……………」

少年は無言で来雪達を見つめていた。

「あれは…」

「え？」

「……………見た所妖精ね…でも普通の妖精には思えない…」

アリスはその少年が妖精だと進言したが、彼女が知る妖精とは異なる事を疑問に思っていた。

「……………」

少年は木の木陰に隠れてしまった。

「…待ちなさい!」

紗綾が持ち前の脚力で、少年の隠れた木に一気に近づいた。

だが——

「ツ!…消えた?」

隠れた筈の少年の姿はそこには無かったのだ。

「紗綾さん!」

紗綾を追って走ってきた来雪とアリス。

「…突然消えた…間違はなくこの木の陰に隠れた筈なのに…」

「貴女の速さなら隠れる前に捕まえる事は出来た筈よ？」

「私もそのつもりでした…でも見た時には既に居なかつたんです…まるでそこに端から居なかつた様に…」

（妖精にそんな芸当が出来るかしら？…紗綾の速さはあの烏天狗程ではないにしてもそれなりに上位の筈…どういう事？）

アリスは考えるが、一向に答えが出なかつた。

ババババババババ

「クツ…相変わらず容赦が無いなあ」

場面は変わり、ゴースト・ドーパントと戦っている霊繫と魅魔——

だがゴースト・ドーパントが呼び出した三人の博麗の巫女によつて戦況が逆転していた。

魅魔の魔法障壁で何とか防いでいるが、十一代目の博麗米亜理の持つ銃による銃撃に苛まれている。

「あんたの前任者でしょ！何とかしなさいよ！」

「無茶言わないでよ！此処から出たら蜂の巣にされるわよ！」

喧嘩する二人――

その隙が命取りだった。

「……………」

二人の背後に八代目の霊斬が愛刀を構え現れた。

『ツ!?!』

「博麗ノ型・陰陽輪」
おんみょうりん

刀から放たれる白黒の陰陽玉の二つの斬撃が、二人を襲った。

「魅魔退いて!」

魅魔の前に霊繫が立つ。

「博麗式格闘術肆ノ型・絢爛」

博麗式格闘術――

それは十二代目博麗の巫女・博麗霊繫が独自に編み出した戦闘技術。

六つの型があり、戦況に応じて使い分ける。

肆ノ型・絢爛は簡単に言えばカウンターである。

八代目の斬撃をまるで踊っているかの様に受け流し、そのまま攻撃した八代目に返

す。

ザンツ

攻撃を返された霊斬は上下真つ二つになった。

「ナイスよ霊繋！」

魅魔は障壁を張った右手はそのままに、左手に魔力を溜めた。

「マスタースパーク！」

ドウウウウン

真つ二つになった霊斬に向けてマスタースパークを放つ魅魔。

しかし霊斬の前に初代巫女・初夢が現れる。

「……………」

初夢が右手を突き出すと、マスタースパークは初夢の霊力だけで打ち消された。

「なっ!？」

「魅魔のマスタースパークを霊力だけで!?!…これが初代様の力!？」

真つ二つになった霊斬の体はみるみる再生し、臆て元に戻った。

「魅魔……これマズくない?！」

「マズいなんてもんじゃないわよ……最悪よ」

「フツフツフツ……流石は歴代楽園の巫女……復活させて正解だったなあ」

ゴースト・ドーパントはその様子を嘲笑いながら見ていた。

そんなゴースト・ドーパントの横の土が盛り上がり始めた。

「ん？」

土は形を変え、先程まで来雪達の前に姿を見せていた少年になった。

「おお…帰ってきたか…」苦勞

「?…あれは…妖精？」

「妖精だ…だが巫女達と同じ様な見た目だな」

靈繫と魅魔は現れた少年を見て言った。

銃撃を辞めた米亜理は続いてコンバットナイフを生み出し、靈繫に向けて投擲した。

「ッ！」

顔面に刺さる寸前にコンバットナイフを掴む靈繫。

「危あつぷなあ…米亜理さん完全に殺しに来てるよ」

「先代だけじゃないだろ…」

靈繫と魅魔の周りを三人の巫女が取り囲む。

「フッフッフッ丁度いい…ツッチー…お前も混ざれ」

「……」

少年…ツッチーは無言で歩き出す。

「ツッチー…名前からして土妖精か…何故そいつの味方をしている？」

魅魔はツッチーに呼び掛ける。

妖精とは本来人間の子供の様に遊び回ったり、人を脅かす等悪戯好き…だが人を殺そうとする様な者は殆ど存在しない。

魅魔はそれを知っているが故に呼び掛けた。

だがツッチーは無言だった。

まるで生気を感じられない人形の様な表情で、二人に迫っていた。

「無駄だ…その妖精も歴代巫女と同じ…私の穢土転生によって蘇らせた駒に過ぎん」

「穢土転生？」

「蘇らせただと？…馬鹿な…妖精に死の概念は無い…自然があれば何れ復活する…そこそ自然が無くならない限り永遠に消えることの無い存在だぞ！」

妖精が死ぬ事は珍しい事じゃない。

死と言ってもゲームで言う一回休みになる感覚で、数時間あればまた出現する存在。

それが幻想郷に住む妖精達…

幻想郷に住む者達からの印象なのだ。

魅魔や霊繫も妖精とはそういう存在と認識していた。

だが中には例外もいたのだ。

「このツッチーは例外だ…この妖精は呪いによって二度と生き返る事が出来なくなった妖精だ…そうだな…モース…とても名付けるか…妖精にとっての天敵…呪いをまき散

らす毒の塊…妖精がモースに侵蝕されればひとたまりもない…この妖精は友の為に困となりモースに侵蝕されこの世を去った者だ」

「モース…そんな存在が幻想郷に…」

「だがモースは現博麗の巫女…博麗霊夢によつて退治された…土妖精ツッチーという犠牲を出したがな…その結果私の駒として復活を果たしたということだ」

ツッチー

『土を操る程度の能力』

彼は二人の友達をモースから逃がす為に戦い侵蝕されてしまった。

二人の友達はその死を悲しみ、霧の湖の近くに小さなお墓を建てたという…

「…外道ねあんた」

霊繫はゴースト・ドーパントを睨み付けた。

「貴様の事だ…この妖精や巫女達の他にも…」

「当然だろう？…既に幻想郷中に穢土転生を解き放っている…私の実験の為にな」

ゴースト・ドーパントの言う通り、穢土転生された死者達は幻想郷の至る所で暗躍し

ていた。

「全く…何処だ此処は…」

紅魔館近くの森に三人の穢土転生が召喚された。

一人は金髪のツンツンヘアで細い体型、緑色の瞳をした革ジャンを着た男。

せいどうらんぶ
青導蘭武

『全ての武術を操る程度の能力』

嘗て紅魔館の門番——紅美鈴が住んでいた道場の兄弟子であり、初恋の人物。

「まあまあ良いじゃないの？こうして肉体が戻った…訳じゃないじゃん？」

一人はアシンメトリーボブの黒髪赤目で20代くらいの青年。

ロベール・スカーレット

『機械に変形する程度の能力』

紅魔館の主——レミリア・スカーレットとその妹フランドール・スカーレットの叔父にあたる人物。

「貴様…吸血鬼か？」

一人はボロボロの茶色のコートとカウボーイハットを被り、ボサボサのグレーの髪を
した男。

いざよいごくし
十六夜獄糸

『不死を殺す程度の能力』

紅魔館のメイド長――十六夜咲夜の育ての親兼ヴァンパイアハンターの師匠である
人物。

「あれ？分かつちやった？いやあ凄いやねえ日中だつてのに崩れないこの体…どうなっ
てんだろうねえ？」

「吸血鬼は殺す」

獄糸はコートから銀のナイフを取り出し、ロベールに刺そうとする。

「……動かん」

「止めとけよ厳つい旦那…どうやら俺達は勝手に動く事が出来ないらしい…」

「ええ…折角あの痛みを味わえると思つたのに…残念じゃん」

「クツ」

三人の穢土転生は歩き出す。

「おつ？勝手に歩き出した…何処に向かつてんだ？」

蘭武はお気楽な感じで言った。

「う〜ん…取り敢えず自己紹介しない？俺はロベール・スカーレット…こう見えて吸血鬼の名門なんだ…宜しくね」

「スカーレット…まさか教会でも第一級危険認定された一族の生まれか…吸血鬼に教える名前は無い」

「まあまあ旦那よ…こうしてどういう訳か身動き取れない者同士…昔のいざござは流して仲良くやろうぜ？あつ俺は青導蘭武…それで旦那は？」

蘭武は男に名前を聞く。

「……はあ…十六夜獄系だ」

「へえ〜獄系ちゃんって言うんだあ〜蘭武ちゃんも宜しくね」

「ちゃん…てか」

「貴様…殺すぞ」

「ええ〜良いじゃん仲良くしようよお〜」

来雪達が居る魔法の森近くにも二人の穢土転生が召喚された。

「ふ〜む…魔法の森か…また懐かしい所に来たな」

一人は白衣にベレー帽を被り、腰のベルトには多種多様な筆記道具に画材がありロン

グヘアで見る角度で色合いが自在に変幻するグレーの瞳の女性。

たなかかくえ
田中描絵

『描いた絵を実体化させる程度の能力』

幻想郷に名の知れた天才画家にしてアリス・マーガトロイドのライバルを自称する人物。

「…魔法の森…里の外って事？」

一人はサイドテールの黒髪で利休鼠色目の少女。

しよいんしよくみと
書院蝕美絃

『文字を化けさせる程度の能力』

人里のとある二人の少女の幼馴染でただの能力持ちな七歳の小さな子供である。

「何で…私…病気で…」

「なんだ童…お前も病死したのか？」

描絵は美絃を見つめ聞いた。

「え？…えつと…はい」

美絃は暗い顔をしながら言った。

「そうか…全く悪趣味な術だ」

「術……ですか？」

「そう考えるのが妥当だろう……私とお前は病死した筈だ……それなのにこうして現世に立っている……何者かが何らかの術で私達を蘇らせた……お前の様な童であろうとな」

「何で……私が……」

美絃は俯きながら考える。

二人の体が勝手に動き出す。

「体が勝手に……」

「ふむ……自分の意志で動かすことが出来ない……これでは駒ではないか腹立たしい……」
描絵は怒りで顔を歪めた。

そして場所は戻り、三人の巫女とツツチーに囲まれた霊繫と魅魔――

「先代達と同じ存在がまだいる……命を何だと思つて……」

「私の実験材料だよ……そして我等『裏』幻想郷の手駒に過ぎん」

ゴースト・ドーパントが手を上げる。

四人の穢土転生が其々動き出す。

「覚悟を決めなさい霊繫」

「出来てるわよ魅魔」

二人は構えた。

「ワーツハツハツハツハツハア！」

すると何処からか高笑いが聞こえた。

「はっ？」

「何だ？」

「む？」

霊繫達は疎か、ゴースト・ドーパントも疑問に思った。

「……………」

十一代目が空を見た。

「む？」

それを見た穢土転生以外の三人が空を見た。

そこには幻想郷にとつて異界なものが飛んでいた。

零式艦上戦闘機

外の世界にて嘗て起こった第二次世界大戦期における大日本帝国海軍の艦上戦闘機である。

「えっ？何あれ？」

「戦闘機……それも第二次世界大戦期の産物が何故幻想郷の空を飛んでいる？」

ゴースト・ドーパントもその異様な光景に頭を抱えた。

そんな零戦の翼部の上に一人、その者は立っていた。

「幻想郷よ！私は帰ってきたあ!!」

それは女性だった。

しかしただの女性ではない。

それは迷彩色の巫女服を着ていた——

そう——

穢土転生で蘇った十一代目博麗の巫女——

博麗米亜理と同じ姿だった。

「とうー！」

女性は零戦を降り、ゴースト・ドーパント達の目の前に着地する。

「シユタツ……さて……さて……さて……さて……来ました!!この私……」

女性は天に向けて指を指す。

「十一代目博麗の巫女……博麗米亜理!!ただいま幻想郷!お帰り私!満を持して私、参上!!」

両腕と両足を広げ、ポーズした女性——

博麗米亜理は幻想郷に降り立った。

『いやあんた生きてたのかよ!?!』

霊?と魅魔は米亜理を見て叫んだ。

始動のF／不死身の手駒達

レティとの戦いに勝利した霊夢が居る森の近くにて、穢土転生がまた召喚された。

ガガガガガ

ドスン

地面から二つの棺桶が出現した。

「……此処は……森の中……ですか」

六代目博麗の巫女

博麗霊結^{れいゆ}

『どんな呪いも祓う程度の能力』

一人は六代目博麗の巫女の博麗霊結——

もう一人は黒い長髪でハイライトがない黒目でサングラスをかけ、黒いスーツを着た男の姿。

背中には蝶の羽が生えている。

「お前は……巫女か？」

黒涙鳳^{こくろいあげは}

『黒色火薬を生み出し操る程度の能力』

蝶の妖怪で能力を活かし、影も形も無い爆弾魔・エアボマーと呼ばれていた殺し屋である。

「そう言う貴方は…妖怪ですね？」

「ああ…俺は黒涙鳳…見ての通り蝶の妖怪だ…で？あんたは？」

「……私は博麗霊結…博麗の巫女です」

霊結の名前を聞いた鳳は驚愕する。

「はっ？博麗霊結？…おい俺の記憶が正しければ六代目の名前だよな？まさかこうしてお目にかかれるとはな」

「そこまで大層な存在ではありませんよ…貴方も死んで蘇ったクチですね？」

「ああ…木っ端微塵に吹っ飛んだ筈なんだがなあ…一体何だこりや…」

鳳は自身の手を動かし始める。

その手には黒色火薬が握られていた。

「ん？…何で火薬が出てやがる？俺は能力を発動してねえぞ？」

「私達はある存在によってこの世に蘇らせられ…体の自由を奪われています」

「……何か知ってんのか六代目？」

「ええ…蘇った直後に元凶に会いましたから…」

「死人を使うのか……：気に食わねえなこの能力よお」

二人は動き出した。

「クソ……ホントに体が言うこと聞かねえ」

「私達は何をやらされるのでしょうか……」

「さあな……ただ何かを消しに行くのは確かだろうさ」

鳳の答えに霊結は疑問を感じた。

「何故そう言い切れるのですか？」

「なに簡単だ……俺は殺し屋だからなあ……殺し屋の俺を復活させたんだ……何かを消す以外考えられねえ」

「殺し屋……ですか……」

霊結は険しい顔になった。

「そう怖い顔しなさんな六代目……殺し屋だったからこそ……ロクな死に方してねえしな……チツ……能力が発動するみてえだ」

鳳の腕から黒色火薬が生成され、形を変えていく。

「起爆殺……：火薬蝶かやくらよう」

黒色火薬は蝶の形に変わり、森の奥に飛び去った。

「ムカつくぜ……こうして駒の様に使われるとはよ……」

(これから戦いが始まる…ということですね…)

二人は黙々と歩いて行つた。

「メモリ……メモリ……」

霊夢は落ちたサイクロンメモリを探していた。

「何で無いのよ……まさか誰かが回収した？」

「おーい！」

そこに魔理沙が飛んできた。

「ん？魔理沙…あんた箒は？」

「あつ…いやあさつき橙と闘った時に折れちまつてな」

「橙？……まさか……」

「ああ…メモリの力に吞まれてた…改めて実感したよ…メモリの怖さをさ」

魔理沙は暗い顔になりながら言った。

「そうね…私もメモリに吞まれたレティと戦ったけど…これがなければ死んでたわ」

霊夢はアクセルメモリを見つめて言った。

「なっ?!メモリ!?何で霊夢がそれ持つてんだ!?!」

「託されたのよ…ある人にね」

「かあく…大丈夫なのかよそれ？ドーパントになったら最悪戻れなくなるって来雪も言っただらう？」

「これは大丈夫よ…風の街を守護している刑事さんの想いが宿ってる特別なメモリだもの…だからといって過信はしないけどね」

アクセルメモリを握り、霊夢は改めてメモリを使用する覚悟を決めた。

「まっ…霊夢なら大丈夫ー」

「っ！魔理沙!!」

魔理沙が喋っている最中に、霊夢は魔理沙の腕を掴み自身の後ろへ引っ張った。
「なっ！」

ドオオオオン

その瞬間に突如、辺りが吹き飛んだ。

「起爆したか……さて…バラバラになったターゲットを掴みに行くか」

「余り気乗りはしません…私の意志で動く事が出来ない以上…仕方ありません」

火薬蝶が起爆した事を察知した鳳と霊結は、爆発が起きた場所に向けて走り出した。着いた先は辺りの木々が吹き飛び辺りが更地になっており、爆発の威力が強力であることを物語っていた。

「これは……」

「俺の作る黒色火薬はそんなじよそこらの火薬とは訳が違う……ほんの少しの火薬でも辺りを吹き飛ばすのは造作もねえ……こりやターゲットも見ると影も……いや……初めてだなあ……俺の爆破で生きてやがるのは……」

鳳がそう言いながら爆破地の中央を見ると、結界を張り無傷で立っている霊夢と魔理沙の姿があった。

「た……助かったぜ……霊夢……」

「正直ギリギリだったわ……あと少し遅れてたら私もあんたも木っ端微塵よ……で……こんなことする馬鹿は誰かしら？」

霊夢が元凶である鳳を睨み付けた。

「これはこれは……まさかターゲットが博麗の巫女様とはなあ」

「ツ……あんたは……みすちーの屋台によく居た……」

「ほう……俺の顔を覚えてるのか……光栄だねえ」

鳳と霊結が霊夢達の前に姿を表す。

「ん?…霊夢…あの女の格好…」

「……ええ…巫女服ね…あんた何者よ」

霊夢と魔理沙は霊結の格好を見て、疑問に思った。

「……貴女が現博麗の巫女ですか?」

「現?…ええそうよ…私は博麗霊夢…博麗の巫女よ」

「霊夢ちゃんって言うのね…こんな時に言うのも難ですが…可愛い後輩が出来て嬉しいです♪」

「は?…後輩?」

霊結の発言に疑問を抱く霊夢。

「おいおい六代目…俺達は今からあいつらと戦うことになるんだぞ…馴れ合ってどうする?」

「……六代目?…待って…六代目って…」

「申し遅れました…私は六代目博麗の巫女…博麗霊結と申します…どうぞよろしくお願いますね」

霊結の爆弾発言に二人は驚愕する。

「はあ!?!六代目博麗の巫女!?!おい霊夢どういう事だ!?!」

「こつちが聞きたいわよ! 大体六代目って…どうの昔に死んでるのよ!?!何で此処に居る

のよー！

「まつ当然の反応だわな…正直俺も聞いた時は耳を疑ったぜ」

「混乱させてごめんなさい…霊夢ちゃん…それと魔法使いちゃん？」

霊結は魔理沙を見て言った。

「…私は霧雨魔理沙だ」

「霧雨？…貴女…霧雨魔理沙と言うの？」

「ああ…そうだぜ？それがどうしたんだ？」

「…フフツ…いいえ…そう…あの子が…フフツ」

霊結は嬉しそうに微笑んだ。

「おいおいどうした六代目…急に笑ってよ…ツ」

鳳は自身の手にも黒色火葉が生み出されていることに気付く。

「チツ…おい博麗霊夢…それと魔法使いの嬢ちゃん」

「嬢ちゃんじゃねえ！私は霧雨魔理沙だ！」

「んなことどうでもいい！良いか！死にたくなけりや避けるよ！」

鳳は黒色火葉を辺りに振り撒いた。

『ツ！』

「起爆殺…火葉蜘蛛」

振り撒いた火薬が小さな蜘蛛の形に変わる。

「その蜘蛛に捕まるなよ…爆発するからな！」

「はあっ!？」

「魔理沙! 気を抜かない!」

霊夢が御札を取り出し、蜘蛛達に投げつける。

御札を触れた蜘蛛達は光出す。

「マズイ!」

ドドドドドドオオオン

蜘蛛達は一斉に爆発し、辺りを巻き込んだ。

「また助けられたな霊夢」

魔理沙は冷や汗を掻きながら言った。

「さつきも言ったはずよ…気を抜かないで…」

爆煙が晴れるとそこには爆発に巻き込まれ、体が欠損している鳳と霊結の姿があった。

「おい自爆かよ…」

「……ッ」

二人は言葉を失った。

何故なら欠損していた体のパーツがみるみると再生しているからだ。

「チツ……死ぬ事も出来ねえのかよ…」

「どうやらその様ですね…」

「なっ…何なんだよあいつら…」

「あの男は兎も角…六代目にこんな能力があるなんて聞いたことないわよ…」

霊夢の眩きに鳳と霊結が反応する。

「俺にもこんな能力はねえよ！チツ…ムカつくぜ…自分の意志で動けねえこの状況よ

！」

「霊夢ちゃん…魔理沙ちゃん…よく聞いて下さい…私達はある者によつて蘇らせられた駒に過ぎません…意識はつきりとしていますが体の自由を奪われています…私達の意志に関係なく貴女達を攻撃する様になってしまっています」

「…どういう事だよ」

魔理沙が険しい顔をしながら聞いた。

「理解してると思うが…俺も六代目も既に死んだ身だ…元凶は死人を蘇らせ手駒にして

るってこった」

「私だけではありません…初代様から十一代目まで…私を含めた歴代巫女…そして彼のように蘇らせられた存在がこの幻想郷に解き放たれている筈です」

「…何だよそれ…誰がそんなひでえ事してんだよ!」

魔理沙は二人の話を聞いて激怒する。

「…六代目…貴女は元凶の存在を知っている…違いますか?」

霊夢は冷静に霊結に尋ねた。

「……Dr. ガイスト…それが私達を蘇らせられた術者の名前です…そして彼が所属する組織…『裏』幻想郷…私が知ってる情報はここまでです」

「『裏』幻想郷…」

霊夢と魔理沙は組織の名前を胸に刻んだ。

死者への冒瀆を侵した組織を絶対に止めることを誓った。

「…ん?…何だこりゃ?」

鳳の右手が勝手にポケットの中を漁る。

ポケットの中にはある物が入っており、鳳はそれを取り出した。

「ツ!それは…」

「ガイアメモリ…てことはミュージアムってのはその『裏』幻想郷が動くための活動

名つて所かしら」

ガイアメモリが出てきた事で霊夢は察した。

ミュージアムという名前は仮の名前であり、本当の敵の名は“裏”幻想郷である
とー

「こんなもん知らねえ…俺はこんなの使ったことすらねえしな…」

鳳はそう言うのと、メモリの起動ボタンを押した。

【ARMS！】

ガイアウイスパーが鳴ると、鳳の右頬に生態コネクタが出現しメモリを挿し込む。

鳳は形を変えていった。

真つ赤な人型の素体に、黒鉄色の様々な装備をまとった姿。

鳳は武器の記憶の怪物、アームズ・ドーパント超人に変身した。

「その姿は…Dr. ガイストが言っていたドーパント…という事ですか…」

「……生前に知りたかつたぜ…仕事が楽になつたらうに…」

アームズ・ドーパントは右手に持つ盾を備えた剣、シールドソードを構えた。

「悪いが俺の意志じゃどうにもならねえ…俺を止めてくれ」

そう言いながらアームズ・ドーパントは霊夢達に向けて走り出す。

「やるわよ魔理沙！」

「おう！」

二人は構えた。

場所は変わり、来雪達が居る森の中——

穢土転生で蘇った描絵と美絃は着々と来雪達に近づいていた。

「全く……こんな術に操られてなければ久々に来た此処を絵にしていたと言うのに……」

「……お姉さんは画家なんですか？」

描絵の呟きに美絃が反応した。

「まあね……自分で言うのも難だけど結構有名だったんだけど……田中描絵って言うんだが

……知らないのかい？」

「うん……ごめんなさい……多分私が死んだのはお姉さんが死ぬ前だと思うんだ……だから

……」

「謝る必要は無いさ……生きた時代が違うんじゃないしね……ッ」

描絵は腰のベルトに付いている巻物を広げた。

「お姉さん？」

「チツ…私の芸術をこんなことに使うことになるのか…何処の誰だか知らないが巫山戯るなよ…」

描絵の顔は鬼の形相になっているが、筆を持った右手は止まること無く絵を描き始めた。

その絵は笛の中から大量のネズミが現れ植物や食べ物だけでなく、建物や岩といった無機物までも食べ尽くし、全てを穴だらけにする絵だった。

「作品番号参……ネズミの妨害」

描絵が絵を描き終わると、その絵は巻物から飛び出し実体化した。

笛を持ったネズミの獣人が描絵と美絃の前に現れ、手に持つ笛を吹いた。

すると何処からともなく大量のネズミが現れ、辺りの木々や石等の無機物までも喰い荒らして行つた。

「チツ…まさかこの森の木々を絶滅させる気か？…生態系がどうなっても知らんぞ…」

「お姉さん…このネズミ達は何？」

「ああ…これは私の能力だ…描いた絵を実体化させる程度の能力…それが私の能力でね…これは私の作品の一つさ」

田中描絵——

現代の幻想郷で知らぬ者等殆ど居ない天才画家。

彼女が描く作品の人氣は非常に高いー

人里のみならず妖怪の山や地底、更には博麗神社でも彼女の絵を見ることが出来る。

外の世界よりも文明が多少遅れている幻想郷だが、そんな幻想郷に絵画という物を流
行らせたのは間違いなく彼女の功績である。

今では寺子屋の子供達ですら、彼女の存在を認知している程である。

何故なら幻想郷の歴史の教科書に載っているレベルの人物であるからだ。

そんな彼女の能力ー 『描いた絵を実体化させる程度の能力』はその名の通り、彼
女がこれまで描いてきた絵を実体化させ攻撃や防御更にはサポートまで何でも熟す能
力なのだ。

彼女が戦闘で使う作品は全部で十種類程度で、この作ネズミの妨害品はその内の三番目の作品で
ある。

「この作品は探索型の作品でね…大量のネズミが辺りを喰い荒らして穴だらけにする代
わりに敵を見つけるのさ…だが欠点もある…このネズミ達は植物は喰うが生物は喰わ
ん…よってこの森に住む妖怪や動物は無傷って訳だ」

「その何処が欠点何ですか？」

美絃は純粋な疑問をぶつける。

「欠点だろう…植物や無機物は喰うのに生物は喰わんのだ…辺り一面の隠れ場所が全て穴だらけ…尚且つ敵は生きている…私は能力の発動時に絵を描かなければならない…この意味が分かるか？」

描絵の説明に美絃は納得した。

「絵を描くにも時間が掛かる…でもネズミ達は生物を攻撃しないから探索は出来ても迎撃出来ない…障害物も食べちゃうからお姉さんが無防備になるって事ですか？」

「その通りだ…中々賢いな美絃は…」

描絵は美絃の頭を撫でようと力を入れるが腕が動かない。

「本当に不便だな…頭すら撫でられんとは…」

「…ねえお姉さん…ネズミ達が溶け始めたよ？」

美絃の言う通り、ネズミ達の体が溶け始めていた。

「このネズミ達も所詮は私の描いた絵だ…雪は水蒸気が結晶化して降ってきた物…つまりは水分と変わらん…私の作品は水で消える…」

描絵が呟くと、辺りにいた大量のネズミが完全に溶けて消えた。

そして辺りに残ったのは穴だらけになった木々や無機物の残骸だった。

「雪が降っていて助かったな…これが晴れや曇りだったら辺り一面何も残っておらん

ぞ」

すると森の奥から三人の人物が走って来た。

「何…何これ!？」

「酷い…さつきまで木々が生い茂ってたのに…」

それは先程まで闘っていた来雪達だった。

「ツ!?!…そんな…まさか…」

一緒に付いて来たアリスは描絵の顔を見て驚愕した。

「…アリス…君か……久し振りだな」

描絵は微笑みながら言った。

「…描絵……本当に…描絵…なの?」

アリスは悲しそうな顔をしながら聞いた。

「…フツ…何だ?…友の顔を忘れたか?」

「描絵?…描絵って…まさか田中描絵!?!…あの天才画家の田中描絵!?!」

紗綾はこの場に天才画家が居ることに驚愕する。

「…誰?」

「えっ!?!…来雪さん…田中描絵を知らないんですか!?!幻想郷に来てもう結構経ちますよ

ね!?!」

「えっ……あつうん……ごめん……有名人何ですか？」

「有名人も何も！田中描絵と言えば此処幻想郷で名高い天才画家です！幻想郷に絵画を広めたと言つても過言ではない偉大な人で！人里の寺子屋じゃ歴史の教科書に載つてゐる位有名な人ですよ！」

紗綾は来雪の肩を掴んで揺らしながら語つた。

「紗綾さん！分かつた！分かつたから揺らさないでえ〜！」

「ふむ……私の名も随分と売れたものだ……そこの犬妖怪君……その反応……私の支持者かな？」

「はい！私貴女の絵が大好きなんです！貴女の作品を見た時に一目惚れして……初めて人里で買い物したのも貴女の作品でした……流石に本物は高過ぎて買えないから模造品でしたけど……」

「お姉さんやっぱり凄い人だったんだね」

美絃は描絵を見て言つた。

「私は別に売れたくて売れた訳じゃないがね……まあ此処まで褒めてくれるのは素直に嬉しいけどね」

「……………」

アリスは無言で描絵を見つめていた。

「あれ……でもおかしいです」

「え？」

紗綾の疑問に来雪は反応する。

「田中描絵は数年前に病に倒れてそのまま亡くなってしまった筈なんです……貴女は本当に田中描絵何ですか？」

「ああそうさ……私は確かに病に倒れそのまま死んだ筈だ……だが気が付いたらこの森の近くで目覚めた……この美絃と共に……」

「……」

美絃は悲しい顔をしながら俯いた。

「アリス……こうして君と再び会えたのは正直凄く嬉しい……だが喜んででも要られんのだ……」

「描絵……この周りの景色は貴女の作品がやったのね？」

「ああ……だが私の意志じゃない」

描絵は怒りの形相で語り出す。

「何処の誰だか知らないが……私と美絃は蘇らせられた……そして自由を奪われこの有り様だ……今は辛うじて命令が下されていないようだが……術者の力で何時でもお前達を攻撃するだろう」

『ッ!』

三人は構えた。

「アリス…頼む…私達を止めてくれ…私は我慢ならないのだ…私の芸術が…これ以上こんなことの為に使われるのは…私は君の作品に惚れ込み様々な作品を描いた…私にとつて絵画とは君と出会った大切な思い出なのだ…それを…こんな…」

描絵は悔しそうに言った。

「描絵…」

「アリス…そしてアリスの友人達…で良いんだよな?」

「あつ…園田来雪です」

「犬飼紗綾と言います」

来雪と紗綾は軽く自己紹介をする。

「そうか…では来雪に紗綾…君達も頼む…私達を…ッ!」

描絵は喋っている最中に巻物を広げた。

「描絵!」

アリスが叫ぶ。

「マズイ…頼む三人共…私を止めてくれ!!」

「紗綾さん!」

「はいー」

来雪と紗綾がガイアメモリを取り出し、起動ボタンを押した。
しかしー

【HEAT…HE…HEAT…】

【KER…KERBE…BEROS…】

ガイアウイスパーが異様な鳴り方をした後、機能が停止した。

「えっ!？」

「メモリが…起動しない!？」

「…まさか…」

その様子に美絃が気付いた。

「これは私の能力です!」

「能力?」

来雪が聞くと、美絃は答えた。

「私の能力は『文字を化けさせる程度の能力』です! 周囲約三十mの範囲にある文字を解

読不可能な状態にしてしまいます！物品に刻まれている文字が読めないという事は意味や機能が喪われるって事です！お姉さん達の持つてる小箱が起動しないという事は文字が書かれているんじゃないでしょうか！」

ガイアメモリにはその記憶となる名前が刻まれている。

美絃の能力はそんな名前すらも化けさせてしまい、ガイアメモリに刻まれている記憶を呼び起こす事が出来なくなつたのだ。

「本当だ…メモリの名前が読めなくなつてる…」

来雪は自身の持つメモリを確認すると、全てのメモリの文字が読めなくなつていた。

「ツ！来雪さんは離れて下さい！メモリが使えない今貴女は戦う術を失っている！」

紗綾が来雪を後ろに下がらせる。

「でも！」

「駄目よ間に合わない！」

アリスが人形達を操る。

「作品番号壱——炎獅子！」

描絵は絵を描き終えた。

その絵は紅蓮の業火の中に佇む一頭の獅子の絵だった。

巻物から絵が実体化し始める。

「気を付けろ！炎獅子はその名の通り業火を纏った獅子だ！咆哮だけで途轍も無い熱気が放たれる！近くに居たら焼け死ぬぞ!!」

描絵の忠告も虚しく、業火を纏った獅子が実体化した。

『ガアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

炎獅子の咆哮が灼熱の業火を生み出し放たれた。

「紗綾！」

「分かっていますよ!!」

アリスの指示で紗綾が動いた。

紗綾は自身の『切り裂く程度の能力』を使い、灼熱の業火を文字通り切り裂く。

切り裂かれた業火は三人から軌道をずらされ、当たらなかつた。

当たった木々の残骸は燃えるを通り越し溶けた。

「木が溶けてる…マグマの熱みたい」

来雪はその惨状を見て青褪める。

「気を抜くな！第二波が来るぞ!!」

描絵が叫ぶ。

「フッ！」

アリスが腕を前に掲げる。

すると炎獅子の頭上に魔法陣が描かれ、中から大量の水が放出させる。

『ガアアアアアアア!!』

炎獅子は雄叫びを上げながら溶けた。

「獅子が溶けた…」

「描絵の実体化させた物は所詮は絵なの…だから水を掛ければ溶けて消えるわ」

「アリス！流石だな！」

「…ツ」

美絃が懐からある物を取り出した。

「これは…お姉さん達が持つてる小箱…」

それはガイアメモリだった。

「ツ!?メモリ!？」

「どうして君が!？」

「分かりません…ですが勝手に体が動いて…」

美絃は起動ボタンを押した。

【MOLD!】

ガイアウイスパーが鳴ると、美絃の左手の甲に生態コネクタが浮かび上がる。

「モールド…カビ？」

「また新しいメモリ…という事は…ミュージアムの仕業って事だね」

「ミュージアム…」

アリスはミュージアムという名前を聞き、険しい顔をした。

友人を蘇らせた挙げ句、こうして手駒にしている組織を許せなかったのだ。

「何で私の能力の範囲内なのに…この小箱は動くの？」

美絃は自身の能力が発動しているにも関わらず、ガイアメモリが起動している事に驚いていた。

「力を抑えられているんだろう…能力者である美絃まで使えなくなっては敵わないからな」

「…出来ればこの小箱も使えないで欲しかったんだけど…」

美絃は生態コネクタにメモリを差し込んだ。

左手の甲からカビが噴出し、姿を変える。

その姿は某ホラーゲームの7作目に登場するカビのクリーチャーの様な姿になった。

美絃はカビの記憶の怪物^{超人}、モールド・ドーパントに変身した。

「お姉さん達…お願い…止めて…」

モールド・ドーパントは悲痛な声を上げながら三人に向けて走り出す。

「上海！蓬萊！」

『シヤンハーイ！』

『ホウラーイ！』

アリスの命令で上海人形と蓬萊人形がモールド・ドーパントに槍を構えながら突進する。

グサグサツ

槍がモールド・ドーパントに刺さる。

すると槍からカビが生え始めた。

「ツ！上海！蓬萊！」

アリスは即座に上海人形と蓬萊人形を下がらせる。

刺さった槍はカビだらけになり臙て朽ちた。

「触れたものが喩え無機物でもカビて朽ちる能力……厄介なメモリだね」

来雪の想像通り、モールドメモリの能力の一つである。

「アリス！来雪！紗綾！次描き始める！対処しろ！」

描絵が筆を走らせていた。

「そうしたいのだけど……こっちも厄介なのよ！」

アリスは人形達で対処するが、モールド・ドーパントの能力で次々と大切な人形達が朽ちていった。

「ごめんなさい…ごめんなさい！」

モールド・ドーパントは謝りながら攻撃をし続ける。

「クツ…紗綾！」

「ウオオオオオオ!!」

紗綾が自慢の脚力でモールド・ドーパントの懐に入り、切り裂いた。

モールド・ドーパントは上下真つ二つになった。

「良し！」

「今よ！描絵を止めて！」

アリスの指示で駆け出す紗綾。

「クツ…もう遅い！」

描絵が叫ぶと絵が実体化を始めていた。

その絵は天空に向けて飛び立つ龍の絵だった。

「作品番号式——昇り龍！」

巻物から竜巻を纏った龍が実体化した。

『ギヤアアアアス!!』

昇り龍は三人を見下ろしていた。

Fの襲来／崩れる異変

幻想郷の地に、十一代目博麗の巫女・博麗米亜理が降り立った。

「いやいやいや米亜理さん！貴女生きてたんですか!？」

米亜理の姿を見た霊繋がツツコミを入れた。

「ほえ？そりやあまあ…現に此処に居る訳ですし？」

「いやはや…まさか今このタイミングで現れるとは…十一代目…」

ゴースト・ドーパントは米亜理の登場に心底うんざりしていた。

「君が今回の異変の首謀者…て訳じゃないよねえ…あれ？そこに居る生気を感じられない人？…何か私に似てね？」

米亜理は穢土転生米亜理を指差し言った。

「似てるも何も…これはお前だよ博麗米亜理」

「え？…わおもしかして某忍者漫画に出てくる死人を手駒にする術？…やだあ…罅だらけだけど私ってば可愛い…流石は私！」

「言っている場合か!？」

マイペースな米亜理に魅魔がツツコミを入れた。

「全く…余裕でいるのも今のうちだぞ？ 博麗米亜理…こちらには貴様を含めた博麗の巫女三人に妖精が居るのだからな」

ゴースト・ドーパントが腕を上げると、穢土転生巫女達が米亜理に向けて走り出す。「魅魔ちゃん霊繋ちゃん少し離れててね」

米亜理はそう言うのと右腕が光出しある物が出現した。

「おっと…最初はこれね」

米亜理が右腕に出現したのは、ロケットランチャーゴーリアスD2だった。

「ヌツ！」

ゴースト・ドーパントはすかさず自身の目の前にツツチーを立たせる。

「はいドーン!!」

パシユウウウ

ゴーリアスD2の弾が発射された。

弾は真つ直ぐゴースト・ドーパントに向けて飛んでいく。

「土陸返し」
どろくがえし

ツツチーが手を翳すと、地面が壁のように垂直に立った。

ドオオオオン

ツツチーの壁に着弾し、ゴースト・ドーパントは難を逃れた。

「ありや?」

呆けている米亜理の背後に八代目が周り込む。

「おっと」

ゴリアスD2を消した後に、八代目の刀を右肘と右膝で白刃取りする米亜理。

「セーフ」

「まだ終わってない!」

魅魔の言うように、今度は初代が米亜理に迫っていた。

「せっかちな先輩達だなあ」

米亜理は咄嗟に体制を崩し、八代目を巴投げし初代にぶつける。

「ええい!何をしている!さっさと仕留めろ!」

ゴースト・ドーパントは明らかに苛ついていた。

すると今度は穢土転生の十一代目がハンドガン・サムライエッジを出現させ発砲する。

「おおサムライエッジ!良いねえ」

サムライエッジの弾をローリング回避した後に、米亜理は次にアサルトライフル・A F19を出現させる。

「撃ち込んでやるぜえ!」

A F 19を十一代目に向けて撃ち込む。

十一代目もまたローリング回避をしつつ、サムライエッジを撃ち込む。

「危なっ！」

霊繫に流れ弾が飛んできた。

「下がれ霊繫！」

魅魔はすかさず障壁を張った。

「チィ！」

ゴースト・ドーパントは霊体化で流れ弾を回避する。

なお、流れ弾はツツチー達穢土転生達を貫いていく。

二人による銃撃戦を繰り広げた。

「ほいっど！」

米亜理はローリング回避の途中にある物を設置する。

「お次は何でしよな？」

米亜理が手にしたのは擲弾・MG12グレネードグレネードだった。

「ほいほいほい！」

三発のグレネードを投げる米亜理。

ドオオオオオン

十一代目はグレネードの爆発に直撃に、吹き飛んだ。

しかし穢土転生の再生能力により、身体が再生し始める。

「うくん埒が明かないなあ…何か良いの来い！」

米亜理が続いて出現させたのは武器ではなく乗り物だった。

それは近代兵器であるホバーバイクだった。

ただそれはとある防衛軍が使用するホバーバイクを改造したサイドカーが両脇に装着してある特別製だった。

「おつラツキー！霊繋ちゃん！魅魔ちゃん！ずらかるよ！さっさと乗った乗った！」

「はっ!？」

「ちよっ!？」

突然の事についていけない二人は啞然とするが、米亜理が二人の元に駆け寄る。

「なに呆けてんの！速く速く！」

「ちよつと米亜理さん!？」

「相変わらず破天荒な人ねあんた！」

二人は米亜理にサイドカーに無理矢理座らせられる。

「逃がすと思ってるのか！」

「ゴースト・ドーパントの命令で、再生が完了した八代目が動く。」

「博麗ノ型・夢想斬」
むそうざん

八代目の刀から七色の極太な斬撃が放たれる。

「やべえ！飛ばすよ！」

米亜理はホバーバイクをフルスロットルで発進させる。

ホバーバイクのスピードで、夢想斬を回避する。

「ダメ元だけどポチッと！」

米亜理がりモコンを取り出し、ボタンを押す。

ドオオオオン

すると八代目の足元に仕掛けてあったC24爆弾が起爆し、下半身を吹き飛ばした。

「良し！魅魔ちゃん踏み台！」

「悪霊使いが荒いな！」

魅魔は土魔法で土台を前方に創る。

「ついでに！」

米亜理はホバーバイクを運転しながら武器を作り出す。

「おっとこれは…」

それは自由の国アメリカで開発された巡航ミサイル・トマホークだった。

「幻想郷の地形変わりそうだけど…：しょうがないよね!! 砲撃よおい…：Fire!!」

パシユウウウ

米亜理はゴースト・ドーパント達に向けてトマホークを発射する。

「ムッ！」

ドゴオオオオオオン

トマホークは着弾し、ゴースト・ドーパント達が立っていた地形が少し抉れた。

「無茶苦茶な事しないで下さいよ米亜理さん!!私か霊夢が後で紫に怒られるじゃないですか!!」

トマホークの爆撃を見た霊繫が叫んだ。

「その時は私も一緒に怒られてあげようよ！」

「にしても凄い物撃ちますね…だが…」

「魅魔?」

魅魔は爆撃された場所を見つめる。

「Dr. ガイストは死んじやいない…あれでも奴にとつては目眩ましにしかない」

「やっぱね…『裏』幻想郷だっけ?…今回の敵は今までの異変首謀者とは比べ物にならない程の存在みたいだし…」

「米亜理さん…組織の事を知ってるんですか?」

元々『裏』幻想郷に所属していた魅魔が驚いた表情で米亜理に尋ねる。

「全部を知ってる訳じゃないよ……まあ成り行きでちよつと知っちゃっただけ……それより今はこの異変をどうにかしないとね……久々に異変解決と洒落込みますか!!」

「ちよつと米亜理さん」

米亜理はフルスロットルで森の中を爆走し始める。

爆煙が晴れると、そこには無傷のゴースト・ドーパントが立っていた。

「まさか巡航ミサイルを持ち出すとは……おかげで巫女達が消し飛んだではないか……」

トマホークの着弾で、巫女達の再生が少しだけ遅れていた。

「まあ良い……今は役目を果たすでしょう……ボス達もこの状況を見過ごすとは思えんな」

ゴースト・ドーパントは再生途中の穢土転生達を棺桶に戻し、その場から消えた。

「裏」 幻想郷にて、ゴールドメモリ所有者達が集まり異変の観察をしていた。

「おいおい……まさか十一代目が乱入して来るとはな」

「どうします？十一代目博麗の巫女博麗米亜理……穢土転生で手駒としてこちらにも戦力に入ってますが……」

克巳と董香は、ボスである麟を見る。

「そうだね…歴代巫女の中で一番規格外な巫女…このまま放置しといても厄介になるかな…克己」

「あ？」

「地底に行つてあの娘を連れてきて貰える？あの娘の能力なら十一代目の規格外な力を封じられるからね」

「あの娘と言うと…ああマテリアルちゃんね」

董香が言うマテリアルとは、その者が持つているメモリの名前である。

「裏」 幻想郷が誇る三人の番人。

それぞれ『フォートレス』、『ファクトリー』、『マテリアル』のメモリを授かった三人の妖怪で構成されている。

「アイツか…分かった…だが何でアイツなんだ？十一代目位シルバーメモリの奴らで始末出来るだろうに…」

「始末だなんて勿体無い…彼女も来雪が成長するには必要な人材…つまりは僕達にも必要な存在だよ？それを始末なんてする訳ないでしょ？ただ今のままだとこちらとしても厄介な存在だからね…そうだねえ…能力までとは言わないけど…記憶の一つや二つは封じさせて貰わなきゃ割に合わないし」

「記憶を封じる…成る程…そりゃアイツが適任だわな…分かった…ちと遠いが行つてく

るわ」

克巳はそう言うのと瞬時に消えた。

「本当に便利な能力ですよねえ克己君の能力って」

(さてと…Dr. ガイストが放った穢土転生達…良い具合に暴れてね)

場所は変わり、着々と紅魔館に近づく三人の穢土転生。

「一体何処まで歩かされることやら」

蘭武が愚痴を言った。

「……何か見えて来たぞ」

獄糸が見つけた物は、レミリア達が暮らす紅い館である紅魔館だった。

「あれえ？…どつかで見たことある様な…」

ロベールは自身の記憶を呼び起こしていく。

「全体が赤一色…趣味悪」

紅魔館を見て蘭武が愚痴った。

「チツ…勝手に技の体制になりやがった」

蘭武が地面に手を付けると、天高く跳び上がる。

「おお高く跳んだねえ…人間にしては凄い脚力じゃん」

(青導蘭武…聞いたことある名前だと思ったが…成る程道場泣かせの蘭武か…噂通りの脚力だな)

「……………」

美鈴は門の前で来雪達の帰りを待っていた。

「…来雪さん…咲夜さん………」

帰りを待つ美鈴だが、それと同時にあることを察知していた。

(こちらに近づいて来る気配が三つ…チルノちゃん達じゃない…この気配は…ツ一人が跳び上がった…来るッ!!)

「龍神脚!!」

美鈴が空を見ると、蘭武が急降下キックを放った。

「ッー」

ドスン

美鈴は咄嗟に腕をクロスし龍神脚を受け止めた。

そして蘭武の顔を見て驚愕する。

「えっ…」

「…ッ」

蘭武も美鈴の顔を見て驚いた顔をした。

「まさか」

「そんな……」

蘭武は技を止め、その場から離れた場所に着地する。

「その顔その動き……美鈴ちゃんか？」

「……蘭武……さん……」

美鈴は嘗ての兄弟子であり、事故により死んだと聞かされていた初恋の人物が目の前に現れた事に混乱した。

「ハハッ……見違えたな美鈴ちゃん」

「蘭武さん……どうして貴方が此処に……師範からは事故で死んだって……」

「え？事故？……ああ……まあ……事故つちやあ事故か……師範……気を利かせて事故死つて事にしてくれたのか……サンキュ」

蘭武は本来の死因が飴玉を飲んで窒息死したという阿呆みたいな死に方を誤魔化してくれた師範に静かに感謝した。

「この悪趣味な外装……見渡す限りの紅……やっぱり紅魔館かあ……懐かしいね」

蘭武の後ろからロベールと獄糸も遅れて歩いてきた。

「紅魔館……スカーレットデビルの根城か……」

「うん?…あれ?美鈴ちゃん?久し振りだねえ元気だった?」

「ツ!ロベール様?…蘭武さんだけじゃなくロベール様まで…どうして…」

美鈴は蘭武だけでなく主の叔父にあたるロベールも居ることに驚愕する。

「何だ吸血鬼の旦那?美鈴ちゃんと知り合いか?」

「蘭武ちゃんこそ美鈴ちゃんと知り合いなだねえ…知り合いもなにもねえ…此処兄貴の館でねえ…兄貴がどつからかメイドとしてスカウトしたのが美鈴ちゃんなんだよねえいやあ懐かしい」

「ロベール様!メイド時代の事を余り蘭武さんに言わないで下さい!!」

美鈴は顔を赤くし叫んだ。

「メイド?美鈴ちゃんが?…ホントに成長したなあ…それだけ俺は長い間死んでたんだな…」

「ううん…蘭武さん…ロベール様…そちらの方も恐らく死んでいた方なのでしょう…何故死んだ筈の貴方が…」

美鈴は咳払いした後真面目な顔で尋ねた。

「いやあそれがさあ…俺達にも分かんないんだよねえ…目が覚めたらこの三人で森の中に居てさあ」

「……………」

おちやらけた返答をするロベールを無言で獄糸は睨み付けていた。

「俺達は何者かによつてこの世に再び呼ばれた…そして身体を奪われ手駒扱いだ…ムカつくけどな」

「死者を使役…到底許される事では無いですね…」

美鈴は怒りを露わにする。

すると門が開いた。

「なんだか懐かしい気配がするから出てきてみれば…どういう状況よこれ」

そう言いながら館から、スカーレット姉妹とパチュリー及び小悪魔が出てきた。

「お嬢様！」

「全くレミイったら…魔女使いが荒いんだから」

「パチュリー様パチュリー様…どうやらそんな事言ってる場合じゃ無い様ですよ？」

パチュリーの小言を小悪魔が真面目な顔で切り捨てた。

「やあレミリアちゃんにフランちゃん久し振り〜元気だった？」

ロベールが呑気に手を振りながら言った。

「ロベール叔父様…何故貴方が此処に…」

「ロベールおじさん…どうして」

「もうレミリアちゃんったらそんな叔父様だなんて硬っ苦しい呼び方無しだぜ？フラン

ちゃんを見習いなよおじさんだけで良いってのに」

「今はそんなことどうでも良い…何故死んだ筈の貴方が此処に居るのかを聞いているんです叔父様」

「もうお硬いなあホントに堅物な兄貴にそっくりに育っちゃってえ…おじさん悲しくて涙が出てきそうだよ」

ロベールは不機嫌そうに言った。

「お嬢様…ロベール様達は何者かによつて蘇らせられた存在らしいです」

美鈴が簡潔に報告する。

「そう…何処の誰だか知らないけど…スカーレット家の身内を使うとは…万死に値するわ」

「え？何レミリアちゃん俺の為に怒ってくれてるの？…ヤダ…おじさん嬉しくて泣きそうだよ」

レミリアの反応に少しばかり嬉しそうにロベールは反応した。

だがそんな雰囲気をぶち壊す様にロベールが上着を脱ぎ始める。

「あれ…ヤバツ…レミリアちゃん達気を付けなよ…マジでヤバいから」

ロベールが先程のおちやらけた態度とは一変し焦っていた。

(叔父様が服を脱ぎ始めた…確かにマズイわね)

ロベールの能力を知っているレミリアは警戒態勢を更に強くする。

「パチエー！結界！」

「既に張ってるわよ」

「流石ね！」

パチュリーの言葉を聞いたレミリアが、スピア・ザ・グングニルを構えながらロベールの懐に飛んだ。

「ッ！」

（速い……これがスカーレットデビルかよ）

蘭武はレミリアのスピードに戦慄した。

「叔父様ごめんなさい」

ズシャア

レミリアはロベールに謝罪すると、スピア・ザ・グングニルで心臓辺りを貫いた。

「……………」

レミリアは不快感を露わにする。

自身の身内に手を掛けた事に対する不快感だった。

「…避けた方が良いよレミリアちゃん」

「ッ!？」

心臓を潰したのに喋ったロベールを見て驚愕するレミリア。するとすかさずロベールは能力で右腕を丸鋸に変形させた。

ギユイイイイイン

ロベールは丸鋸になった右腕をレミリアに向けて振り降ろす。

ガガガガガガ

丸鋸は咄嗟に飛び込んだフランドールのレーヴァテインで防がれていた。

「お姉様！」

「ツ！助かったわフラン！」

スピア・ザ・グングニルを引き抜き、二人は後ろに下がった。

「ナイスだよフランちゃん……いやあおじさんヒヤヒヤしたよ」

大穴が空いた胸は徐々に再生していった。

「この体……死人なだけあって不死身みたいだねえ」

「チツ……薄々そう思ってたが……目の当たりにすると余計にムカつくな」

ロベールの言葉を聞いて蘭武が舌打ちした。

「それもそうだけど何より許せないのが……俺の可愛い姪っ子達を俺の手で始末させ

ようとする術者だよねえ」

ロベールのおちやらけた言葉の裏には強い怒りが滲み出していた。

「……吸血鬼と一緒にするのは不愉快だが……仕事だからな」

獄糸はそう言うのと懐から銀のナイフを取り出した。

「……チツ……美鈴ちゃん……俺達を止めろ」

蘭武はそう言いながら構える。

「蘭武さん……」

「覚悟を決めなさい美鈴……じゃないと殺られるわよ」

「おじさん……」

「……悪趣味な術ね」

フランの悲しそうな顔を見たパチュリーが呟いた。

「……フラン……貴女は下がりなさい……貴女が叔父様と殺り合う必要は無いわ」

レミリアはフランドルを気遣い言った。

フランドルはレミリアの思うように辛そうな顔をしていた。

ロベールが死んだと聞かされた時、フランドルが一晩中泣いていたのをレミリアは

知っていた。

幼い時から懐いていた相手を今から殺さなきゃならない……そんなことをフランドル

ルにやらせたく無いのだ。

「ううん…お姉様…私もやるよ…だって許せないもん…おじさんをあんな風にした奴を…」

辛そうな顔をしながらフランドールは言った。

「フラン…分かったわ…でもキツくなったら下がりなさい」

「うん…」

「…ごめんねレミリアちゃん…フランちゃん」

そんな姉妹を見てロベールは静かに言った。

場所は変わり異変の元凶である白玉楼へと繋がる階段下。

そこに先程まで米亜理達と戦っていたD r・ガイストが既に辿り着いていた。

「冥界白玉楼…上質な魂が集められそうだ」

D r・ガイストが持っているステッキで地面を叩くと、二つの棺桶が出現した。

ガガガガガガ

ドスン

棺桶が開き消えると、中から二人の男性が出てきた。

「さて…『裏』幻想郷の為…ひいてはボスの為に働くが良い」

一人はガタイの良い嚴つい鎧を着た大男で、もう一人はイタリアの軍服を着た男だった。

「…む？…此処は何処だ？」

元イタリア王国大元帥

ベニート・ムツソリーニ

「何だ…こりや？…」

中国後漢末期の武將

典韋

「ベニート・ムツソリーニ…そして典韋」

「む？…何だ貴様」

「お前達は私の力によつて再びこの世に蘇つた…お前達には我等の目的の為に働いてもらうぞで」

「てめえ…何もんだか知らねえがワシは殿以外の下に付く気は—」

典韋が持っている斧を振り上げ、Dr. ガイストに斬り掛かろうとする。

「フツ」

「ツーーー」

Dr. ガイストが典章を睨みつける。

すると典章は、まるで人形のように動かなくなった。

「これは…」

ムツソリーニは突然動かなくなった典章を見て察した。

「お前達の人格は私の思いのまま…ベニート・ムツソリーニ…お前も逆らえばコイツと同じ様に人形と化すことになる」

「……ふむ…どうやらその様だ…」

ムツソリーニは観念したのか、Dr. ガイストに対する敵対反応を解いた。

「蘇らせられたと言ったな？…貴様は私と此奴に何をさせる気かね？」

「お前達にはこの上に居る剣士の足止めをしてもらう…私はその奥の屋敷に用があるのでな…所謂揺動だ」

「ふむ…まあ良いだろう…私にも叶えたい野望があるのでね…そのチャンスがあるのであれば文句はない」

ムツソリーニの言葉を聞き、Dr. ガイストはとあるメモリを渡す。

「これは？」

「我等が組織が量産しているメモリだ…典韋は兎も角お前は現代に近い者…戦う術をボスから授かった…では行け」

「ふむ…面白い」

「ー」

Dr. ガイストの命令で、ムツソリーニと典韋が階段を登り出す。

「さて…では始めるとするか」

コツツ

再びステッキで地面を叩くと、棺桶が更に二つ出現する。

ガガガガガ

ドスン

中から二人の女性が出てきた。

一人は先程Dr. ガイストと共に米亜理達と戦っていた八代目博麗の巫女・博麗霊斬だった。

そしてもう一人は黄緑色のロングヘアで触覚のような物が2本生えており、オレンジ色の瞳はよく見ないとわからんが昆虫のように複眼になっている女性だった。

セクト・バグスター

『蟲の力を使う程度の能力』

嘗てはその能力故に『蟲の女王』と呼ばれ、風見幽香のライバルだった妖怪である。

「ふむ…此処は人格を戻しておくか…フツ」

「……ん…何だ…また呼び出したのか貴様」

人格が戻ったと同時に不機嫌そうな顔をする霊斬。

「どういう事だ…私はあの時…」

「ん？…お前さん…セクト・バグスターか？」

「…八代目博麗の巫女？…何故お前が？…躓いて即死したと聞いたが…」

「そのの爺さんに蘇らせられた…此処にお前さんが居るということは…お前さんも死んだか」

セクトは霊斬の言葉で自覚する。

自身が死人なのだが、今現世に再び蘇った事を。

「博麗霊斬…お前はムツソリーニと典章がしくじったら戦闘に参加しろ…元魂魄家の出であるお前ならば対処も容易いだろう」

「……懐かしい感覚だと思ったが…白玉楼か此処は…悪趣味な奴だな貴様…」

霊斬はそう言いながらムツソリーニ達の後を追った。

「セクト・バグスター…お前は私と来い」

「お前…私に何をさせる気だ？」

「いずれ分かる…」

Dr. ガイストは笑みを浮かべながら言った。

「……………」

白玉楼へと続く階段の最上階——

白玉楼の庭師兼剣術指南役である半人半霊・魂魄妖夢は、手に持つメモリを見つめながら異変解決に来る筈の博麗の巫女を待っていた。

「…霧彦さん…私は…」

妖夢は自身のメモリを見つめ、悲しい顔をしていた。

「…ッ」

妖夢は前方に気配を感じ取り、自身の刀・楼観剣と白楼剣を構える。

「ムッ？…何かと思えば…ただの小娘か」

妖夢の目の前に、上がってきたムツソリーニと典章がいた。

「…お前達は何者だ…人間…では無い…此処はお前達の様な者が来るの所では無い…即刻立ち去れ」

「ふむ…人間では無い…か…分かつてはいたがやはり人間として復活した訳では無いよ
うだ」

ムツソリーニがそう言うのと、控えていた典章が斧を振り上げながら走り出す。

「ッ」

妖夢は楼観剣と白楼剣で斧を受け止めた。

典章は持ち前の怪力で妖夢を押し始める。

「何て…カッ」

殺戮人形と化した典章は斧を器用に動かし、白楼剣と楼観剣を弾いた。

「ッ!？」

妖夢は自身の刀を二刀とも弾かれた事に驚愕する。

「終わりだな」

ムツソリーニはその光景を見て言った。

「ッ」

妖夢は咄嗟に先程持っていた金色のメモリを取り出した。

【NASCAL!】

ナスカメモリからガイアウィスパークが鳴る。

妖夢は首筋の生態コネクタにメモリを挿し込む。

キュピーン

妖夢の姿が徐々に変化し始める。

ナスカの地上絵のような模様が刻まれた、騎士のような姿。

妖夢はナスカ文明の記憶の怪人^{超人}、ナスカ・ドーパントに変身した。

ナスカ・ドーパントは自身のナスカブレードで、典韋の斧を弾いた。

「ほう」

「…まさか此処でコレを使うとは…博麗の巫女達が来た時のおきだったのに」

ザシユン

ナスカ・ドーパントはナスカブレードで典韋を斬り裂いた。

「霧彦さんの想いが詰まったこのナスカブレードに、斬れぬもの等…あんまり無い!!」

Lの目的地／決戦の地白玉楼

「ハアッ！」

ナスカブレードでムツソリーニに斬り掛かるナスカ・ドーパント。

「フッ」

ムツソリーニは軽々と避け続ける。

「避けてるだけでは私は倒せません！」

「知っているとも」

ムツソリーニは無意味に避けていたのでは無かった。

「ツ！」

ナスカ・ドーパントは後ろを振り向き、ナスカブレードを前に突き出した。

カンッ

後ろには丁度再生を終えた典章が斧で攻撃を仕掛けようと迫っており、ナスカブレ

ードの突きを斧でガードした。

「クッ不死身ですか……」

ナスカ・ドーパントは典章を見て眩いた。

「ふむ…どうやら死人なだけあつて不死身らしい…生憎と私もこの体には慣れていなくてね…しかし奇つ怪な姿をしている…これか？」

ムツソリーニは渡されたガイアメモリを起動する。

【METAL!】

「メタル…鋼か…私には合わん…ほれ」

ムツソリーニはメタルメモリを典章に向けて投げつける。

メタルメモリは起動によつて典章の右腕に出現した生態コネクタに挿さつた。

キュピーン

典章の身体が金属の様な皮膚になり複眼状の右目が赤く光り、持っていた斧も槌の先端に斧が付いた特殊なメタルシャフトに変化した。

典章は闘士の記憶の怪物^{超人}、メタル・ドーパントに変身した。

「ツーン」

メタル・ドーパントに変身しパワーが更に上がった典章――

徐々に押され始めたナスカ・ドーパント。

「やはりこれがそうか…ふむ」

【ROM!】

「ほうローマとな！私に相応しい物ではないか！フンツ！」

ムツソリーニは右手の甲の生態コネクタにローマメモリを挿し込んだ。

その姿は赤い鎧を身に纏う頭がライオンというシンプルな見た目をしていた。

ムツソリーニはローマ帝国の記憶の怪物^{超人}、ローマ・ドーパントに変身した。

「素晴らしい！力が溢れて来るではないか！私の時代にもこれさえあれば……うむ」
「ツ」

カンツ

ナスカブレードでメタルシャフトを弾く。

「フツ！」

ジャキン

ナスカブレードで斬られ、怯むメタル・ドーパント。

「ハアアアアツ！」

ナスカ・ドーパントは青いオーラを纏い、ローマ・ドーパントに向けて飛んだ。

「どれ……この力を試すでしょう」

ローマ・ドーパントが手を翳すと、ナスカ・ドーパントの目の前にいきなり壁が立ち
はだかった。

「ッ！」

「ほう！コロッセオの壁か！面白い力だ！」

「フッ！」

ナスカ・ドーパントは壁をぶち破り、そのままローマ・ドーパントに迫る。

「こんな小細工で止められると思わないで下さい!!」

「勿論知っているとも」

ローマ・ドーパントの手に、専用武器であるローマグラディウスが握られる。

カンツ

カンツ

ナスカブレードとローマグラディウスの斬りあいが始まった。

「クツハアツ！」

「フフフ良いではないかこれは！だが私にだけ気を取られて良いのかね？」

ジャキン

「ガッ！」

ナスカ・ドーパントは後ろからメタル・ドーパントに斬りつけられた。

「二対一だということを忘れていたのかね？」

「クツ」

ナスカ・ドーパントは二体のドーパントに囲まれた。

「さて…続きを始めようではないか？ Signorina？」

異変の中心にて戦闘が行われている中、それぞれの場所で穢土転生達との闘いが繰り広げられていた。

——霊夢&魔理沙SIDE——

「起爆殺——黒炎舞」

こくえんぶ

アームズ・ドーパントの右手から黒い煙の様な物が噴射される。

「何だコレッ」

「マズイ！」

霊夢は咄嗟に魔理沙の首根っこを掴み投げ飛ばす。

「ツ!? 霊——」

カチツ

チユドオオオオオオン

アームズ・ドーパントが両腕の金属部分を擦ると、噴射された黒い煙が大爆発を起こした。

「ツ!! 霊夢!!」

投げ飛ばされた魔理沙は爆発を喰らわずに済んだが、霊夢は爆発の中心にいた。

爆煙が晴れると、霊夢が立っていた。

「はあ…はあ…ウツ」

「おいおい…あれだけ爆破を諸に受けたつてのに五体満足かよ…だが無傷って訳でもねえな」

アームズ・ドーパントの言う通り、霊夢は爆破を諸に受けたにも関わらず無事だった。だが無傷では無い——

霊夢の身体は至る所に火傷の後があった。

「霊夢！大丈夫か!?…ひでえ火傷じゃねえか！」

「はあ…はあ…咄嗟に小規模の結界を張ったのよ…でも咄嗟だったから全てを防ぎきれなかった…ツ！魔理沙！」

「ツ!？」

魔理沙の後ろに、霊結が結界を生成していた。

「二人共避けて下さい！」

結界に光が一点集中していた。

「結界砲」

結界から一点に集中された光がレーザーとして放たれた。

「マスターズパーク!!」

魔理沙は持つているミニ八卦炉からマスターズパークを放ち、結界砲を相殺した。

「まさか結界砲を相殺するとは…流石ね魔理沙ちゃん」

霊結は驚きながらも魔理沙の実力を見て安堵した。

「伊達に霊夢の相棒は名乗ってねえぜ！」

「全く」

霊夢は立ち上がった。

「行けるか霊夢？」

「誰にももの言ってるのよ?」

霊夢は懐からアクセルメモリを取り出した。

「ドーパントは私がやる…そっちは任せたわよ?」

「おう!」

【ACCEL!】

「変……身!」

キュピーン

霊夢は腹部の生態コネクタにアクセルメモリを挿し込み、アクセル・ドーパントに変身する。

「なんだ…博麗の巫女も変身出来んのか」

「さあ…振り切るわよ!」

ブウンブウン

マフラーから爆炎を発しながらアクセル・ドーパントはアームズ・ドーパントに向けて走り出す。

「へっ…そんな訳だ…あんたは私が相手をするぜ六代目」

魔理沙はアクセル・ドーパントを見届けると霊結に向けて言った。

「ええ構いませんよ…出来る事なら私を止めて下さい」

「行くぜ!!」

魔理沙は霊結に向けて魔法を放った。

——来雪&紗綾&アリスSIDE——

「アリス!」

『ギヤアアアアアス!!』

描絵の描いた竜巻の龍が三人に向けて咆哮を上げながら突撃する。

「ハアツ!!」

ドシューウン

アリスが来雪の前に立ち、水魔法で龍の絵を流した。

「クツ…」

アリスがその場に片膝を付いた。

「アリスさん!」

来雪はアリスを支える。

「ごめんなさい…魔力を使いすぎたわ」

「私こそごめんなさい…何も役に立てなくて…」

「来雪！アリスと紗綾を連れて逃げ…クツ」

描絵は次の絵を描き始めた。

「寄りにもよってこれか…作品番号漆——笑うは人か？花か？」

その絵は花畑の中に頭に花を咲かせた人が一人で笑っている絵だった。

描絵の能力で実体化を始めると、花びらが舞い地面に落ちた。

すると一つの芽を出しそして人型の植物・マンドレイクとなった。

大きさは50cm位で、その数がおよそ100体程——

「作品番号漆ツ…魔力さえ残ってれば対処は出来るのに…」

「なんて数…」

来雪はマンドレイクの数に絶句した。

「うっ来雪さん！アリスさん！」

紗綾はモールド・ドーパントの腕を抑えながら二人の名前を叫ぶ。

「クソ…」

描絵は怒りの形相でマンドレイク達に指示を出した。

描絵自身の意志に関係無くマンドレイク達は二人に向けて一斉に走り出す。

「来雪逃げなさい」

「アリスさんを置いては行けないよ！」

アリスが来雪に逃げるように言うが、来雪はアリスを離さなかった。

マンドレイク達が二人を襲う——

その時だった。

「二人共伏せて!!」

『ツ!』

突然の声に二人は戸惑いながら伏せた。

「霊繋ちゃん魅魔ちゃん2秒以内に飛び降りてね！」

『はあっ!?!』

ブウン!

二人の頭上をエアークバイクが飛び越した。

「トウツ！」

『ツ!』

エアークバイクに乗っていた米亜理，霊繋，魅魔は飛び降りた。

操縦士を失ったエアークバイクはそのままマンドレイクの群れに突っ込んだ。

「ポチツと！」

ドオオオオン

米亜理がスイッチを押すと、エアークバイクがマンドレイク達を巻き込み爆発した。

「ふうう…爆弾取つといて良かったあ」

「良かったあじゃないわよ！殺す気か!!」

霊繫が米亜理の胸倉を掴みながら怒鳴った。

「まあまあ落ちて着いて霊繫ちゃん!…マジで！絞まつてる！絞まつてるから！」

「よしなさい霊繫…この人はこういう人だったでしょ」

魅魔が霊繫を宥めた。

「えっ?…誰?」

来雪は颯爽と現れた三人を見て呟いた。

「貴女達…」

「ん?…貴女神綺の所の…」

魅魔はアリスを見て言った。

「ええ…アリス・マーガトロイドよ」

「魔理沙が世話になってるな」

「うちの霊夢も世話になってたわよね？ありがとう」

落ち着きを取り戻した霊繫も礼を言った。

「先代巫女…行方不明って聞いてたけど…」

「先代巫女？…えっ？てことは…」

来雪はアリスの言葉で感づいた。

「ええ…霊夢の前の巫女…つまり霊夢の母親よ」

「霊夢の…お母さん？」

「ええ…その流れだと私は霊夢ちゃん？のお婆ちゃんって事？……嫌だあ！まだ私そんな歳じゃなあい！！」

米亜理は頭を抱えながら叫んだ。

「馬鹿やってないで構えなさいよ米亜理さん」

霊繫が構える。

「これは驚いた…まさか先代と先々代が来るとはね」

描絵は驚きながらも笑みを浮かべる。

「うう」

「先代巫女と先々代巫女…凄い面子だね」

モールド・ドーパントを抑えながら呟く紗綾だったが、モールド・ドーパントが抑えつけられている腕を斬り落とした。

「ツ！自分の腕を!?!」

「身体が勝手に…」

モールド・ドーパントは跳び上がり、描絵の隣に立つ。

「お姉さん…」

「分かつてる…意識が…段々ね」

描絵は苦しそうに呟く。

「来雪!」

「え?...あつ咲夜ちゃん」

そこに咲夜が怒りながら走って来た。

「置いていくなんて酷いじゃない!」

「ごめん!咲夜ちゃん気を失ってたから…」

来雪は怒る咲夜を宥める。

「取り込み中悪いんだけど…」

描絵が言った。

「私と美絃の意識が…遠退いて行ってる…術者の作業なのは間違いないが…」

「うう……」

「描絵！」

アリスが描絵の名前を呼んだ。

「アリス……私達を……止め……」

描絵は無表情の状態になり、瞳の色が白くなった。

モールド・ドーパントも言葉を発しなくなった。

「描絵……」

「Dr. ガイスト……外道が……」

魅魔は呟いた。

「Dr. ガイスト？」

「ああ……こいつ等……穢土転生を操っている術者の名前だ……」

来雪達は魅魔の呟きを聞き、術者の名前を心に刻んだ。

「そいつが描絵をあんなにしたのね……」

アリスは怒りのあまり拳を握り締めており、握り締めた手から血が垂れる。

「アリスさん……」

紗綾はアリスの様子を見て呟いた。

「来雪ちゃんだっけ？」

「えっ?はい」

米亜理は来雪を見つめ言った。

「此処は私と霊繋ちやんでなんとかする…魅魔ちゃん…その子達を連れて白玉楼に向かつて」

「……分かった」

魅魔は了承する。

「十一代目…」

「アリスちゃん…怒る気持ちは分かる…でも貴女が此処に残って戦う必要は無い…恐らくだけで白玉楼に術者が居る」

「ツ…そう…ならそっちに行かせて貰うわ」

「状況がいまいち分からないけど…行き先は決まったのね?」

咲夜が来雪に尋ねる。

「うん…魅魔さん…連れてって下さい…白玉楼に」

「分かった…お前は どうする犬妖怪?」

「犬飼紗綾です…勿論行きますよ…こんな事する術者を許せませんから」

紗綾の答えに米亜理は笑みを浮かべる。

「じゃあ決まりだ…此処は任せて先に行きな…あつこれ死亡フラグだ」

「あんた絶対わざとでしょー！」

米亜理の言葉に霊繋がつっこんだ。

「行くわよ」

「はいー！」

魅魔は来雪達を連れて飛ぶ。

「さあて…そちのカビは任せたよ霊繋ちゃん」

米亜理はA F 1 9アサルトライフルを構えて言った。

「了解…」

霊繋が博麗式武術の構えをとった。

「……霊夢&魔理沙SIDE……」

「ハアツ！」

「フツ！」

アクセル・ドーパントのパンチとアームズ・ドーパントの剣がぶつかり合った。

「なんだよ使い慣れてんじゃねえか」

「そんな訳無いでしょ…さっき使ったのが最初なんだから」

アクセル・ドーパントは肘のマフラーの出力を上げた。

「グツ」

「だあああ！」

アクセル・ドーパントの馬力が上がり、アームズ・ドーパントを殴り飛ばす。

「ぐわっ！」

アクセル・ドーパントの後ろから魔理沙が吹っ飛んできた。

「魔理沙！」

アクセル・ドーパントは魔理沙に駆け寄る。

「悪い……強すぎるぜ六代目……」

魔理沙とアクセル・ドーパントの目線の先には、霊力を高めお祓い棒から光の剣を生
成する霊結の姿があった。

「流石六代目……霊力に至っては歴代最高の巫女……紫から聞いてたけど……これ程とはね」

「お褒めに預かり光栄ね……霊力の高さには自身があるの」

「霊夢……どうするよ」

「どうするって……やるしかないでしょ……」

魔理沙を支えながらアクセル・ドーパントが呟いた。

「いやはやなんとも……恐れ入ったぜ博麗の巫女……」

殴り飛ばされたアームズ・ドーパントも戻ってきた。

「どうやら…まだまだの様ですね…」

霊結は呟いた。

「出来る事なら止めて貰いたかったのですが…」

霊結は光の剣を構えながら二人に迫る。

「こりゃ…終わりか？」

アームズ・ドーパントがシールドソードを構えながら走り出す。

(殺られるツ…魔理沙)

アクセル・ドーパントは魔理沙を先に逃がそうと掴もうとする。

そこにー

「ザ・ワールド！」

ドウウン

カチツ

飛んできた咲夜以外の時間が止まった。

「魔理沙と一緒にいるドーパント…まさか霊夢かしら？」

咲夜は魔理沙とアクセル・ドーパントを掴み、その場から離れた。

離れた場所には同じく時間が止まった状態の来雪達が居た。

「さて…あれも穢土転生とか言う死人ね…ホントに悪趣味な術ね」

咲夜は離れた場所に止まっている霊結とアームズ・ドーパントを見て呟いた。

「時は動き出す」

キュウウウン

「ッ!？」

「はっ?消えた?」

霊結とアームズ・ドーパントは、いきなり目の前から二人が消えたことに驚愕した。

「ッ!」

「…これは…咲夜?」

アクセル・ドーパントは咲夜を見て察した。

「やっぱり霊夢なのね貴女…」

「霊夢…その姿…」

来雪はアクセル・ドーパントの姿を見て悲しそうな顔をする。

「…ごめんね来雪…私…ドーパントの力を使っちゃった…」

「……姿から見てアクセル……だよな？……アクセルにドーパントの姿があるなんて……」

「ええ……照井さんから託された力よ」

「照井……」

来雪はあることに気付いた。

（あれ？……何で私……霊夢のメモリがアクセルだつて分かったの？それに……照井つて誰？）

「来雪さん？」

紗綾が来雪の肩を掴んだ。

「あつ……ごめん……何でもない」

「兎も角助かったぜ咲夜」

魔理沙は咲夜に感謝した。

「お礼なら後にしてちょうだい……あの二人は？」

咲夜は二人を探すアームズ・ドーパントと霊結を見て尋ねる。

「アームズ・ドーパント……あれも穢土転生にされた人が変身してるんだね」

「ええ……もう一人は博麗霊結……六代目博麗の巫女よ」

『ツ!?!』

アクセル・ドーパントの眩きに魔理沙を除く全員が絶句した。

「描繪が復活した時点で考えてたけど…まさか本当に博麗の巫女を穢土転生として…」
アリスは戦慄した。

「アリス…お前も来てくれたのか？」

魔理沙がアリスを見て言った。

「ええ…穢土転生を操っている黒幕に用があるのよ」

「ッ」

魔理沙はアリスのこれまでに見たこと無い怒りの形相を見て驚愕した。

「アリス…まさか…」

「ええ…さつきまで友人と戦わされてたわ…許せるわけ無いでしょ？」

「…そうね…」

アクセル・ドーパントは気持ちを切り替える。

「話は終わったか？」

そこに魅魔が遅れてやって来た。

「えっ?! 魅魔様!?!」

「魅魔…あんた何で…」

「久し振りだね霊夢…それに魔理沙…今は話をしてる場合じゃなくてね…」

魅魔は二人の穢土転生を見て言った。

「霊夢に魔理沙……この穢土転生を操ってる術者は今冥界白玉楼に居る……此処は私が相手をするからあんた達は白玉楼に急ぎな」

「ちよつ……魅魔様一人でやるのは無茶だ！私もー」

魔理沙が魅魔を追おうとするがー

「魔理沙……あんたは霊夢達と行きな……異変解決はあんたらの仕事だ……こんな所で足止め喰らってちゃ意味が無い……それとも何かい？私が負けたとしても思ってたのかい？」

「ツ……そんな言い方……ズルいぜ魅魔様……」

「フツ……分かったら行きな……白玉楼への道のりはその犬のお嬢ちゃんに聞きな……事細かに説明してあるから」

「魅魔さん」

来雪が魅魔に言った。

「無理はしないで下さいね」

「……フツ……餓鬼が生意気な……誰にも言うってんだい？……私はこれでもあの脳筋巫女のお守り役だ……こんな所で殺られる筈無いだろ？……さっさと行きな」

「……頼んだわよ魅魔」

霊夢は変身を解きながら言った。

「……みんな……行くわよ」

霊夢の言葉に皆が頷き、空を飛ぶ。

「…魅魔様…信じてるぜ」

魔理沙はそう言うと、飛んでいった皆を追いかける。

「……私も丸くなったね…分かってるよ魔理沙…」

魅魔は二人の穢土転生の前に降り立つ。

「ん？…今度は誰だ？」

「…貴女…悪霊…ですネ？」

霊結は魅魔の正体を見抜いた。

「まあね…ここからは私の相手をしてもらうよ六代目…それにそのドーパント」

「そうですか…霊夢ちゃんと魔理沙ちゃんは離脱出来たみたいですね…良かった」

「それは良いが…あんた一人で俺達を止められるのか？」

「さてね…だが時間稼ぎは出来るさ…異変解決までの時間稼ぎはね！」

魅魔はステツキを構える。

そして白玉楼の中庭に場面は変わる。

「……………」

白玉楼の主——西行寺幽々子は、中庭に聳える西行さいぎょうあやかし妖を見つめていた。

「……あらあら……招かねざるお客様がいらつしやいましたか……」

幽々子が振り返ると、そこにはセクト・バグスターを連れたD r. ガイストが立っていた。

「いやはやお初にお目にかかる西行寺幽々子……私はD r. ガイスト……以後お見知りおきを」

「……妖夢が居るのに……どうやって入ったのかしら？」

「魂魄妖夢は私の手駒が相手をしている……侵入するなど容易いこと」

「……セクト……まさか貴女とこうしてまた対面出来るとは思わなかったわ」

幽々子はセクトを見て言った。

「私もだよ幽々子……幽香は元気か？」

「ええ……相変わらずの戦闘狂だつて紫が言つてたわ……それで……どうして貴女がそちらに？」

「……ムカつく話だが……身体が言う事を利かない……この爺さんに逆らえないんだ……嘗ては蟲の女王とまで言われた私も地に落ちたな」

セクトは悔しそうに呟いた。

「そう……道理で魂が無かった筈だわ……貴方が魂を攫つてたのね」

「御名答：既に数多くの魂を穢土転生させて貰ったよ…」

「…それで？ 一体何用かしら？」

「何…少し欲しい物がありましてね…その桜の下に眠る貴女の体を頂きに参った」

「ッ！」

幽々子はガイストを睨み付ける。

「幽々子の体…だと？」

「左様…私のゴーストメモリは魂と器さえあれば穢土転生を作る事が出来る…だがこうも思つてね…あの書物の様に死体のDNAを用いて穢土転生を作れば更に強い縛りが出来るのでは無いかとね」

「…おかしな事言っているね…魂と器が必要なのでしょうか？…その理屈なら魂は私自身でしょ？…此処に埋まつてるのは私の元の体…魂なんか無いわよ？」

「その通りだ…だが私はある仮説を立てた…そこに埋まつてる貴様の死体を使って穢土転生をすれば…生前の西行寺幽々子を穢土転生出来るのでは…とね」

「ッ！」

幽々子は戦慄した。

「ボスから貴様の生前の能力を聞いた…是非とも私の手駒として加えたくてね…亡霊となった貴様と生前の貴様は最早一つの存在とは言い難い…上手く行けば生前の西行寺

幽々子を手駒に出来る……これ程使えそうな駒があるか？」

ガイストは笑いながら語った。

すると屋敷から声が聞こえた。

「そんな事させると思ってるの？」

そこにいたのは幻想郷の賢者の一人である八雲紫とその式八雲藍だった。

「紫」

「これはこれは……幻想郷の賢者がお出ましか」

「紫……藍……」

セクトは紫と藍を見て呟いた。

「セクト……こんな形で貴女と再会するなんてね」

紫は悲しそうな顔をしながら言った。

「セクト・バグスター……風見幽香のライバル……そういう認識で穢土転生したが……こうも顔が広いとは」

「……………」

「まあ良い……八雲紫……貴様に相応しい相手を用意しよう……」

カツン

ガイストがステッキで地面を叩くと、棺桶が一つ出現した。

「紫様」

藍が紫の前に出る。

ガガガガガガ

ドスン

中から出てきたのは長い銀髪に火鼠の衣を纏い頭からは犬耳が生えた罇だらけの男性だった。

「ッ!？」

紫はその男性を見て戦慄する。

「……紫様?」

紫の様子を見て藍は不思議に思った。

「……輪……廻?」

「え?」

紫は震えていた。

「感動の再会と行こうか八雲紫……八雲藍……此奴の名は八雲輪廻……貴様の前任者……八雲紫の初めての式だ」

やくもりんね
八雲輪廻

『組み立てる程度の能力』

「…外道が…」

セクトはガイストを睨み付けながら言った。

「フンツ駒をどう使おうが私の自由だ…さて…貴様も人格を縛るか…」

「何？…ツ…これ…は……ロー…」

ガイストが念を込めると、セクトは複眼の全てが白くなり動かなくなった。

「セクト」

幽々子はその様子を見て顔を歪めた。

「さて…話は終わりだ…八雲輪廻…セクト・バグスター…殺れ」

ガイストの命令と同時に二人が動いた。

セクトは幽々子に向けて飛び出し、輪廻は紫達の方に走り出す。

「クツ」

幽々子はその場を飛び、セクトも翅を広げて後を追った。

「紫様下がって下さい！」

迫りくる輪廻を止めるべく、藍が飛び出す。

「藍！駄目！」

紫が静止するが、藍と輪廻は取っ組み合いになる。

「おい！輪廻とか言ったな…紫様の式なのだろ？何故紫様を襲う！」

「—————」

藍の問い掛けに反応しない輪廻。

「無駄だ…人格は縛り付けてある…今のソイツは私の殺戮人形だ」

「…貴様…よくも輪廻を」

紫はガイストを睨み付けていた。

その眼光は今までに無いほど殺気立っていた。

「ふむ…私が憎いか八雲紫…なら少しだけ遊んでやろう」

ガイストは懐からメモリを取り出した。

「…ガイアメモリ…」

「フツ」

【GHOST!】

キュピーン

額の生態コネクタにメモリを挿し込み、ゴースト・ドールパントに変身した。

「何処からでも掛かって来たまえ…言っておくが…私の力が穢土転生だけとは思わないことだ…」

Hでの決戦／集う者達

「クツ…ハアツ！」

「まだ粘るか…諦めが悪い」

ローマ・ドーパントがローマグラディウスでナスカブレードを受け止める。

「クツ」

「先程も言ったね？私にだけ気を取られて良いのかね？」

「ガツ！」

ローマ・ドーパントの背後からメタル・ドーパントがメタルシャフトを突き出し、ナスカ・ドーパントの腹部を突いた。

「歩兵隊…構え」

ローマ・ドーパントが腕を挙げる。

すると何処からともなくローマ歩兵隊が数人現れ、ナスカ・ドーパントに向けて槍を構える。

「ツ！」

「放て！」

ローマ・ドーパントが腕を降ろしたと同時にローマ歩兵隊は持っている槍を投擲する。

「この程度…ハアアアア！」

ナスカ・ドーパントは青いオーラを発しながら飛び出す。

「何度も同じ手を通じるとでも？ 行け！」

ローマ・ドーパントはローマ歩兵隊を更に動員した。

「それは…こちらの台詞です!!」

追撃のローマ歩兵を斬り捨てつつ、ナスカ・ドーパントはオーラを纏いながら飛ぶ。

飛んだ先には典章と戦闘した際に弾かれた楼観剣が転がっており、ナスカ・ドーパントは飛びながらそれを掴む。

「ムッ…させるとー！」

「フッ！」

ナスカ・ドーパントは持っているナスカブレードを投げつけた。

ザクツ

「なっ!?!」

ローマ・ドーパントの挙げた右腕にナスカブレードが突き刺さり、隙が生まれた。

ナスカ・ドーパントはローマ・ドーパントの懐に入る。

「しまー」

「草早楼観剣!!」

ナスカ・ドーパントは掴んだ楼観剣でローマ・ドーパントを居合い切りの要領で横に一刀両断した。

「……見事だ……Signorina」

ドオオオオン

ローマ・ドーパントは眩くと同時に爆発した。

ピキン

爆炎が収まると、皮膚の色が白くなり斬り捨てられた腹部から崩れ始めるムツソリーニとメモリブレイクされたローマメモリが地面に散らばっていた。

「ふむ……不死身の体の筈だが……成る程その刀か」

ムツソリーニは崩れる体を見ながら言った。

「……楼観剣は一振りで幽霊10匹分を屠る殺傷力があります……死人である貴方に振るえば一溜まりもない筈です」

「そのようだね……しかし無念だ……私の野望の為に従ったが……こうもあっさり崩れ去るとは……」

「……………」

ナスカ・ドーパントは敢えて聞かなかった。

「Signorina…お嬢さん…最期に聞かせて欲しい…名は何と言うのかね？」

「……冥界白玉楼庭師兼剣術指南役…魂魄妖夢です」

「……うむ…覚えておこう……冥界の剣士魂魄妖夢よ！良くぞこの私…ベニート・ムツソリーニに掛けられた術を解いてくれた！大義である！貴女のような勇士を私は忘れることは無いであろう！…さらばだ」

ムツソリーニは高らかに語り、崩れ去った。

ムツソリーニが立っていた場所には、体を形成していた紙と穢土転生の器にされたであらう男性の遺体があった。

「……」

ナスカ・ドーパントは無言でお辞儀をした。

そしてナスカブレードを拾い上げ、メタル・ドーパントに意識を向ける。

「残るは貴方だけです」

「……………」

ナスカ・ドーパントはナスカブレードと楼観剣を構えた。

「行きます！」

ナスカ・ドーパントは青いオーラを纏いながらメタル・ドーパントに向けて飛び出す。

白玉楼入口にて、ある3人が逃げていた。

「何なの何なの!?!何で追いかけて来るの!?!」

「リリカ!そんな事言つてないで急いで!」

それは幻想郷で人気を誇る騒霊演奏隊・プリズムリバー三姉妹のルナサ・プリズムリバー、メルラン・プリズムリバー、リリカ・プリズムリバーの3人だった。

そんな3人を追う者がいた。

「アハハハハハルデスヨオオオ!!」

それは先程まで霊夢と戦っていたサイクロン・ドーパントー

否、レティ・ホワイトロックが使っていたサイクロンメモリを挿入され理性を失った春告精リリ・ホワイトであった。

「何でリリーが襲つてくるの!?!しかも変な姿になつてるし!?!」

「知らないよ!兎に角今は逃げるしかないよ!」

リリカの叫びにメルランが言った。

「ッ!」

すると一緒に逃げていたルナサがその場で止まった。

「ルナサお姉ちゃん!?!」

「何やってるの!?!」

「二人は逃げて! 私が時間を稼ぐから!」

ルナサは持つているヴァイオリンを奏でる。

「ストラディヴァリウス!」

ヴァイオリンから音符型の弾幕がサイクロン・ドーパントに放たれる。

「アハハハハハ」

ドオオオオン

突っ込んでくるサイクロン・ドーパントは弾幕に被弾した。

「速く行って二人とも!!」

「でもルナサお姉ちゃん!」

「ツ! 危ない!」

メルランが叫ぶ。

「ツ!」

「アハハハハハ!」

「ガツ!」

煙からサイクロン・ドーパントが風を纏いながら飛び出し、ルナサにボディブローをいれた。

その威力でルナサは吹っ飛ばされた。

「ルナサお姉ちゃん！」

リリカが吹き飛ばされたルナサの元へ飛ぼうとするが、サイクロン・ドーパントが既に迫っていた。

「ガッ」

「カッ」

サイクロン・ドーパントは二人の首を絞め始める。

「アハハハハハ」

「アッ…カッ…リリ…」

「やめ…て…リリ…」

「アハハハハハ」

サイクロン・ドーパントの手が止まることは無く、二人の首は絞まりつつあった。

「うっ…メルラン！リリカ！」

吹き飛ばされたルナサは、痛みに耐えながら二人の元へ行こうとする。

「アハハハ！」

サイクロン・ドーパントは風を操り、ルナサの邪魔をする。

「うっ…やめてリリ…！お願い！私の妹達を奪わないで！！」

ルナサは泣きながら訴えた。

「アハハハハハハルデスヨオ！」

「ガツ……ア」

「お……ねえ……ちや……」

「やめてえええ!!」

二人の首はへし折られる寸前だった。

その時だった。

キュインキュイン

「ツガア!？」

突然、首をへし折られる寸前だった二人がサイクロン・ドーパントの顔面を殴り飛ばしたのだ。

「え?」

その光景に唾然するルナサ。

「間に合ったわね」

ルナサが声のする方を見るとそこには漸くここまで辿り着けた来雪達と、アリスが変身したパペティアー・ドーパントがいた。

「ナイスだぜアリス！」

「貴女達は…ッ！メルラン！リリカ！」

ルナサは二人の妹達の所へ行き、抱き着いた。

「へっ？…ルナサ姉さん」

「お姉ちゃん？」

メルランとリリカは何があつたか分からずに戸惑つた。

「良かった…良かったよお…」

二人はパペティアーの能力で一時的に操り人形になり、サイクロン・ドーパントを殴り飛ばしたのだ。

「サイクロン・ドーパント…ヒートメモリがあるんだからあつても不思議じゃないよね」

来雪は殴り飛ばされたサイクロン・ドーパントを見て言った。

「アイツ…さつき私が倒した奴よね…やっぱメモリを回収されてたのね」

霊夢は苦い顔をし言った。

「速く逃げなさい」

咲夜がプリズムリバー三姉妹に言った。

「ありがとう」

ルナサは来雪達に御礼を言いつつ、二人を連れて逃げた。

「アハハハハルデスヨオオオ」

「春ですよ……リリーホワイトね」

「無害なアイツですらこうなっちゃうのかよ」

霊夢がサイクロン・ドーパントの正体を呟き、魔理沙がその姿に戦慄した。

「たださつき相手したレティよりは弱いわ……変身してない私でもダメージを負わせられたのだから」

霊夢は御札を構える。

「ハルデスヨハルデスヨオオオ!!」

「霊夢さん達は先に行って下さい……私が抑えます」

紗綾が前に出た。

「紗綾さん」

「大丈夫です……すぐに後を追いますから」

心配そうに呟く来雪に紗綾はケルベロスメモリを取り出しながら言った。

「行って下さい!!」

【KERBEROS!】

紗綾は右太腿の生態コネクタにケルベロスメモリを挿し込み、ケルベロス・ドーパン

トに変身した。

「ハアアアアア！」

「アハハハハルデスヨオオオ!!」

二人はぶつかった。

「行くわよ」

「うん……紗綾さん……気をつけて」

霊夢達はケルベロス・ドーパントに想いを託し、白玉楼の入口に入った。

「……………ムツソリーニだったか? ……殺られたの」

陰でナスカ・ドーパントの闘いを見物している博麗霊斬が呟いた。

「にしても……楼観剣……魂魄家の出じやな」

同じ魂魄家の出である霊斬は笑みを浮かべる。

「見た所妖忌じゃないのお……………娘か? ……そうか……わしにも孫が出来たかあ……」
霊斬は知らなかった。

今戦っている魂魄妖夢は自身の息子である魂魄妖忌の孫であることを……

自分は祖母ではなく曾祖母にあたる事を……

「うむ……わしに似て可愛かったのお……可愛い孫に加勢してやるのが祖母であるわしの務

めなのじゃが…チツ…あの老いぼれめ…」

靈斬は今の状況に苛立ちを覚えていた。

「にしてもあの男も粘るのお…じゃが倒されるのも時間の問題…ムカつくが行くかのお」

靈斬が陰から姿を現し、戦闘に参加する——

その直後だった。

「……ほう……つちが先か……」

靈斬の後ろから白玉楼を目指す者達の気配がした。

「自動的に対処するのか…仕方あるまい…今の巫女の力を拝見するでしょう」

靈斬は後ろを向き、階段を降りてった。

「…もう少しね」

階段を登る靈夢達。

「…ツ…誰か降りてくるわ」

いち早く咲夜が気付いた。

目的地である白玉楼から誰かが降りてきている事を——

「…いふむ」

それは紅白の巫女服に紅い持ち手の刀を腰に差した白髪のセミロングで深緑のリボンをし、白目部分が黒く緑色の瞳でグラマスな体型の皮膚の罅が目立つ女性だった。

「一先ずは褒めておくかの…良くぞ白玉楼まで辿り着けた」

「霊夢…あいつの恰好…」

魔理沙が霊夢に呟いた。

「ええ…六代目と似た恰好…貴女…博麗の巫女ね」

「如何にも…わしは博麗霊斬…八代目博麗の巫女だ」

「八代目…博麗の巫女の中で剣術に秀でた巫女…確か紫がそう言つて…」

「ほう…それを紫から聞いているという事は…お主が現博麗の巫女かの？」

「ええ…博麗霊夢…十三代目博麗の巫女よ」

霊夢はお祓い棒を構えながら言った。

「十三代目…あの場には十一代目までだったな…」

霊斬は呟いた。

「うむまあ良い…知つてると思うが…今のわしは体の自由が無い…今もこうしてお主らの前に来たのもお主らを斬れという命令故にな…」

霊斬は自身の愛刀宝桜ほうおうを抜刀した。

「じゃがそれでは困る…お主らにはこの異変を止めて貰わねばならんからの…一人…い

や二人は残れ…他は首謀者を何とかしろ」

宝桜を構え霊斬は言った。

「…みんなは行って頂戴…此処は私がやる」

霊夢が前に出ようとするのを止めた者達がいた。

「それはこつちの台詞よ霊夢…寧ろ貴女が先に行きなさい」

「そうだけ霊夢…お前が元凶を叩かないでどうすんだよ」

それは咲夜と魔理沙だった。

「魔理沙…咲夜…」

「咲夜ちゃん」

「…安心しなさい来雪…大丈夫…私にはコレがあるもの…だから行って頂戴」

咲夜は懐からチャーチメモリとあるアイテムを取り出した。

「それは…」

「お嬢様から借りた物よ…大丈夫…もうメモリに吞まれたりはしないわ」

「…気をつけて」

「…全く…任せたわよ」

「ええ」

「おう！」

霊夢達は先に行くために階段を上がる。

「分かっていると思うが……これはわしの意志ではないからの！」

階段を上がる霊夢達に向けて霊斬が斬り掛かる。

だがその刃が降り掛かる事は無かった。

「む？……空振った……わしがか？」

斬り掛かろうとしていた霊夢達が一瞬で姿を消したのだ。

「私の能力で先に行かせたわ」

霊斬が上の段を見ると、何時の間にか咲夜が立っていた。

（わしが背後を取られた……いや違う……これは……）

霊斬は一連の出来事を冷静に考え、答えを出す。

「……空間操作……いやこれは時間操作の類いか……成る程……やはり唯の人間では無い様

じやな」

「……まさか私の能力をこんな短時間で見破るなんて……時間を操る……それが私の能力

よ」

「……面白いの」

霊斬は笑みを浮かべる。

「咲夜退け!!」

「ッ」

「マスタースパーク!!」

ドウウン

「ほう」

ドオオオオン

霊斬にマスタースパークが直撃した。

「危ないじゃない魔理沙」

「悪いな…けど…」

魔理沙は爆煙を睨み付ける。

二人は分かっていた。

この程度で殺れる相手では無いとー

「魔法か…そう言えば魔法使いと対峙するのは初めてじゃの」

霊斬の左腕が消し飛んだが、瞬時に再生し始める。

「やっぱ駄目か」

「消し飛ばしても再生出来るのね」

穢土転生の再生を初めて見る咲夜は冷や汗を掻いた。

「はあ…惨めじゃな…わしがあの老いばれ如きに自由を奪われるとは…お主ら…名は何

と言ったかの？」

「…私は霧雨魔理沙…霊夢の相棒で普通の魔法使いだ」

「紅魔館のメイド長…十六夜咲夜と申します」

「そうか…では魔理沙に咲夜よ…生憎と加減は出来ぬ…死ぬなよ」

霊斬が宝桜を構えながら言った。

「当然だぜ！」

「此処で死ぬもんですか…」

「はあ…はあ…」

「……………」

ナスカ・ドーパントは息を切らし、メタル・ドーパントの動きを伺う。

「中々手強いですね」

メタル・ドーパントがメタルシャフトを振り上げ、ナスカ・ドーパントに向けて走る。

その時だった——

「夢想封印！」

「ッ！」

ドオオオオン

ナスカ・ドーパントは突然の攻撃を察知し避けるが、メタル・ドーパントは諸に受けた。

「…貴女達は…」

ナスカ・ドーパントが見たのは、階段を上がってきた霊夢達だった。

「ナスカ・ドーパント…パチュリーさんが持ってたウイズダムメモリと同じゴールドメモリのドーパント…」

「要するに強敵って訳ね…」

来雪の言葉にその場に居た全員が戦闘態勢になった。

「…博麗の巫女…もう来たんですね」

「…あんだ…今回の異変の関係者？それとも穢土転生を操る術者？」

「…穢土転生？…もしかして死者を操る術の事ですか？」

「…その反応だとあんだは異変の関係者の方ね」

霊夢はナスカ・ドーパントよりも、爆破したメタル・ドーパントの方を見た。

「……………」

「メタル・ドーパント…ヒートやサイクロンに続いてメタルまで」

「…ナスカだっけ？…今はあんだとやり合ってる暇はないわ…先ずはこつちを退治する

わよ」

霊夢は来雪の言葉を聞き、ナスカ・ドーパントに目を遣る。

「…良いでしょう…確かに異変所ではなさそうです…私は魂魄妖夢です」

「そう…博麗霊夢よ…こつちが園田来雪とアリス・マーガトロイド」

「宜しくお願ひします妖夢さん」

「宜しく」

「…こちらこそ宜しくお願ひします」

四人はメタル・ドーパントを見つめ構える。

「—————」

四人とメタル・ドーパントの闘いが始まる——

かに見えた。

シユウウウン

ガタン

メタル・ドーパントは突如地面から現れた棺桶の中に入れられ、消えた。

「なっ!？」

「消えた…術者が戻したのね…」

「霊夢の言う通り、幻想郷中で戦闘を行っている穢土転生達が回収され始めていた。」

紅魔館

「フツ…ハア！」

「おっと…フツ…強くなったな美鈴ちゃん」

美鈴の攻撃を受け流しながら蘭武は言った。

「蘭武さん…あの頃の私と一緒にだと思ってたのですか？」

「まさか…気のデカさが桁違いー」

蘭武の言葉は遮られた。

シユウウウン

蘭武、ロベール、獄糸の背後に棺桶が出現する。

「ん？」

「棺桶？」

「おいおい何だよー」

ガタン

「むっ……終いか」

ガタン

「そうみたい……可愛い姪っ子達……じゃあね」

ガタン

ドドドドド

棺桶は三人を取り込むと、地面に沈んでいった。

「ロベールおじさんー」

「……叔父様……」

スカレット姉妹は地面に消えたロベールを見て悲しい顔になった。

「蘭武さん……」

美鈴もまた、蘭武が消えた事に一筋の涙を流した。

米亜理， 霊繫SIDE

シュウウウン

ガタン

ガタン

ドドドドド

殺戮人形と化した描絵、モールド・ドーパントも棺桶に取り込まれ、地面に消えた。

「ふえ？」

「穢土転生が…霊夢」

霊繫は白玉楼に向かった娘を心配する。

魅魔SIDE

シユウウウン

「これはー」

ガタン

「……どうやら此処までの様ですね」

ガタン

ドドドドド

アームズ・ドーパントと霊結も棺桶に取り込まれ、地面に消えた。

「…ある意味助かった…だが」

魅魔は白玉楼があるであろう場所を見つめる。

魔理沙， 咲夜 S I D E

「はあ…はあ…何だよ…博麗の巫女ってみんな強すぎるぜ」
「…侮ってたわ…メモリを使う余裕すらくれないなんてね」
魔理沙と咲夜の体は切り傷だらけになっていた。

「なんじゃ終わりか？なつとらんの」

シユウウウン

靈斬の背後に棺桶が現れた。

『ツ!?!』

「む？これはー」

ガタン

ドドドドド

靈斬は棺桶に取り込まれ、地面に消えた。

「どうなつてんだぜ？」

「分からないけど…霊夢達を追いましょう」

「…そうだな…考えたって仕方ない…行こうぜ」

二人は階段を駆け上がった。

白玉楼・門前

「どうして急に……」

「……急ぐわよ……嫌な予感がする」

来雪の言葉を聞いた霊夢が言った。

「……」

「貴女も来なさい」

白玉楼内に入る二人を追う様に、アリスがナスカ・ドーパントの肩を叩いた。

「……分かりました」

妖夢は変身を解いた。

アリスと妖夢も霊夢達の後を追った。

白玉楼・中庭

白玉楼の中庭に辿り着いた霊夢と来雪が見たのは信じられない光景だった。

「うっ……あっ……」

そこには穢土転生八雲輪廻により斬り刻まれ、血だらけの藍が倒れていたのだ。
だがそれだけではなかった——

「ゆ……かり……」

「……………」

「ふむ……幻想郷の賢者に白玉楼の主と言うからどんなものかと期待したのだが……この程度とは……」

屋敷の壁にめり込み気を失った紫と穢土転生セクト・バグスターに踏み付けられた幽々子——

そしてそれを見つめながら笑みを浮かべる変身を解いていたガイストの姿もあった。

「嘘でしょ……紫と藍が……」

「そんな……」

霊夢と来雪はその光景に絶句した。

「ツ!!?これは……」

「ツ!!幽々子様!!」

遅れてやって来たアリスと妖夢もその光景に絶句した。

特に妖夢は自身の主のやられた姿が信じられなかった。

「よ……うむ……逃げ……ガッ!？」

妖夢に逃げるように言おうとした幽々子を蹴りつけるセクト。

「ツ!! 貴様アアアアア!!」

「待ちなさい妖夢!」

その姿を見た妖夢は逆上し、楼観剣と白楼剣を抜きセクトに向けて跳び出した。

アリスが静止するも遅かった。

「ふん」

ガイストは跳び出してきた妖夢に向けて手を翳す。

「なっ!？」

すると妖夢の動きが止まった。

「うぐ……けな……」

「魂魄妖夢……貴様程度が私を斬れると思っているのか? ファンツ!」

「クアアア!？」

翳した手を祓うと、妖夢が後方に吹き飛ばされた。

「妖夢さん!」

吹き飛ばされた妖夢を来雪が受け止める。

「フフフ……私をそこら辺のメモリ所持者と一緒にしないことだ……既に私は領域までに

至っているのだよ」

「……あんたが術者ね」

「如何にも……自己紹介がまだでしたな……私はD r・ガイスト……幹部では無いが“裏”幻想郷の研究者だ……ご察しの通り穢土転生を作り出し操っていたのは私だ……如何だったかな？穢土転生の出来は？」

霊夢の問いに笑いながら答えるガイスト。

「……そう……あんたが描絵を……」

ガイストの話聞いてアリスが殺気立った。

「アリス・マーガトロイド……貴様も此処に来たのは誤算だが……まあ良い……目的は既に果たした」

ガイストがそう言うと、西行妖の陰から一人の穢土転生が現れた。

「ツ!?六代目!?魅魔が闘ってた筈……」

それは先程まで魅魔と闘っていた博麗霊結だった。

「穢土転生を操っているのは私だ……一度全ての穢土転生を引つ込め再びこの地に召喚したに過ぎん……ベニート・ムツソリーニは敗れたみたいだがね……だがおかげで時間稼ぎが出来た」

霊結はある物を持っていた。

それは腐敗した人間の右腕だった。

「ッ!？」

「腕?…いったい何処から…」

「霊夢!」

魔理沙と咲夜が遅れてやって来た。

「なっ!？」

「これは…」

魔理沙と咲夜もその光景に驚愕した。

「霧雨魔理沙に十六夜咲夜か…だがもう遅い…既に目的の物は手に入れた…最早此処に用はない」

「逃がすと思ってるの?」

霊夢が御札を投げつけると、八雲輪廻が間に入り壁になった。

「ッ」

「無駄だ…今の貴様らに敗北する私ではない…」

霊結から右腕を受け取るガイスト。

「さて…私は此処で失礼させてもらう…実験があるのでね…貴様らは此奴らの相手でもしてたまえ」

カツン

ガイストがステッキで地面を叩くと、二つの棺桶が新たに出現する。

ガガガガガガ

ドスン

中から出てきたのは初代博麗の巫女・博麗初夢と先程まで魔理沙達と戦っていた八代目博麗の巫女・博麗霊斬だった。

「また八代目かよー!」

更に初夢の隣に霊結が並び立った。

「六代目に八代目…真ん中の巫女…十中八九博麗の巫女ね」

「その通りだよ博麗霊夢…此奴は博麗初夢…初代博麗の巫女だ」

『ツ!?!』

その場に居た全員が絶句した。

幻想郷に存在する博麗の巫女の原点にして頂点……

初代博麗の巫女博麗初夢が目の前に現れたのだから……

「六代目や八代目だけじゃなく初代様まで……」

「おいおい何の冗談だよ……」

「フフフ…奇跡の瞬間ではないかね? 初代博麗の巫女と対面など出来る訳ないからな

…」

ガイストが念を送ると、薄黒く罅だらけだった皮膚が生氣を取り戻した。

「……ん…此処は」

「…霊夢ちゃんに魔理沙ちゃん…またこうして会ってしまうなんて」

「何じゃ…白玉楼の中庭じゃないか…」

三人の巫女の意識が覚醒した。

(メモリを使わずに能力を…元々の程度の能力…それとも…ハイドープ?…あれ…何でハイドープって言葉を知ってるの?)

来雪は目の前に復活した巫女達を見て思った。

「博麗初夢， 博麗霊結， 博麗霊斬…足止めは貴様らに任せる」

シユウウウン

ガタン

ガタン

ドドドドド

ガイストがそう言うのとセクトと輪廻が棺桶に取り込まれ、地面に消えた。

「…Dr. ガイスト…貴方ですか」

「…死者に対する冒瀆の数々…到底許せません」

「…体さえ動いていれば貴様を斬り殺してやるのに…」

三人の巫女はガイストを見て殺気立った。

「フフフ…さて…長く話してしまったな…私は拠点に帰るとしよう…ああ私が拠点に帰ったら貴様らを回収してやる…くれぐれもムツソリーニの様にやられぬ様にな」

ガイストはそう言うのと、懐からカードの様な物を取り出す。

カードが起動すると、ガイストはその場から消えた。

「待ちやがれ!!」

「魔理沙!今追うのは得策じゃない…相手は歴代巫女達なのよ」

追おうとする魔理沙をアリスが止めた。

「くそっ!」

「…:誠に不本意ではありますが…:どうすることも出来ないのも事実…:貴女達に止めもらう他ありません…:」

初夢が霊夢達に言った。

「本気で来て下さい…:それこそ…:私達を消し去るつもりで…:」

「…:歴代巫女三人の前で手を抜ける程余裕なんてあるわけないじゃない」

初夢の言葉に、霊夢は鬼気迫る表情で言った。

Hでの決戦／対峙する巫女達

歴代巫女達と対峙する霊夢達——

しかし両者共に迂闊には動けなかった。

「迂闊には動けんか……まあ及第点じゃな……此処で真っ先に動いていれば斬られていたか
らの」

霊斬が宝桜を抜刀した。

「……」

妖夢が霊斬を見て違和感を覚える。

（八代目博麗の巫女……何だろう……何か懐かしい様な……この感覚は……）

妖夢が考えていると——

「うっ……妖……夢」

満身創痍の幽々子が屋敷の柱に凭れ掛かる。

「ツ！幽々子様！」

「む？……幽々子じゃと？」

妖夢の叫びに霊斬が屋敷の方を見る。

「何だ幽々子酷いやられようじゃな…白玉楼の主が情けないのお」

霊斬は幽々子の姿を見て言った。

「……久し振りに会ったのに酷い言い様じゃない妖斬…」
ようぎ

「は？妖斬？…何よ八代目とあんた知り合いな訳？」

霊夢の疑問に霊斬が答える。

「知り合いも何も幽々子はわしの元上司じゃ」

「えっ!？」

霊斬の答えに妖夢が驚愕した。

「は？…何で白玉楼の主が博麗の巫女であるあんたの上司なんだ？」

魔理沙は自身の疑問を口にした。

「む？わしは元々魂魄家の出じゃからの」

霊斬の爆弾発言に霊夢と妖夢が絶句した。

「えっ？…魂魄家って…妖夢さんの苗字と同じ…」

来雪は呟いた。

「ふむ…旧名で自己紹介するかの…わしの旧名は魂魄妖斬…元白玉楼庭師兼剣術指南役
じゃった…博麗の巫女になった際に名前を霊斬にした訳じゃな」

「私と…同じ…」

妖夢は靈斬の旧名を聞いて驚愕した。

「して幽々子よ…妖忌の奴は何処行つた？娘を放つたらかしにしおつて…見つけ次第喝を入れてやらんとな」

「…妖夢は妖忌の娘じゃないわ…妖忌の孫よ」

「何？…孫じゃと？…何じゃならわしは祖母ではなく曾祖母になるのか？はあく時の流れとやらは速いのお…それにしても先程から聞き流しておつたが…妖夢と言うのか…いやあわしに似て可愛い曾孫が出来たのお」

靈斬は抜刀しているにも関わらず腕を組んだ。

そうした事で自身の腹部に宝桜が刺さつた。

「えっ!?ちよ八代目!」

靈結が慌てて言った。

「む?何じゃ六代目…ありや…やってしまったのお…生きていたら致命傷じゃわい」
靈斬は笑いながら言った。

「…相変わらず抜けてるとこ抜けてるわね妖斬」

「…微笑ましいではないですか」

幽々子の言葉に初夢がのほほんと答えた。

「そうじゃそうじゃ…妖夢よ…わしはお主の祖父魂魄妖忌の母にあたる…故にわしの事

はひいおばあちゃんと呼んでも構わんぞ？」

靈斬は笑顔で言った。

「えっ…おじいちゃんの…えっと…その」

妖夢はいきなりひいおばあちゃんと呼んでも良いと言われ困惑する。

「…何か今から闘うつてのに微笑ましいわね」

「あはは」

咲夜の言葉に苦笑いする来雪。

「こんなひと時なら大歓迎なのですが…そうもいかないようです」

靈結が小さな結界を作り、結界内に靈力を貯め始めた。

「何じゃもうやるのか？折角可愛い曾孫とこみゆにけえしよんとやらを楽しむみたいと思つとつたのに」

靈斬もまた宝桜を構えた。

「ツ…来雪」

「分かつてるよ咲夜ちゃん」

来雪がメモリを取り出そうとすると――

ウオンウオン

そこに自立起動型メモリであるズーメモリが現れた。

「えっ？ズーちゃん？」

「何よこの子…犬？」

霊夢がズーメモリを見て言った。

「む？あの老いぼれが使ってるガイアメモリとやらか？」

「あの様な物もあるんですね」

「……ちよつと可愛いです」

歴代巫女三名もズーメモリを物珍しそうに見ていた。

上から霊斬、初夢、霊結と続いた。

「……もしかして…一緒に戦ってくれるの？」

ウオンウオン

ズーメモリは吠えると来雪に飛び付く。

来雪はズーメモリをキャッチした。

「…ありがとうズーちゃん…行くよ」

ウオンウオン

カチャカチャ

来雪はズーメモリを折りたたみ、本体を吐出させた。

そして起動スイッチを押した。

【ZOOー】

ガイアウイスパーが鳴り、来雪は右腕の生態コネクタにメモリを挿し込んだ。
キュピーン

来雪の体に変化する。

狼の頭部にライオンの鬣とヘラジカの角が付いた様な頭部ー

バイソンの顔が模った胴体ー

ゴリラの様に強靱な左腕ー

サイの皮膚に鱗の頭部が付いた右腕ー

象の右脚にラーテルの毛皮に覆われた左脚ー

極めつけに尻尾部分がキングゴブラといったキメラの様な姿になった。

来雪は動物園の記憶の怪物^{超人}、ズー・ドーパントに変身した。

「何じゃ…そんじよそこの妖怪よりも奇っ怪な姿じゃの」

「……」

「……正直気色悪い見た目ですね……」

上から霊斬、初夢、霊結と感想を言った。

初夢に至っては若干引いていた。

「……来雪？」

「盛りすぎじゃねえか？」

「……名の通り一人動物園ね」

霊夢と魔理沙は引いており、咲夜が率直な感想を口にした。

「……うん……見た目はスゴイ変だけど……これは私の持つてるメモリの中で一番強いよ？」

ズー・ドーパントがそう言うと、霊結が動き出した。

「でかいのが放たれます！避けて下さい！」

霊結の結界から結界砲が放たれる。

「任せろ！マスタースパーク！」

霊結の結界砲と魔理沙のマスタースパークがぶつかり、相殺された。

結界砲が相殺されたと同時に、歴代巫女三人が動き出した。

「技が相殺されたから自動迎撃に移行したって所じやな」

「分析してる場合ですか？」

霊斬の分析を聞いてツツコミを入れる初夢。

「ツハア！」

妖夢が靈斬の宝桜を白楼剣と楼観剣で受け止め、鏢迫り合いが始まった。

「妖夢よ……お主の実力……見定めさせて貰うぞ？」

「望むところですよ……靈斬様」

「……」

靈斬は妖夢の言葉に少しシヨックを受けた。

（靈斬様……か……まあ突然会ったこともない死んだ曾祖母が目の前に出てきてひいおばあちゃんと呼べと言っても素直には呼べぬか……）

靈斬は刀に集中する。

「わしの攻撃を受け止めたのは良い……じゃが甘い」

キンツ

靈斬は宝桜で妖夢の刀を弾き飛ばす。

「ツ!?!」

妖夢はあっさり刀を弾き飛ばされた事に驚愕した。

その隙が命取りだった。

「馬鹿者!! 気を逸らすな!!」

靈斬の言葉を聞いた時には、既に遅かった。

霊斬は宝桜を既に構えており、妖夢を斬る体制に移行していたのだ。

「妖夢！避ける！」

霊斬は宝桜に妖力を溜めた。

「博麗ノ型…夢想斬」

「ッ」

「妖夢！ッ」

幽々子が妖夢を助ける為動こうとするが、ダメージが思いの外入っていた為動けなかった。

（斬られるッ）

妖夢は咄嗟に腕を盾にしようとするが、無意味であることは知っていた。

【PUPPETEER！】

後ろからガイアウイスパークが鳴る。

そこにはパペティアーメモリを下顎に挿し込み、変身したアリスが居た。

「フッ！」

パペティアー・ドーパントは糸を妖夢へ繋ぎ、力一杯引いた。

すると妖夢は人形が引つ張り出される様な勢いで後ろに飛んだ。
ブン

それにより、靈斬の夢想斬は空振った。

「危なかつたわね」

パペティアー・ドーパントは糸を切り、妖夢を通常の状態に戻す。

「ツ！…助かりましたアリス」

「気を抜かないで…次もそう上手く行くか分からないわ」

パペティアー・ドーパントは弾き飛ばされた白楼剣と楼観剣を糸を使って手繰り寄せ、妖夢に渡した。

「人形使いか…じゃが助かった…良くぞ曾孫を守ってくれた…感謝する」

靈斬は心の底からアリスに感謝した。

「じゃがまだ終わった訳では無い…気を引き締めろよ二人共」

「そのつもりよ」

「さつきは油断してしまいました…今度は大丈夫です」

【NASCAL!】

妖夢はナスカメモリを取り出し、首筋の生態コネクタに挿し込んだ。

妖夢はナスカ・ドーパントへと変身する。

「ドーパントじゃったか…それで良い…わしにお主らを斬らせないでくれよ」

妖夢とアリスが霊斬を抑えてる。

その一方で、霊夢と魔理沙は初夢の相手をしていた。

だが、二人の弾幕は初夢に一切当たらなかった。

「はあ…はあ…全然当たらない…」

「目をリボンで覆ってるのに…どうなってんだよ」

魔理沙の言う通り、初夢の目は赤いリボンで覆われており辺りを観ることは不可能な状態になっていた。

「それは私の能力…『見透す程度の能力』で辺りを感じ取っているに過ぎません…私の目は博麗の巫女になって数日しないうちに光を失ってましたからね」

「…視力を失っても能力で補ってたって訳ね…初代博麗の巫女…とんでもない存在ね」

「……………」

その様子を倒れた状態で見ていた藍——

(博麗初夢：幻想郷に博麗の巫女というシステムが作られるキツカケになった巫女：久し振りにその姿を見たが：未だに慣れないな：いつ見ても恐ろしい)

藍は初夢を恐れていた。

視えていない筈の目――

しかしそんな彼女に常に見透かされている感じがしていたからだ。

(紫様は何故あの者を幻想郷に招き入れた？：私は今でもその理由が分からない……博麗初夢：初めて会った時からお前は分かっていたかの様な態度だったな：私はそれが恐ろしくて堪らなかったよ)

闘うまでの体力を回復出来ない藍は、ひたすら初夢に対する恐怖心を抑え込んだ。

(気を付けろ霊夢：魔理沙：初代巫女博麗初夢はお前達が思っている以上に強敵だ)
なにせ初代博麗の巫女博麗初夢は歴代最強の巫女なのだから

「十三代目：博麗霊夢さん：でしたか」

「初代様に名前を覚えて貰えるとは光荣ね」

霊夢はアクセルメモリとお祓い棒を構えながら言った。

「気を抜くなよ霊夢：多分：というか確実に今まで闘ってきた相手が一番ヤベエぞ？」

「あんたに言われなくても分かっているわよ：相手は初代様：私の人生で一番相手にした

くない相手よ」

魔理沙の忠告を霊夢は真面目に返した。

霊夢は幼い頃から紫に歴代巫女の話や巫女の勉強の一環として聞いており、聞いていた内に一番関わりたくないと感じていた。

『見透す程度の能力』

程度の能力にしては微妙な能力だと最初は思ったがそれは大きな間違いだった。

人の考えや環境の変化、少し先の事象全てを見透す能力——

それが初代巫女——博麗初夢の能力なのだ。

「……恐れていますね霊夢さん……私を」

「ツ——」

「気にしなくて結構……慣れていきますから……ですが闘いの最中で恐怖心はなるべく出さない方が良いですよ?……それが後に厄介な結果になってしまいますので」

初夢は霊力を高め始める。

「私は六代目や十代目程霊力は高くありませんが一つ忠告しておきます……霊力の高さが強さに直結するものではありません……強い力を持つていたとしてもそれを使いこなせなければ意味がありません……正直な話をしますと……今の貴女では私に勝つ確率は低いでしょう……ですので死ぬ気で掛かってきて下さい……そちらの魔法使いさんも……ね」

『ツ!!』

初夢の言葉の重みが二人に伸し掛かる。

(これが初代様の庄……マズイわ……勝てる気が少しも感じられない……)
(ヤベエな……想像以上の化け物じゃねえかよ……)

霊夢と魔理沙は初夢の庄に押し潰されそうになるが、耐える。

「……」

初夢は考えていた。

(今の彼女達で私を抑えられるか……いえ抑えられるかではなく抑えて貰わねば困ります
……私を含めた巫女達は所詮過去の存在……今の幻想郷を守護する役目を与えられている
のは間違いなく霊夢さん……貴女なのですから)

そして遂に初夢が動いた。

『ツ!』

初夢は飛び上がり、霊夢よりも遥かに多い弾幕を作り出した。

「ちゃんと避けて下さいね……でないと死にますよ……夢想封印・乱」
みだれ

初夢が二人に手を向けると、周りの弾幕が二人に降り注ぐ。

「霊夢!」

「分かってるわよ!死ぬ気で避けなさい!!」

二人にとっての地獄の時間が始まった。

六代目博麗の巫女である博麗靈結と対峙するズー・ドーパントと咲夜は、互いに距離を取り警戒していた。

靈結は持つているお祓い棒を光の剣に変えた。

「靈力を一点に集中させた光剣です…斬れ味も鋭いので当たらないで下さい」

靈結はそう言うのと、二人に向けて走り出した。

「咲夜ちゃん！」

「分かっているわ！」

ズー・ドーパントは靈結へ向けて走り出し、咲夜はチャーチメモリにレミリアから借りたガイアメモリ強化アダプターを挿し込んだ。

【CHURCH！UPGRADE！】

咲夜は左太腿の生體コネクタにチャーチメモリを挿し込んだ。

咲夜は強化チャーチ・ドーパントに変身する。

その姿は修道女の姿から某救国の聖女の様な見た目をしていった。

「ハアツ！」

強化チャーチ・ドーパントは光剣を自身の十字架で防いだ。

「ツ！私の光剣を防げるなんて…流石ですね」

霊結は驚きながらも笑みを浮かべる。

「来雪！」

「ハアツ!!」

ズー・ドーパントはライオンの鬣をヤマアラシの針に変え、射出した。

「ザ・ワールド」

ドウウン

強化チャーチ・ドーパントは自身の能力でその場から消える。

「ツ!?!」

強化チャーチ・ドーパントが消えた事によって、ヤマアラシの針を諸に浴びた霊結は

蜂の巣になった。

「咲夜ちゃん」

「ええ…気を抜かないで」

二人が見たのは、蜂の巣になったにも関わらずに瞬時に再生する霊結の姿だった。

「今の連携は見事です…ですが私は死人…死ぬ事が出来ないんです」

霊結の身体は完全に再生した。

「これ程死を望んだ事はありません…全く…度し難い…」

「…咲夜ちゃん…チャーチの能力に浄化とか無いの？」

「…残念だけど無いわね…」

「だよね…どうしようか」

二人が考えていると、霊結は再び霊力を溜め始める。

「私はあまり闘い向けの技を持っていませんのである二人程強くはない…ですが霊力は

あの二人よりもあります…気をつけて下さい」

「強くないって…」

「よく言うわよ…こっちは強化アダプターまで使ってるのにはぼ互角じゃないのよ…」

二人は構える。

一方その頃――

「ハルデスヨオオオ!!」

サイクロン・ドーパントは突風を纏いながら、ケルベロス・ドーパントに突っ込む。

「さつきから同じ攻撃ばかり…適正に合っていない？」

ケルベロス・ドーパントは容易に攻撃を避けながら呟く。

「ハルデスヨハルデスヨオオオ!!」

「いい加減聞き飽きました!」

ケルベロス・ドーパントは鎖をサイクロン・ドーパントに巻き付ける。

「ハルデスヨオオオ!?!」

「これで終わりです!!」

ケルベロス・ドーパントは右足にエネルギーを溜め、鎖を思い切り引いた。

それによりサイクロン・ドーパントはケルベロス・ドーパントの射程内に入った。

「ハアアアアセイヤアアアア!!」

ケルベロス・ドーパントは引き寄せたサイクロン・ドーパントに蹴りを入れる。

「ハルデスヨオオオ!?!」

ドオオオオン

サイクロン・ドーパントは爆発し、リリーホワイトに戻った。

「おっと」

ケルベロス・ドーパントはリリーホワイトを抱える。

「さて…メモリを回収して速く来雪さん達の所に行かないと…」

バタバタバタバタ

ケルベロス・ドーパントが白玉楼に向かおうとすると、何処からか音がした。

「ん?」

ケルベロス・ドーパントが後ろを向くと、ヘリコプターが何処からか飛んできた。

「えっ?!何あれ!」

幻想郷出身のケルベロス・ドーパントはヘリコプターを見たこと無い為、鉄の塊が飛んでいることに驚愕する。

「イイイイイイアアアアアアアアアア」

ヘリコプターの扉部分に全力でしがみついている霊繋が見えた。

ヘリコプターはそのまま白玉楼へと向かった。

「……何今の?…あつそんなことよりメモリメモリ」

ケルベロス・ドーパントはサイクロンメモリの搜索に入った。

そんな光景を見ていた者達が居た。

「……十一代目達の記憶を封じればいいのか?」

「ああ…お前にしか出来ないからな」

一人は「裏」幻想郷ゴールド幹部の一人である小野塚克巳――

もう一人は赤い服を着ており、自らの能力と心を表わすように背中には道路の規制標識のような看板を背負っている少女だった。

「頼んだぜ……みとりちゃん」

地に潜む紅い怨念

河城みとり

『あらゆるものを禁止する程度の能力』

「分かってるわよ……あまり地上には出たくなかったんだけど……」

みとりはそう言うのと、白玉楼へと向かった。

「さて……戻るとするかね……ガイストの奴は戻った頃か？」

克巳はカードを使つて消えた。

「……うっ……申し訳ありません幽々子様」

「良いのよ藍……謝るのは私の方よ」

幽々子は傷付いた紫と藍を屋敷の中に入れ、休ませていた。

「妖夢……」

幽々子は外で戦っている従者を心配する。

「ハアアアア」

ナスカ・ドーパントはオーラを纏いながら霊斬に斬り掛かる。

キンッ

「メモリじやつたか？それに頼り過ぎだ」

キツカンッ

霊斬はナスカブレードを押し出し、ナスカ・ドーパントを斬り付ける。

「うっ」

「妖夢身体を借りるわよー！」

パペティアー・ドーパントが再びナスカ・ドーパントの体を操りだす。

「うむ人形使いらしい戦い方よな…じゃが」

霊斬はナスカ・ドーパントの攻撃をあつさり躲し、パペティアー・ドーパントへと詰め寄る。

「ッ！」

「相手が人形使いなら大元を叩くのが鉄則だ」

カンッ

「くっ」

霊斬はパペティアー・ドーパントを斬り付ける。

「ハアッ！」

「フッ」

霊夢と初夢の八卦掌がぶつかり合う。

「くっ」

「まだまだですね」

「霊夢退け！」

魔理沙が八卦炉を後ろに構える。

「スターダストレヴアリエ!!」

箒が無い為、後ろに構えた八卦炉から魔力を放出し突っ込む。

「オラアアア!!」

「ッ」

魔理沙の拳が初夢の顔面に入り、吹き飛ぶ。

「おっしやあ」

「でもこの程度でやられる程初代様は甘くないわよ」

「……ええ……痛覚があれば良かったのですが」

初夢の頬は罅割れており、徐々に修復していく。

「やられましたね……良いパンチだと思えますよ」

「そりやどうも」

（やっぱ強いわね……流石は初代様……勝てる気がしない）

霊夢は本気で思った。

「みんな……苦戦してるね」

「そうね……こっちは相手の倍は人数がいるのにな」

「確かに数はそちらが上……ですが乗り越えてきた修羅場の数はこちらが勝っているでしょう……」

ズー・ドーパントと強化チャーチ・ドーパントの呟きに霊結が答える。

「博麗の巫女とはそういう者達が殆どですからね」

「咲夜ちゃん……どうする？」

「……」

ズー・ドーパントの問いに強化チャーチ・ドーパントは考える。

だが霊結が止まる事は無い。

「考えている所申し訳ありません！でかいのが放たれます！」

霊結は再び結界砲を放つ体制に入っていた。

「考えるのは後のようね」

「うん」

一方その頃――

バタバタバタバタ

へりを操縦し、白玉楼の入口に入った米亜理達――

「もう少しで白玉楼に付くよお！霊繋ちゃんもう少しの辛抱だから！」

ゼツタイニツイタラナグツテヤルウウウ

へりに必死にしがみつく霊繋は、降りたら米亜理を殴る事を心に誓った。

(うん……霊繋ちゃんのパンチ痛いんだよなあ)

米亜理は霊繋からの後の制裁に怯えた。

そんな時だった。

ガンッ

ビービービー

突然ヘリが操縦不能になった。

「えっ!? 嘘!? 何で!?!」

ダカライヤダツテイツタノニイイイ!!

操縦不能になったヘリは回転しながら墜落していった。

「操縦不能! 操縦不能! 霊繫ちゃん飛び降りるよ!!」

シヨウキデスカアアアア!?

「死にたくなかつたら飛び降りる!! ほら行くよ!」

米亜理は操縦席の窓から飛び降りる。

アアモウ!

霊繫も手を離し、飛び降りる。

ドオオオオン

ヘリはそのまま墜落し、二人は白玉楼に続く階段へと降り立った。

「はあ…はあ…助かったあ」

「米亜理さん…マジで一回殴り飛ばすわ」

霊繫は拳を握り締めて米亜理に近付く。

「霊繫ちゃんちよつと待って話を聞いて!」

米亜理は霊繫から逃げるように後ろに下がる。

「突然操縦不能になったんだよ！こんな事今まで無かったんだけど…」

「……もしかして…あなたが関係してる？」

霊繫が振り向きながら言った。

そこには階段が上がってきた者がいた。

「……さっきの鉄の塊があなた達のだったなら…そうね…それは私の能力によるものよ」

「…君は…見た所河童かな？…でも少し違う…」

米亜理はその者を見ながら呟き、観察する。

「……成る程…半妖だね君？」

「ああ…良く分かったね…私は河城みとり…人と河童の間に生まれた半妖だ」

みとりは笑みを浮かべながら言った。

「河城？…にとりと同じ苗字…」

「にとりか…あいつは私の妹だよ…最も腹違いの妹だけど」

「そう…で？…私達に何の用かしら？」

霊繫は睨みながら言った。

「ああ…あなたには用はないのよ十二代目…私が用があるのは十一代目…あなたよ」

「ほえ？…私？」

「あんたは『裏』幻想郷にとつて邪魔なのよ…悪いけどあんたから記憶を封じさせて貰う…まあついでだし…一緒にいる十二代目…あんたも封じさせて貰うけど」

みとりから『裏』幻想郷の名が出てきた事で、二人は構える。

「言っておくけど…私の能力の前では何をしても無駄よ?」

みとりは背負っている規制標識を掴んだ。

「あんた達…『裏』幻想郷に関する情報を漏らす事を禁ずる…そして無闇にこちらの邪魔をする事を禁ずる」

みとりが呟くと、規制標識のマークが車両通行止めから通行止めのマークへと変わった。

『ツ!?!ー』

規制標識を見た二人は瞳から光が消え、その場に倒れた。

「はあ…十二代目が知ってることは魅魔が喋ったって事よね?…面倒な事を…とつとと終わらせて地底に帰るとしますか…」

みとりは倒れた二人を置いて、階段を降りていく。

みとりと魅魔は、この後戦闘になるのだがー

それはまた別の話ー

Iの終息／新たな闘いの幕開け

「裏」 幻想郷に先代、先々代巫女の封印を終えたみとりが帰ってきた。

「はあ……終わった終わった……さてと……どうするかなあ」

みとりは仕事が終わりで予定が空いたのでどうするか悩んでいた。

「おお終わったかみとり」

「ん？」

そこに二人の妖怪が現れる。

一人はフォートレスのメモリを授かった土蜘蛛の八城一輝ー

そしてもう一人はみとりと一輝と同じ様に「裏」 幻想郷の番人を任せられ、最後のメモリであるファクトリーを授かった虫妖怪の少女だった。

その少女は着物メイド服を着ており、背中には巨大な鍬を背負っていた。

自然の守り人

神斬かそり

『洗脳する程度の能力』

「何だ…一輝にかそりか」

みとりはそう呟くとそそくさとその場を離れようとする。

「おいおいおい！何そそくさ逃げようとすんだよ！」

それをかそりがみとりの肩を掴んで止める。

「…別に…ただ速く家に戻りたかっただけよ」

「ツレねえ事言うなよおっくうい達の仲だろ？これから一輝といういで飲みに行こうかと思つてたんだよっ付き合えよお同じ番人仲間だろっ」

「そういうのが嫌だから速めに帰ろうと思つてたのに…はあ」

みとりは肩を組むかそりを引き離しながら溜め息を吐いた。

「…………みとり…仕事はどうだった？」

一輝がみとりに訪ねた。

「…終わつたわよ…まあ…記憶を封じるだけの簡単な仕事よ」

「流石みとりだな…うい達番人の中で一番の仕事量を誇る功労者殿はお偉いさん方に頼られてて良いねえ」

かそりが茶化した。

「…別に…そもそも今回の仕事よ…記憶を封じるんじゃないよ…あんたの能力を使えばあの巫女達を配下にも出来たのに…何であんたじゃないのよ」

みとりはかそりを睨み付けながら言った。

「ん？能力つて…ういのか？冗談はよせよ…仮にも元博麗の巫女二人を洗脳とか無理に決まってんだろ…出来たら『裏』幻想郷に身を置いてねえし自力で天下取ってるつうの！」

「…夢のまた夢だな…それは」

一輝はニヤけながら言った。

「一輝！ニヤけながら言うの止めろ！地味に傷付くだろうが！」

「喧しいわよ…だから速く帰ってたのよ…はあ」

みとりは再び溜め息を吐いた。

「ほう…これはこれは番人の皆様」

そこに帰ってきたD r. ガイストが話しかけて来た。

「…D r. ガイストか」

「白玉楼に行つてたんじゃねえの？…そのまま消えてくれたら良かったのにな」

一輝とかそりが顔を顰めながら言った。

「酷い言われ様ですな…同じ『裏』幻想郷の仲間ではないですか」

「仲間…ねえ」

「うい達を下っ端の駒としか思ってねえ奴がどの口で言つてやがる！」

かそりが背中の鍔を取り出し言い放つ。

「下つ端の駒等とんでもない…貴方方は『裏』幻想郷の番人…下つ端では無い…駒であるのは合っていますかね？」

ガイストは3人を嘲笑う。

「てめえ…斬り刻むぞコラア!!」

「落ち着きなさいかそり…コイツがこんな性格なのは今に始まった事じゃないでしょうに…」

向かっていこうとするかそりを止めるみとり。

「けどね…」

みとりがガイストを睨み付ける。

「あまり調子に乗るなよ老害…私達は番人である前に執行人だ…ボス達から命令が下れば例え『裏』幻想郷の幹部であろうと始末出来る権限を持つてるのよ…命令が降り次第消すから覚悟しときなさい」

「ほくう…消すですか…貴方方如きに私を消せるとでも？」

「…Dr. ガイスト…貴様…何か勘違いしていないか？」

「うい達をそこら辺の雑魚と一緒にだと思ふなよ？…何でうい達が番人に選ばれてると思ふ？」

番人の3人の眼つきと色が変わった。

「うい達はシルバー幹部クラスまでだったら始末出来るんだよ…幹部にすらなつてねえてめえを仕留める位…簡単な仕事なんだぜ?…なあ…Dr. ガイスト?」

「ツ!」

ガイストは戦慄した。

今まで見下していた3人にそんな力があるとは思っていなかったからだ。

「血気盛んで困るね君達?」

「ツ!」

そこにガイアドライバーREXを腰に巻いている麟がやって来た。

「ぼ、ボス」

みとり以外の3人が姿勢を正した。

「全く…君達はホントに仲が悪くて困る…いずれは君達同士で任務に当たってもらおう事もあるから…なるべく仲良く…ね?」

「ツ!」

みとり以外の3人は麟から発せられる威圧感に震えた。

「…さて…ガイストにみとり…報告をして欲しいから後で円卓に来て貰えるかな?かそりと一緒にシルバー幹部全員を招集して貰えるかな?もうそろそろ春雪異変も終幕み

「…承知しました」

「…お、おう…了解です」

「…お、おう…了解です」

一輝とかそりがカードを使って幻想郷に向かった。

「ガイスト…穢土転生の具合はどうか？」

「問題ありません…今も博麗の巫女達が白玉楼にて戦闘中です…いつでも私の意思で回収も可能です」

「そう…じゃあもうそろそろ回収しても良いかな…君も戻って来たみたいだし…お願いね」

「はっ！」

ガイストはその場を離れる。

「…みとり？」

「はい」

「あつ…今は楽にしているよ？僕と君しか居ないからね」

「…そう…なら遠慮なく」

みとりは隣を見つめながら呟く。

「はあ…全く…番人の仕事も楽じゃないわね」

「あはは…他には見せられない態度だねみとり」

「私は元からこんな感じよ…麟こそ良くあんな威圧感出せるわね?…流石は『裏』幻想郷のボスね」

「やめてよ…二人の時は今まで通りの関係で居たいからって言ったの忘れた?」

先程のボスとしての威厳を保っていた麟の姿はどこにも無かった。

「ていうかさ…何で僕だけゴールドメモリなのにみとりが一般メモリなの?」

「仕方ないでしょ?マテリアルメモリに選ばれたんだから…その代わり番人として『裏』幻想郷には身を置いてるじゃない」

「それでも…僕はみとりにこそ幹部になつて欲しかった…」

「またその話?…全く…あんたには頼もしい仲間がいるじゃない」

「克巳も董香も『裏』幻想郷が出来上がってからの幹部だし…みとり程の付き合いじゃないし…」

麟は俯きながら言った。

「はあ…『裏』幻想郷のボスがそんな顔しない…忘れてない?これはあの娘が成長する為…それは変わらないでしょ?」

「…うん…そうだね…ごめん…気が滅入ってた…」

「分かれば宜しい…さてと報告をしないとね…行きましょ?ボス?」

「……そうだね……行こうか……」

二人はそう言うのと円卓に向かった。

「……う、うゝん」

白玉楼へと続く階段にて、気を失っていた米亜理が目を覚ました。

「頭痛……何か気持ち悪いし……うゝん」

米亜理は何か疑問を抱いていた。

「何か大切な事忘れてる様な……駄目だ思い出せない……」

米亜理が考えていると――

P r r r r

米亜理の巫女服のポケットから着信音が鳴った。

「ほえ？……こんな時に誰よ……はいもっしく今取り込み中……あれ作者さん？何よこんな時に……」

米亜理がかみさまと呼んだ人物は、自身を産み出した創造主^{さくしや}だった。

「一時的記憶の封印？……何でそんなの喰らってる訳？……仕様？……気付いちやいけない事に首突っ込んでこの作品^{せかい}の作者^{かみさま}さんからのセーフティロックを掛けられたって事？

……まあ今更何が起きてても驚きはしないけどさあ……」

米亜理は内心納得していないが渋々受け入れることにした。

「うん……うん……分かったよ……あまり目立つことはしないよ……分かってるって
プリキュア作品で懲りてるって……はいはい……分かったよ……じゃあね」

米亜理は携帯を切りポケットに仕舞い込む。

「はあ……作者さん同士かみさまの制約……ね……どの世界も世知辛いねえ……まあ……封じられてようが
関わるけどね……私も短い間だったけど博麗の巫女で伝説の戦士だった訳だしね……さて
と……霊繋ちやんを起こして加勢しますか」

米亜理は未だに気を失っている霊繋を起こしに取り掛かった。

一方の霊夢達は苦戦を強いられていた。

「夢想封印・閃せん」

初夢は人差し指と中指を合わせ構えながら霊夢の元に跳んだ。

初夢の合わせた2つの指は光を放ち始める。

「避けなさい！ さもなければ死にますよ！」

「ッ！」

霊夢はイナバウアーの要領で攻撃を躲し、前髪数十ミリ程掠った。

（危ッ……今の躲せなかったら真つ二つになってたわよッ）

「まだ終わってないわよー」

初夢が叫ぶと、霊夢の周りには初夢の夢想封印・乱みだれが展開していた。

「夢想封印・乱みだれ」

「ッ」

【ACCEL!】

霊夢は咄嗟にアクセルメモリを起動する。

「変、身!!」

ドオオオオン

霊夢が腹の生態コネクタにメモリを挿したと同時に夢想封印・乱みだれが炸裂する。

「霊夢!!」

「……」

初夢は無言で爆発した場所を見つめる。

「…貴女もガイアメモリとやらを持っていたのですね…霊夢さん」

初夢が後ろを振り向く。

そこにはエンジン音を上げながら立っているアクセル・ドーパントが居た。

「ただのガイアメモリじゃない…照井さんから受け継いだ希望です」

「……そうですか…私にはそれが希望とは思えないのですが…」

両眼をリボンで覆っている初夢の顔はまるで嘆いた顔をしていた。

「…どういうことですか…」

アクセル・ドーパントは初夢に問う。

「私の能力は見透す程度の能力…その名の通り全てを見透す事が出来ます…どうにもその小箱が希望に見えないのです…」

「……」

「私はその小箱がどういった代物か詳しくは知りません…ですが私の能力がそれを見定めている…それは薬の様な物…一度使えばどんな人間だろうとその力に溺れ魔に取りつかれる代物の様ですね」

初夢は自身の能力でガイアメモリを見定めた。

外の世界の街である風都で起こるガイアメモリ犯罪を――

そしてそれを根絶しようと奮闘する刑事や街の涙を拭う探偵の物語を――

「どうやら…それはこの幻想郷の希望にも絶望にもなり得る劇薬…貴女はそれを知つても尚…その小箱を使用すると言うのですか？」

「…確かに…これは危険な物よ…あの大人しくて無害なりりーホワイトですら大暴れす

る様な毒……それは否定出来ない……」

「ならー」

「それでも……私の友達^がこれを集めてる……劇薬であるこのメモリを……悪事の道具としてでは無くてね……おかしな話よね？この小さな箱をまるで友達^の様に接して……それが悪事に使われてるなら絶対に止めるって豪語する」

アクセル・ドーパントは、未だ戦っているズー・ドーパントを見ながら言った。

「何でかしらね……そう言ってるあの娘を助けたい……あの娘の力になりたい……中立の博麗の巫女としては失格かも知れど……私は友達^の……来雪の力になりたい……そう決めたのよ……それにこのメモリは照井さんから受け継いだ物……あの人の想いが詰まった物なのよ……あの人の期待に応えたい……今の私の心はそう言ってる……私は……自分の心を信じる！」

アクセル・ドーパントは拳を初夢に向けて突き出した。

「……」

「ですが……嫌いではありませんよ……貴女の姿勢は」

初夢は眩きながら走り出す。

「ッー」

「夢想封印・武^{たける}」

初夢は靈力を自身の身体に纏い身体強化を施した。

「行きますー！」

【ACCELL! MAXIMUM DRIVE!】

ブウンブウンブウン

アクセル・ドーパントはエンジンを吹かし始める。

「ハアアア!!」

「アクセルグランツァー!!」

初夢の拳とアクセルグランツァーがぶつかり合う。

「この程度ですか?」

「まだですよ…魔理沙!!」

「おうよー!」

アクセル・ドーパントの後ろから魔理沙が現れる。

「ツ!?!」

「マスタースパーク!!」

初夢は驚愕した。

車線上にアクセル・ドーパントがいるのに魔理沙はマスタースパークを放ったのだ。

「まさか仲間ごと!?!」

「そんな訳無いでしょ?」

初夢が今打ち合っている相手を見た。

そこには半透明になりかけているアクセル・ドーパントがいた。

「それは…その技は…」

それは歴代博麗の巫女達が修得するのに多大な時間と努力を有する博麗の奥義だった。

「奥義・夢想天生」

アクセル・ドーパントはその場から霧の様に消えた。

そして初夢はマスタースパークに飲み込まれる。

「よもやそこまでに至ってしまいましたか…霊夢さん…見事…」

ドオオオオン

「ツ!?!初代様?!!」

「何じゃ…あの小童…初代様を倒したのか?」

その様子を戦いながら見ていた六代目、八代目は驚愕した。

まさか現代の博麗の巫女とその友の魔女が初代博麗の巫女を倒したのだからー
「嘘……」

「霊夢と魔理沙の奴……博麗初夢を倒した」

その光景を見ていた幽々子と藍は戦慄した。

「霊夢に魔理沙……やったわね」

「うん！負けられないね！」

強化チャーチ・ドーパントとズー・ドーパントも喜びを顕にした。

「まさか……初代博麗の巫女を……あの二人……凄いですね」

「そうね……全く……また置いてかれちゃったわ」

ナスカ・ドーパントの言葉に同意しつつ、アリスは苦笑いした。

「はあ……はあ……どうだ！」

「ナイスよ魔理沙」

魔理沙の横にアクセル・ドーパントが姿を現した。

爆煙が晴れると、初夢の姿は無かった。

「まさか……初代様を倒すなんて……」

「カッカッカ……やりおるのお小童共……見直したぞ？」

初夢がいた場所に霊結と霊斬が集った。

「にしても……後二人か……」

魔理沙がうんざりした顔で言った。

「はあ」

アクセル・ドーパントはメモリを抜き取り、霊夢に戻った。

「霊夢」

そこに二人の巫女と戦っていた4人が集まる。

「アクセルメモリを使って奥義をやつて……流石に……疲れた」

霊夢は肩で息をしていた。

「霊夢は休んで……私達が後はやるよ」

ズー・ドーパントが前が出る。

「威勢が良いのお……じゃが……忘れとらんか？」

「私達は……死ぬことは出来ないんです」

霊斬と霊結がそう言うのと、跡形も無く消え去った初夢を形成していた紙が再生し始めていた。

「おいおい……知ってはいたけど冗談じゃねえぜ」

魔理沙が呟くと、初夢が復活した。

「素晴らしい一撃でしたよ魔理沙さん…そう落ち込まないで下さい」
初夢は微笑みながら言った。

「そりやどうも」

魔理沙はそう言った。

「それにしても…霊夢さん…今のは夢想天生…でしたね？」

「ツ!?その若さであの奥義を!？」

「成る程のお…鬼才じゃの十三代目」

初夢の問いに霊結は再び驚愕し、霊斬はニヤついた。

「歴代の巫女達に褒められるとはね…悪い気はしないわ」

「じゃが一度が限界か…そこは修行不足じゃ…精進せい」

「八代目…一度でも凄いことですよ…あの若さでその領域まで至ってるんですから」

「……」

霊夢は霊斬の言ってる事に納得する。

密かに体調が整ったら嫌いだが修行するかと思っていた。

「ですが…死者である私達は死ぬことが出来ない…どうにかして私達を封印なりして欲しいんですが…」

三人の巫女は自身の意思に関係無く戦闘態勢を取った。

「まだ来る気ね」

アリスが呟く。

すると何処からか何かが飛んでくる音が聞こえる。

「…何の音？」

ズー・ドー・パントがそう呟くと、後ろからミサイルの様な弾が横切った。

「危な!？」

「博麗ノ型…夢想斬」

すかさず霊斬が妖刀でミサイルを斬り裂き、ミサイルは真つ二つになり三人の横を過ぎて爆発した。

「あちゃあやっぱ無理かあ」

霊夢達が後ろを向くと、そこには米亜理と霊繋がいた。

「えっ?先代!？」

「漸く来たのね十一代目」

驚く霊夢と待ちくたびれた様に呟くアリス。

「遅くなつてごめんねアリスちゃん」

「霊夢…今は再会を喜ぶ暇は無いわ」

「べ、別に喜んでなんか…」

米亜理と靈繫が靈夢達の所に着いた。

「十一代目?…あの時一緒にいた筈じゃ?」

靈結は初めて呼び出された時のことを言っていた。

「何じゃおんし?何時完全に生き返った?」

「いやいや八代目?私はそもそも死んで無いんですよ?どうも連中?…あれ?連中って

誰だっけ?」

「連中って…『裏』幻想郷の連中でしょう?」

アリスがそう言うのと米亜理と靈繫は顔を顰める。

「いや…それがどうも記憶を封じられちゃったみたいでさあ…詳しいこと覚えて無いん

だよねえ」

「記憶を封じられた?」

「まあ今はそれは置いといて…というわけで初代様達…ここからは私等も加わるから…

宜しく」

「構いませんよ…寧ろその方が良い」

初夢は正直ホツとしていた。

自分達を止められる確率が少し上がったからだ。

「まあ…生き返ってる理由は分かりませんが…確かにその方が良いですね」

「じゃな…気張れよ十一代目…おんしらに掛かってー」

靈斬が言いかけたその時だった。

シユウウウン

三人の巫女の後ろに棺桶が出現した。

「ツ！あれは…」

ナスカ・ドーパントは先程まで戦っていた侵入者と同じ現象を見た為察した。

「むっ？…はあ…またかの？」

「ここまでですか…」

ガタン

靈結と靈斬が棺桶に収納された。

「靈夢さん…それにこの時代を生きる者達」

「……………」

「幻想郷を頼みましたよ？」

ガタン

ドドドドド

初夢もそう言い残し棺桶に収納され、3つの棺桶は地面に引きずり込まれる。

「取り敢えず助かったわね」

霊繫が霊夢に近付き呟く。

「まあ…そうなるわね」

「いやあ…キツかったぜ今回の異変…」

魔理沙がその場で座り込んだ。

「まだ終わってないわよ魔理沙」

霊夢が言った。

「元々は白玉楼の面々が起こした異変…予想外な敵が現れて異変自体がおかしな方向に行っただけ…首謀者はこっちだし」

霊夢は幽々子を見つつ言った。

「どうする？まだ異変を続ける？」

「そうねえ…もうそれどころじゃ無くなっているし…こっちの負けで良いわよ」

「幽々子様…」

ナスカ・ドーパントが幽々子に駆け寄る。

「申し訳ありません幽々子様…私が至らなかつたばかりに…」

「良いのよ妖夢…貴女のせいじゃないわ…変身を解いて頂戴」

「はい」

ナスカ・ドーパントはメモリを抜き取り、妖夢に戻った。

「…来雪達も変身を」

「分かったよ」

霊夢の言葉に来雪と咲夜は従い、変身を解いた。

「紫様」

「…ええ分かってるわ」

いつの間にか起きた紫を支える藍。

「ひどくやられたわね紫？」

霊夢が紫を見ている。

「ええ…久々に腸が煮えくり返ったわよ…あの老害…今度あつたら私がー」

（あの紫がここまで怒りを露わにするなんて…）

紫の顔が怒りに染まっているのを見て霊夢は驚いていた。

「まあまあ紫…取り敢えずは一件落着…とは言い難いけどそれで良いじゃん」

怒る紫を米亜理が慰め始めた。

「……米亜理…貴女帰って来てたのね」

「まあね…帰ってきて早々こんな面倒くさそうな異変が起こってるとは…私も運が無い事この上ない…はあ」

「正直貴女が帰つて来てくれた事は嬉しい誤算ね…米亜理…貴女にもー」

「みなまで言わなくても良いよ紫…私も短い間だったとはいえ博麗の巫女だったんだから…私も手伝うよ…まあ諸事情あつて記憶を封じられちゃったけど…問題は無いしね」
「それよ…記憶を封じられちゃったつてどういう事よ？」

苦笑いしながら言う米亜理に霊夢が聞く。

「いやあね作者さん曰く何だけどね…私が強すぎるのと今後の展開的に覚えてたら不味いつて事でこつちの作品の作者さんからセーフティロックが掛かっちゃったみたいでさあ？一緒にいた霊繋ちゃんもその対象になっちゃつて…あはは」

「とんだとぼちりよ…やつぱり一回殴らせて貰つて良いかしら米亜理さん？」

霊繋が指を鳴らしながら近付く。

「いやいやいや待つて待つて待つて！霊繋ちゃん待つて！」

「ちよつと待つてよ！強すぎるつて…最強の巫女つて初代だろ？」

魔理沙が間に入り止めつつ米亜理に問う。

「…まあ、私は経験豊富だからね…とはいつても制限は受けているけどね主に作者さんによつてね…と言うか私を作つた人も便乗してさ…まあ、そこまで影響を受けなかつたしと言うか経験で言えば私が一番戦闘力高いからね？」

「…マジかよ…頭痛くなつてきたぜ」

「十一代目……あんたそんなに強いのか？先代からは3ヶ月しか巫女をやってないって聞いたけど？」

「それはまあ……私は繋ぎの巫女だったから……本当なら私の先代の狂夢さんが次代の巫女を決めるはずだったんだけど……あの人命でポツクリ逝っちゃって紫に急遽用意されたのが幻想郷に迷い込んだ私だった訳……後強さだったね？じゃあ聞くけど三人の博麗の巫女+ α 一名合計四人と一人で同時に戦える？しかも自分が劣勢の状態だよ？」

『ええ……』

霊繋、幽々子、紫、藍以外の面子が米亜理の言葉で引いた。

「あの……そんなあからさまに引かないでくれる？……私にも心があるから……傷付くんですけど……」

「相変わらず規格外な巫女ね紫？」

「そうね……だからこそ博麗の巫女に選ばれたのよ」

紫が幽々子に言った。

「裏」 幻想郷による介入で目茶苦茶になった春雪異変は幕を閉じたのだった。

それから数日後、一人のメモリ所有者による新たな異変が起ころうとしていた。

「フッフフ…さあ…始めましょうか…」

その女は金の延べ棒を模したGが描かれたメモリを持っていた。

フォーウルム様コラボ回・空白期／異界騎士転移異変編 遭遇のK／突然の出会い

春雪異変が解決された数日後の事ー

紅魔館のメイドとして働く来雪は、咲夜からティータイムの為の買い出しを言い付
かっていた。

だが人里にて、彼女とはある出合いをするー

これは後に文屋の新聞にて「三日置きの百鬼夜行」と称される異変が起きる少し前の
話である。

「ハアッー」

「くっ何なのよ！邪魔するんじゃないわよ!!」

人里にてフリート・ドーパントに変身した来雪は、とあるドーパントと戦っていた。

その姿は筋肉質で金色ー

頭部はサイコロを模しており、ピンと3の部分が目ー

右肩にはレバーがあり胴体にはスロットー

左腕にはルーレットがあり、脚はトランプとコインが散りばめられたようになって金色の姿だった。

「見た目の割には素早いッ」

「こちとらアンタの相手をしてるほど暇じゃないのよーフンッ！」

謎のドーパントは、脚に付いているトランプを蹴りで飛ばした。

「ッ！グッ」

フリート・ドーパントは盾で防ぐ。

盾にトランプが命中すると、小規模な爆発が起き目眩ましになった。

「フフッ」

謎のドーパントはその場を跳び、姿を消した。

煙が晴れると、その場にはフリート・ドーパントだけになっていた。

「…逃げられた…」

フリート・ドーパントは変身を解こうとした。

その時だったー

「ッ!？」

殺気を感じたフリート・ドーパントは振り向く。

そして突然現れた男が、剣を振り降ろして来た。
フリート・ドーパントは既の所で躲した。

「いきなり何するの!？」

「見たことねえドーパントだな…さてはお前か…」

男は剣を構え、走り出す。

「ゼアアツ!!」

「ちよっ…もう!」

カンッ!

フリート・ドーパントは持っている剣で、男の振り降ろした剣を受け止める。

(重い…この人…人間?…ドーパントと互角…いやそれ以上の力って…)

男の力は尋常ではなく、フリート・ドーパントは若干圧されていた。

「おいお前! 姫乃を何処にやった!」

「はあ? 姫乃? 何言ってる!」

「しらばつくれる気か!」

男は力を上げ、フリート・ドーパントを力で押し返した。

「くっ…凄いい力…」

「何が何でも姫乃の居場所を吐いてもらおうぞ！」

男は剣を再び構え、フリート・ドーパントに向けて走り出す。

「ああもう何なのよ！」

フリート・ドーパントは甲板にある砲台を動かす。

「撃ちます！F i l e !!」

ドオオオオオン

「ッ！」

男は人間とは思えない程のスピードで跳ぶ。

「なっ!?!」

「遅え!!」

男は着弾する前に、フリート・ドーパントの懐に入った。

「オラァ!!」

「クッ！」

男の剣を盾防いだフリート・ドーパント。

「へえ…やるじゃねえか」

「貴方何なの…一体何が目的!？」

「それはこっちの台詞だ！」

お互いが距離を取った。

「お前には聞きたい事が山程ある…悪いが、叩き潰させてもらう」
「聞きたいのはこっちなんだけど！」

二人は走り出す。

そして二人の剣が再びぶつかり合った。

場所は変わりー

幻想郷の裏側の世界・『裏』幻想郷にて一人の少女が彷徨っていた。

「此処…幻想郷?…でも何か違うような…」

少女は知人が居るであろう博麗神社がある場所に向けて歩き出す。

だが少女が見た所に博麗神社は無かった。

「あれ?…彼処博麗神社があった場所だよな?…あんなお城建つてたっけ？」

そこにあつたのは巨大な城だった。

「…うくん…此処どこ?…幻想郷じゃないよね?」

少女は辺りを散策しようと動く。

しかし—

「これはこれは…」

「ツ! 誰!？」

少女が振り返ると、そこには「裏」幻想郷のメンバーであるD r. ガイストが立っていた。

「こんな所で何をしていますかなお嬢さん?」

「あつえつと…」

「これは失礼…私はD r. ガイスト…しがない研究者です」

「あつどうも…私は姫乃禍月…えつとガイストさん? 此処は?」

「ほう…分からずに「裏」幻想郷に入った…と?」

「「裏」…幻想郷?」

姫乃の言葉にガイストは笑みを浮かべる。

「何はともあれ…興味深い…実験材料に丁度いい」

「実験材料？」

「フツ」

コツン

ガイストが持っている杖で地面を叩くと、姫乃の後ろに二つの棺桶が出現した。

「えっ!?!何!?!」

突然の事で驚く姫乃。

ガガガガガガ

ドスン

棺桶の中から、田中描繪と青導蘭武が出てきた。

「えっ…誰？」

「やれ」

ガイストの命令で、最初に動いたのは蘭武だった。

蘭武は姫乃の顔面目掛けて蹴りを放つ。

「危ッ!!」

姫乃は既の所で避けた。

「何するの!？」

「ほほう避けたか…面白い」

ガイストが呟くと、描繪が巻物を開き絵を描き始めた。

「――作品番号壱――炎獅子」

巻物に描かれた燃え盛る獅子の絵は実体化した。

「絵が!?!ちよつとマズイよね!?!」

姫乃は咄嗟にその場から逃げ出す。

「逃げられるとお思いか?」

『ガアアアアアアアアアア!』

描絵の炎獅子が咆哮と共に爆炎を吐いた。

「ツ!」

ドオオオオオン

爆炎が姫乃を襲った。

「……む?」

なんと爆炎に包まれたにも関わらず、姫乃は火傷すら負ってなかった。

何事も無かった様にそのまま走って逃げた。

「傷すら負わないか……面白い……追え!」

ガイストの命令で、二人の穢土転生は姫乃を追う。

(何なの此処…あの人達一体何なの?…兎に角凱君と合流しないと!)

姫乃は走り続けたー

出口も分からない //裏// 幻想郷の大地を走り続けるー

これは異世界から来たガイアナイトと呼ばれる戦士との出会いー
そして新たな異変の幕開けであった。